
くしびと —OUT OF REACH—

Jim Take

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

くしびと — OUT OF REACH —

【Nコード】

N3726X

【作者名】

Jim Take

【あらすじ】

『因幡志朗』は幼い頃より幻覚症状に悩まされてきた。その原因は、高校生となった今でも、明確にはなっていないが、長く患っている事もあり、その症状とも上手く付き合えるようになっていた。そんな折り、志朗は通学路にて、意味不明な言動で詰め寄ってくる謎の女性に出会う。

ところが、その女性は志朗の幻覚だった。

志朗はそれに気付くと、幼い頃からお世話になっている主治医に相談すべく、病院へ向かうとする。

その時、一人の少女が志朗に声を掛けてきた。少女は、志朗と同じ学校の同級生で、『水沢ひかる』と名乗った。そして、ひかるは志朗へと不可解な言葉を投げかける。彼女は、さきほど志朗が目にした幻覚の女性が、自分の母親だと主張するのだ。この出会いが、志朗の日常に劇的な変化をもたらす事となる。

※この物語はフィクションです。劇中の医療・行政行為には、多分に演出が為されています。

t i m e t o b e l i e v e n o w 1 (前書き)

あの日から半年、ようやくここに参加する余裕が出てきました。
日常が戻ってきた感じです。余裕がある人はどうぞ読んでいっ
て下さいな。

t i m e t o b e l i e v e n o w 1

| t i m e t o b e l i e v e n o w |

誰にも見えないものが見えた時。誰にも聴こえない音が聴こえた時。人はその存在を信じる事が出来るだろうか。

自分にしか見えないもの。

——ねえ、今の見た？

——いいえ。

自分にしか聴こえない音。

——なあ、今の聴こえた？

——ううん。

そう言われてしまったては、思う事は決まって“気のせい”。

本当に存在しているものでも、本当に存在している音でも、自分以外みんなが否定してしまえば、その存在を信じる事はとても困難になってしまう。

——本当に見えたんだ。

——本当に聴こえたんだ。

そう訴えても返ってくるのは、心配、怪訝、酷い時には無視。
みんなにそんな態度を取られればやっぱり“気のせい”。

自分一人にしか認識できない事を信じる人間。そんな人間を周り
はどう捉えるだろう。

——どうして信じてくれないの！

——嘘なんかじゃない！

そんな強い訴えに返ってくるのは、非難、恐怖、そしてとうとう
迫害。

こうなればもう信じられないのは自分自身。

自分の目を疑って、自分の耳を疑って、ついにその存在を否定す
る。

誰にも見えないのだから存在しない。

誰にも聴こえないのだから存在しない。

自分には見えるけれども。

自分には聴こえるけれども。

それは視覚に異常を来しているから。

それは聴覚に異常を来しているから。

そして——

それは精神に異常を来しているから。

誰にも見えないものが見えた時。誰にも聴こえない音が聴こえた
時。人はその存在を信じてはいけない。

**t
i
m
e
t
o
b
e
l
i
e
v
e
n
o
w
1
(後書き)**

お話は次からです。

t i m e t o b e l i e v e n o w 2 (前書き)

基本的に会話で物語は進みます。

time to believe now 2

一月二十二日 土曜日 昼下がり

「ねえねえ、ちょっと来てくれるだけでいいからさあ、ね、ね？」

「……はあ、しつこいですよ、何度も断ってるでしょう」

「そこをなんとか、ね？ 助けると思ってる」

「だから、まず用件を言ってお下さい」

「来て欲しいの、来て欲しいのよ。ねえ、お願い、いいでしょ？」

「よくないです。来て欲しいって何処へですか？ なんでここじゃダメなんですか？」

「ここじゃないのよ。来て欲しいの、お兄さんに来て欲しいのよ、ね？ ね？」

「……ワケわからん」

季節は冬。

一月のとある土曜日の放課後。

午前中で学生としての使命を果たした俺は、学校帰りに夕食の買い出しをしていた。

場所は駅前商店街。駅前から東に向かって一キロメートル以上続

くアーケード街。このアーケードを抜けた先にある高校に通っている為、電車通学者である俺にとって、この商店街は通学路である。帰宅すべく駅へと向かうその途中で買い物をする。と、考えるのはもちろん俺だけである筈も無く、放課後ともなれば、ウチの学生のみならず、そして電車通学者のみならず、この街にある学び舎で学ぶ学生達の誰もが、この商店街へとやって来るのだ。

そんないつも通りの放課後、いつも通りの商店街で、いつも通り買い物をしていると、いつもとはちょっとだけ違う事態に遭遇した。

「お願い、手間なんて取らせないから、ね、ね、いいでしょう？
ねえ」

「すでに手間です」

かれこれ十五分は過ぎただろうか、正確には分らないが、体感的にはそのくらいだ。その十五分間、ずっと足止めを食っていた。

この、ネオンに映えそうな艶やかな出で立ちをした妙齡の綺麗な女性、によって。

アーケードを駅側から入り、最初の横町にある行きつけの八百屋で、白菜とパプリカとまいたけを購入後、再びアーケード街へと足を踏み入れようとした瞬間、ネオンに映えそうな艶やかな出で立ちをした妙齡の綺麗な女性に引き留められたのだ。

その人は、はっきり言って美人の部類に入る女性だった。ウェーブのかかった長い髪は、セットもカラーリングも完璧で、ヘアカタログにでも載りそうな程。短いスカートから伸びる肉感的な脚は、俺と同年代の女子からは感じる事の出来ない艶めかしさを放っている。

しかし、如何せん派手だ。

濃いめの化粧に、高級そうな毛皮のコート、そして強く存在を主張する数々の装飾品。

高校生の俺では、ただ隣に居るだけで緊張してしまう。

「大丈夫、すぐよ、すぐだから、ね？　ほら来てってば、もーお姉さん引っ張っちゃう」

「やめて下さい」

宗教の勧誘？

キャッチセールス？

……どちらも違う感じがする。

だけど、こんなネオンに映えそうな艶やかな出で立ちをした妙齡の綺麗な女性が、学生で賑わう土曜お昼の商店街において、一学生でしかない俺を何処かへ誘おうとしているのだ。これは警戒して然るべき状況である筈。

「本ッ当に困ってるの。ね？　お願い、こっちに来てよー」

「……ふう、困ってるのはこっちだよ」

用件を訊いても「こっちに来てくれー」の一点張り。しかも彼女の示す方向は明らかに裏通り。そこは店舗の背面が連なっていて、云わば賑わう商店街の舞台裏。これまでずっとお客の立場を取ってきている俺には、全くとっていい程用事がない。そこへと見ず知らずの人間に導かれても、楽しい想像は無理だ。嫌な予感しかない。

「ごめんなさい。俺、もう行きますね」

……なんとなく。

なんとなく彼女が困っているのは、本当のような気がした。とは

言えその怪しさは無視出来ない。十五分超の押し問答が俺に出来る精一杯だ。俺は家路へと……

「やーっ、行っちゃダメ！ 来て欲しーんだよっ、来てくれるまで離さなーい！」

……つこうとしたのだが、ネオンに映えそうな艶やかな出で立ちをした妙齡の綺麗な女性に妨害される。

「えっ？ わっ、ちよっと、は、離して下さい！」

さすがに驚いた。

ネオンに映えそ……お水系の派手な女が、帰ろうとした俺の腰に組み付いて来たのだ。

まさかここまでするとは。

というか、この構図は客観的に見て……。

「お願いっ、来て欲しーの、来て欲しーのよ！ お兄さんじゃなきゃダメなのよ！」

「何なんですか一体！？ なんで俺！？ いやそれより周りっ、みんな見てる！」

アーケードを行き交う人達は足を止め、こちらへと視線を向けている。俺が視線を合わせようとすると、誰もがそそくさ足を動かした。始めた。

見事な見て見ぬふりだった。

かなりの確率で痴話喧嘩と思われる事だろう。

しかもホステスと学生のカップリング。

「来て！　お願い！　もうちょっと、もう少しで、カルチョをつ！」

「カ、カルチョ……？」

「来てよ！　カルチョの為なの！　こっちに来てっ！」

「落ち着いて下さいっ、何ですかカルチョって！？」

「三角草が咲く前に！　カルチョの為なら！　お願いだから来てっ！」

「ミスミソウ！？　何それ！？　もう全然解らんっ！」

「こっちに来てっ！　来てっ！　来てっ！　来てえええー！！！」

……まずい。

何故か彼女はひどく白熱している。

最初の軽めな雰囲気は消え始めていた。

アーケードを歩く誰もが足を速めて俺達に関わらないようにしている。――いや、一人、俺と同年代くらいの女子が、ものすごい形相でこちらを見つめていた。

どうやら自分で思っている以上にのっぴきならない事態のようだ。俺は、自分の腰にしがみ付いている女性の頭の上に手をやり、何とか落ち着かせようと試みる。

「は、話聞きますから、ね？　一旦落ち着きましょう。さあ、深呼吸を……」

「――いいからきなさい」

「……ッ!？」

これは誰だ？

……いや、この言い方はおかしい。

訂正。

この人は、本当にさっきまで話していた女性なのだろうか。別に
姿形が急に変化した訳では無い。その表情だ。今の表情が最初の印
象と全く重ならない。

それはひどく、ひどく冷たい表情。

先ほどまでは終始笑顔で、いったい何がそんなに楽しいのかと問
いたくなる程、明るい表情だった。ところが今の顔つきはどうだ、
一切の感情がそこに見つけられなくなっている。混乱していた俺の
頭を、むしろ冷静にしてしまうその冷たい表情。俺は彼女から目が
離せなくなってしまうていた。

そのまま膠着していると、この状況を変えてくれる第三者の声。

「……あー、君？」

それは男性の声。後ろから声をかけると同時に、俺の肩へと手を
置いてきた。

少しだけ逡巡してから、ゆっくりと振り向く。するとそこには……

「げ……」

……お巡りさんが居ました。

「あ、いや、これは、その……」

当然の如く、しどろもどろになる俺。……何故だろう、俺に非は
無い筈なのに、つい悪怯れてしまう。

「ん〜と、徳英の生徒さんかな？」

「あ、は、はい」

警官は、俺の左胸に目線を合わすように腰を曲げながらそう確認してきた。

俺が今着ている紺のハーフコートは学校指定。その為、左の胸の所に学校名が刺繍されている。この警官はそれを見たのだろう。下に着ているブレザーを見れば一発で分かる事だが、俺は上着の前はガッチリ閉める主義だ。

「さて、では……何をしていたんですか？」

目の前の警官の口は動いていない。その後ろに居るもう一人の警官が言葉を発したらしい。警らは二人一組が基本だから居て当然と言える。

「ええと、なんと申しますか……その、この人が……」

そう言いながら元凶たる女性に目を向けるが、

「……て、あれ？」

居ない。——え？ 居ない！？

キョロキョロと周りを見回してもやはり居ない。信じられない事に、今の一瞬で逃げたようだ。

「おい、どうした、何か探しているのかい？」

「えっ？ あ、いえ……」

「ふむ、何やら様子がおかしく見えますね」

「そうだな」

二人の警官は、俺を不審者認定してしまったようだ。……まいた。

「学生証は持っているかな？」

「もちろん持っています」

俺は淀みなく答え、淀みなく内ポケットに手を入れ、淀みなく生徒手帳を取り出す。なんとか彼らの不信感を拭わねば。

「見せてもらうね。……うん、確かに徳英の生徒だな」

『私立徳英学院大学附属高等学校』。

俺は間違いなくその生徒だ。

「名前は……因幡志朗君^{いなばしろう}、ね。因幡、因幡か……」

「……ああ、珍しいですか？ 因幡国^{いなばのくに}の因幡です」

「いや、そういう事じゃ無くてね、本部にも同じ名前の警部さんが居たなあ、と思ってね」

「んぐ」

それは父です——とは口が裂けても言わない。

俺は父さんに迷惑をかけるのが何よりも嫌いだ。出来れば父さんを煩わせずに乗り切りたい。

「えー因幡君、持ち物を確認させて貰っていいですか？」

「あ、はい」

若い方の警官の要望にすぐさま応える俺。これは職務質問。仮にも警官の息子である俺は、それなりに彼らの仕事を理解しているの
で、無駄にごねたりしない。何より、後ろ暗い事など無いのだから。

「どうぞ」

スポーツバッグを肩から降ろし、ジッパーを開け、中が見えやすいように大きく口を広げる。

「……うん……うん、はい、どうも。次はポケットの中身を見ていいですか？」

「はい」

俺はコートの前を開けてから、ポケットの中身をすべて取り出す。それらを警官に提示した後、両腕を軽く広げてポケットを確認し易いようにする。

「……はい、ご協力ありがとうございました」

「ふう」

「君、もしかして職質慣れてますか？」

しまった、前科者認定されたかも知れない。

「はは……まさか」

とりあえず愛想笑い。

「それじゃあ最初の質問。ここで何をしていたのかね？」

生徒手帳を確認していた年配の警官が、やや厳しめに質問してきた。

「どこから話せばいいのか……。その、あそこの八百屋で買い物してから、ここを通りかかった時に、見知らぬ女の人に絡まれました」

「女の人？」

「ええ。それでその人が俺……んん、僕を何処かへ連れて行こうとしたんですよ。必死に断ったんですけど、その人なかなか離してくれなくて……。えっと、そこで、なんか言い争いみたいになりました、そしたらこう組み付かれて、ええっと、それで、動けなくなっ
て困っていたところに、そう、そこでお巡りさん達が来まして……」

何故だろう。我ながら、罪を逃れんと言いつけているようにしか聞こえなかった。

だが、絶対に俺に非は無い。……筈だ。……よね？

しかし残念ながら、警官たちの俺を見る目は大変残念な事に……
変質者認定でしょうか。

「……我々が来た時には、女の人なんて居なかったんですがね」

若い警官から、予想外の指摘。

「え？」

「んー、そもそもだね、君が一人で何やら騒いでいたから、声をかけたんだよ」

年配の警官の話に、俺はある種の確信を得る。

「一人で……」

一人。

俺は一人。

女の人はいない。

俺は一人だった

「……………」

「おい、君？ 因幡君？」

「……あ、はい、すみません。えっと、交番まで行った方がいいですか？」

「は？」

「えっと、僕、適当な事を言ってしまったて……まさか見てらしたとは、すみません」

「ふう……。では、何をしていたのだね？」

「彼女とケンカしてイライラしてたんです。それでぐちぐち悪態をついてたらヒートアップしてしまいまして、声を上げて彼女の悪口を……お騒がせして、申し訳ありませんでした」

「……………」

「……………」

「あの、やっぱり交番に？」

「……………どうしますか？」

「んー、まあ、よく解らんこともあるが、彼自身にそう問題があるようには見えない。やるべき事はやったし、ま、いいんじゃないか？」

「ですね。ああ、因幡君、もういいですよ。でも、あまりハメを外し過ぎないようにね」

「はい、ご面倒をお掛けしました」

深々と頭を下げ、警官たちが去るの待つ。
程無くして、彼らは行った。

「……………」

ゆっくりと顔を上げ、なんとなく周りを見渡しながら髪を撫で付ける。

さて、問題は解消した、帰ろう。
いや、その前に先生の所に……。

「――ねえ、アンタ……」

「ん？」

「おーーーーーいっ！ シローーーーーっ！」

「おわっ」

突如アーケード街に響く大声。こんな大声で呼ばれた奴は実に恥ずかしい事だろう。

「よおっ、シロ！ 見てたぜえ！」

呼ばれたのは俺だった。見るとかなりガラの悪そうな、趣味の悪そうな、頭の悪そうな風体の三人組がこちらへと近づいて来る。悲しい話だが、内一人は俺の友人だ。

「んだよ、チカンでもしたんかぁ？ ミケが泣くぜえ？」

「チカンなんてしてない、だからミケも泣かない。そんな事よりトラ！ 大声で呼びつけるな！ 恥ずかしいだろ！」

「なあなあ、それってよく聞くけどよ、絶対呼ばれた奴より呼んだ奴の方が恥ずかしくね？」

「む、まあ、確かに……。なんだ、恥ずかしかったのか？」

「うんにゃ、別に」

「だよな」

その程度で恥ずかしがる人間が、髪を逆立てたり、左目だけにカラコン入れたり、ドギツイ朱色のボワ付きロングコートを着たり、装着可能な身体部位全てにアクセを施したりしないだろう。うん、実に残念なビジュアル系もどきに仕上がっている。

……というかお巡りさん、ここに俺なんかよりも職質すべき人間が居ますよ。

「おいイナバ！」

「ん？」

誰？

「おめえ、虎太郎さんより年下だろうが！ なにタメ口きいてやがる！」

「はあ、すみません」

「んなこたあいいから、シロ。なんでマップなんぞに世話んなってやがった」

……マップ。

トラが初めてこの言葉を発した時、俺はググった。
親の職業だった……。

「大した事じゃ無い、持病の発作。今回ちょっと派手だったもんだ

から、お巡りさんが心配してくれたんだよ」

「あん？　なんだよ、最近は落ち着いてきたって言ってなかったか？」

「まあな。でも治った訳じゃないし、こんな事もあるさ」

「ふーん？」

「ま、事無きを得たんだから気にするな。お前の方はどうした、こんな時間に珍しくない？」

「ああ、物件漁^{あさ}ってんだ」

「……何を漁^{あさ}ってるって？」

「物件だよ、物件。どっかにいい立地のオフィスねえかな」

「……お前、何を企^{くわ}んでる」

「別に、起業しようかなってな」

「……………」

「……………」

「トラ」

「あん？」

「その少し先に保育所がある。この辺は風営法第二十八条が適用される」

「風俗店じゃねーし」

推理は外れたようだ。

推理ってほどのモノでもないか。

見た目で判断した感が強いな。

にしても、この男の口から起業なんて言葉が出てくるとは。まともにも働いてるところすら見た事無いのに。

「うーん……」

「？ んだよ」

改めてトラの容貌を観察してみる。

やっぱりしつくりくるぞ、風俗店店長。

もちろん性風俗。

「まあ、何をしてもいいが、社会のルールだけは守ろうな」

父さんの手を煩わせる様な事だけはしないで欲しい。

「テメエ、イナバ！」

「え？」

だから誰？

「さっきから何エラそうにしてやがる！ 虎太郎さんに失礼だろう」

が！」

「はあ、すいません」

「いいつつてんだろっ。……まあ、シロが心配すんのも解かる」

「心配というか、不安というか……」

「でもな？ オレもぼちぼち少年法が護ってくれない歳になった。ここらで一発勃起しとくべきかと思ってよ」

「一念発起だこの馬鹿。あと、少年法はお前を護る為にあるんじゃない」

「うっせーな。んで、コイツらと一緒に事務所立ち上げようと考えたワケよ」

「事務所？」

トラの後ろに居る二人に目を向ける。さっきから難癖つけてくる太めの男。登場以来一言も発していない長身の男。明らかにトラと同じコミュニティの住人だ。平たく言えばチンピラ。

「トラ」

「なんだ？」

「向こうの方にな、暴力追放運動推進センターの支部があるんだ」

「暴力団事務所じゃねーし」

「……今のは完璧に見た目で判断したが。」

「つか、なんでシロはオレにそんな印象なワケ？」

「どの口が言う」

ひょっとして自覚無かったりするのだろうか。過去のアレやコレを忘れてしまったのだろうか。

「虎太郎さん、そろそろ行きましようや」

「ん？ ああ、だな。んじゃシロ、オレら行くわ」

太めの男に促され、トラはここを後にしようとする。

「ちょっと、何しようとしてるのか教えて行けよ」

「ああ？ んー、本決まりんなったら教えてやんよ。その日までワクワクして待ってな」

いや、不安でモヤモヤする。でもまあ、言う気が無いなら仕方がない。俺はそのまま三人を見送る事にした。

「……ったく、何なんすか？アイツ。ガキのくせに腹立つっ」

「くくく、確かに態度は悪いがな、心の奥ではオレの事が好きなんだぜ？ ツンデレってやつよ……」

こら、妙な流言を広めんな。

諸事情により友人の少ない俺にとって、トラは貴重な存在ではあるものの、アイツ自身を好ましい人間とは思っていない。気に掛かっているのは認めるが、トラの生き方はどうも好きになれないのだ。譬^{たと}えるなら“無頼な兄に、忸怩^{じくじ}たる思いを抱く弟”といったところだろう。

「ふう……俺も帰るか」

小さく呟きながら俺は家路を急……ごうかと思ったが忘れてた。先生のところに電話しようとしていたんだった。

踏み出しかけた足を止め、トラによって中断させられた作業を再開すべく、ポケットからケータイを取り出す。

「んーと……」

電話帳を開き、メモリに優しいささやかな登録件数の中から、目的のナンバーを見つける。

トゥルルルル…… トゥルルルル……

「——ねえ、ちょっとアンタ」

「ん？」

……プツッ

「はい。児^この手柏^{てがしわ}医院です」

「あ、もしもし、いつもお世話になってます、因幡です。IDは0

52の……」

「く……」

あれ？　今、何か……？

「はい。確認致しました、因幡さん、本日はどうされましたか？」

「あ、えつとですね……、その、来週に予約は入っているんですけど、出来れば今日診てもらえないかと思ひまして」

「はい。えー、来週定期診療が入っていますね。それを待たずにと
いう事はお急ぎなんですね」

「急にですいません。無理でしょうか」

「はい。いえ、大丈夫ですよ、よくある事ですから。では、担当の
美作にお伝えしておきますね。こちらには何時ごろいらっしゃいま
すか？」

「えっと、今からだと三時……いや、三時半でお願いします」

「はい。承りました。それでは因幡さん、お待ちしておりますね」

プツ…… ツー ツー

首尾よく約束を取り付けられた事に安堵し、ケータイを閉じよう
とした時だった。

「――ねえ、そこのアンタ……」

ピリリリリリ…… ピリリリリリ……

「うく……ま、またなの？」

閉じかけのケータイが鳴り出した。

着信だ。

液晶を確認すると、発着信及びメール履歴のそれこそ九割を占めるであろう人物からだった。……マズ、約束あったな、ゴタゴタの所為ですっかり抜けてしまっていた、謝らないと。

……ピッ

「もしもし」

「開けろー」

「う……す、すまん、まだ帰ってないんだ」

「うゆ、居ないん？」

「ああ。えーと、今ウチの前か？」

「ん、ドアの前」

ガンッ！ ガンッ！

「人んちのドア蹴るな。……でな、ミケ、その、申し訳ないんだけど、今日は中止って事で」

「やたー」

「こらこら、喜ぶな。その代わり、明日は朝からって言うつもりだったんだ」

「むー、おべんきよヤー」

「この時期に嫌とか言ってるんじゃない。追い込みだろうが」

「ふっ……もう、教わる事は……何も……無……い……ガクリ」

「あるよー。英長文と関数」

「わたしは日本人だ。そして、人間はもはやコンピューターには勝てまい」

「受験にそんな理屈は通用しない」

「そもそもシロが悪い」

「何、急に」

「シロが徳英なんかに行くから、わたしの受験戦争は苛烈を極める」

「そう言われてもな……前にも言ったけど、父さんの通った学校に行きたかったんだよ」

「ファザコン」

「うぐ……べ、別にいいじゃん、子が親を慕って何が悪い」

「大いに結構。シロ×シロパパGJ」

「……あの、妄想は自由だけど、ミケの頭の中だけに留めて欲しい」
「つまんない」

「話が逸れたな……。まあなんだ、最終的に決断したのはミケな訳だし、ここは頑張ろうよ。な？」

「むー」

「それにほら、あれだ、俺も、その……ミケと、通えるようになれば、う、嬉しい……訳、だし」

「……………」

「ええと……」

「……むふ」

「機嫌が直ったところで明日なんだが、九時に俺んち来れる？ 今日の分もやらなきゃだし」

「なん……だと……」

「ん？」

「日曜の朝のパラダイスを……奪うと？」

「あ、そか、アニメ……。でも、毎回録画してるんだろ？」

「リアルタイムこそ至高」

「んんー、じゃどうすっかなあ……。十時だったら？」

「朝から夕じゃなくて、昼から夜でよろしく」

「うーん、それでいいか」

「おやつはスウィートポテト、お夕飯はパスタでシクヨロ」

「……まあ、いいケド……」

「聞き忘れてたけど、今日中止の理由って何さね」

「ああ、言ってなかったな。ちょっと美作先生の所に行く理由が出来ちゃってさ」

「委細了解。……シロ、平気？」

「ありがと。なに、念の為に感じだから、心配はいらない」

「そ。じゃ、わたし帰んね」

「うん、無駄足ごめんな」

「いいさね。じゃあ明日」

「ああ」

ピッ……パタン

用件を終え、今度こそケータイを閉じる。

さて、美作先生の所に向かうか。……あ、サツマイモ買ってかなきゃな。

「ちょっと、その、アンタツツッ！」

「のわっ」

スタツカートの効いた鋭い呼びかけ。

自分に向けられたものかどうかなんて考える間もなく、反射的に声のした方へと顔を向けてしまった。

「いつまで待たさんのよっつつっ！」

再び放たれる鋭い声。

怒声と言ってもいい。

見れば何やら一人の少女が怒り心頭のご様子。何があったのだろう。

「こらっ！ 聞いてるっ！？」

ビツと音がしそうなほど、力強く差し出される人差し指。それは真っ直ぐにこちらへと向けられていた。

「……て、え？ お、俺……ですか？」

「当り前でしょ!？」 人が話しかけようとするたんびに躲してくれちゃってさ、余計な時間食っちゃったじゃない! 今度こそ私のターンよね? そうでしょ? きびきび答えなさいっ!」

どうしよう、彼女がなんの話をしているのか解らない。だが、この少女の怒りが自分に向けられているという事は解かった。

「あの、人違いじゃ? 俺、君の事知らないし……」

「私だってアンタの事なんか知らないわよっ!」

「はい?」

今日は日が悪いのだろうか。仏滅では無かったと思うが。

いや、場所か? ……かもしれないな。

考えてみれば、ここに來てからなんやかんやで一步も動けていない。なんとなくトラバサミで身動きの取れない自分の姿が頭に浮かぶ。まあ、動けないんじゃないかって俺が動かなかっただけだが。なににせよついてない。

「はぁ……」

「何よそのため息!？」 言っとくけどアンタが悪いんだからねっ!」

「あ、ゴメン、今のは君に対してじゃなくて……って、俺が悪い? 俺、君に何かした?」

「シカトしたでしょ!？」 こっちは話があるっていうのにさっ!」

「シ、シカト……? え、えーと」

「しらばっくれんなっ！ なんなのよアンタはっ!？」

なんなのと言われても、それはこちらのセリフだ。

彼女は、感情的になっていいる所為か、話の要領がなかなかはつきりしなかった。そして、こちらの意見の受け入れ態勢は明らかに整っていない。

これじゃあさっきの女の人と大差が無いな。

(……ん？ さっきの人と同じ?)

ふと思ひ当り、すぐさま周囲に目を向ける。

「ちよつと、何キヨロキヨロしてるのよ!？」

やはり衆目を集めていた。

だがそれはいい、大事なのはそこでは無い。

大事なのは、その目が向けられている先。

果たして、それは、俺か？

それとも、俺達か？

「……ふ、ふゝん。こ、このタイミングで、シ、シ、シカトくれちゃうんだ……。へ、へゝ、そお……」

少し冷静になって目の前の少女を見据える。

落ち着いて見ると、かなりの美少女だった。

肩にかかる程度の長さの髪の毛はストレートで、茶色に染められてはいるが、けばけばしさは感じられず、むしろ清潔感を覚える。

顔立ちは整っており、まつ毛の長さが映える大きな目が印象的だ。

メイクをしているかどうかは、男の俺に判断は難しいが、髪にしろ、

肌にしろ、手入れが行き届いているように見える。仮に、某アイドル集団に彼女が混じっていても、きつと違和感は無いだろう。

「アンタが……そんな態度に出るんなら……こっちだって」

ボワの付いたチェックのダッフルコートも、彼女の雰囲気合っている。肩に掛けているクリーム色のトートバッグもコーディネートされている感がある。ファッションが気に掛かるタイプのようだ。……女の子は皆そうか。

「……すう」

コートの裾下から覗くスカートは……ん？　これ、ウチの制服じゃないか？　この子、徳英の生徒？

「きゃあああああっ！　この人チカンですううううっ！」

その瞬間、顔という顔、目という目が、俺へと向けられた気がした……

「……って、ええええええええええええ！？」

「いやあーーーーっ！　誰かーーーーっ！」

「ちょ、ちょ、ちょっと、待って、待って……」

それはダメだろ。

それはやっちゃダメだろ！

それだけはやっちゃダメだろっ！

「来ないでえええーっ！」

「話しかけてきたのそっちじゃん!？」

……ざわざわ……ざわざわ……

うそ。

嘘だろ。

これが痴漢冤罪。

話には聞いていたが、まさか自分に降りかかるだなんて。

どうする？

どうすればいい？

このままじゃ、父さんに迷惑がかかってしまう。

「……ッ。もうやめてくれえ！　このとおり！　お願いしますっ！」

精神的に追いつめられた俺がとった行動は、土下座、だった。

「俺が悪かったから！　何でも言う事聞くから！　だから頼むっ！」

しかも、すべての非を認めるかのような言葉が口を突いて出る。

「……あっ……」

何でこんな事になってしまったのだろう。

恥ずかしくて、情けなくて、涙が出そうだった。

だけど、どうすればいいのか。どうすればよかったのか。

この何も妙案を生み出さない頭を、只々、地面へと押し付ける以外に。

「うわ、やば……」

彼女はとりあえず叫ぶのを止めてくれた。しかし、俺の社会的な死は目前かも知れない。

「ちょっと……やめてよ。ま、周りがみてる……」

「……………」

「た、立ってよ、ほら、立ってってば」

彼女はオレの右腋に両手を入れ、上に引き上げようとするが、落ち込みきった俺の心とシンクロした俺の身体はなかなか浮上しない。

「もう……！ 立って……てばっ……！」

彼女はグッと力を込めて強引に引っ張り上げてきた。そうされてようやく、俺はおもむろに立ち上がる。

「その、なんていうかさ……」

「……ああ、君達？」

彼女が何かを口にしようとする瞬間、男性の声がそれに被^{かぶ}さる。何か、聞き覚えのある声だ。

「げ……さっきのお巡りさん」

「あー、確か因幡君？ また君かい？」

「う」

今度は偶然ではないだろう。通報があったに違いない。
俺は絶望し、思考が停止してしまった。

「さて、痴漢との報せしらがあつて戻ってきたんだが……君なのかな？」

「……………」

何も言葉が出ない、ただ俯くのみ。

「あ、あの……！」

ガバッと、誰かが俺の右腕に組み付いてきた。

「誤解なんです！」

「おや？ 君は被害者って訳じゃあ……？」

「違います！ カノジョです！」

「彼女って……因幡君の？」

「はい！」

これは、なんだろう。

ひょっとして擁護してくれているのだろうか。

元凶の彼女が？

もう訳が解らない。

「実は……彼と、その、ケンカしてしまつて。それがヒートアップして、つい彼を貶めるような真似を……お騒がせしてごめんなさいっ」

「何か聞き覚えのある話だな……。そうなのかい？ 因幡君」

「……………」

まだ、俺の思考は回復していなかった。

「ちよつと！？ あ、あはは……さ、さすがにチカン扱いはやり過ぎだったみたいです。こ、こんなに落ち込んだ彼、初めて。あゝ、えつと、ゴ、ゴメンねえ？ ……そ、その、イナバ？ 君」

「……………」

「ちよつと……！ 何か言いなさいよ……！」

彼女が耳元でそう囁くが、やはり何も言葉は出て来なかった。

「ふうむ、どう思う？」

「そうですねえ……。被害者が居ないのなら、我々の出る幕は無いんじゃないでしょうか」

「まあ、そうだな」

「あ、その、すみません！ お手数おかけしました！」

彼女は好機と見たのか、話を打ち切りに出た。

「うん、それじゃ、ケンカするのは仕方ないけど、周りの迷惑もちゃんと考えて下さいね」

「はい」

「因幡君もいつまでも落ち込んでないで、ちゃんと話し合おうんだよ？」

「……………」

「こらっ、何か言いなよ！」

彼女が耳元でそう叫ぶが、それでも何も言葉は出なかった。

「じゃあ、我々は行くよ」

「あ、はい、どうもすみませんでした」

彼女は深々と頭を下げ、警官たちが去るのを待っているようだ。何か既視感を覚える。

程無くして警官たちは行った。

「はぁ……………」

隣から聴こえる大きなため息。それをすべきは俺の方ではないだろうか。……まあいい、訳も解らずに陥った危機は、訳も解らないままに脱した。とにかくこの場を離れよう、これ以上はキツイ。

「って、どこ行く気！？ 私の話がこれっぽっちも終わってないん

「だけどっ！」

「……………」

……キツイんだってば。

「こっち来て、ここじゃ注目浴びちゃう」

そう言いながら俺の腕を引っ張る。抵抗する気は無かった。彼女に引かれるまま向かった先は、奇しくも、あの女の人に引き込まれそうになった路地裏。

「いつまでもムスツとしてないでよ。……分かった、謝るよ。ゴメンナサイ、さすがにやり過ぎだった」

「……話があるなら早くして欲しい」

いじけたような態度を取ってしまった。しかし、この後に用事があるのも事実、早く終わらせたい。

「もう、感じ悪いなあ」

誰の所為だ。

「私は、水沢ひかる、徳英附属の一年よ。アンタも徳英でしょ？えーと、イナバ君？」

「……………」

俺は無言のまま、生徒手帳を彼女の眼前へと突き出した。

「もう、ホント感じ悪いなあ」

自覚はある。ただ、ちっぽけなプライドが素直な反応を許してくれない。

「なにになに……、あら、同じ一年じゃない。先輩かと思ってた」

この子は、先輩に対してもああいった態度で接するのだろうか。

「因幡志朗……か。何か聞き覚えのある名前ね」

諸々の事情により、徳英では案外知られていたりする。悪い方向でだが。

「んじゃ、因幡君。用件なんだけど……えゝ、んゝ、なんていうかさ……」

急に歯切れが悪くなった。何か躊躇しているようだ。ああまでしたのだから、よっぽど重要な事なのだろう。

「こう言っちゃなんだけどさ……アンタ、さっきの場所で変な事してたじゃん？ その、一人芝居……みたいなの？」

「……………」

さっきのあれか。

彼女は……と言うか、俺以外にはきつとそう見たのだろう。

一人芝居、か。

そう言えば、この水沢ひかるという子の事も、さっきの女性と同

じものじゃないかと疑ったんだっただけ。
結局は違っていたが。

「その時にさ……こう、口にしなかった？」

「ん？」

「カルチョ」

「えっ……」

それは、あの女性が口にした言葉。
そして、俺がオウム返しで返した言葉。
だから、水沢が聴いたのは後者……の筈。

「その後、こうも言ってなかった？」

「……………」

「ミスミソウ」

それはやはり、あの女性が口にした言葉。
そしてやはり、俺がオウム返しで返した言葉。
だからやはり、水沢が聴いたのは後者……の筈。

「……ねえ、因幡君。正直、あの時のアンタって、かなりキモかった」

「……………」

この水沢という少女は、どこまで人を落ち込ませれば気が済むのだろう。

「本当なら近付きたくなかった。けど、この二つの言葉を……この二つを同時に聴いてしまったら、確認しない訳にはいかないのよ」

今、気付いた。

それは水沢の表情。

ひどく思いつめたような。

何かを恐れているような。

とにかく、負の感情が滲み出ているかのようにだった。

「アンタ、それ、どういうつもりで言ったの？」

「どういうつもりって……」

「お願い、答えて。これは私にとって、とても重要な事なのよ」

彼女が俺を睨みつける。最初のような怒りを孕ませた瞳ではなく、静かな炎を灯したような瞳で。

答えなければならぬ、そう感じた。

だが、俺はその答えを持ち合わせてはいない。何故ならあの女性
は――。

「すまない、よく解らないよ」

だからそう答えた。

「……ッ、ふざけないでっ！」

もちろんふざけてなんていない。

これを説明するには、まず俺の事情を話さねばならないだろう。

しかし、初対面の人間に話すような事では無いのだ。

仮に話したところで、彼女の欲するものを提供出来るとも思えない。何故なら、その二つの言葉を口にしたあの女性は――。

「ごめん、力になれそうもないよ。俺、行くな？」

「待ちなさいよっ！ それ、誰かに聞いたんでしょっ！？ そうな
んでしょっ！？」

「……何？」

「カルチョっていうのは、幼い頃の私のあだ名。私をそう呼んだのは、一人しか居ない」

「え、ちよっ……」

「ミスミソウは、私とある人との思い出の花。その人は私の事をカルチョって呼んでた」

「ちよっと待ってくれよ……」

これは……おかしい。今までに無かった事だ。

カルチョもミスミソウも、あの女性が口にした言葉。
でも、だけど、あの女性は――。

「私のママよっ！ アンタ、私のママを知ってるんじゃないのっ！
？ 八年前に居なくなった私のママをつ！」

「なん……だって？」

「ねえっ！ そうなんでしょっ！？ 知っているなら教えて、ママはどこに居るのっ！？ この八年間ずっと探してるのよっ！」

水沢は完全に冷静さを失っている。俺が彼女の母親を知っていると思い込んでいるようだ。母親への思慕が溢れ出て、自分をコントロール出来なくなっているのかも知れない。

「俺は知らない、君のお母さんの事なんて……」

「嘘言わないでっ！ 私はこの話を誰にもしてないし、パパですら三角草の事なんて知らないっ！ だから初対面のアンタがそれを知ってる筈無いっ！ もし知ってるというなら、それは、ママから聞いたという事に他ならないっ！」

「……………」

俺は今、かつて無い程に頭が混乱していた。

時間が欲しい。

考える時間が欲しい。

「……ッ、ゴメン、水沢っ！」

俺は逃げ出してしまった。

後ろからは水沢の声が追いかけてきたが、それを意図的に聞き取らないようにしながら、駅へ向かって全力で走った。

水沢には同情している。申し訳ないとも思っている。でも、まず俺の頭を整理しなくてはならない。そうしないとおかしくなってしまうそうだ。

だってそうだろ？

水沢の話が本当だとするならば、あの女性が水沢の母親である可能性が出てくる。

でも違う。

そんな可能性は無い。

何故ならあの女性は、俺の……この俺の——『幻覚』、なのだから。

t i m e t o b e l i e v e n o w 2 (後書き)

次回も……と言うか、ずっと会話メインです。

t i m e t o b e l i e v e n o w 3 (前書き)

かったるい話が入ります。

t i m e t o b e l i e v e n o w 3

一月二十二日 土曜日 夕刻前

「――それで、お巡りさんに声を掛けられてからは見えなくなったのね？」

「はい」

「咄嗟に逃げた可能性は？」

「お巡りさんは、俺が一人で騒いでいたから声をかけたって、言っていました」

「あらら、決定的ね」

「こここのところ落ち着いていたんですけどね……」

「落ち込まなくても平気よ。少なくとも悪化している訳じゃ無いもの」

一つの部屋に、二人の男女。

一人は俺。

もう一人は年配の女性。

二人はリビングテーブルを挟んで、向かい合って座っていた。

「はぁ……」

俺は溜め息を一つ吐き、ソファに深く座り直す。

「あらあら、ひどくお疲れね。そんな顔、久々に見たわ」

「どんな顔です？」

「そうね……何かに後悔してる顔、かな」

「……………」

この人には敵わない。

確かに俺は少しだけ後悔していた。水沢ひかるの事だ。

——ママはどこに居るの！？

あの時の彼女の必死の形相が頭から離れない。俺は、彼女から逃げたのは失敗だったのではないかと、思い始めていた。

「幻覚の事よりも悩ましい事案を抱えてるみたいね」

「美作先生、鋭過ぎなのは嫌です」

「あら、ごめんなさい」

美作先生。

みまさか なおこ

美作奈緒子医師。

俺の主治医で、ここ、児の手柏^{こてがしわ}医院の開業医。俺が六歳の時からお世話になっている精神科医だ。

付き合いはかれこれ十年近くになる。年齢は未だに知らないが、

少なくとも俺の父さんよりは上の筈。しかし見た、目は出会った時から全く変わっていない。髪型もずっとショート、体型もほぼ維持され、しわも増えてる様子は無い。この人だけ時間が止まっているかのようだ。ただ、最近は手元を見る時に眼鏡を掛けるようになった。きつと老眼が……。

「ん、んんっ。志朗君？　今、何を、考えたのかな？」

「いやいやいや……な、何も、そんな、別に……」

「んん？」

「うっ」

余計な事は考えない方がいいな。この人は本当に鋭過ぎる。

「まあいいわ。それで？　どんな事で悩んでるのかしら、ひょっとして青い悩みかな？」

「違いますっ。ここで悩み相談するつもりはありません。カウンセリングをお願いします」

「あら？　私、カウンセリングってお悩み相談だと思ってたわ」

「え、あれ……？」

「ふふ、カウンセリングって言葉は広義に使われるからね。正確には『相談援助』。悩みを抱えている人が、自らその悩みへと立ち向かえるように導くのが、カウンセリング」

「何かややこしい言い回しですね」

「その人に、解決方法を提示してあげるのは、アドバイス。その人を、自分で解決できる人にしてあげるのが、カウンセリング」

「主体性の有り無し？」

「そんな感じね」

「じゃ、先生が俺にしているのは……」

「心理的カウンセリングよ。一番多くやっているのは来談者中心療法ね」

「それって話を聞くだけですよね？」

「ただ聞くだけ」

「……もしかして、精神科医ってぼろ儲け？」

「ウチの医業収益対人件費比率は70パーセントに迫ってるの。火の車。明日をも知れない状態よ」

「そんな事、患者に話しちゃっていいんですか？」

いつも通り、話は脱線していく。

そう、これはいつも通りなのだ。

本題が四に対して雑談が六、雑談の勝ち。

「話が逸れてるわ」

「いつも逸れます」

「いけないいけない、お仕事しなくっちゃ」

別にいい加減な先生という訳では無く、こういうテクニクなんだと思う。その証拠に、ここに来る前までの不安感は薄れ、今は普段の自分を取り戻せているように思える。

「さて、と……あら、何だったかしら？」

……テクニクの筈だ。

「今日の事は分かったわ。水辺じゃないのに随分と明晰だったみたいね。水辺で見る幻覚の方は相変わらず？」

「……はい、それは相変わらずです」

幻覚症状。

それこそが、長年ここへと通う理由。

そもそもの始まりは、六歳の時に遭った水難事故。それをキッカケに、俺は水辺において幻覚を起こすようになった。

海で。

川で。

プールで。

水溜りで。

表れる症状は基本的に幻視。見えるのは女の人。水の中から女の人が見れるのだ。それはとても恐怖を誘う幻覚だった。だから俺は水辺に近付かない。いや、近付けない。

美作先生は、水難事故を原因とするPTSDと診断した。すなわ

ち、幻覚は心因性のものだという事だ。

「今は季節的に雨が少ないんで助かってます。……まあ、雪が溶けたら水溜りになりますけど。でも、子供の頃ほどの恐怖は感じなくなりましたし、前も言ったように、前兆みたいなのを感ずるようになったので、パニックにはもうならないと思いますよ」

「前兆って、例の背中のだらだら？」

「いえ、背中のだらだらです」

「……違いが判らないわ」

「ええと、感覚的な事なんで、口で説明するのは難しいんですよ……」

「通常、幻視の前駆症状として挙げられるのは、意識障害とかなのだけ」

「そういうのは無いと思います。失神とかした事は無いです。大抵は、不意にこう……あ、ぞわぞわしてきた、これはくるかも……みたいな感じです」

「因みに今日のは？」

「前兆ですか？ 全く無かったですね。というか、幻覚って気付かなかったです」

「幻視、幻聴、体感幻覚の三拍子だものね」

俺は五感の内、味覚を覗く四つの感覚で幻覚を起こす。複数の感覚で症状が出た場合は、それを幻覚だと認める事が非常に難しい。

まさに今日がそうだった。

俺はあの女性の姿を目にし、声を聴き、身体に触れた。あれを幻覚と気付けた事は、運が良かったと言える。子供の頃なんかは、幻覚なんて概念を持っていなかった為、見たもの聴いたもの触れたものの全部を、現実と認識していた。お蔭で俺は、自分の幼少期の記憶に、全く信用が置けない。

「それにしても、また新しい幻覚ね。その女性、いつもの女性じゃないのよね？」

「はい、あれはさすがに見間違いません」

「近頃は寧ろ、水辺以外の幻覚が多いかしら？」

「……かも、知れません」

水難事故によるPTSDが幻覚の原因……であるならば、こうも事故と関係の無い内容の幻覚を起こすのは何故だろうか。俺は、水辺で起こす幻覚を「怖い幻覚」、それ以外は「怖くない幻覚」と、分けて考えている。もっと言えば、前者は「認識し易い幻覚」、後者は「認識し難い幻覚」。さらに言えば、前者は「事故の所為」、後者は「なんで?」。そして、今日の幻覚は後者と言える訳だが、俺が水辺に近付かない事もあり、最近はこの手の幻覚が主となってきた。

そもそも、この幻覚症状が事故後のものなのか、それともそれ以前からあるものなのか、実は未だにそこが確定していなかった。となれば、俺の症状は本当にPTSDなのか、という疑問が出て来る。そういった訳で、美作先生は非定型精神病の可能性も視野に入れ

て診るようになった。すなわち、幻覚は精神病性のものだという事だ。

心因性か、精神病性か、あるいはその両方か。答えはまだ出ていない。

「去年の時と比べるとどうかしら？」

「去年……？ ああ、ゴールデンウィーク明けの時の事か。あの時も全く気付くませんでしたよ、今日と同じです」

「この一年間で、現実と区別できなかった幻覚症状は、今日のを合わせて二度？」

「うーん……どうでしょう。その二度は、直後にそれが幻覚である事を示す出来事が起こったんで、気付けたんですよ。ひょっとしたら、幻覚と気付かずにそのまま流してきた事もあるのかも」

「……幻覚と気付かず……ね」

「え？」

「いえ。じゃ、今日を経て、今の志朗君の心境は？」

「あ、ああ……ええと、参ってる……かな？」

「辛い出来事だった？」

「その、まあ、なんて言うか……客観的に見て、衆人環視の中『一人芝居』をしてたようなものですからね」

「そうねえ、周りにはそう映ったかもしれないわねえ。それを恥じ入っているのかしら？」

「というか、今になって冷静に考えると、あの時間のあの場所、ウチの学校の生徒が沢山居ただろうなあって。それを思うと、明後日の登校がちょっと億劫に……」

実際、現場を目撃していた女子生徒と、すでに接触を果たしている。その彼女はなんと言っていたわけ？ ……いや、しっかりと憶えている。「キモい」と言われた。

「今、学校に通う事に対して、強いストレスを感じる？」

「……でもないかな。いつもよりは、程度です」

「それは、普段から常にストレスを感じているという事？」

「あ、いえ、我慢出来る範囲です」

「……我慢、しているのね、志朗君」

「……………」

正直に言って、俺は学校生活を謳歌出来ていると言い難い。

その理由は、去年五月、ゴールデンウィーク明けに起こった出来事に起因する。

「——ああいう事が起こる可能性は、考慮していたんですが……」

「学校は、一番多感な時期の人間が集まる場所。一般社会ですら理

解を得にくい現状を考えると、高校生くらいの子たちが志朗君の問題を受け入れるには、些か人生経験に欠けるわ」

「うーん……」

その年代であるところの俺としては、キツカケさえあれば、みんな理解を示してくれるのではないかと思っている。多感な時期だからこそ、フレキシブルに物事を受け入れられるのではないだろうか。しかし、今の俺の現状を考えると、美作先生の意見には一理あると認めざるを得ない。

「フフ……気に入らないみたいね。まあ、だからこそ志朗君は、学校に通い続けられるのでしょうね」

「それは……よく、分かりませんが」

今でもあの出来事を思い出すと心が沈む。

日にちや曜日は……パツとは出て来ないが、とにかく五月初旬のゴールデンウィーク明けだった。

クラス委員としての仕事を請け負い、放課後の教室に一人残っていた時の事。俺は、突然現れた女子生徒に、愛を打ち明けられた。だが、俺はそれを拒んだ。女の子から告白されたのは、それが生まれて初めての事ではあったが、俺には想っている人が居た為、すぐさま断りの言葉を口にしたのだ。それがいけなかったのか、彼女は取り乱し、泣き出し、喚き出した。感情を剥き出しにする彼女の姿に、そこまで俺の事が好きなのかと心を打たれた次の瞬間、その彼女が突然カッターナイフを取り出したのだ。そして、それを自らの首筋へと宛がいながらこう叫んだ。

——死んでやるっ！

あまりの展開に胆が冷えた。本気かどうかなんて考えもしなかった。俺は無我夢中で彼女の腕を掴み、首からカッターナイフを引き離して、そのまま押さえ付けながら説得に当たった。時間にすれば二時間以上は掛かっていたと思う。その説得が功を奏した頃にはすでに日は落ちていた。どうにか落ち着いた彼女は、最後に力無い微笑みを俺に渡して、静かに教室を後にした。

……それが全て、幻覚、だったのだ。

この放課後の出来事は、翌日、俺の奇行という形で学校中に知れ渡る事となる。

曰く、因幡が放課後の教室で独り言を呟いていた。

一人、虚空に語りかけていた。

一人、呼吸を荒げていた。

一人で叫んでいた。

一人で暴れていた。

一人で。

独りで。

独り、放課後の教室で怪しげな行動をする男、因幡志朗。

色々な意味でショックではあったが、俺はそれほど深刻には捉えなかった。こんな事態は十分に有り得た事。ただちよつと最悪気味に起こってしまっただけ。人の噂も七十五日、今を乗り切れば何とかなるさ。……そう思っていたのだ。

だが、悪い事というのは重なる。

その後すぐの事だった。情報のソースは判らないし調べるつもりもないが、誰かによって、俺が精神科に掛かっている事を広められてしまったのだ。

これにより、俺には「異常者」のレッテルが貼られてしまった。

それからは当然の様に孤立している。クラス委員の仕事でもない限り、クラスメイトとも、ともにコミュニケーションも取れない。俺なりに、周りから信用を得ようと奔走してはいるのだが、今に至

って状況の改善は見られなかった。

「——イジメられるような事にはなってないのよね？」

「はい。基本的に怯えられているような感じですよ」

「心の負担を甘く見ちゃだめよ？　自分は耐えられる、なんて考えてる時点で限界は迫ってるわ」

「負担を軽減してくれる存在は、しっかりと確保しているつもりです。その中には先生も入っています」

「あら、本当にイイ子ねえ、志朗君は。なでなで」

「あ、あの……子供扱いされるのはちよっと嫌かも……」

「ま、カワイイ事言うのね」

「あの、だから……」

美作先生が脱線モードに入りかけている。さては飽きたな——と考えているのは内緒だ。

まあ本当は、俺のポジティブな発言を聞いて、今回の診療を終わらせるタイミングを見つけたのだろう。俺もそろそろ良い頃合いだと感じていたし。

「……あ」

「ん？　なにかしら」

水沢ひかるの事、話すべきだろうか。俺の幻覚に、間接的にだが、干渉してきたあの少女の事を。今までに無かった事なんだし、話した方がいいのだろうけど、まだ、俺の中で上手くまとまっていない。彼女のプライバシーにも関わりそうだし、どうしよう……。

「話したい事を我慢するのだけはやめてね？　話すべきか判断がつかない事なら、話さない方がいいわ」

「……………」

いつも思うんだが、精神科医って言うのは、心が読めるんだろうか。

「後者です」

「ならやめときましょ」

そうだな、これでいい。水沢の事は少し一人で考えたい。あの様子だと近いうちに接触してくるだろうし、それまでに心構えも作っておきたかった。

「じゃあ、今日は……今日もありがとうございます」

「いゝえゝ、こちらこそゝ」

こちらこそは変でしょ——そう思いながら、スポーツバッグと買い物袋を手取る。

「あ、来週の定期診療はどうしましょう」

「予約はそのままにしとくから、来たければ来ればいいわ」

そんなんでいいのだろうか。他の患者さんの都合とかは？ まあ、今に始まった事ではないか。

「処方箋はいつもの薬局にFAXしとくから、受け取り票はちゃんと受付でもらってってね」

「あ、はい。御世話様でした」

「はい」

そうして診療室を出た。すると……。

「おっと」

「あ、すみません……」

「いえ、こちらこそ」

出会い頭に男性と肩がぶつかる、どうやら部屋の前で待っていたようだ。ふと見ると男性は白衣を着ていた、ここの先生だろうか、見覚えは無いのだが。

「あら、京助君」

後ろから美作先生の声、一緒に出て来たようだ。別れの挨拶がちょっただけ恥ずかしく思えた。だってもう一度言わなきゃじゃん。

「あの、院長？ 患者さんの前では高井でお願いします」

「あらら、そうだったわね」

なんだか深読み出来そうな会話だ……。って、邪推か。

「志朗君、紹介するわね。……こちら高井京助先生、今週からウチの常勤になったのよ」

「高井です。よろしくお願いしますね」

「あ、因幡志朗です。こちらこそ、よろしくお願いします」

「君が因幡君ですか、院長からお話は伺っていますよ」

「へ？ 話って……」

「院長の娘婿につて」

「はあっ!?!」

なんじゃそりゃあっ!?!

「あれ？ 違う？」

「当り前ですっ！ そもそも、美作先生に娘さんがいる事自体、初耳ですよっ！」

「おや？ 僕の勘違いだったのかなあ……。めでたいと思ったのに、とても残念です」

この先生、何だか（変な意味で）危険なニオイがするぞ。そして美作先生は何故否定しない。

「クスクス……高井先生はね、私の旦那の妻の姉の夫の子供なのよ」

「いや姉の息子でいいじゃん……って、美作先生の甥っ子さん!？」

「さすが志朗君、頭の回転が速くって素敵よ。そう、私の甥」

「へえ……何て言うか、ハンサムな方ですね」

ハンサム。

イケメンとは違う。

その知的でスタイリッシュな風貌は、ハンサムって言葉がしつくりくる。背も高めで顔つきもシャープ。目は細めに見えるが、笑顔を絶やさないからだろう。うーん、モテそうだ。

「駄目だよ？ 僕には妻がいる、君と結婚は出来ません」

「何言ってますかっ!？」

「あはは……。ごめんねー、彼、少し変わってるのよ」

少し、だろうか。医者だよな？ しかも精神科の。……大丈夫なんだろうか。

「けど、なんか……美作先生の血筋って感じはする」

「あらま、どういう意味なのかしら。でもそうね、血筋っていえば、私に娘がいるのは本当よ」

「あ、そうだったんですか」

「志朗君、結婚してくれる？」

「貴女も何言ってるのっ!？」

「あらやだ、私とじゃないわよ？ 娘とよ、娘と」

「んなこたあ解ってます！ もう結婚ネタはいいですから！」

「ま、ネタだなんてヒドイわ。行き遅れ街道まっしぐらな子だから、早い内に当たりを付けてあげたいのよ」

「どんな人なんだ、先生の娘さん。いや、ここで興味を持ってはいけない。」

「そもそも、俺はまだ結婚できる年齢じゃありません」

「そんなの平気よ。言ったでしょ？ 行き遅れ街道まっしぐら。いくらでも待てるわ」

「だからどんな人なんだ、先生の娘さん。くそっ、興味が出て来てしまった。失礼な意味で。」

「でも、志朗君がどうしてもって言うなら、私が……」

「本日はありがとうございました。では、また後日」

俺は、脱兎の如く、その場を離脱したのであった。

「……あらら、行っちゃった。」

「叔母さん、叔父さんと離婚するんですか？」

「別居中ですもの、いつそうなってもおかしくは無いわね」

「そうですか……。世間の風当たりは強いでしょうけど、僕は因幡君との事を応援しますよ」

「京助君」

「はい」

「志朗君が居ないところで続けてもつまんない」

「はい？」

「……貴方も大概変わってるわね。それより、彼、どんな印象だった？」

「うーん、想像とは大分違っていましたね」

「そうなの？」

「叔母さんから話を聞いた時は、もっとニューロティックなイメージでした。まあ、症状の話がメインでしたから当たり前なんですよけど」

「じゃ、実際に会ってどうなったかしら」

「随分と社交的だったので驚きました。初対面なのに物怖じした様子はありませんでしたし、年代の違う相手とのコミュニケーションにも気後れせずに対応が出来てましたね。寧ろ……社交的過ぎやませんか？ カルテを見る限り、対人恐怖症に直結しそうなサブジェクトが多々ありました。そこから彼の、あのひとなりは想像できませんよ」

「ええ、尤もね」

「今日の来院は飛び込みだったんですね？ 何か症状が？」

「少し重めの幻覚症状」

「どう見てもその直後とは思えなかったんですが、どういったものだったんです？」

「えーと、幻視は、見たものの特徴を細かい部分まで思い出せるレベル。幻聴は、完全に聞き取れていてレスポンスにレスポンスが帰ってくるレベル。体感幻覚は、自分の身体に対して何がどういった作用を及ぼしているのかを明確に把握できるレベル。……なんでも、ネオンに映えそうな艶やかな出で立ちをした妙齡の綺麗な女性が、彼にしがみ付いて、『こっち来い』って連呼したんだそうよ」

「……………」

「解ってる。ちゃんと妄想の可能性も考慮はしてるわ」

「え、ええと、エピソードの一貫性については……」

「基本的には一貫性があるわ。彼は事故以来、『水辺で女性が現れる』と口にし続けてる。でもそれと同じくらいの頻度で、多様な一過性の幻覚を起こしているの」

「事故……PTSDに関しては疑いようありませんが、叔母さんは非定型精神病と診断したんですか？」

「便利な病名よね」

「……方便なんですか？」

「もちろん根拠はあるわよ。ただ彼の場合、心因性か精神病性かの判断が未だ付かないのよね」

「幻覚以外はどういった症状が多いんですか？」

「志朗君はね、幻覚を起こすだけなのよ。それに伴うはずの障害や疾患の症状があまりにも軽微なの。正常と言ってもいいわ」

「……ここ最近の治療手法は？」

「PTSDに関しては、手堅くEMDR。私の分野だからね。あとは、今日みたいなカウンセリングが主よ。薬はクロキサゾラムを中心に処方してる」

「メジャートランキライザーを試したことはあるんですけどっけ？」

「ええ。でもすぐにやめたわ、緩解しなかったからね。薬は幻覚を抑える為じゃ無く、幻覚によって引き起こる混乱や不安感を抑えるのが目的になってるわ」

「対症療法の感が否めませんね」

「耳が痛いわね」

「うーん、しかし、なんと言いますか……」

「高井先生はどう判断しますか？」

「いえ、僕はまだ因幡君とまともに接していませんし、なんとも……」

「現時点の意見でいいから、実際に会ってみてどう思ったか聞かせて？」

「フウ……。では、敢えて言うならばを、前置きとしまして」

「うんうん」

「ミュンヒハウゼン」

「あれま」

「主観ですけどね」

「自傷行為は無かったと断言できるわ。それでもミュンヒハウゼン？」

「今日会った事でパラノイアの線は、僕の中では薄まりました。それで、カルテにあった彼の生い立ちに関する内容を鑑みて、これは

しつくりくると思えたんです」

「なににせよ京助君は、志朗君が幻覚を起こしていないと考えてるのね？」

「例の水難事故の直後はあったんだと思いますよ？ PTSDの症状としてね。でも今は違う。きっと彼は、症状の回復と共に、周囲の人達の自分への関心が、薄れてしまったと感じたのでしょう。そこで再び関心を得ようと、精神病的エピソードとして目を付けたものの、それが『幻覚』。ただ、今ではエスカレートし過ぎて、幻覚の範疇を超えてしまっている。そこに気が付かせてあげられれば、エピソードは破綻する訳ですので、新しいエピソードを生み出してしまう前に、症状の自覚を促す。……といったところでしょうか」

「うん、なるほどねえ、いいトコ見てるわ。では、十年来の主治医の意見をば」

「……聞かせて下さい」

「志朗君は、確かに関心を失う事を恐れている。それは、あるたった一人の関心だけ」

「それは？」

「お父さん」

「ふむ……」

「彼の行動理念の根幹には、常にお父さんの存在があるの。お父さんに迷惑をかけたくない、悲しませたくない、失望されたくない。」

志朗君は常にそんな思いを抱いているわ。それは明らかに過剰なもので、ともすれば異常ともいえる程よ」

「境界例なんですか？」

「いいえ、いわゆるファザコン。エレクトラとは混同しないでね？ 俗にいうファザコンよ、重度のね」

「それが本当なら、彼にとって『病気の息子』という立ち位置は…」

「むしろストレッサー。だから、ミュンヒハウゼンは除外」

「じゃあ叔母さんは、幻覚に関しては疑いを持っていないんですね？」

「……それは、どうかしらね……」

「叔母さん？」

「……いろいろ反論はあると思うけど、いえ、反論しか出て来ないでしょうけど、とりあえず聞いてもらえるかしら」

「珍しく自信無さ気ですね……なんですか？」

「志朗君のは幻覚じゃないかもしれない」

「え？」

「彼はね、幻覚に自力で気付けるのよ。状況との整合性を計り、矛

盾が見つければそれを幻覚とみなし、自ら対処法を考える」

「……なんとも、随分と冷静な子ですね。ん……？ いや、違う。そもそも、そんな精神状態の時に幻覚症状が出るなんておかしい。無いとは言いませんが、それならいつそ脳器質性の疾患を疑います」

「統合失調症を疑った時に受けさせたfMRIの画像を、知り合いの脳神経科医に診てもらった事があるの。その先生は正常と判断したわ。因みに、灰白質も減ってはいなかった」

「うーん？　じゃあやっぱり、虚言か妄想ですか？」

「もう一つあるじゃない」

「もう一つ？」

「幻覚でも虚言でも妄想でも無いなら？」

「……まさか、現実だとか言い出す気ですか？」

「私もね、それなりに地位というものを持っているの。だから、こんな事をおいそれと誰かに相談できないのよ。私のなけなしの権威に係わるからね。でも京助君なら遠慮は要らないでしょ？」

「実は早くも降参気味なんですが……。まあ、とりあえず聞く、という話でしたからね。分かりました、聞きましょう。叔母さんの相談相手だなんて、僕では役不足でしょうけど」

「いいえ、貴方は優秀な子よ。そんな優秀な京助君に伝える、私の結論」

「はい」

「彼、因幡志朗君は、通常の人間には知覚し得ない現象を知覚出来てしまう人間——」

「……………」

「——超感覚的知覚能力者、よ」

t i m e t o b e l i e v e n o w 3 (後書き)

医者達の会話は、わりと適当です。あんまり真に受けないようにして下さいまし。

t i m e t o b e l i e v e n o w 4 (前書き)

なかなか学校の話が出てきませんが、学園ものと言います。

time to believe now 4

一月二十四日 月曜日 早朝

憂うつな月曜日の朝。

休日明けの朝というのは、どうしてこうも辛いのだろう。本来、休日でリフレッシュされた身体は、この時にこそ絶好調であるべきではないだろうか。しかし実際は、月曜日が最も辛く、そこから火曜、水曜と、徐々に調子を上げていき、土曜日の夜に絶好調はやって来る。

要するに、身体の問題では無く、心の問題。

どうやら俺は、月曜日の朝において、すでに次の日曜日が待ち遠しいらしい。

月曜日の朝が憂鬱なのは、そこが一番休日から遠い場所だからだ。――俺はこれから、六日間の険しい道のりを歩まねばならない。学校という苦難を乗り越えて……。

穂ノ上^{ほがみ}ー…… 穂ノ上ー……

電車のアナウンスが、俺の降りるべき駅に到着した事を報せる。俺は数多の学生達と共に電車を降りた。

何気なく振り返ると、ラッシュの解消された電車のドアが、丁度閉まるところだった。穂ノ上市には学校機関が集結している為、この時間、学生が降りてしまえば、車両内は着席率100パーセントに達する事が出来る。それを見る度、俺は、もう一度電車に乗り込みたい衝動に駆られるのだ。

こんなところでも、俺の深層心理にある不登校願望が窺えてしま

う。

ゆっくりと動き出した電車の中の乗客達は、悠々としていた。穂ノ上から乗り込んだ客は、当たり前のように座れているし、さっきまで学生達に圧倒されていたサラリーマンは、これ見よがしに新聞を広げている。OLは手鏡で身なりを整え、中には化粧を直している輩まで居る。学校のある場所が穂ノ上ではない学生も、もちろん居る訳で、「ここからは自分達のターンだ」とばかりにはしゃいでいる様子が目に入り、持たざる者の羨望を覚えた。

ラッシュの時には手に持っていた荷物を、空いた途端に網棚へと載せるのは何故だろう。込んでいる時にこそ、上に載せるべきではないだろうか。客席は空いたが、網棚は混雑している。よく見れば赤ん坊まで沢山載せて……。

「……て、えっ!?!」

思わず電車を追う。だが、加速がつき始めた車両は急速に速度が上がり、あっという間にホームを後にした。

「……………」

……まったく、俺の脳、或いは精神は、何を思ってあんな光景を創り出すのだろうか。仮に、夢と同様、深層意識に伴うものであるとするならば、電車の網棚の上の赤ん坊は何を暗示するのだろうか。あんな異状極まりない光景・発想が己の心の内にあるのかと思うと、自分自身に信用が置けない。

そう、俺が何よりも信じられないのは自分なのだ。

「はぁ………」

溜め息を吐いた後、俺は人の波へと合流した。

憂うつな最たる原因が一昨日、土曜日の午後の出来事である事は、言うまでもないだろう。加えてその夜、父さんが仕事で帰れず、せっかくの八宝菜を食べて貰えなかった。そしてもう一つ、昨日の日曜日。サツマイモを買う事を失念してしまっていた俺は、ミケにスウィートポテトを振る舞えなかった。「おはよ、機嫌直った?」「「っーん」といったように、今朝に至るまでミケの機嫌が麗しくない。こんな精神コンディションで今日の学校を乗り切れるだろうか。そんな不安を抱えていたところに先程の幻覚。言いたい事は一つ。まいった。

「はあ……」

溜め息以外の呼吸の仕方を忘れてしまっそうだ……なんて考えに再び溜め息。そんな無為な行為を繰り返しながら駅を抜け、バスターミナルへと向かう。

「……………」

ふと、駅前商店街の方に、目が向く。アーケード街に入って最初の横町に、気持ちが向く。そこは、例の幻覚を起こした場所。

——ママはどこに居るの!?

再び水沢ひかるの言葉が頭を過った。

これは共感なのだろうか、それとも同情なのだろうか、俺も母親が居ないから変に気に掛かってしまう。

水沢は、八年間ずっと探していると言っていた。そんな彼女には、お母さんとの再会を果たして欲しい。俺に出来る事があるのなら、協力するのもやぶさかではない。

だが、しかし、だ。

彼女の母親が、俺の幻視に表れるなんて事、あり得るか？

俺が幻聴で聞いた事柄が、水沢母娘に関係する事だなんて、あり得るのか？

偶然だ。そうとは思えない。

大体、俺が目にした女性はどう見積もっても二十代前半。水沢を生んだのいくつの時だよ。一けた代になるぞ。

……いや、待てよ。忘れてしまってるだけで、俺は過去に水沢の母親と会った事があるのでは？ その時の事が幻覚として現れたから、彼女の年齢は、俺と出会った時の年齢だった……とか？

「……………。時間はまだ八時になってない、か……」

学校指定のコートのポケットから、ケータイを取り出して時間を確認。いつも通り余裕のある時間だ。バスに乗らずとも充分に間に合う。

俺は、試しにもう一度、あの場所へと行ってみる事にした。もしも、俺の記憶が幻覚となって表れたのであれば、あの場所で何か情報を得られる、もしくは思い出す事があるかもしれない。

だが、これは飽くまで、試しに、だ。

「…………ん？」

アーケードに向かって歩いてみると雪がちらつき出した。今はもう一月も下旬。二十四節季ではとっくに春だが、通念的には冬真っ盛りだ。

この地域では、これから二月に掛けてが降雪量のピーク。でありながら、晴れ間の多い時期でもある為、早朝に降り積もった雪が、午後一気に溶けてしまう事が多い。その結果生ずる大きな水溜りは、俺の幻覚症状を誘発してしまいがちだ。梅雨や秋雨に比べればもちろんマシだが。

「ん、走るか……」

バッグに常時入れっぱなしにしている折り畳み傘を出すべきか迷ったが、ちよつと行けばアーケードがある訳なので、俺は走る事を選択した。

駅前商店街を名乗っている以上、駅前にあるのは当たり前、ものの数分で辿り着く。

ガヤガヤ……ガヤガヤ……

早朝といえど、アーケード街はそれなりに喧騒があった。俺の通う学校の通学路みたいなものだし、通勤・通学者をターゲットにしている店もいくつか開いている所為だ。学食に飽きた学生などは、ここで昼食を調達している事だろう。朝食を摂るパターンもある。俺はすでに食べたし、弁当持参なので店に用は無い。

用があるのは、そう、あそこ。

「……昨日の女性は見えない、か」

土曜日にいざこざのあった横町への曲がり角。そこでいったん足を止めて周囲を見回してみるが、特に何も起こらない。

「まあ、こんなもんだよな……」

簡単に諦めをつけて、そこから立ち去ろうとした時だった。

「……？ ツ……うわっ！？」

不意に、背筋を駆け上がる悪寒。

これは前兆。

俺特有の前駆症状。

主に水辺で起こしてきた事態。

「う……っ、つよい……ッ」

水辺では無いのにも拘らず、今までに感じた事が無いほどの強烈な怖気^{おそけ}。思わず地面に片膝をついてしまう。

俺はすぐに両腕を交差させて、自分の両肩に両手を載せ、自分で自分を抱きしめる様な姿勢を取った。そうしたら、肩を左右交互にトン、トン、トン、トン……と、優しく叩いていく。「バタフライ・ハグ」と呼ばれるものだ。いつもこうやって心を落ち着かせる。最近では、うまい具合に抑えられるようになってきていたのだが、今日はそうもいかないようだ。

それはあまりにも強い前兆。

自分がどうなってしまうのか、とても怖い。

「あ、あの、大丈夫ですか……？」

不意に聴こえてきた声。しかし今の状態では、それが現実なのか幻聴なのか、全く判断する事が出来ない。

「だ、大丈夫です……！ ほっという……！」

「そ、そう……」

とりあえず、突き放すように対応した。現実ならば、相手に大変失礼な真似をしてしまった事になるが、今は自分の事で手一杯。

「……ん……な、なんだ……？ ……うくっ」

ビイイイイイイイイイ……

幻聴？

いや、耳鳴りか？

やたらと耳に付く、かすかな音。それに気付いた直後、背中の悪寒がゆっくりと治まり始めた。

「フウ……フウ……」

息を整えながら、無意識に音の出所を探した。だが、幻聴なのだとすれば、それは無意味な行為だ。

ガッシャアアアアンツツツ！

「ッ！？」

小さな音を探して見つけたのは大きな音。どこから聴こえて来たのか、今度は当たりが付いた。それは、土曜日に、あの女性が俺を引き込もうとした路地裏。

「くっ！」

身体が勝手に走り出した。何故だろう、幻覚なんて気にしないのが一番なのに。自分の創り出した幻想に、振り回されるようになってしまったてはお終いだ。それは、社会への適応力が欠如した人間。閉鎖病棟へと入れられてしまう可能性すらある。

そんな事を考えながらも足は止まらない。

俺は感じていた。

何よりも信用の置けないこの心で感じていた。

それは強い『予感』。あそこへ行けば何かが変わる、そんな強い『予感』。

この時の俺は、何かに急ぎ立てられるかのように、路地裏へと足を踏み入れた。……後日、俺はこの行動の正誤に悩まされる事となる。

「ああつ、うっとーしいっ！」

ガッシャアアアアンツツッ！

路地裏に足を踏み入れると同時に、怒声が耳に入った。そして、間髪入れずに、先程と同じような破壊音が続く。

「な、何だ……？」

恐る恐るそちらを見やる。

そこに居たのは中年の男性。おそらくは声の主だろう。そしてその周りには缶や瓶、ごみ袋やらポリバケツやらが散乱していた。たぶん、これが先程の音の原因。現状から、この男が暴れたのではないかと推察出来る。

そして気付いたのは、再び背中をせりあがり出したぞわぞわとした感覚。――あの男は危険だ。直感的にそう感じた。

俺は、一目散に逃げる事を選択する……

「……ん？」

……が、出来なかった。男がこちらに目を向けたのだ。

「あ……あ……」

「なんだお前は。もしかして俺を見ているのか？」

見たくて見ているんじゃない。

今すぐにでも顔を背けたい。

でも出来ない。

何故か出来ない。

あの男に目を向けられた瞬間から、俺の身体は全く言う事を聞かない。

「んん？ 聴こえてねえのか？」

男がこちらへと近づいてくる。ついに俺の身体は震え出してしまった。

いったい何故だ？ 何なんだこれは？ この男は幻覚か？ それとも現実か？ 俺はどうしてこんなに怖がっている？ 何がそんなに怖い？ あの男？ あの男が怖いのか？ あれは誰だ？ あの男は一体誰なんだ？

「……………」

「何なんだあ？ このガキは」

男が更に近づいて来る。

今の俺にできる事は男を見る事だけ。本当は今すぐにでも逃げ出したい。でも身体が動かない。俺は只々、男へと視線を向け続けた。

「チッ」

男が忌々しげに舌を鳴らす。機嫌を損ねてしまったようだ。もう何をされるか分からない。悲鳴を上げたい心境だったが、俺の喉は

音を発してくれそうもない。男がどんどん近づくとつれ、俺の心もどんどん追いつめられていく。

卒倒しそうになった時、視界の隅にそれが映り込んだ。

「……あつ」

声が出た。

もう二度と出ないかと思ってた。

それを聴いた男が足を止める。

「なんだ」

「あ……う……」

男の口から発せられる声に、いちいち戦々恐々としながら、今見えたものにもう一度意識を向ける。そして確認したのは、一昨日の女性の姿。まさかこんなタイミングで見る羽目になるとは……。

「ん〜？」

男は、俺の視線が自分の後方に向けられている事に気付いたのか、おもむろに振り返った。

「……………」

「……………」

男は無言。

俺も無言。

当り前だ、そこには何もないし、誰もいない。俺がそこに幻覚を

見ているだけ。

やがて、何も見つけられなかった男は、ゆっくりと俺の方へと顔を戻す。

「ひっ!?!」

俺は男の顔を見て戦慄した。別に何がどうなった訳では無い、男はただ笑っていただけ、俺は男の笑顔に慄いたのだ。

その表情を目にして、俺がこの男を恐れる理由が判明した。それは――狂気。

この男からは、狂気が滲み出ているのだ。

「小僧、顔色が悪いな」

男はすでに目の前に居る。身長は高めだ、180センチは優に超えているだろう。男は、俺よりやや高い目線から見下ろして来た。雑なオールバックと無精髭がガラの悪さを強調している。着ているスーツは、よれよれにはなっているが、なんとなく高級品のような気がした。そして、さっきから感じている、この圧倒的な威圧感。ここまで威圧感を覚えるのは生まれて初めてだ。トラの二歩三歩は先を行っている感じ。まるで本格的なヤクザのような……。

「……んん? んん?」

男はやや腰を落とし、俺をじっくりと観察しだした。目玉をギョロギョロと動かして……ん? 左眼しか動いていない。

この男の右眼、義眼だ。

「おい、俺の言ってる事が判るか?」

「え……？」

「ふむ、お前の名前は？」

「な、なんで……？」

「言え」

「あ……う、い、因幡……です」

「因幡……。下は？」

「えと……志朗」

「因幡志朗、か……」

マズイ。

名前を教えたのはマズイ気がする。
だが恐怖で逆らえない。
なんでこんなに怖いんだよっ。

「……チッ、これかあ、くだらねえ。もっと面白いもんかと思った
ぜ」

「え……？ え……？」

急に男が愚痴り出した。理由は分からない。

「今更なんだってんだ。宿命だってか？ くそったれっ」

男の言っている事はさっぱり理解出来なかった。誰に対しての、何に対しての悪態だろうか。

「ふん、まあいい、これも一興と捉えてやる。面白くないなら、面白くすればいいだけの話だ」

なんだ？ なんの話だ？

「よう小僧、今日、俺達が出会って事は分かってたんだろ？」

「は……？」

なんだそれは。分かってた？ そんな訳無いだろう。

「俺の方は期待してたのと違って、やや落ち込み気味だ」

だから、なんだそれは。解るように言え。

「小僧の方はどういうつもりでここへ来た？」

どういうつもりも、アンタには関係ないだろ。

「ふん、だんまりか」

「……………」

俺ではこの男と渡り合えない。すでに事は決している、この男が上で俺が下。

「あの女に興味があるのか？」

「えっ!？」

あの女？

あの女ってまさか……。

「あ、あの……！ 女……っていうの……は」

「あん？ あれだろ？」

男が顎をしゃくる。示したのは、先ほどあの女性が見えた場所。
しかし……

「え？ ど、どこに……」

……女性の姿は見つけられない。

「んん〜？」

男は、俺を値踏みするような目を向けてきた。

「……………。……派手なねーちゃんだな。美人だが化粧が濃い。あ
んなだけ脚出してたら、毛皮着てもさみーだろ」

「——ッ!？」

……それって、それって！ あの女性！ なんで!？ どうして
知ってる!？ オレの幻覚だろっ!？

「あ……あ……」

「なるほどな、つーことは今日のは偶然だったって訳か。いや、俺側の因子か？」

もう駄目だ。

もう限界。

なんとしてでも、ここから逃げなければならない。

「ほら、どこへ行く。会った記念にちよつと助けてやるよ」

腕を掴まれた。

どうする、振りほどくか？

そもそも、振りほどけるか？

「……の義務を果たすつてのも悪くないかもしれん」

なんだ？ 相変わらず何を言っているのか解らない。

「よっ……」

ガシッ……！

「!？ は、離して……!」

後ろから組み付かれてしまった。ものすごい力だ。

「いつまでも見えたり見えなかったりじゃ面倒だろ？」

「え？」

——ビイイイイイイイイ……

「……ああああああああああああ……!？」

さっきの音。

さっき耳鳴りのような小さな音。

その小さな音に、俺の全身は共振を始めた。

「……ああああああああああ……!」

「抵抗するな。よく聴いて慣れろ。そうすりゃコントロール出来るようになる。どうせ、いずれは俺の様になるんだから、早い内に慣れた方がいいだろ？」

慣れる？

コントロール？

そんな事よりもう止めてくれっ。

「……ああああ……ああ……」

ガクツと、俺は膝をついた。立っていられなくなったのだ。そう
なってようやく、男も放してくれた。

「ハア……ハア……ハア……ハア……」

地面にうずくまりながら呼吸を整える。身体に異常は無い……と
思いたいが、こいつは一体何をした？ 俺は一体何をされた？

「じゃあな、小僧……もう会うつもりは無いが」

男が静かに呟いた。どうやら去るようだ。

「ま、待って……！ アンタ……一体……」

一瞬足を止めたが、振り返らずに歩き出す。

「お前の保護者によろしくな」

軽い口調でそう言って、男は去って行った。

「……保護者？ 父さん……か？」

父さんを知ってる？

まさか、あの男は俺を知っていた？

「ふう……もう、何が何やら……」

呟きながらゆっくりと立ち上がる。意外にもすんなり立てた。震えも止まっているし、耳鳴りも無い。身体にも怪我は無いようだ。心身ともに異常は見られない。

不思議だった。何せあれほどの……。

「あれほどの……何だ？」

冷静になって思い返す。

耳鳴りのような小さな音が聞こえたと思ったら、急に全身が震えだした。

……それだけだな。耳鳴りがして身体が震えたただけだ。

「……………」

じゃあ、なにか？ 俺は痛かった訳でも、苦しかった訳でも無く、ただ単に恐怖でうずくまった？ 情けなくない？

「むー……」

思わず両手で顔を覆う。

あの義眼の男……、もっと話をするべきだったのではないだろうか。一昨日の水沢ひかるの時と同じだ。怖くなって逃げた。怖くて何も出来なかった。実に情けない。

「ねえ、そこのお兄さん。ちょっとこっちに来て欲しーんだけど」

「!？」

……マジ？ 立って続けですか？

「ね、いいよね、いいよね？ ねえ、いいわよねえ？」

声を掛けてきたのは、そう、あの女性だ。そういえばさっきチラッと見えたんだった。

「ねえ、おねがーい、こっち来て欲しーのよー」

「……あ、ああ、えーと、どうする？ ……どうしよう。あ、あのですね……その、俺、これから学校が……ハッ！」

学校!？

そう学校!

俺は慌ててケータイを取り出し、時間を確認した。

「わっ、もう十分切ってる!？」

ここから学校までは、一キロメートル強。十分あれば何とかなる。
だが、この状況はどうする? そもそもこの為にここへ来た筈だ。

「くうう……か、皆勤優先っ！」

俺は登校を優先し、脇目も振らずに駆け出した。

t i m e t o b e l i e v e n o w 4 (後書き)

義眼の男、この後長い事出て来ません。

t i m e t o b e l i e v e n o w 5 (前書き)

ようやくと学校シーン。でも、あんまり楽しくなさそうです。

time to believe now 5

一月二十四日 月曜日 昼休み前

「――そうして分類されたのが『ホモ・サピエンス』だ。これはラテン語で『考える人』という意味で……」

四時限目、生物。

好きでも嫌いでもない教科だ。

興味のある内容の場合は食い付くように受講するが、興味の薄い内容の場合は作業的に受けてしまう。因みに今は後者。

「……というふうに分けられた我々亜種は、さらに優秀という意味で『ホモ・サピエンス・サピエンス』という学名で……」

この先生は、只々教科書をなぞっていくタイプだ。こちらから質問でもない限り、教科書以上の知識は授けてくれない。これならいっそ読書の時間にして欲しい、その方が自分のペースで学べる。

「はらへった……」

思わず呟いてしまった。はっとして周りを見回すが、どうやら気付かれてはいないようだ。

それにしても、本当に空腹だった。何しろ今日は、朝の内にかかりのエネルギーを消費してしまっている。身体も心もだ。

身体は遅刻を回避すべく酷使した為。心の方は……言わずもがな。朝の出来事、あの義眼の男との遭遇は強烈過ぎた。言い訳にした

くはないが、お蔭で今日は授業に身が入らない。頭はどうしても朝の事を考えてしまい、授業内容を隅へと押しやってしまうのだ。この四時限目に至っては、教師の性質も相俟って、ほとんど話を聞けていなかった。但し、ノートを取るのだけは怠れない。あとで見せて貰えるような友人が居ないからだ。……言ってて悲しい。

「……で、人間が他種を圧倒する能力の一つが言語だ。これも、元はと言えば二足歩行からの……」

……言語、ね。

言語は何の為にあるのか。

それは情報を自分以外の誰かに伝える為。

人間は基本的に言語化された情報しか理解出来ない。伝えたい事があるならば、言葉にしなければ伝わらないという事だ。

しかしながら、言葉にしたからと言って必ず伝わるという訳でも無い。言葉を伝える側と受け取る側の間には、一定の信頼関係が必要なんだと思う。その信頼が無いとどうなるか。幻覚の女性然り、水沢ひかる然り、義眼の男然り、だ。俺はそれから受け取った情報を、ほとんど理解出来なかった。言葉を有していながらも、人間というのはこんなにもコミュニケーションが下手なのだ。

意思の疎通の難しさというものを、こここのところ頻繁に痛感している。

「はぁ……」

「んんっ！ 因幡、ちゃんと聞いているのか？」

「へ？ ……あっ」

しまった、指されたのか？ いや、この先生はそういうタイプじ

やなかった筈だ。

「え、と……なんの話、でしたっけ？」

「今日は珍しくボーっとしてるな。体調が悪いのか？」

「す、すいません。実はその……空腹でして、あはは……」

苦笑しつつ周りの様子を見る。

……無反応。

失笑でもいいから、何か反応が欲しい。

「昼までもうすぐだろう？ 頑張って集中しなさい」

「はい……」

「さて、これらの説が、人類が二足歩行を得た理由として有力だ。しかし、これらの他にも様々な説がある。ときに因幡、お前はそれを知っていたりするか？」

「え？」

教科書には無い内容。この先生が脱線するなんて珍しい。これは、あれかな……。

「例えば、ラブジョイの社会的戦略説……ですか？」

「ほお、それを知っているか。さすが因幡だな」

「はあ、どうも」

「せっかくだから説明しよう。えー、人類学者オーエン・ラブジョイは……」

当り前だが、この学校の教師は、俺の事情をある程度知っている。孤立、偏見、中傷と、俺が学校内でどんな状況にあるのかも理解している。その為か、生徒達の俺への印象を変えようと、たまにこうやって、俺の見せ場を作ってくれる先生が居るのだ。

しかし、まるで示し合わせたかの様なやり方は、完全に逆効果。きつとみんなは、俺を教師のご機嫌取りと捉えている事だろう。…まあ、内申書は気になる方ではあるが。

「……うむ、この事から、初期人類は一夫一婦で子育てをしていた可能性も考えられる訳だな」

何やら、俺良い事したゝ的な顔で授業を続ける教師。ホント、意志の疎通って難しい。

「はらへった……」

今度は誰かの耳に届く事を願いながら呟く。――ああ、俺もだ。――授業早く終わんないかなあ。そんな感じの反応が返ってこないかと期待したが、どうやら誰の耳にも届かなかったようだ。

キンコンカーンコン……

ついに昼休みへと辿り着いた。俺は待ってましたとばかりに、すぐさま号令をかける。

「起立！」

——ガタガタガタ……

「礼！」

——ありがとうございます……

クラス委員としての仕事。

俺が好きな仕事。

俺の言葉でクラス全員が立ち上がる。

この時ばかりは誰も俺を無視できない。

……本当に情けないな、俺。

「昼メシ、昼メシ」

バッグから弁当を取り出す。いつも通り、独りの昼食。慣れたくはなかったが、もう慣れている。

去年の五月頃は、教室から逃げるように、外や学食で食べていたが、今ではもう気を遣うのも疲れた。クラスメイトも、当初は気まずい空気を醸し出していたが、今ではすっかり無関心。俺が教室に居てもギクシャクした感じはしない。居ないものとされているのかもな……。

「なあなあ、お前、四組の時田と付き合ってるって本当か？」

「おいおい、どこの情報だよ、ソースを言え」

後ろから聴こえてくる会話。

実に高校生らしい会話だ。

混ざりたい……。

「信じらんねー、なんでお前ごときがあんなカワイイ子と」

「だから、誰に聞いたんだっつーの。てゆーか、お前ごときにお前ごときなんて言われる筋合いはねえ！」

ふーん、四組の時田さんてカワイイのか。今度見てみるかな。

「なあ、どこまでいってるんだ？ もうヤツたのか？」

さすが男子高校生は露骨だね。ヤツたのか？

「うるせー！ お前には何も言わねー！」

「チッ」

チッ。

「うらやましい奴め。時田って四組じゃ一番カワイイんじゃない？」

そんなにカワイイのか。やっぱり見てみたいな。

「バーカ。四組じゃ水沢が断トツに決まってるだろうっ」

……水沢？

「んあ、ああそーか、水沢が居たな。ありゃ四組どころか、学校でトップクラスだわ」

「だろ？」

「なあ、水沢って、水沢ひかる？」

「ッ！」

「い、因幡……」

つい話に割り込んでしまった。突然振り向いた所為で驚かせてしまったようだ。

「あ、急にゴメン。それで、今言ってた水沢って、下の名前はひかる？」

「そ、そうだけど……何なんだよ」

「あ、えーと、それだけ。……アリガト」

彼らのやり難そうというか、いつそ迷惑そうな表情に気後れした俺は、あっという間に話を打ち切った。——って、これじゃ駄目だろ。何で話を展開させないんだ。こんなじゃ改善なんて出来る筈も無い。いつまで経ってもこのままだぞ。いいのかそれでっ！？
……などと考えながら、正面に向き直り弁当をつつく。

「……モグモグ、ゴクン。……はあ」

クラスメイト達にとって、俺はいわば腫物。ある種の同情心から気を遣ってくれる者も居るが、まず深くは関わってこない。

俺の問題を受け入れるには人生経験が足りない、とは美作先生の言だったか。どうすればいいか分からないからどうもしない、まだ若いクラスのみんなはそういうスタンスのようだ。

そして、それは俺も同じだった。

「……………」

——知っているなら教えて！ ママはどこに居るの！？

水沢の事……俺も、どうすればいいか分からなかったからどうも
しなかった。

（……水沢、か）

どうする？ 会いに行ってみるか？ 期せずして水沢のクラスは
判明している。会おうと思えば会えるわけだが……

（……寧ろ、向こうから会いに来る可能性があるか）

考えてみると、水沢は、俺の事をよく知らないようだった。聞き
かじった程度と言ったところか。もしかして、俺が思っている程、
知れ渡っている訳では無いのか？ だとしたら、こんなキツカケで
もひょっとしたら……

「……………ぐあ」

情けない考えが浮かび、思わず呻く。^{うめ}

悩みを聞くフリをして近付く、とかって有り得ない。どこの女誑
しだ。彼女は本気で嘆いていた。力になりたいのなら、一切の下心
は消さねばならない。

……ん？ 俺は彼女の力になりたいのか？

「……………」

会いに行くべきか、行かざるべきか。うーん、待っていれば向こうから……駄目だ駄目だ、そんな消極的な事でどうする。そんなんだから今の状況があるんだ。別に失うものなんか無い、会いに行こう。

「……ヨシッ」

心を決めた俺は、素早く弁当を片付けて教室を出る。

「うわ、因幡、四組行くんかな……?」

「水沢ヤバくね……?」

「ぐ……ととっ……」

教室を出る瞬間に耳に入ったさっきの二人の声に、俺は思わずたたらを踏んでしまった。

「ヤバいって何がだよっ!?!」

と、心の中で叫ぶ俺。

クラスにおける俺のイメージはこんな感じな訳か。予想通りと言えば予想通りではある。

「きゃっ……」

「うわっ」

教室からよろけながら出て来た俺に、廊下に居た女子生徒がぶつ

かりそうになる。幸い、お互いに回避行動を取ったので、ぶつか
る事は避けられた。

「ちょっと気を付けてよ……」

「んあ、ごめんなさい」

「ん？ ……あっ」

「へ？」

「ア、アンタ……土曜の……」

「あ、み、水沢……」

その女子生徒は水沢ひかるだった。

四組に行く手間は省けてしまったが、若干心の準備が間に合っ
ていない。

「ああ、え、えーと、あれだ、やっぱそっちから来たか」

「はあ？」

「俺もそっちに行こうと思ってたんだ」

「何、言ってるの？」

「え、何って、土曜日の事だよ。あの時の事、ちゃんと話そうかと
……」

「や、ちょっとやめてよっ」

「はい？」

水沢がキョロキョロしながら、拒絶しているかのような態度を見せる。

「あの時の事は忘れて。私とアンタは何も関係ない、いい？」

かのような、では無く拒絶していた。ひどく意外だ。土曜日の時の感じからして、根掘り葉掘り訊かれるものとはかり思っていた。

「で、でも、あんなに話を聞きたがってたじゃないか。こっちも少しだけ頭の整理ができ……」

「いいからっ！……アンタの事、詳しく聞いたわ。話、当てにならないって事が判った」

「！」

「……悪いと思うけど、私に関わって欲しくない。じゃ……」

誰かから俺の話を聞いて、あの事を知ったようだ。いや、知らなかった水沢が特殊だったのかもしれない。だからって、そんな見事なまでに手のひらを返さなかったっていいと思う。慣れているつもりだったが、俺は少しカチンときてしまった。

「ちょっと待てよ、確認だけ……」

「ひかるーっ！」

水沢を引き留めるべく、彼女の肩に手を置いた瞬間、女子生徒が一人、俺達の間割り入ってきた。

「ほらひかる、遅いつつの。みんな待ってるから急いで」

「え？ あっ、ええ、そうね……」

その女子生徒は、有無も言わさぬ勢いで水沢の腕を取り、俺から彼女を遠ざけた。

「おいっ、話がまだ終わって……！」

「うっさいわね、こっちは急いでんのよ！ さ、ひかる」

「う、うん」

思えばこの時の俺は、自分で思っている以上に、頭に血が上っていたのだろう。だから、こんな不用意な言葉を放ってしまった。

「確認だけさせてくれ！ 水沢、君の母親って夜の仕事してたか！？」

「なっ！？」

水沢が物凄い勢いで振り返った。そしてその表情は、土曜日のあの時の表情。

「あ……」

俺は、自分の発言の意味に気付くと同時に、一気に冷静になった。
――夜の仕事？ バカか俺は！ 何でそんな言い方をした！？ 誤解を招くにも程があるだろ！ しかもこんな人前で！ 本当になんてバカなんだ！

「この……！」

水沢は俺を睨みつけながら、一気に間合いを詰めてきた。右手はすでに振りかぶられている。あれを俺へと振るうのだろう。避ける気は毛頭無い。寧ろ、自分から当たりに行きたい心境だった。

パアアンツ！

彼女の平手は見事に俺の頬を捉えた。そして、続けざまに怒声を浴びせられる。

「ふざけんな！ 何なのよアンタはっ！」

彼女の怒りは尤もだ、反す言葉も無い。しかし黙っている訳にもいけない。

「ごめん水沢。今のは間違いだ、俺の勘違いだ」

はっきりと、周りの人達にも聴こえるように言葉を紡ぐ。俺の不用意な発言を、俺自身で否定する為に。

「……っ、当り前よっ！」

「本当にすまない。言葉を間違えてしまった。水沢のお母さんを貶めるつもりはない。ただ、確かめたかっただけなんだ。申し訳無い」
おとし

俺は深々と頭を下げた。

「く……」

「この通りだ。俺も、自分の事とは関係ないと確認出来たし、言われた通り、もう水沢には関わらないよ」

「……それって、どういう意味？」

「どういうって、もう君には近付かな……」

「その前よっ」

「その前って……」

「おいおい、なにごとだこりゃ？」

「水沢じゃん。どしたー？」

水沢に謝罪していると、数人の男子生徒が首を突っ込んできた。俺の知っている顔は無い。四組の生徒だろうか。

「あ、う、ううん、いいの。もう終わったから気にしないで」

どうやら水沢も冷静さを取り戻したようだ。となると、この話は終了、だな。

「んだよ、男に絡まれてたんか？」

「ううん、別にそういう訳じゃ……」

「そーなのよ！　しかもコイツにつ！」

力強く俺を指差す水沢の友人と思しき女子。^{おほ}正直、イラっとくる言い方だった。

「ちょ、ちょっとナツ、もういいから……」

「て、うわっ、コイツ一組のサイコパスじゃんつ。水沢、よく無事だったなあ」

ドクンッ

今……なんて？

「ちょっと……」

「サイコパス？　へええ、コイツがそーなんか」

「ちょっと、だからヤメなって……」

「……サイコ……パ……ス……？」

「あ……い、因幡……君……」

お前達、その言葉の意味、解かった上で、俺に、向けているのか？

「マジやばいよね」

「ナツ！ ヤメなつてば……！」

「確か、イナバ……だっけか？ 何、お前、水沢に付きまどつてんの？」

「いいからっ……！ もう行こつ。ほらナツもっ」

「ひかる、こういうのはビシッと言っておいた方がいいって」

「こいつは何しでかすか分かんないぜ？ 水沢をストーキングするかも」

「……………」

「おいこら、イナバ。なに黙ってんだよ？ 水沢に付きまどつてんのかって訊いてんだ」

「付きまどつてない」

「んじゃ、なんで絡んだんだ」

「絡んでなんかない。話があっただけだ」

「何の話だよ」

「済んだ、もう話は無い」

「だったらもう水沢に用は無いって訳だな？」

「ああ、無い」

「それじゃあ言うておく。今後一切、二度と水沢には近づくな。いな？」

「分かった」

「ふん。……行こうぜ、水沢」

「……………」

「ひかる？ 行かないの？」

「……行こ、ナツ」

「へ？ あ、うん……」

彼、彼女達は去って行く。

その際、水沢だけは申し訳なさそうに見えた……のは、俺の願望かも知れない。

「……サイコパス、ね」

俺は小さく呟きながら、自分の教室へと戻った。

教室に入った瞬間、一瞬だけざわめき、すぐに水を打ったように静まる。そして俺が席に座ると、昼休みの喧騒が舞い戻ってきた。廊下でのやり取りを聴かれていたようだ。この教室の真ん前なんだから当たり前か。

「ふう……サイコパス……か」

無意識に口を突いて出る言葉。

かなりのショックだった。

クラス以外ではそれほど知られていない？　とんでもない。情報が少ない分、かなり酷い事になっていそうだ。噂は遠くに伝わるほど形が歪む。

もしかしたら、俺の、俺に対する認識は甘いかもしれない。

「……なにせ、サイコパス……だもんな」

俺は自分が良識ある人間だと自負している。手前味噌になってるな……言い直そう。俺は、常に良識ある行動を心掛けて生活している。社会規範に添った人間であるという事を周りに示せば、俺という人間が決して危険ではないと解かって貰える、そう考えたからだ。

だから俺は、社会のルールをしっかりと守っている。法に触れるような真似をした事が無いのは当たり前、この学校の校則も逸脱した事など無い。父親が警官である事も相俟って、俺は公明正大たるべく己を律してきた。

だが、しかし、それでも、周りは俺を危険視する。それは何故か。

“精神疾患Ⅱ異常者”

このパラダイムが、なかなかシフトしてくれない。

この国は、はっきり言ってメンタル・ケア途上国だと思う。欧米などでは、精神医療は比較的浸透しており、例えば、仕事で失敗をしてしまったとか、引越して生活環境が変わってしまったなどと、わりと些細な事でも精神科医のケアを受ける事があるらしい。

この国はどうだろう。「アイツ精神科に掛かっているんだって」「マジで？　ヤバくね？」……体験談だ、実際に言われた事がある。

そして、さっきの廊下でも誰かが言っていた。「何しでかすか分からない」……こんなの偏見もいいとこだ、そんなの精神疾患は関係ない。

だってそうだろう？

他人が何をしでかすかなんて、基本的に分らないじゃないか。精神疾患の有無に関係なく犯罪は起こっているのだから。

「ああ、くそ……！」

ダンッ！

イライラするあまり机を叩いてしまった。周りの幾人かがビクツとした気がする。……駄目だ、落ち着けよ俺。そんな態度を取ってもいい事なんて何もない。

偏見は今に始まった事ではないし、今すぐ解決できる事ではない。誰が悪いつていう問題でもないし、誰かに責任を負わせる問題でもない。

ここで怒りを曝しても立場を悪くするだけだ。幸い、俺にはちゃんと味方がいる、独りで抱え込む必要な無い筈さ。

……そうだな、とりあえず定期診療はちゃんと行こう。美作先生に話を聞いて貰いたい。

「……君！ 因幡君っ！」

「わっ!？」

「わっ、じゃありません。号令掛けて下さい」

「へ?」

突然話しかけられてやや混乱する俺。見れば、そこに居たのは、担任の広瀬川早苗先生ひろせがわ さなえだった。そして、視線を先生から黒板の上の時計に移すと……

「……うわっ、五時限目始まつてる！ いつの間に!？」

「いつの間に、でもありません。号令を掛けなさい」

「あ、き、起立！」

——ガタガタガタガタ……

「礼！」

——お願いしまーす……

「着席！」

——ガタガタガタガタ……

「はい。では、さっそく教科書の233ページを開いて下さい」

あっ……と、教科書、広瀬川先生だから現文か。やばいやばい、今日の俺は落ち着きが足りない、ちよっと本気で心を入れ替えよう。午前中は身が入らなかったから、午後だけでもしっかりと受けた方がいい。集中出来れば、嫌な事も忘れられるさ。

「すううー……、はああー……。よしっ」

気合を入れ直し、授業に向かう姿勢を整えた時——それは始まっ

た。いや、終わったとも云える。

それは、俺の内における、パラダイムシフト。

そんな俺の人生の転換期は、こんな音と共に訪れた。

ビィィィィィィィィィィ……

t i m e t o b e l i e v e n o w 5 (後書き)

学校での主人公は、基本的に憂うつなので、楽しい話にはなりません。

堅苦しくなり過ぎないように、そのうち、崩れたキャラを登場させる予定です。脇役で、ですが。

t i m e t o b e l i e v e n o w 6 (前書き)

三話で触れた『去年五月のゴールデンウィーク明け』に纏わるお話です。

time to believe now 6

一月二十四日 月曜日 お昼過ぎ

「――233ページ、開きましたか？ 今日、河盛好蔵の著書を紐解いていきます。えー、彼はファール昆虫記の翻訳に携わった事でも有名ですが……」

五時限目、現文。

担当は、担任の広瀬川早苗先生。

現代文学は比較的好きな為、授業に集中するのは容易だ。……と、思っていたのだが、始まって早々から、授業妨害が起こっていた。……俺、限定で。

ビイイイイイイイイ……

耳鳴りだ。

授業が始まった途端、耳鳴りも始まった。

微かな音ではあるが、一度気になりだしたら、授業に気がいかなくなってしまった。耳をほじったり、鼻を塞いで耳抜きなどもやってみたりしたが、治まる気配が無い。幻聴ならば度々経験してきたのだが、耳鳴りというのは殆んど覚えが無かった。これが起こり始めたのは、つい今朝方からだ。

つい今朝方……というと、やはりあの事が思い起こされる。

――よく聴いて慣れろ。そうすりゃコントロール出来るようになる。

不意に、頭の中で男の声が再生された。
今朝のあの男。

あの義眼の男に組み付かれた時に言われた言葉。

（慣ればコントロール出来る？　というのは、この耳鳴りのコントロールという事なのか？　……どうにも意味が解らない。確かに、あの男に組み付かれた時にもこの耳鳴りが起こったが、男と遭遇する前にも耳鳴りは起きていた。という事は、あの男に何かをされた線は薄い。耳鳴りの原因はもっと他に……）

「……君、因幡君っ。もう……因幡君っ！」

「――ハッ。あ、はい！」

しまった、指されたのか？　広瀬川先生はよく当てる先生だし。

「大丈夫ですか？　因幡君。何かぶつぶつ言っていたようですが……」

当てられた訳では無く、心配されたようだ。って、ぶつぶつ言っ
てましたか？

く……また嫌な噂になってしまう……。

「す、すいません。大丈夫なんで授業を……、……ッ!？」

「因幡君？」

広瀬川先生に、授業の再開を促そうとしたその時、“それ”が目
に入り、俺は息を飲んだ。

“それ”とは、教卓を挟んで、広瀬川先生の右隣に立つ人物。何をするでもなく、ただそこに佇む女子生徒。

普通なら、板書の為に前へと出て来たクラスメイトだと思うだろう。

だが違う。

彼女はクラスメイトではない。

恐らく、この学校で、彼女の事を知っている人間は居ない筈だ。俺を除いて、は。

そう、俺は知っている。完璧に見覚えがある。その黒髪のおかっぱ頭も、夢で小柄な体躯も、伏し目がちで淋しそうな面差しも、間違い無く覚えている。何故なら彼女は……

「……あの時の」

「因幡君？ 一体どうしたんですか？」

先生が声を掛けてきているが、それに応じる余裕は無かった。俺の目は、教卓の傍の彼女に、釘付けになってしまっていた。

幻覚症状。

俺は今、幻覚を起こしている。

何故それが幻だと思うのか。それは、前に一度、同じ幻覚を起こしているからだ。今、俺が目になっている女子生徒は、去年の五月、ゴールデンウィーク明けに、放課後のこの教室で、俺の幻覚に表れた少女なのだ。つまり、俺がこの学校で孤立するきっかけとなった幻覚を、再び起こしてしまったという事だ。

「！」

少女がこちらへと顔を向けた。俺と目が合うと、何故か驚いたような表情を見せた。しかし、彼女はその表情をすぐさま和らげ、嬉

しそうに微笑みながら、俺に向かって手を振ってくる。そして、その次の瞬間……

ビイイイイイイイイ……

……耳鳴りが急激に強まり、突然、目の前がブラックアウトしたのだった――

――気付けばそこは、夕日の差し込む教室。

そこに居たのは、俺一人だけ。

つい今まで、そこでは授業が行われていた筈。しかし、そこに居るのは俺一人。広瀬川先生も、クラスメイト達も居ない。俺、たった一人だけだ。

それは、驚くべき事態なのだろうが、俺の頭は酷く冷静だった。

射し込む夕日に、情感を覚える余裕があるくらいだ。俺は、全く周章狼狽する事も無く、只々ぼんやりと、誰も居ない教室内を眺めていた。

「あ、あの……。わ、わたしは……」

不意に声を掛けられる。

誰も居ないと思われた教室に、突如として現われた女子生徒。俯き加減で、切り揃えられた前髪の下から、覗き見るかのような上目使いをする、とても小柄な少女がそこに居た。

これは覚えがある。

そう、これは、去年の五月に見た光景。あの時と同じ幻覚だ。これも……フラッシュバック……と言っているのだろうか。

「わたし、あなたが……あなたが居ないと駄目なの。あなたが傍に居ないと何も出来ない。本当にあなたの事が……好きなのっ!」

やはりそうだ。

あの日のあの時と全く同じ科白。

俺はこれに……そう、確かこう答えたんだ。

「わかってるって。俺だってお前の事が好きさ」

……?

違う、そんな事は言っていない。

俺はこう言った筈だ。——ごめん、君の気持ちには応えられない。

「本当? 本当にそう思ってくれてるの?」

「ああ、もちろんだ」

知らない。

俺は、こんな会話はしていない。

「……じゃあ、なんで?」

「ん? 何がだ」

「……なんで、あの子と毎日会うの? なんで、あの子と遊びに行くの? なんで、あの子と……あの子とキスするの!?!」

「ちょ、ま、待ってって、なんの話をしてるんだよ?」

「静木さんよ! 佐田高の静木加南子さんの事!」

「あ、あっちゃ〜……」

これは……何なんだろうか。

この男子生徒は俺ではない？

なら俺は一体何を見ている？

ここは何処だ？

今はいつだ？

何が一体どうなってるんだ？

疑問は尽きない。尽きる事を知らない。

ただ一つ、これだけは解る。

俺は、目の前で繰り広げられている物語の、登場人物ではないよ
うだ。

「まあ、落ち着けよ、ことり。なんだ、どっから聞いた？」

「……ッ、そ、それは……」

「お前、もしかして俺を尾行したか？ うあー、サイアクー。スト
ーカーかよ」

「そっ！？ そんなっ、だってわたし……省吾君が！」

「好きだからってか？ 好きなんだったら信じろよな〜。……ハア、
ここまでかあ」

「え、ここまでって……？」

「バレたんだったら、続けらんねーだろ？ あ、もしかして、お前
ってそれでもOK？」

「え？ 何？ 何を言ってるの？」

「だから、俺の本命は可南子なんだ。ことりはキープ……てゆーか息抜き？ んで、ことりがそれでもいいってんなら、この関係が続けようぜって話だ。もちろん、可南子には内緒だぜ？」

「……………」

なんだこの男は？

心が無いのか？

どうして悪怖れもせずそんな酷い事が言えるんだ？

彼女の表情が見えないのか？

彼女のその悲痛な表情に何も思わないというのか？

「わたし……は。わたし……省吾君が……省吾君のお蔭で学校……頑張ってこれたのに。省吾君が居なくなったら……わたしは……」

「だろ？ 俺のお蔭で、ことりは学校に馴染めたんだ。俺と離れたら、また昔に逆戻りだぜ？ んじゃ、これまで通りだな。今までだって別に不満は無かったろ？ お前が可南子の事を気にしなければ、これからも俺達是一緒さ」

「……は、はは……」

そんな理屈、通る筈が無い。通るようなら、そもそも彼女はこんな状況を作らない。

今、彼女の胸には如何なる感情が芽生えているのか。

愛憎。

諦念。

愁嘆。

そんな言葉達が頭を過った。

「わた……わたし……ううう……」

チキチキチキチキチキ……

「おまつ、ことりっ！　なんのつもりだっ！？」

カッターナイフ……。

俺は……この展開が判っていた気がする。

今の彼女の姿は、俺が去年の五月に目にした光景、そのままだった。彼女はこの後、そのカッターナイフを、自らの首筋へと宛がうのだろう。

「わ、わたし……うう……わたし、死ぬよ……？　このまま……死んでやるっ！」

まさか、この光景をもう一度見る事になるとは思わなかった。この、自分の首にカッターナイフを押し当てる女子生徒の姿を。

「はあっ！？　頭おかしいんじゃないのっ！？」

そんな事を言っている場合じゃない。
止めろ。

彼女を止めるんだ。

「ううう……だって、だって！　わたし、また独りぼっち！　わたしにはもう誰も居ないんだもん！」

「うわ、マジかよっ！ お前、こんなイタイ女だったんかっ!？」

そういうお前は馬鹿なのか？

どうして彼女を止めないんだ。

彼女が本気で思い詰めているのが判らないのか？

とにかく彼女を止めるんだ。

さあ、早くっ。

「く……、っ、付き合ってられるかっ！ 勝手に死ねえっ！」

ガタンッ！ タッタッタッタッタ……

「あ……」

男は、教室を去ってしまった。
信じられない言葉を残して。

「あ、あは……あははは……」

彼女の口からは、小さな笑い声が漏れていた。
そこには、空虚しか感じられない。

「……うう……ッ……ううう……」

次いで聴こえてきたのは、嗚咽。
流れる涙が、拭われる事は無い。

「……ッ」

その時、彼女がナイフを持つ手に、力を入れた気がした。――ま

さか……。

「……あ……ああ……」

よせっ。

駄目だっ。

止めるんだっ。

お願いだから止めてくれ！

「……ああああああああ……」

止め――

「――因幡君っ！？」

「……え？」

あれ？　なんだ？　何がどうなって？　んん？　あの女子生徒は？

「因幡君、保健室に行った方がいいわ」

「は？　保健室？」

これは……広瀬川先生、だよな？

えっと、クラスメイト達もみんな居る。

……て事は？

「因幡君、貴方、今、意識が無かったんじゃないかもしれませんか？　一分

は返事しませんでしたよ？ 体調が悪いのでは？」

広瀬川先生が顔を近づける。かなり心配そうな表情だ。

「い、いえ、体調は悪くないです。ただ……」

あんな幻覚の起こし方は初めてだった。

第三者的立脚点から、見ず知らずの人間達のやり取りを目にする。

……これが幻覚？

寧ろ白昼夢では？

まさか、新しい症状が……

「……ん？ 先生、今、一分って言いました？」

「え？ ……ええ、そのくらいは返事がありませんでしたよ？ 大丈夫？」

「本当に身体は平気です」

しかし一分？

一分だけ？

あの出来事がたったの一分？

「本当に大丈夫なんですね？」

「あ、はい。すいませんでした、授業を中断させてしまつて」

「んんー……。うん、まあ、心配だけど、因幡君がそう言うなら、授業を再開します」

「はい」

広瀬川先生は、教壇へと戻って行った。……筈なのに、何故だろう。俺の机の側には人の影。

「ッ!？」

ガタンッ!

その人影を目の当たりにして、俺は思わず立ち上がり、後ずさった。だが、すぐに隣の机に遮られてしまう。

「ちょ、ちょっと? 因幡君?」

ザワザワ…… ザワザワ……

俺の奇行に、クラス全体が動揺を示している。しかし、誰よりも動揺しているのは、俺自身だ。何故なら、今、俺の眼前には……

「……やっと、気付いてくれたんだね」

……あの女子生徒が居るのだ。

「……ずっと、お礼が言いたかったんだ」

彼女は、落ち着いた物腰で語りかけてくる。

「……でも、あなたは、あれからずっと、わたしに気付いてくれなくて」

その言葉は、果たして、俺に向けられたものなのだろうか。

「……この日が来るのを、信じて待ってたんだよ？」

ただ、幻覚の時と違って、その顔が穏やかな事には、安堵を覚えた。

「君は……一体」

「……………。……いつも独りぼっちだったわたしに、あの人は優しくしてくれた。あの人と出会って、わたしの人生は変わったんだって思ってた。でも、違ったみたい。あの人は、わたしが死のうとしでも、止めてすらくれなかった。……わたしに初めて優しくしてくれた人。だけど、その優しさはまやかしだったんだ」

「……………」

さっき、俺が見たあれは、彼女の過去？

「……でも、あなたは違ったね」

「えっ…………？」

「……名前も知らないわたしを、あなたは必死に、あんなにも必死に説得してくれた」

「それは…………」

去年の五月の事、か？

「……とっても、とっても嬉しかったんだあ。人の優しさ、本当の優しさ、知る事が出来たの」

「そんな、俺は……」

彼女は、一体どんな人生を歩んできたのだろうか。そんな当たり前の事を、そこまで喜ぶだなんて。

「……でも、ごめんね？」

「え？」

「……ごめんなさい。あなたは、必死に止めてくれたけど……」

なんだ？ 彼女の表情が急に……。

先程まではあんなに穏やかだった彼女の表情が、今では悲愴に包まれていた。

「……わたしは、もう……」

彼女は悲しげな目を俺へと向けながら……

「……すでにここを……」

……自分の首に右手を当てた。そして……

「……切り裂いてしまったのっ……!」

プシャアアアアアアア……!

「ッ!?! うあああああああー!?!」

……彼女の首筋から飛び散る、大量の血飛沫。
あまりの事に、俺は絶叫してしまう。

「い、因幡君っ!?!」

ガヤガヤ…… ガヤガヤ……

俺の身体に鮮血が降り注ぎ、あつという間に血みどろになってしまった。

「あああああああつつ!?!」

「因幡君っ! 落ち着いて、落ち着いて下さいっ!」

拭っても、

拭っても、

拭っても、

拭っても……どんなに拭ってもっ!

何故みんな平気な顔をしているんだっ!?

「あああ……! ああああ……!」

「大丈夫っ! 因幡君、大丈夫だからっ! だ、誰か……あつ、ほ、保健委員の人! 彼を保健室へっ!」

「えええっ!?! わ、わ、わ、私がっ!?! むりむりむりむり! 無理ですううう!」

「あう……え、え」と、じ、自習にします！ 私が保健室へ連れて行きますので、その間、皆さんは自習していて下さいっ！」

「は、はい……」

「わ、分かりました……」

「さあ、因幡君、保健室へ行きましょう？ ほら、こっち……ああ、ほーらっ、こっち……に、来な……さい……！」

身体が何かに引っ張られた。

だけどそんなの関係無い。

だって血が……！

血がこんなに……！

「うーわ、見るの初めてだけど、あんなになんのかよ……」

「マジでヤバくない？ シャレになってないんですケド……」

「ひくよねえ、さすがに……」

「私、暴れ出すのかと思って、恐かったあ……」

「きっつー。因幡、マジきっつー……」

「ガチで異常者なのな……」

その後の事はよく憶えていない。ただ、保健室に着いた頃には、冷静さを取り戻せていた。後で知った話では、廊下で四苦八苦していた広瀬川先生に、隣のクラスで授業をしていた男性教諭が気付き、

二人がかりで、俺を保健室まで引き摺って来たんだそうだ。その男性教諭は、保健室に着いてすぐ教室へと戻ったらしく、すでに居なくなっていた。後で謝罪せねばならないだろう。

そんな訳で、今、保健室に居るのは、俺と広瀬川先生。そして、養護教諭の小池瞳先生こいけひとみの、三人だ。

「――それでは小池先生、後をお願いしてよろしいですか？ 私は授業に戻りますので……」

「はい、分かりました」

「では……」

ガラガラ……と、保健室の戸を開けて、広瀬川先生は廊下へと出て行った。そんな訳で、今、保健室に居るのは、俺と小池瞳先生の、二人だ。

「初めまして、かな？ 因幡志朗君」

「う……そ、そうですね……」

徳英に入学して間もなく一年になるが、小池先生と面と向かって話すのは、初めてだったりする。

「私としては、漸ようやくかって感じだよ。君とは深い交流になるって踏んでただけだなあ」

「は、はあ……」

実は、担任を通して、小池先生から何度かアプローチを受けてい

る。「相談しに来い」って事だったんだろうが、俺には十年來の主治医が居るので、必要性が感じられなかったのだ。

「それで？ 因幡君、突然取り乱したって話だけど、何があったのかしら？」

「いえ、問題無いです。ご存知の通り、俺は幻覚を起こすので、こんな事もあります」

「それって、問題でしょう？」

「……ええ、まあ、そうなんですが……」

「フウ、話したくなさそうね。まあ、強要は出来ないし、いいよ。それじゃあ、体調が悪いようなら横になる？ それとも、早退した方がいいかな？」

「あ、俺、戻ります。もう大丈夫なんで」

「戻るって……もうっ、無理はしちゃダメ！」

「無理なんて……」

「してるでしょ？」

「……………」

して……るかも。確かに、今すぐ教室に戻るの気が引ける。…
…そうだな、そうするか。考えたい事もあるし。

「あの、早退はしたくないんで、今の時間だけ横にならせて下さい」

「そう、分かったわ。じゃあ、私は親御さんに連絡しておくね？」

……は？

「ちよっ、やめて下さいっ！」

「わっ」

「……あ、ご、ごめんなさい、大きな声出して……。その、ウチは母が居ませんし、父は仕事ですから、今の時間に連絡は取れないんです」

「……………」

「だから、その、別に連絡の必要は無いですから……」

父さんは、土曜日から今日に至るまで、県警本部に詰めていた。それは即ち、何か重要な事案が生じたという事に他ならない。そんな時に、余計な事で煩わせたくなかった。

「……あのね、因幡君。こんな時の為に、私は、君のお父さんから緊急連絡用のナンバーを戴いてるの」

「え？」

「私だけじゃなくって、担任の広瀬川先生はもちろん、学年主任や教頭先生も、因幡さんご本人から直接、緊急用の電話番号を渡されているのよ？ ご挨拶と共にね」

「父さんが？ いつの間に……」

「何かあった時は、すぐに連絡して欲しいって。些細な事でも報せて欲しいって。くれぐれもお願いされちゃってるんだよ」

知らなかった。父さんがそんな事をしてくれていたなんて。

「連絡しても、いいかな？」

「……すみません、お手数ですがお願いします」

「ふふ。じゃあ、因幡君は横になりなさい。好きなベッド使っているから」

小池先生は、俺に横になる事を促してから、自分の机の上に備え付けられている、電話に手を伸ばした。俺はブレザーを脱ぎ、とりあえず、最寄りのベッドへと入り込む。別に眠気がある訳では無いので、ぼんやりと天井を見ながら、つらつらと考え事を始めた。

「……あ、もしもし。わたくし、徳英附属高校の養護教諭で、小池と申します。因幡さんでいらっしゃいますか？」

今日の事は、去年の五月のあの日の時とは、比べものにならない程の禍根を残す事だろう。何しろ、授業中にクラスメイト達の目の前で、醜態を曝してしまったのだから。去年の時は、ほんの一握りの生徒に目撃されただけで、孤立に繋がったというのに、今日は、クラス全員に決定的な光景を見せつける形となった。

正直、これからの事を想像すると、鬱を通り越して、絶望的な気持ちになる。俺はこの先この学校でやっていけるのか、と。

「……はい、大丈夫です、もう随分落ち着いてますので。……ええ、念の為にご連絡をと……」

だけど、さっきの小池先生の話。何やら父さんが、裏で色々と気を回してくれていたようだ。言われて考えてみると、この学校の教師たちは、俺に対する理解が深い気がする。生徒達からは敬遠されているが、先生方からは、よく声を掛けて貰っていた。これが父さんのお蔭だというのなら、諦観するのはまだ早いかもしれない。

なら今は、自分に起きた事態を把握しよう。そうすれば、次の対処へと繋がる筈。

「……はい……はい。……いえっ、こちらこそ至らなくて、申し訳ないです……」

では、あの時、自分に一体何が起こったのか。

幻覚症状？

俺の創り出した幻想、もしくは妄想？

……そうなのだろう。

何故なら、あの女子生徒が見えていたのは、俺だけのようだったからだ。というか、あれが現実なのだとしたら、今頃学校は、上へ下への大騒ぎになっている筈だ。俺の身体のどこにも血が付いていない事も証拠。あの夕日の差し込む教室の光景は不思議だったが、その後の事は、いつもの幻覚症状の範疇だろう。……水辺以外の場所、あんなに強烈なのは初めてだったが。

「……はい、ええ、お伝えします。では、お忙しいところ失礼致しました。ご免下さい……」

なんにせよ、あれが幻覚である事は間違いない……のだろうか？

この胸のモヤモヤ感はなんだ？

何故だか納得いかない気分だ。頭ではなく、心が納得してくれない感じ。幻覚に心を引き摺られているようでは、この先が思いやられるというのに。

「……ふう。えっと、因幡君？ 起きてるかな？」

「……あ、は、はい。寝てません」

シャツと、目隠し用のカーテンが開かれ、小池先生が顔を見せたので、俺は慌てて上半身を起こした。

「今、ケータイ持ってる？」

「はい？ ええ、まあ……」

「少ししたら、お父さんが掛けたいそうだから、電源を入れて欲しいって」

「父さんが？」

「そう。『このまま代わって頂いて構わない』ってお伝えしたんだけだね？ 『学校の回線は公共のものだから、私用では使えない』んですって。真面目な方ね」

「まあ、父は公僕ですからね」

言いながらケータイを取り出し、電源をONにする。

「君はちゃんと電源を切ってるんだね。偉い、偉い」

小学生じゃないんだから、そんな事で褒めないで欲しい。

「校内では切るようにと、校則にありますから」

「律儀に切ってる子は初めて見たよ。みんな、大抵はマナーモードだもの」

「そんな事はないんじゃない？……切る人は切ってると思いますけど」

「知ってる？　ここ数年、授業中に生徒のケータイが鳴らなかった日は、一度も無いそうよ？　毎日、誰かしら必ず、職員室へとやって来るの。没収されたケータイを引き取る為にね。君はそんな経験無いでしょ？」

「まあ、ケータイ鳴りませんからね……」

「電源切ってるものね」

鳴らしてくれる人間が居ないという見方も出来る。

「ふふ、因幡君は、噂通り、品行方正のようね」

「ど、どこの噂ですか？」

「教師間での噂、よ。君は先生方の間じゃ人気者なんだから」

「へ？　な、なんで……？」

「そりゃそうでしょ。授業は真剣に受けてくれる。目上の人に対す

る態度もしっかりしてる。大変な境遇なのに十分な成績を上げてる。現状に負けずに積極的な行動をしてる。うーん、なんて健気な子かしら。やっぱ教師って、そういう生徒には弱いよね。みんな、因幡君みたいな生徒を夢見て、教師になったんだと思うわ。多かれ少なかれね」

「……………」

なんだこのホメ殺しは。……そんなの、頑張って装ってるだけだ。信用を得たいが為に。

「……ここの生徒ってさ、進学校なだけあってみんな優秀なんだけどさ、その分猪口才ちよこざいな子も多いんだよね……」

「ちょこ……って、もしもし？」

「それに、なんて言うか……現代っ子？ 的な傍若無人さも目に付くんだよね……」

「小池先生……？」

「私が若造な所為か、粗を見つけてはからかってくるんだよね……」

あれ？ 愚痴にシフトしたぞ。

「男子は平気でセクハラ紛いの言葉を掛けてくるしっ！ 思春期だからって限度ってモンがあるのっ！ 保健の先生がエロいなんて偏見だあああっ！」

「ぶふっ!？」

何を言った！？ 我が校の男子生徒！

「女子は女子で年が近い所為もあってか普通にタメ口だしっ！ そのくせ陰でオバサン呼ばわりしてるの知ってんのよっ！？ つーか二十代半ばで上がってたまるかあああっ！」

「ぐあっ！？」

女子の陰口ってそんなに辛辣なの！？

「くそっ！ どいつもこいつも馬鹿にしゃがって！ 死なすぞガキ共おおおおー！！！」

誰この人！？ 小池先生はどこ行った！？

「せ、先生、抑えて……抑えて下さい！ そのガキ共の一人がここに居ますっ！」

「――ハッ」

正気に……戻った、か？

「……………」

「……………」

嫌な沈黙が入る。

「……………なんちゃって」

「遅いかと」

どうやらかなり明け透けな先生のようにだ。まあ、裏表が無いって事だし、俺としては好感が持てるな。

だが、なるほど。パニックを起こした人間はああ見えるわけか……。参考になったかもしれない。

「むゝ、だつてさ、だつてさ……」

今度はいじけだした。なんだろう、初見では威厳も感じたんだが……これは、フォローを入れた方がいいのか？

「……えっと、小池先生？ そんなの気にしてもしようがないですよ」

我ながら、自分を棚に上げた発言だった。俺は常に、周りにどう思われるかを気にしてる。

「その話だと、先生の魅力が原因とも取れますし」

「えっ!？」

「男子は、間違いなく、先生の気を引こうとしているんだろうし、女子の方は……^{ひが}僻み？」

「あ、あら……?」

男子の方は自信がある。女子もそれに伴って……だと思ふんだが。「男子に人気のある先生が鼻に付く」って感じで。

「それって、私が、綺麗って事？ ……とか言ってみたりし……」

「ええ」

「ツツ！？」

こうして見ると、随分と若い先生だ。新任なのだろうか。見た目が、女子生徒達とそう大差が無い為、他の先生方よりも近い感じを覚える。白衣を着ていなければ、教員にすら見えないかもしれない。これでは、生徒達が馴れ馴れしくしてしまうのも解る気がする。恐らく、髪型の所為で幼く見えるのだろう。両サイドのおさげを前面へと垂らし、前髪を切り揃えている。これで三つ編みだったら、古き良き女学生といった風貌だ。

でもなんだろうこの感じは。どこか安心感を与えてくれるような……ああ、そうか。美作先生。あの人の感じに近い。なるほど、養護教諭なのだから、カウンセラーとしての側面があっても不思議じゃない。とすると、先程のはっちゃけぶりも、この人なりのテクニクだったりするのかもしれないな。実際、俺の沈んだ気持ちさが、払拭されているように思える。

「……君、すごいね。その歳で、臆面も無く、そんな事を言えるなんてさ……」

「はい？」

「……おべっかや下心があるような感じが全然しなかった。落ちそうだったよ……」

「落ちる？」

「あ、ん、んんっ。……あー、なんかもう大丈夫そうだね？」

「はい。先生のお蔭です。助かりました」

「え？」

「？　なんですか？」

「私、何かしたっけ？」

「……………」

小池先生は、本気で意外そうな顔をしていた。もしかして、今までの全部、天然だったのだろうか。そういえば「よく生徒にからかわれている」というような主旨の発言があったな。……つまりは、そういう事なのか？

「……えっと、まあとにかく、後二年はここに通う訳ですし、またお世話になる事もあると思うんで、これからもよろしく願いします」

「あら、ほぼ一年間、ここを避けてた子とは思えないね」

「いえ、別に避けてた訳じゃ……ただ、必要性を感じなかっただけです。けど、小池先生が信頼出来る方だと解ったので、これからは頼らせて頂こうと思ったんです。……いいでしょうか？」

「ツツツツツ！？」

「あれ？」

今、この人、跳ねなかった？

「……そう……そうなのね……その素直さで先生方を落としてきたのね……よく……解ったよ……」

「こ、小池先生？」

先生の様子が明らかにおかしい。俺は何か地雷を踏んだのだろうか。

「す、すいません、何か、お気に障りましたか？」

「ううん、何も。ただ……君がちよっと可愛かっただけ。……じゅる」

「!？」

ズザザザザ…… ガタンッ

俺の身体が、反射的に、後方へと回避行動を取った。

しかし、そこはベッドの上。

すぐに背中がヘッドボードへとぶつかり、それ以上の行動が不能となってしまう。

「おい、どうしたー、なんで離れたー？」

解らない。身体が勝手に動いたのだ。

「いえ、お気になさらず……」

「んんんー？」

小池先生が、ゆっくりと近付いて来る。それに合わせるように俺も後ずさったが、もちろん、これ以上は下がれない。

というか、自分の行動が理解出来ない。何をやってるんだ、俺は。

「……因幡……くん？」

いや、俺の行動は間違っていない。先生の目を見て、それを確信した。

……逃げよう。

ここは逃げた方がいい気がする。タイミングを計って……

——ピリリリリリ…… ピリリリリリ……

「……わっ！？ あ、ケータイ……」

突然、右手にずっと持っていたケータイが鳴りだした。表示は父。流石は父さんだ、いつも俺を救ってくれる。

「あの……父から電話です」

「チッ……。そう、じゃあ私は少し席を外すから、ゆっくり話すとイイヨ。何かあったら、職員室に居るから」

今、舌打ちしなかった？

「あ、はい、お気遣いありがとうございます」

コツコツコツコツ…… ガラガラ

そうして、小池先生は、保健室から去って行った。

「……フー……。……変な空気だった……」

多分、「――なんちゃって」とか言ったオチがあったのだろうが、俺にあの空気を耐えるのは無理だ。……どうも俺は、年上に遊ばれるきらいがあるな。

ピリリリリリ…… ピリリリリリ……

「あつと、やばっ……」

……ピッ

「もしもし、ごめん父さん、待たせた？」

「ああ志朗。大丈夫、平気だよ。それで、今は電話しても？」

「ああ、うん。養護の先生の許可があるから」

あつたよな？ はっきりそうとは言ってなかったけど。

「じゃあまず、具合の方はどうなのかな？」

「何も問題なし。俺の事よりも父さんの事だよ。電話なんかしていいの？ 土曜日から立て込んでるんだろ？」

「僕の方も問題は無いよ。ちゃんと、時間を作ってから電話してるからね。それに、仕事も一段落してるから、予定通り今日は帰れるんだ。……って、僕の事よりも志朗の事だよ。先生のお話では、授業中にパニックを起こしたとか」

「そんな大袈裟なものじゃないよ、大した事無い、こっちは大丈夫。それより、俺の所為で父さんの仕事に……」

「志朗」

「う……」

父さんの強い呼びかけに、思わず口を噤む。怒鳴った訳でも無いのにこの迫力。伊達に刑事はやっていない。

「いつも言っているだろう？ 僕に親の責務を果たさせてくれ、と。志朗、君は親を頼らな過ぎる。それは、決して正しいとは言えない。もう何度も言っているが、君の抱えている問題は、家族の問題。君が解決したいと思っているのと同じだけ、僕も解決したいと思っている。それは、誰だろう、僕自身の為なんだ。解るね？」

「解ってはいるんだけど……」

どうしても、父さんを煩わせる事には罪悪感を覚えてしまう。それだけは、これだけは、どうしようもなかった。俺の……いや、俺と母さんの業だから。

「長々と話しても、いつもの繰り返しになるね。なら、こうしようか。今すぐ、何か一つ、父さんを頼りなさい」

「は？」

「なんでもいいよ。例えば、『今すぐ迎えに来い』とかね」

「え、だって、仕事でだろ？ そんな迷惑は……」

「その迷惑を掛けなさいと言っているんだ。君が僕の手を煩わせることが出来たなら、今日の所は良しとしよう」

「ええと？ 出来なかったら？」

「話、終わらないよ？」

「……………」

迷惑が掛けられないのなら、話は終わらない。仕事である父さんにそれは迷惑だ。というか、現在進行で迷惑が掛かっている。急いで迷惑を掛けて、今のこの迷惑を終わらせねば……って、ややこしいわっ！

「何か浮かんだかい？」

「えー、帰りに納豆を買って……」

「了解。けど、それは僕にとって迷惑にならないね。僕も食べる訳だから」

「く……」

駄目だ。こんなじゃ話が長引くだけ。でも、恣意的に迷惑を掛

けるなんて、良心の呵責が凄いですケド。

「……………」

一つ。

一つだけ、思いついた事があった。

でも、これは……。

「どうした志朗。ちょっとやそつとじゃ迷惑だなんて思わないよ？
思い切って……」

「……あのさ」

「ん……」

俺の声のトーンが変わったのに気付いたのだろう。父さんは聞き取りモードに入ったようだ。

「その、実は……」

「うん」

「し、調べて貰いたい事が……」

「へえ、驚いたね。それはつまり、警官としての僕を頼るということかな？」

「こ、ごめんなさい」

「いや、勘違いしてはいけない。志朗がそんな事を言うだなんて、

よっぽどだ。これは、是が非でも聞かなくちゃあいけないな。志朗、話してみなさい」

「……………」

本当にいいのか？ もし、俺の考えている通りの結果だったらどうする。今までの事、全てがひっくり返ってしまおうぞ。

「志朗、何も恐れる事は無い。僕はいつでも君を信じている」

電話越しだというのに、父さんは、的確に俺の表情を読んでいるようだ。いつもの事ながら頭が下がる。

……そうだな、どんな結果になっても、きっと、良くも悪くも、何も変わりはないだろう。

「父さん」

「うん？」

「この学校……徳英でさ、過去に、女子生徒が亡くなるような事件があったどうかを、調べて欲しいんだ」

「……………」

「もしもし？ 父さん？」

「ん、ああ、すまない。想像外の内容だったから、少し考えてしまったよ。それが志朗にどう関わるのか、とね。まあ、それは君に直接問えばいい話だし、まずはその頼みを聞きましょう」

「調べてくれるの？」

「その前に一つ確認。それは、学校内部での事件限定かい？ それとも、徳英の生徒が巻き込まれた事件全般を知りたいのかな？」

それは、徳英の生徒が亡くなったというような事件が、いくつもあるという事だろうか。それはそれで気になるが、今は前者の事が知りたい。

「学校内、教室で起きた事件だよ」

「教室……ね。そうか、なら、調べるまでも無いね」

「え？ それって……」

どっちの意味合いが？ 無かったから調べる必要が無い？ それとも……。

心が逸った。

この後すぐ聞ける事なのに。

「……父さんが徳英を卒業した直ぐ後、女子生徒が一人、亡くなっている」

ドクン

「そ、そ、それって……自殺？」

「そう……だね」

「カッターで首を切ったの!？」

「……………」

「父さんっ！ 答えてくれっ！」

「誰かに聞いたのかい？」

ドクン

それは、つまり、肯定。

それは、つまり、俺が見たあれは……。

「志朗、どんな経緯で知ったか知らないけど、それはもう随分と昔の話だ。君に関係ある事じゃ……」

「その人の名前はっ！」

「……ッ」

「その人の名前は……ことり？」

「……そうだ」

「く、黒髪のボブで伏し目がちな背の低い女の子っ!？」

「……………」

「父さんっ！」

「……ああ、その通りだよ」

「そっ……そう、なんだ……」

もう、充分だった。

これはもう、認める他無い。

「……『葉山ことりさん』。学年で、僕の二つ下だったね。彼女は学校の教室で自殺をしてしまった。首吊りでは無く、首を切るという、より凄惨な死に方だったからね。当時は随分と報道されたものだったよ」

分かってる。

父さん、俺は見たんだ。彼女の首から血の吹き出す、その瞬間を。

「動機は明確になっていないが、誰もがイジメを原因と考えた。もちろん学校は否定していたよ、遺書も無かったしね」

それも分かっている。

彼女は、発作的に、衝動的に、自分の首を切ったんだ。イジメではないが、心を酷く傷付けられて。

「志朗の知りたかった事だったかい？」

「……そう……だね」

「ふむ。……さっきも言った通り、それは、僕が徳英を卒業した直ぐ後の事だ。つまり、志朗が生まれた年の事なんだよ。その年の五月」

「ッ！ ゴールデンウィーク明け!？」

「それも知っているんだね。決して、志朗の知り得ない事では無いけれど、君がこの事件の事を知っているのはやや不自然に思える。ひょっとして、都市伝説のような形になって伝わっているのかい？」

「違う……けど……」

言われてみて、そういう噂があったかどうか、記憶を辿ってみたが、全く聞き覚えは無かった。仮にあったとしても、俺自身は全く知らなかった事だ。

「……ろう？　もしもし、志朗？」

「あ、ご、ごめん、何？」

「……何やら、随分と参っているようだね。話は打ち切った方が良さそうだ。志朗、やはり今日は迎えに行くよ」

「え？　あ、違う違う。憔悴してるんじゃないんだ。考え事をしてたから、反応が鈍ってたんだよ。俺は大丈夫だから」

「無理しているようにしか思えないんだけど？」

「いや、今は無理のしどころなんだ」

そう、これを取り切れば、何かがカチリと嵌りこむ気がする。俺のこの先の人生に関わる、重要な何かが。

「なるほど、面白い言い方だね。無理をしている自覚があるのなら、もう少しだけ様子を見ようかな」

「ありがとう、父さん。それと、今日は帰って来るんだよね？」

「ん？ ああ、そうだよ」

「なら、今夜は、俺の話に付き合ってくれないかな？」

「ふむ、それはもちろん構わないが、改まった話なのかな？」

「うん、ちょっと一度、真剣に考えてみたい事があって……それに付き合って欲しいんだ」

「それは？」

「えっと、かなり言い難い事なんだけど、笑わないでくれる？」

「真剣な話を笑ったりはしないよ。言ってみなさい」

「……“幽霊が存在するか否か”について」

「……なんだって？」

その日の夜、我が家の家族会議は踊った。

t i m e t o b e l i e v e n o w 6 (後書き)

『父さん』は主要キャラクターですが、情報は小出しにしていきたいです。先生方は……メインにするかサブにするか悩んでるところです。

t i m e t o b e l i e v e n o w 7 (前書き)

今回、短いです。重要な話ありません。でも、ひかるちゃんが登場します。

time to believe now 7

一月二十八日 金曜日 昼休み

「ううう、さむ……」

寒空の下でのランチ。

俺が醜態を曝した月曜日から、四日経った金曜日の昼休み。

俺は、出来得る限りの防寒対策を講じつつ、学校の屋上で弁当を食べていた。ウチの学校は屋上を開放しているので、昼食を屋上で摂る生徒は多い。

こんな季節でなければ、だ。

ここが生徒達で賑わうのは、基本的に春と秋。廂ひさしも風除けも無い為、夏は熱中症で死にかけるし、冬は低体温症で死にかける。

そして今は冬、したがって屋上に人影は無い。

「……ごはん冷たっ」

何故俺が、こんな過酷な食事の摂り方をしているのかというと、それは月曜日の五時限目に起こった出来事に起因する。

あの出来事で、クラスメイトとの溝を決定的にしてしまった俺は、前にも増して居場所を無くしてしまっていた。

もちろん精神的な意味で、だ。

教室に俺が居ると緊張感が……いや、緊迫感？とにかく、そういう雰囲気が生じるようになった為、それに耐えられない小心の俺は、休み時間になると席を外すようになっていた。

去年、俺が精神科に掛かっている事が広まった時も、教室に居る

際は気まずい空気に包まれたが、今回は気まずいどころではない。俺が教室へと足を踏み入れた瞬間に空間が凍結する、といった感じだ。

あれから四日経つが、寛解かんかいの兆しは見られない。どうやら、俺の高校生活の一年目は、こんな雰囲気のまま締め括られる事になりそうだった。

「ズズ……わ、もう冷めてる」

学食の自販機で買った、温かかった筈のお茶は、何者かによって冷却が施されていた。これにより俺は、体温の低下に抗う手段を失った事になる。……とつとと校舎に入ればいいだけだが。

ヒュウウウウウウウウウウ……

「ふお!? さむっ、さむ……」

木枯らしが俺に集中砲火を浴びせてきた。――急いで弁当を平らげねば! このままでは、俺を待つ先は死あるのみ! などと独りでサバイバルやってないで学食行けよという意見もあるだろうが、それが出来ない理由が二つ。

一つは、解っていた事だが、すでに俺の噂が学校中に広まっていたのだ。ソースは間違いなく俺のクラスメイトだろうが、人の口にはなんとやら、特にみんなが悪いだとかは思っていない。そんな訳で、俺は今、嫌な意味で学校中から注目を集めている。つまり、学食も教室も大して変わらない環境なのだ。

もう一つの理由というのは……まあ、水沢ひかるが居たから避けている。近付かないと言ったからな。

「ング……ング……ゴクン。ふう、ごちそうさまでした。……て、

撤収っ！」

身体の限界を感じた俺は、わたわたと弁当箱を片付け、ダッシュで校舎内へと戻る……

ギイイ……

……つもりだったが、昇降口の扉が独りでに開き出した為、俺は停止を余儀なくされた。まさかこの時期のこの場所に来るような生徒が、俺以外に居るとは思わなかった。いや、生徒とは限らないか。寧ろ、見回りに来た教師である可能性の方が高い。

「……て、あれ？」

「……………」

俺の予想に反して、そこから現れたのは、教師ではなく生徒だった。

「水沢……」

「……………」

それは水沢ひかる。

月曜日以来、見かけた事はあったが、こうして面と向かうのは四日ぶりだ。なにせ、こちらは出会わないように気を付けていたからな。だが、こういった避けられない偶然はどうにもならない。

俺はすぐに身体を横へとずらし、道を空けるような体^{てい}を取る。

「……何？」

「え？ 何って……屋上に出るんじゃない？」

俺の行動に、何故か訝しげな反応を示す水沢。
屋上に用があるんじゃないのか？

「……出ないわよ、こんな寒いのに」

じゃあ何故……とは訊かない。関わるなど言われているから。

「……………」

「……………」

ヒュウウウウウウウウウ……

「んくっ……な、中に入りたいんだけど……」

「……入ればいいじゃない」

水沢の態度がおかしいような気もするが、それを判断出来るほど親しい訳ではない。今はとにかく、この木枯らしから逃れることが先決。

俺は割り込む様に水沢の横を抜け、校舎の中へと入る。その直後、ボタンと、水沢の手によって扉は閉じられた。一体彼女は、何の為に開けたのだろう。

「アンタ、こんな場所で何をしてたの？」

「……………え？」

驚いたことに、関わるなど言った本人の方から関わってきた。

「何をしてたかって訊いたの」

「昼食……だけど？」

「は？ この時期に？ 頭おかし……あ、ううん」

何やら自重したご様子。

しかし、その気遣いがむしろ痛い。

俺は、頭がおかしい事を気にしてなんかいない。じゃなくて、俺の頭はおかしくない！ ……あれ？ 何か頭がおかしい人ほどういそうだぞ、この科白。

「コホン……あー、俺行くけど……」

いいんだよな？

「待って」

駄目なんだ。

「用があるのか？」

「……………」

「もしもし？」

なんと言うか、俺と水沢は相性が悪いのではないのだろうか。今

を含めて過去三回言葉を交わしたが、どうも噛み合った事が無いように思える。

……違うか。

水沢に限った事ではなく、この学校においては、まともにコミュニケーションを取れる相手が、俺には居ない。トラやミケの存在のありがたみを再確認する俺だった。

「ねえ……」

「……あ、何？」

「因幡君って、いつもここでお昼食べてんの？」

「あ、ああ、まあね。外で食べた方が美味しいし」

そんな訳無い。寒さで味なんて憶えてない。

「どうりで、教室に居ない筈よね」

「はい？」

「……休み時間に一組覗いても、アンタ居ないんだもの」

「えーと？」

「その、月曜日にあんな事があって……そしたらその後、あんな事になって。……もう、学校に来ないのかと思ってた」

「……？」

「そしたら今日、朝にアンタを見かけて……。でも、休み時間に一組行ったらやっぱり居なくて。だから……。もしかしたら、教室に居づらくなって……。休み時間になったら教室抜け出してるのかなって思っ。そう思っ、こうして人目の付かない場所を探して……。それで今、ここで見つけたから……。その、なんて言うか……」

水沢はしどろもどろといった様子だ。思っている事をうまく言葉に出来ないのだろう。注意深く聞き取らなければ、話の筋を見失いそうだった。

ただ、どうやら彼女は、俺に会いたかったらしい。

「あの時の、あの表情が忘れられなくて、すごい傷付いたような顔してたから……。だから、その後のあの事も、その所為なのかなって……」

文脈指示が多くて、いまいち何の事だか解らない。
月曜の話でいいのだろうか。

「……だからその、会って謝ろうかと……。でも、今まで会えなかったから……」

「あっ……」

読み取れた。水沢は、月曜日の五時限目の事を、自分の所為だと思っっているんだ。だから、謝罪する為に、俺を探していた。けど俺は、休み時間は教室から出るようにしていたから、今の今まで会えなかったという訳か。

しかし驚いたな、まさか気に掛けてくれていたとは。

一年間、机を並べて共に勉強に励んできたクラスメイトには、避けに避けられまくっているというのに、二、三回言葉を交わしただ

けの水沢が、そんな風に考えているだなんて、思いもよらない事だった。どうやら彼女は、意外と優しい人物だったようだ。

「あの、水沢、勘違いしてるみたいなんだけど……」

「え？ 勘違いって？」

「月曜の五時限にあった事と、直前の水沢達とのやり取りには、これっぽっちも因果関係は無いぞ」

「……そうなの？」

「ああ。だから、水沢が謝る必要は無いよ」

「……………」

「……………」

「ふう、何よそれ、気にして損したわ」

「あれ？」

水沢の態度が目に見えて変わった。

「だいたいさあ、アンタ、冬に屋上なんかに住まないでよ。そんなの分かる訳ないでしょ、普通。おかげでこの三日間、昼休みを無駄にしちゃったよ」

「あっ、ごめん……？」

俺の方が謝っちゃった？

「何もこんな寒い中屋上に来なくたって、人目を避けるなら他にいくらでもあるんじゃない？」

「で、でも、指定されている場所以外での飲食は、校則で禁止されてるし」

「え？ なにそれ、そんな校則あるの？」

「校内美化の項目にあるけど……？」

「そんなの……いちいち確認してる人なんて居ないでしょ。大体、みんなそこら中で、好き勝手に飲み食いしてるじゃない。それで先生に怒られてるところなんて、見た事無いよ？」

「そう言われてもな……。校則に記されている以上、とりあえず守っておけば、無用なトラブルを回避できるだろ？」

「ド真面目ね……」

絶対に褒めてないな。

だが、俺が律儀に校則を守っているのは、ある種の自己防衛だ。他人からの印象を少しでも良く、という意味合いがある。俺の現状に素行不良なんてものが加わってしまったら、はっきり言って救いが無いからだ。

キーンコーンカーンコーン……

「うわっ、チャイム！？ 俺、行くから……っ」

「ちょ、ちょっと、まだ話がっ」

「俺、クラス委員なんだっ。号令掛けないと……!」

「そんなの女子の委員がやるでしょ!?! いいから待ちなさい!」

「そもそも授業に遅れたくない!」

「ああもう、この真面目っ子! じゃあ放課後、またここに来て!」

「へ?」

「いい!?! 分かったわね!?! 絶対に来てよ!?!」

「あ、ああ……。それじゃ!」

俺は素早くその場を立ち去る。と言っても走ったりはしない。競歩の選手よろしく見た目不自然な歩行法で、教室へと向かって疾歩する。その甲斐あってか、教師が来る直前に辿り着く事が出来た。俺が教室に足を踏み入れた瞬間、例によって、クラスメイト達にミュートがかかる。いや、ポーズかな。だがそれも、席へと着くまでの短い間だけなので、視線を感じつつ自分の席へと急ぐ。丁度自分の椅子に手を掛けた時に教師が教室に入ってきた。

俺はすかさず号令を掛ける。

「起立!」

——ガタガタガタ……

こんな状態でも、みんなは俺の号令で立ち上がってくれる。

クラス委員という立場は、去年の五月の前に、立候補で手に入れた。新しい環境で、いきなりそんな面倒を請け負いたがる人間は他には居らず、また、俺のあの事が知れ渡る前だった為、クラスのみんなは好意的に受け入れてくれた。今となってはこの立場が、俺とクラスメイト達の最後の繋がりと言えるだろう。出来る事なら、二年生になってもクラス委員をやりたいが、望みは薄い。「クラスの仕事」という名目を失って、人に関わる機会が無くなってしまったら、今よりもずっと友達を作るのが難しくなるだろう。……クラス委員の今でも、友達が出来そうな気配はないが。

そういえば、今日は友達っぽいやり取りが出来たな。
放課後の約束なんかもしちゃったし。

「……って約束!?!」

「おわっ!? な、なんだ因幡、ど、どうかしたか……?」

「あ」

——おいおい、まさかまたなのか……。

——勘弁してよね……。

——もう学校休ませろよ……。

教室がにわかになぜか出ず。
しまった。

実にしまった。

「す、すいません先生。なんでも無いんで、授業を続けて下さい」

「だ、大丈夫なのか？」

「はい、月曜日のような事にはなりませんから」

「そ、そうか。……その、コートは着たまま授業を受けるのか……？」

「はい？ ……あ」

そうだった、屋上に出る為に完全防備だったんだっけ。
しまった。

まともやしまった。

「あ、ぬ、脱ぎます、俺なんか気にせず授業を……」

「あ、ああ、そうしよう」

教師は、不安そうではあるが、授業を再開してくれた。それと共にざわめきも収束していく。

まずったな、驚きのあまり声を上げてしまった。だがそれも仕方ないと思う。なにしろ俺は、水沢と、放課後に会う約束をしてしまったのだから。

意外な事に、関わるなど言っていた彼女が、約束をしてまで俺に会いたがった。月曜日の件は、先ほどの話でもう済んだ筈、水沢は俺に一体どんな用があるというのだろうか。心は不安に包まれど、僅かに期待が首をもたげてしまうのは、思春期男子には仕方のない事と言えよう。……これまでの彼女とのやり取りの中に、そんな要素は一つとして見つけられないが……ま、期待するだけならタダだし。

「……なんてな」

本当は分かっている。

話が最初に戻っただけだろう。

そう、これはきつと、水沢の母親に関する事。俺と彼女に関係する事柄はこれしかない。いや、俺がそれに関係しているかは、まだ確定していない。だが、水沢が接触を図ってきたという事は、彼女の方は、俺と自分の母親を関連付けているのだろう。となれば、会う前に話を整理するべきだな。

水沢が俺を関連付ける理由。それは俺が口にした「カルチョ」と「ミスミソウ」という言葉。

「カルチョ」は、水沢が幼い頃に母親から付けられたあだ名。

「ミスミソウ」は、水沢と母親との思い出の花。

俺がそれらの事を知る術は二つ。水沢に聞くか、その母親から聞くか、だ。「カルチョ」と「ミスミソウ」の意味合いは水沢から聞いた。しかし、そもそもその二つの言葉自体は、先週の土曜日にある女性から聞いた言葉だった。それはすなわち、あの、俺の幻覚に表れた女性こそが、水沢の母親だという事になる。――そんな事はある得ない、こんなの偶然に決まっている、だってあれは俺の幻覚なんだもん。とは、今の俺はならない。

それは何故か。

“葉山ことり”だ。

俺にパラダイム・シフトをもたらした少女。この少女は俺の幻想の産物などでは無く、確かに、現実存在している人間だった。いや、存在していた、だな。

そこから鑑みれば、俺が幻覚と捉えていた土曜日のあの女性も、実在の人物である可能性が出てくる。であるならば、あの女性が水沢の母親である可能性も出てくる訳だ。そして……そしてだ、再び葉山ことりの例から鑑みるならば、水沢の母親は、もうすでに亡く

なって……？

そうだな、まず俺がするべき事は、水沢の母親の姿を知る事ではないだろうか。

「……よしっ」

方針は決まった。後は放課後を待つだけだ。

「い、因幡、本当に大丈夫……か？ さっきから、ブツブツと……」

「あ」

しまってばかり（？）だ。

t i m e t o b e l i e v e n o w 7 (後書き)

次話もひかるちゃんが登場する予定。というか、しないと脈絡が途切れますね。

t i m e t o b e l i e v e n o w 8 (前書き)

敢えて少しだけネタバレ。ひかるちゃんは良い子です。

time to believe now 8

一月二十八日 金曜日 放課後

――キーンコーンカーンコーン……

終業のチャイム。

本日の学生としての使命は果たされた。明日までしばしの休養だ。六時限目は、担任の広瀬川先生の現文だったのでチャイムが鳴ってすぐに帰りのSHRが始まった。今日は最速ルートになりそうだ。掃除当番じゃないし、クラス委員の仕事も無い。部活は……行けない状況が続いているしな。

「……こんなところかしら。じゃあ今日はこれで終了です、お疲れ様でした」

広瀬川先生の解放宣言と共に、生徒たちは三々五々散っていく。俺もそれに倣い、急ぎ足で教室を出た。

急ぐ理由はもちろん待ち合わせの場所へと向かう為だ。

俺は屋上の昇降口を目指して、階段を駆け上が……てはいけないので、歩き上がる(?)。

屋上へと出る扉前の踊り場が待ち合わせの場所。校舎は三階建てなのですぐに辿り着けた。しかし、水沢ひかるの姿はまだ無い。

考えてみれば、別に急ぐ必要は無かったのでは？

俺は何を逸^{はや}っているのだろう。

「……………」

しばし思案。

……そうか、これは嬉しいんだ。水沢に会う事が……と言うよりは、人と関わり合う事が。

俺は基本的に、狭いコミュニティの中で生きている。

父さん。

トラ。

ミケ。

美作先生。

（時々）従姉の瑞穂さん。

親しい人の名を挙げろと言われて、出てくる名前はこの五人だけ。親類を除外されたら三人。美作先生とプライベートでの付き合いは無いから実質二人。

……二人、か。改めて凹むな……。

そんな俺が高校生活に馳せた想いは、もちろん友人を作るという事。しかし、今のところの結果は言わずもがな。要するに、俺はコミュニケーションに飢えていた。だから、どんな形だったとしても、人と関わり合いになれる事が嬉しく感じてしまう。

だから今回、水沢との関わり方如何によつては、その後に彼女と友人関係を結べるのではないかと、勝手な期待を膨らませてしまっていた。

「……これも、下心……かな？」

「——ちよつとアンタ、変な事考えてるんじゃないでしょうね……？」

「え？」

いつの間にか水沢がそこに居た。

そしてその顔は警戒の色。
……いきなりしくじったか？

「あの……ね、この際ぶっちゃけるけど、私はアンタの事が少し怖いの」

「う……」

「本当は、こんな人気の無い場所で二人っきりだなんて、嫌でしよ
うがない」

「そ、そこまで……」

「私は、因幡君の事は何も知らない。知っているのは噂だけなの。
もし、アンタが噂通りの人間なら、私は何をされるか判ったもんじ
ゃない」

「な、何もしないって……」

「なんで私がこんなヤバイ真似してるかって事」

「……………」

「それでも知りたい事があるの。言ってる意味、解るよね？」

——ママは何処に居るの！？

水沢は、それだけ母親に会いたって訳か……。さっきまでの考
えは却下だ、ここからは則天去私で行こう。

「俺の手……縛っとくか？」

「はあ？」

「俺が怖いなら、そうしとけば安心して話せるだろ……？」

「……………」

彼女は黙り込む。縛るかどうかを悩んでいるというよりは、バツの悪そうな表情を示していた。

「……べつに、いい」

「そうか、ありがとう」

「なんのお礼よ……」

「ま、とにかく本題に入ろう。水沢が訊きたいのは、俺が君のお母さんを知っているかどうか、だろ？」

「そう、ね。アンタは前、知らないって言って逃げた」

「う、ま、まあ、そうだったな」

「今日も同じ答え？」

「もし、そうだって答えたら？」

「ふざけんなって、ひっぱたく」

「……………」

また？

いやしかし、実際問題として、現時点での俺は、水沢の母親の事を何も知らない。水沢が最終的に求めてくるであろう「母親の居場所」は、どう転んでも俺には提供できない情報だ。

「因幡君は、私のママの事を知っているわ。間違い無くね」

「え？」

俺をジッと見据える水沢の真剣な瞳には、確信のようなものが窺える。

「なんで、そう思う？」

「……月曜日のあのやり取りの時にさ、因幡君、私のママが夜の仕事をしているかって訊いたでしょ？」

「あ、ああ、あれは言い方を間違えたんだ、すまなかった」

「それはいいから。……私が否定したら、アンタは、なら自分は関係ないって返した」

「……だったかな」

細部は違えど、そんなやり取りではあった。

「それってつまり……その……私の……」

水沢が急に口籠りだす。言い難い事を言おうとしている感じだ。こういう時は急かさずに待った方がいい。

「つまり、私の……ママが……」

「……………」

「……ッ、私のママが夜の仕事してたら、アンタに関係あるって事でしょ!？」

「……それって」

「そうよ! してたのよ! だからアンタはママの事を知ってるって思ったの! さあっ、知ってる事を教えなさいっ!」

「み、水沢、声が大きい、あんまり人には聞かれない事なんだろう? 少し落ち着いてくれ」

「んぐ……わ、解ってる……」

「水沢、お母さんの写真とか見れないかな?」

「ッ! あ、あるよっ、いつも持ち歩いてる。み、見てっ……」

彼女は焦ったように、トートバッグからポーチを取り出した。ポーチを開けようとする手は震えており、なかなか中身を取り出せないでいる。想像するに、母親の手掛かりが得られるかもしれないという、期待と不安によるものだろう。

「こ、これっ……どう、知ってる? 知ってるんでしょ? ねえ!

「？」

「だから落ち着いてくれ。今確認するから……」

ファミネートが施された、ブロマイドのような写真。

そこに映っているのは一組の母娘だった。

幼い頃の水沢と思しき少女を、後ろから抱きしめている女性、それが水沢の母親。

そしてそれは——俺が先週の土曜日に商店街で目にした女性だった。

「……………」

「ねえ！　どうなのっ！」

可能性は高いと思っていた。しかし、違っている事を望んでいた。

「ああもうっ、だからどうなのよ!？」

水沢の顔を見ると、そこには明らかな期待。俺が「知っている」と言い出すのを、心から待ち侘びているようだ。

……ああ、知っている。

俺は水沢の母親を知っている。

けど、そこに希望は無いんだ。

水沢は——もう母親には会えない。

「何よ……え？　うそでしょ？　違ったの？」

水沢は俺の顔色で判断をしたようだ。違ってはいないが、それをそのまま伝えない。この場合の答え方は考えてきた。

「水沢は、俺が精神科に掛かってる理由は知ってる？」

「ちょっと、なんで身の上話を始めちゃってるのよっ」

「いいから聞いてくれ。それはな？ 幻覚を起こすからなんだ」

「だ、だから何……？」

「それは、例えば過去にあった事のフラッシュバックだったりする」

「……………」

「俺は憶えていないけど、たぶん俺は小さい頃に水沢のお母さんに会っているんだと思う。想像だけど、そのときに君の話が出たんじやないかな。俺はその時の出来事をフラッシュバックした。そこをたまたま水沢が見かけて、そこでたまたま『カルチョ』と『ミスミソウ』って言葉を俺は口にした。そういう事なんだと思う」

「……だから、因幡君は、ママの居場所を、知らない？」

「ごめん、やっぱり力にはなれない」

「……………。ふううう……………」

水沢は力無く床へと座り込んだ。期待が大きかっただけに、失望も大きいのだろう。

かく言う俺の方もそれなりにダメージがある。もし結果が違っていれば、他力本願だが、父さんの力を借りて探すという手段も、講じる事が出来ただろう。

しかし、水沢の母親はもうすでに亡くなって……いるのか？
ちよっと待てよ？

今気づいたが、亡くなっているのに訃報が無い、というのはどう
いう事だ？

この国ならば、ほぼ間違いなく遺族に訃報が届く筈。届いていな
いという事は、人知れず亡くなって、未だに発見されていないとい
う事になる。いや、もっと根本的に、そもそも死んでいないから訃
報が無い、と考えるのが自然。

だったら、俺が遭遇したあの女性はやっぱり幻覚？

……判らなくなってきた。

「むむむ……」

水沢は八年前だと言っていた。この水沢母娘が映った写真が、最
も新しいものだとするなら、俺が見た水沢の母親の姿は八年前のも
のだ。もし、彼女が葉山ことりと同じ存在なのだったら、亡くなっ
たのは八年前だと考えられる。

という事は、だ。

水沢の母親は失踪直後にはもう……？

いや、逆か？

それこそが失踪の理由なのか？

つまり、水沢の母親は——殺されて隠ぺいされ……

「……え、ねえっ。ねえってばっ！」

「——ハッ、あ、すまん、何だ？」

「なんでアンタがボーツとしてるのよ。……いい？ この話、言い
ふらすんじゃないわよ？」

「あ、ああ……大丈夫だ、俺にそんなネットワークは無い。この学校で、俺の話をまともに受け止めてくれる奴なんていないさ」

「……そっか、因幡君で避けられてるんだっけ……そっか」

そうだけど、そんな納得されるのも辛いぞ。

「じゃあ……いっそ、話を聞いて貰おっかな……」

「え？」

「ママの話、してもいい？　もう長い事、ママの事を話題になんてしなかったから……さ」

意外な展開だ。……いや、そうでもないか。これまで母親についての話をしていたんだから、その間に恋しさが募ってしまったのだろう。

聞き手に俺を選んだのも、この先関わるつもりが無い赤の他人だからと思われる。

「聞かせてくれ」

「……いいの？　わりと長いかも……」

「いいよ。忘れてしまいそうで怖いんだろ？」

「えっ……？」

「話したい事があるのに我慢するのは、とても心の負担になるんだそうだよ。思いの丈を言葉に変えるという行為は、精神に安定をも

たらず。その理由は様々で、水沢の場合は、薄れてしまいそうな母親との思い出を、言葉にする事で明瞭化し、母親が居ないという現状の淋しさに抗おうとしているんだと……あっ」

「……………」

「う、す、すまない、俺は何を偉そうに……。そ、その……今のは、主治医の受け売りで……つい……」

「主治医って、精神科の？」

「あ、ああ……」

「ふーん……。精神科って、そういう話されるんだ？」

「ホントごめん。話すのはそっちで、俺は聞く側だった」

「まあ、いいけど……それなりに当たってるし……」

「ん？」

「確かにそう。誰ともママの話をしないから、忘れてしまいそうなのよ、ママとの思い出」

「気持ち解かる。俺もこの十年で、母さんに関するほとんどの事を忘れてしまっていた。」

「私の記憶では、ママはとても明るくて、今にして思えば、とても子供っぽい人だったと思う」

確かに。俺もそんな印象だった。

「もう言っちゃったから話すけど、ママは昔、いわゆるキャバクラで働いてみたい。そこへ客で来たパパに見初められて、ゴールインしたらしいの」

まあ、ありがちと言えば、ありがちな話だ。

「でもね？ 私の歳から逆算するとか、ママ、その時どう考えても十代なのよ。……キャバクラってお酒飲むトコだよね？」

それもまあ、ありがちと言えなくはない。……トラも十六でホストやったし。

「結婚もデキちゃった婚だったみたいだし、破天荒な人なのね」

なんか随分ぶっちゃけるなあ、水沢。あと、その破天荒の使い方、実は違うの知ってる？

「周りの評価はどうだか知らないけど、私にとっては世界最高のママだった。……ママは私にくっつくのが大好きでね、『カルチョくっこそさせて』って、すぐに抱き付いて来るんだ。だから私、抱っこをねだった記憶が無いの」

そう言われて写真へと目を戻す。そこには、満面の笑顔で娘を抱きしめる母の姿があった。

「そうそう、ママは私の事を『カルチョ』って呼ぶのよ。『ひかるちゃん』の進化形なんだって。後にも先にも、私をそう呼ぶのはママだけ。パパはひかるって呼ぶし」

ひかるちゃんの進化形がカルチョ。どうやら水沢の母親は、独特の世界観を持っているようだ。

「そんなママが好きだった花が、例の三角草ってわけ。ママは草花に詳しくてさ、ハイキングなんかに行くところであっちこちに道を逸れて、私にいろんな花を見せようとするの。だから私、ママの一番好きな花が見たいって言ったのよ。そうして見せられた花は、とっても地味な花だったわ。知ってる？ 三角草って日陰に咲くような花なのよ。なんでこんなのがいいのか聞いたらさ、雪の下でもしっかりと葉を緑にする健気さが好きなんだって。三角草は雪割草とも呼ばれているの」

雪割草、か。そっちのが聞き覚えがあるな。

「ママは居なくなる前に、故郷の三角草を私に見せてくれるって約束したわ」

——三角草が咲く前に！

あの水沢の母親だと思われる女性の言葉が、俺の頭を過った。

「……その約束は……まだ果たされてないけどね……」

「……………」

「まさか、前触れも無く居なくなるなんて……」

それまで穏やかに話していた水沢が、張り詰めた表情を表す。美作先生に倣って聞く事に徹してきたが、雰囲気が変わったのを

きっかけに、口を挿んでみる事にした。

「警察には？」

「もちろんパパがすぐに届けたわ。でも、今まで何も情報は無し。パパも、最初の頃こそあちこち探しまわってたけど、今はもう諦めたみたい。……しかも、再婚とか言い出してるし。信じらんないよ……」

「再婚？　水沢のお父さん再婚するの？」

「……さあね、私はそんなの許す気無いし」

「……………」

「なによ、何か文句ある？」

「そ、そうじゃなくって。……お父さんは、その……お母さんの事は、もう亡くなっているもの？」

「なっ！？　ちがつ、違う！　探すのを諦めたの！　ママは死んでなんか無いっ！」

「だ、だが……」

「なによっ！　アンタは死んだと思ってるの！？　ふざけたこと言わないで！」

「あ、いや、俺は……」

……そう思っていた。

水沢の父親が再婚すると言うのなら、水沢の母親との婚姻が解消されていなければならない。という事は認定死亡を……いや、八年経っての再婚だから失踪宣告の方かもしれない。そのどちらかを請求した筈だ。ならば水沢の母親は、すでに法的に亡くなっているのではないだろうか。

水沢はそれを伝えられていないのか？

いや、再婚を切り出すくらいだから、父親から説明されていて然るべきだ。しかし水沢は……

「ママは絶対に生きてる！ 私が必ず見つけるわ！」

……この剣幕。

必死に現実を拒絶しているのか、それとも心から生存を信じているのか。

俺はどうするべきだろう。

彼女に同意して希望を持たせる？

だが俺は、彼女の母親の死を確信してしまっている。ありもしない希望を抱かせるような真似なんて、俺には出来ない。

ならば水沢を諭すか？

どんな奇跡が起きようとも、君の元に母親は戻らない、と。……果たしてそれは、俺のやるべき事なのだろうか。出会って間もない俺がやっていい事なのだろうか。

「俺は……水沢のお母さんはもう亡くなっていると思う……」

「!? な……な……」

気が付けば俺はそう口にしていた。どうやら、頭よりも先に、心が行動を起こしたようだ。

「ご家族は……お父さんは、もうそれを受け入れているんじゃないかな」

「ッ！　そ、それはっ……！」

水沢の反応からして、やはり父親は話しているようだ。という事は“現実を拒絶している”が正解か……。

「水沢、現実を受け入れるべきだ。そうしないと、いつまで経っても前に進めな……」

「うるさあああいつ！」

パァァンッ！

彼女は俺へと一気に詰め寄り、強烈な平手を浴びせてきた。これで二度目になるが、一度目の時よりもずっと強い衝撃だ。

「いつっ……」

かなり効いた。

左の頬が一瞬で熱を帯びる。

俺は思わず後ずさったが、それでも何とか体勢を整えて水沢と視線を絡めた。彼女は、目に涙を溜めて、こちらを睨んでいる。

一方の俺の方も左目に涙が滲み、僅かに視界がぼやけていた。

「証拠は！？　ママが死んだって証拠があるの！？」

証拠は……提示出来ない。

俺の中にある確信と確証は、俺の中でしか意味を成さない。

「無いよね!？ 無いんでしょ!？ だったら決めつけないでよ!!」

もどかしい。俺が水沢を想って投げかけた言葉は、ただ彼女を傷付けただけ。やはり、俺なんか口を出すべきじゃなかった。似た境遇で共感出来るつもりでいたが、俺はそもそも、偉そうに説教できる立場では無い。俺自身が誰よりも、母親という存在に囚われているのだから。

「……水沢も本当は解っているんじゃないか？」

それでも俺の口は止まらなかった。

そんなに彼女を傷付たいのだろうか。

「何がよっ!？」

「今、自分の傍にお母さんが居ない事、それ自体が答えだ、って」

「――!？」

「自分の事を大好きなお母さんが、今の今まで、音沙汰がないなんて事は有り得ない、って」

「や、やめ……」

「もし、お母さんが無事なら、何に代えても、まず自分に会いに来る筈だ、って」

「やめて……やめて……!」

「それをしないって事は、お母さんはもう……!」

「だまれええええつつつ!」

「うわっ!？」

ドスンッ!

水沢が再び俺へと迫る。また平手打ちかと思いきや、なんと彼女は、体勢を低くして体当たりをしてきた。

バタンッ!

「ぐっ」

俺は情けないほど簡単に倒されてしまう。しかもそれだけでは終わらなかった。水沢が仰向けに倒れた俺の腹の上へと跨ったのだ。つまり、マウントポジションを取られた形となる。

「ちょ、水沢っ……むぐ!？」

水沢の攻勢はさらに続く。彼女が両手で俺の頸部を絞めてきたのだ。

「ああああああああ……!」

「……み……わ……、くる……し………」

「だまれえっ！　だまれええっ！」

彼女は完全に自分を見失っていた。首を絞めるその力は驚くほど強く、俺の心に恐怖が芽生え始める。

「や……め、みず……いき……が……」

「うるさああああいつっ！」

まずい。

本格的にまずい。

彼女の目、そこに慈悲が見つけられない。

俺は馬鹿だ。

あまりにも馬鹿だ。

俺は彼女の心を深く抉ってしまった。

十年来、美作先生と言葉を交わしてきて何も学ばなかったのか？
不安定な精神の持ち主には、言葉をぶつけるんじゃない、言葉を受け止める事こそが肝要。ずっと……ずっとそうして貰ってきたじゃないか！

「……うう……ぐ、……あっ？」

「このおとおお……！」

彼女が前方へと体重を掛けてきた所為か、喉仏の辺りの圧迫感が急激に上昇する。

やばい。

そこを圧迫されてはものの数秒で“落ちる”。
頸動脈洞反射というやつだ。こんな状態で気を失ってしまったら、そのまま殺されてしまう。なんとか抵抗を……。

「あ……」

そう思った時にはもう遅かった。

俺の視界は、幕が下りるように黒く染まっていく――

「――お、お前達！？ 何をやってる！」

「貴方……水沢さん！？ 何をやってるの！ 放してっ、放しなさいっ！」

「うああああああああ……！」

「お、落ち着けっ！ 彼を放すんだっ！」

「水沢さん！ このままじゃ死んでしまうわ！」

――ねえ、志朗。

――え？

――志朗はお母さんの事好き？

――う、うん。

――お母さんとずっと一緒に居たい？

――うん。

——そっか。あのね志朗、お母さん、これから遠い所に出掛けなくちゃいけないの。

——どこいくの？

——志朗の知らない所よ。

——ぼくもいきたい。

——うーん……ほんとはお母さん一人で行かなきゃダメなんだけどなあ。でも、志朗はお母さんと一緒にいいんだよね？

——そう。あと、おとうさんも。

——志朗、お父さんは忙しいから、一緒にはいけないのよ。

——ええ、じゃあ、ぼくとおかあさんだけなの？

——そうねえ、どうしようかしら。ほんとダメなんだけど、志朗がどうしてもって言うなら、連れてっちょおうかな？

——うん、いく。ぼくもいく。

——よし、じゃあ志朗、一緒に行こうね。

——うん。

「――行っちゃ駄目だっ！」

「きゃっ」

「……………。……あれ？」

「い、因幡君…………？」

「ええと…………？ 広瀬川…………先生？」

「え、ええ……。ふう…………よかったわ、目を覚ましてくれて。身体は大丈夫ですか？」

「身体…………」

現状の確認が必要だ。

まずは場所…………うん、保健室だな。

次に時間は…………五時過ぎ、と。

次、人…………ここに居るのは俺と広瀬川先生だけ。

じゃあ状況は…………俺はベッドに横になっていて、すぐ傍で広瀬川先生が椅子に座っている。

最後に、今聞かれた体調…………ほっぺた熱っ。首筋もヒリヒリするし。

「いちち…………」

「ほっぺた腫れてますよ。ほら、このタオル濡らしてあるから」

「あ、すいません、助かります」

先生から濡れタオルを受け取り、頬へと当てる。……ああ、冷たくて気持ちいい。タオルを当てたまま、俺は上半身を起こした。

「平気……？　お願いですから、無理だけはしないで下さいね？」

「ええ、もちろん。それより、どんな状況なんですか？」

「そうですねえ……かなりヘビーな状況……ですね」

「へ、ヘビーっすか」

だんだんと思考が定まってきた。

そう、俺は水沢に……まあ、気絶させられた、でいいか。

あの時、誰かが来たような気がしたが、それは当たっているのだろう。おそらく教師だと思われる。そこでどんなやり取りが行われたかは、気絶していたので判らないが、その後に俺を保健室へと運んだのは間違いない。現にここに居るしな。

……そうか、あの場面を見られたのか。先生方の頭の中では、どんな光景として認識されているのだろう。

「あの、水沢は？」

「今は応接室で、小池先生と谷垣先生が対応しています」

谷垣先生……あつ、四組の担任か。

「彼女の様子はどうなんですか？」

「さあ、ちょっと判りませんねえ。先生は因幡君の担当ですから」

「そうなんですか……。ん？　てことは、広瀬川先生は、事情をほとんど知らないんですか？」

「ええ。だから、説明して貰えると助かります」

「あ、ああ……。ええと、ですね……。因みにですが、先生ご自身はどんな認識でらっしゃるんです？」

「へビー、です」

「……それはさっきも聞きましたが」

いつも通り、穏やかで丁寧な口調だったので気付かなかったが、広瀬川先生は、結構深刻な顔つきをしていた。

「そうですね……。まず、現場に駆け付けたのは教頭先生と春日先生です。お二人の話によれば、『屋上の昇降口でケンカをしている生徒が居るという報せにより駆け付けたところ、水沢さんが因幡君へと馬乗りになって首を絞めている場面に出くわした』との事です。水沢さんは、その……。錯乱状態で、因幡君に至っては昏倒」

「あ、はは……。」

思わず苦笑が漏れた。客観的に聞くと、かなりの異常事態だ。

「笑い事ではないわ、因幡君」

「あ、ごめんなさい」

先生の厳しい声色に、反射的に謝罪の言葉が出る。広瀬川先生に

師事して一年近くとなるが、こんな厳しい顔を見るのは初めてだった。

「いいですか、因幡君。あと一歩遅かったら、貴方は死んでいてもおかしくない状況だったんですよ？ いえ、敢えてこう言いましょう。殺されていてもおかしくはなかった、と」

「う……」

「教頭先生の話では、因幡君から水沢さんを引き離すのに、とても苦労したそうです。それだけ強く、水沢さんは首を絞めていたという事になります。さあ、因幡君、話して下さい。何がどうなってそんな事になったのかを」

これは……どう答えるべきだ？

事は水沢のプライバシーに関わる。俺がここで曝している話じゃ無い筈だ。

……そうだな、ここは概要を話すにとどめた方がいい。

「俺が……悪いんです」

「……え？」

「俺が水沢を傷付けたから……。だから水沢は、逆上してあんな事をし……」

「えええええーっ！？」

「わっ」

ガシャンツと、椅子を後ろへと弾き飛ばしながら立ち上がる広瀬川先生。

ちよつと反応が大袈裟じゃないか？

「そ、そ、それはつまりっ！ 水沢さんが被害者、という事っ!？」

「そ、そうなります……ね」

水沢があんな状態になってしまったのは、俺が追い詰めた所為だ。彼女の内における、母親という存在のプライオリティは、俺よりもずっと重かった。境遇が近いから共感を得られるなんて考えは、俺の一方的なエゴだったのだろう。

「そんな……まさか……。想定していた中でも、最悪の事態、です」

「ええ……。えっ？」

コンコン…… ガララ

突然、ノックと共に保健室の扉が開かれる。

そして現われたのは、養護教諭の小池瞳先生。

「広瀬川先生、因幡君は……あ、起きたんですね。ふう、よかった
あ」

「こ、小池先生……」

「はい？ どうかありませんでしたか、広瀬川先生」

小池先生が保健室へと戻ってきた。という事は、水沢の方の話は

終わったのか……。

ところで、何か広瀬川先生の様子がおかしい。

「因幡君のお話は聞けたんですか？」

「ええ……。スーパーヘビー級でした……」

「は？」

小池先生が困惑した顔を俺へと向けてきた。いや、そこで俺を見られても……。

「どうやら水沢さんは、因幡君の強姦を阻止すべく、あのような行動を取ったようなのです」

「……………」

「……………」

あれあれ？ 広瀬川先生の言ってる事が解らないぞ？ これは一体どうした事だ？

「つまり、正当防衛……だったようなのです」

「…………えーと、因幡君？」

小池先生が俺に何かを求めているようだ。
でもちょっと待っていて下さい。

こちらは今、広瀬川先生の言葉を翻訳するのに手いっぱい……

「……って、ええええええええええー……っっっ!？」

その解釈はヤバイ!

筋が通っててヤバイ!

「ちがつ、違いますっ! 広瀬川先生、それ違いますっ! 俺はそんな事してませんっ!」

「え……? でも、水沢さんが被害者って……」

「だからってなんで強姦と直結っ!? キスもした事無いのにいきなりそんな恐いマネ出来るかあああっ!」

「あ……そ、そうなんです……か?」

「――ハッ」

「ふうん。因幡君で、キスまだなんだねえ」

「ぐはっ……」

後ろへと倒れる俺。バスンツと、枕が頭を受け止めてくれた。そしてそのまま天井へと目を向けながら、俺は最低音のキーで呟く。

「えー……とにかく俺は、天地神明に誓って、そんな事はしていません」

「ふふ、分かってるよ」

「えっ!？」

小池先生の言葉で、俺はガバツと起き上った。

「水沢さん、そんな事は言っていなかったもの」

「そういう事はすぐに言ってお下さいっ!」

「ありゃ、ごめんちゃい」

謝罪軽っ。

「わ、私の早とちりだったみたいですね……。因幡君、申し訳ありませんでした」

広瀬川先生はすげー丁寧だし。

「い、いえ、解って頂けたならそれで」

それにしても危ない所だった。俺にその手の流言蜚語は致命的だ。この学校の生徒ならば、なんの疑問も持たずに信じてしまうだろう。

「それより小池先生。水沢の様子はどうだったんですか？」

「うん? ……そうねえ、落ち着いてる……というよりは落ち込んでる、かな? 水沢さん、途中から憶えていないみたいで、何があったかを説明したら、ひどく動揺してたよ」

「憶えてないって、どこからですか?」

「因幡君をひっぱたいたのは憶えているみたいよ。その後の事は、

気付いたら先生に押さえ付けられていたって感じなんだって」

あの時、水沢は間違いなく自分を見失っていた。その間の記憶が無いと言われても、納得が出来る程に。またも美作先生の受け売りとなるが、「防衛機制」というのが働いたのだろう。

「んー、だけどねー、なんて言うか……不思議なのよ」

「はい？ 何がですか？」

「うん……普通、『知らない間に他人の首を絞めていた』なんて聞かされたら、取り乱すものじゃないかしら」

「まあ、そうでしょうね」

「水沢さん、ショックは受けていたけど、それはそれで受け入れていたの」

「え？」

「……確かに不思議ですね。自分の記憶に無いのなら、そんな話、私だったらそもそも信じません」

広瀬川先生の言うとおりだ。身に覚えのない罪なんて受け入れられる筈がない。先程の俺がいい例だ。

では、水沢は嘘をついているのか？

本当は俺の首を絞めた事を憶えていて、免罪の為にしらばっくれていると？

……違う気がする。あの時の水沢は、忠言が耳に逆らったというレベルを明らか超えていた。「怒りに任せて」というよりは「我を

忘れて」といった印象だった。俺が憎くてあんな真似をしたのではなく、受け入れ難い現実に対する、恐怖心によるものだと思う。恐怖で我を忘れた事が、度々ある俺が言うんだから間違いない。その間の記憶はやはりあやふやになった。

とは言えど、やはり人を殺しそうになるほど激昂するのは、過剰反応と言わざるを得ない。水沢にとって、母親の死というものは、誰かを殺しても認めたくない事だともいうのだろうか。それは――果たして健全な精神と言えるのだろうか。

「小池先生、水沢は今日の事、どういう風に話していましたか？」

「え？ あっ……と、それは……」

小池先生が、チラッと視線を広瀬川先生へと向けた。それを受けてか、広瀬川先生が代わって話し出す。

「あのね、因幡君。こういう場合は、公平性の為にも、個別に話を聞くのが常套なんです。言い分が偏らないよう、水沢さんの事を訊く前に、まずは私に因幡君の話を聞かせて下さい」

「あ、それなら、水沢の言い分に要証事実は無いつて事でいいです。俺から訂正を求めたりもしません」

「え？」

「ちょっと因幡君？」

何度も言うが、水沢があんな真似をした原因は俺にある。今回の事で、彼女に何らかの咎とがが行くのは望ましくない。何より、初めから水沢には則天去私のスタンスを取ってきた。……つもりだ。

「因幡君、私は担任として、貴方を擁護する立場を執れるんですよ？ 今回の様な場合は、私は本意ではありませんが、女子である水沢さんの側に重点を置いた対応が為されるでしょう。言ってしまうば、因幡君は軽んじられる可能性はあるんです。ね？ だから話して下さい。先生は因幡君の力になるわ」

「……いえ、お気持ちは嬉しいんですが、すいません。今回の事を説明するには、どうしても水沢のプライバシーが関わって来るんですよ。俺の口からどこまで話せたものか、判断が付かないんです。それに、最初にも言いましたが、水沢の凶行の原因は、俺の言葉が彼女を傷付けたからなんです。だから、水沢に重点を置いた対応というのは、俺の本意とも言えます」

「因幡君……」

「……もし水沢さんが、強姦されたって言い張ったら？」

「ングッ……」

小池先生がぼそりと痛い所を突く。

それは嫌だ。

とつても嫌だ。

その謗り^{そし}だけは、何としても避けたい。

だが、そんな彼女自身にも及びが行くような嘘を、果たして吐くだろうか。

「水沢は……そんな事、言って無いんですよね……？」

「今はね」

今はっ!?

……た、確かに、彼女には過去、俺をチカン扱いしたという実績がある。

可能性が無いとは言い切れないか?

「……言い出しそうな雰囲気……なんですか?」

「それは多分無いかな」

「……………」

じゃあ言うなよっ!? ……と、怒鳴りつけたくなったが、相手は仮にも先生だ。抑えろ抑えろ……。

「ふふ」

ふふ、じゃねえっ! ……抑えろ抑えろ……。

「広瀬川先生、ここは因幡君の言うとおりにしてはいかがでしょうか」

「え? ですが……」

「いえ、おそらく、広瀬川先生が仰る様な事には、ならないと思うんですよ」

「どういう事ですか?」

それは俺も聞きたい、小池先生はどういう意味で言っているんだ。

「水沢さんはですね、今回の事、自分が悪いと言っているんですよ」

「そうなんですか？」

「……水沢が？」

意外だ。いっそ憎しみを向けられていたとしても不思議では無いのに。

「こうなるとですね、因幡君の申し出は、非常に有難いんですよ」

「あ……そうなります、か……」

「え？ え？」

先生方は二人だけで何かを納得していた。俺の申し出が有り難い、とはどういう事だろう。

「因幡君、実はね……」

「あ、小池先生、待って下さい、それは私が。……担任、ですから」

広瀬川先生が小池先生を遮って前へと出た。理由は分らないが、随分と沈痛な面持ちだ。

「因幡君、貴方があまりにも普通だから忘れそうになったけど、今回の事は、非常に深刻な事態なんです」

「それは理解しているつもりですが？」

「いえ、解っていません。私は……私達教師は、貴方にあまりにも酷い対応をしてしまっているのです」

「へ？」

俺、何かされた？

酷い目に遭った覚えは（水沢の事は置いて）無いんだが。
だが、何故か二人の先生は申し訳なさそうな顔をしている。

「教師として不甲斐無いというか……なんとも尾籠な話で恥じ入るばかりです」

belowな話で恥ずかしい……？

あつ、下ネタの事か！ ……んな訳無い。

「あの、ちょっとなんの話かいまいち……」

びろうの意味が解りません。

「実は、まだ因幡君のお父様に、ご連絡をしていないんですよ」

「父さん？」

それは別に……寧ろ助かる、こないだ迷惑掛けたばかりだし。

「そもそもっ！」

「わっ」

「何よりもまずは、救急車を呼んで然るべきだった！ 首を絞められて昏倒していたんですよ？ それが常識の筈です！ なのに私達学校側は、世間体を優先してしまった！」

「ひ、広瀬川先生？」

「ちょ、ちょっと広瀬川先生、落ち着いて下さい、因幡君が困りますよっ」

「……ほんと、ヘビー……です」

何なんだ？

広瀬川先生は、急に興奮したかと思ったら、途端に萎しぼんでしまった。さっぱり事態が呑み込めない。

「ふう……あのね、因幡君。こう考えてみて」

すかさず小池先生が後を引き継いだ。

「学校内で、殺人未遂事件が起きた……って」

「――！」

「ぶっちゃけるとね、学校側は内々での解決を望んだんだよ。だから、君のお父さんにはまだ連絡してないの」

「……父さんが、警官だから？」

「そう、なるね。ねえ、因幡君？ 君は、自分がもう少しで殺されるところだったって事は、認識出来てる？」

「それは……」

……出来て無かったかも知れない。実質、自身が無事なものだから、大した問題だとは捉えていなかった。

だが、主観と客観の間には大きな隔たりがあったようだ。

俺としてはケンカの延長のように思っていたが、世間的に見れば、「学校で女子生徒が男子生徒を殺しかけた」と映る。それは実にセンセーショナルだ。間違いなく、ニュースや新聞が取り上げるだろう。

「そして、言ってみれば、水沢さんは罪を認めてるって訳。だからね？ 君側の対応如何よっては……」

なるほど、それで俺の申し出に懸ってくる訳か。

確かに、最悪、家裁送致には至りそうな事案だ。きっと学校側は、水沢寄りの対応をしたいのだろう。つまりは隠ぺい。

「すでに水沢さんには、自宅謹慎が言い渡されてるの」

「えっ？ て、停学なんですか？」

「ううん、正式な処分が決まるまでの暫定処置。通常の欠席扱いにはなるけど、まだ停学の記録は付かない。でも最終的には、停学はもちろん退学だって有り得る状況よ」

「そ、それは俺次第という解釈で合ってます？」

「うん、そうね。学校側は、君を被害者と捉えているから」

「隠ぺいでよろしくお願いしますっ!」

「早っ、判ってたけど」

それはそうだ。考えるまでも無く、そんな事態は誰の得にもならない。ここは可及的速やかに事を収めるに越した事はないだろう。何度でも言うが、原因は俺なのだから。

「……小池先生、そう言い包めるように言われてきたのですか?」

「なっ、広瀬川先生!? 言い包めるって……私はただ、『事態を大きくすべきではない』って事に賛成なだけですよっ」

「……だって、因幡君の優しさに付け込んで收拾させた感が強くて……」

「た、確かに因幡君ならこうなるだろうとは思ってましたけど、付け込んだ訳じゃあ……」

「だいたい、事件の直後に話す内容でしょうか。まずは因幡君を慮って、後日、ご父兄同席の下で切り出すべきだったのでは?」

「むぐ……だ、だってだって、私もそう思ったけど、教頭が急かすから……」

「それはつまり、生徒の身よりも学校の信望が優先という事ですか? 主客転倒にも程があります!」

「わ、私に言われても……『事が広まる前になんとかしろ』って教頭が言うんだもん……」

「貴女は教頭の味方をするんですか!？」

「そ、そうじゃないけど……。み、水沢さんの事を考えたら、話が広まる前に何とか出来た方が……」

「それは結果論です！ 全ては因幡君が無事だったから言える事だわ！」

「あう……そ、それは……」

「もし、病院に搬送しなかった事で、因幡君の容態が急変していたら、貴女は一体どうするつもりだったのですかっ!？」

「い、ごめんなさい!」

どうも広瀬川先生は、忸怩たる思いに感情が爆発しているようだ。思っていたよりもずっと熱い先生だったんだな。

でも、これは小池先生がちょっと不憫かも。

どちらの言い分も、正しいと言えば正しいので、好みの問題になってくる。俺としては、広瀬川先生の気持ちは嬉しく思うが、やはり事が大きくなるのは勘弁だ。結果だけ見れば、これで最善と思える。「隠ぺい」と言えば聞こえは悪いが、俺と水沢の問題を秘密にしてくれるという事なのだから。

「大体貴女は隙が多いんです！ だから生徒達に付け込まれるんですよ!？」

「話変わってるううう!？」

何やら、妹を叱る姉といった様相を呈してきたぞ。これならほっといても大丈夫かな？

それよりも、今は水沢の事だ。

ずっと気になっていた事がある。

記憶に無い罪を認めているという事に関してだ。

それは一体どういう事だろうか。

憶えていないというのは、恐らくは本当の事だ。水沢にとって、母親の死を認めるという事は、何よりも耐え難いものであると推測出来る。さらに推測するならば、俺の言葉は、彼女に母親の死を認めさせるに至ったのではないだろうか。

そこで防衛機制が働いた。

つまり、母親の死という事実能耐えられなかった水沢は、俺とのやり取りを無かったものとし、自分が母親の死を認めたという事実も無かったものとしたのだ。よって、水沢は憶えていない。

確か、防衛機制の分類の内の「抑圧」というものだったと思う。道聴塗説かもしれないけど、そうと考えれば水沢が俺の首を絞めたのも、その分類の「攻撃」に当てはまっているのではないのだろうか。……今度もう一度、美作先生に教えて貰おう。

とまあ、そんな理由で水沢の記憶が無いのは本当の事だと思っている。

では、なぜ記憶に無い罪を認めたのか。

広瀬川先生が言っていた通り、「人を殺しかけた」なんて事人に言われたからといって、ホイホイ信じられる事では無い筈だ。

だが、水沢は信じた。

それは何故？

一つだけ思いついた事がある。それは、「経験則」だ。つまり、彼女は今回のような事態を度々経験している為、取り乱す事無く受け入れる事が出来たのだと、俺は考えている。

言うなれば、『母親の死というキーワードに反応して起きる発作』。そういうものを、水沢は有しているのではないだろうか。

この説が正しいとするならば、俺と同じ経験を間違い無くしたであろう人物が一人。それは、水沢の父親だ。きっと、娘に母の死を説明した際に、この『発作』が起きた筈。一度、その父親と話を……

「……いや、待て俺」

まだ懲りないのか俺は。

俺なんかにどうにかなる問題ではないと、もう十分身に染みただろう。

水沢に必要なのは俺のお節介などではなく、そう、美作先生のよ
うな専門家なのだ。俺は自分の範疇を弁^{わきま}えて、出来る事だけをしっ
かりとやればいい。そして、水沢の問題は俺の範疇外。

今の俺に出来る事はきつと……

「えーん、助けて因幡くううん……」

「生徒に助けを請うなんて、なんて情けない。そんなだから貴女は
……」

……この場の収拾、かな？

t i m e t o b e l i e v e n o w 8 (後書き)

主人公は、理屈で自分の心を護るタイプです。こういう人間は、感情的になった時、弱さが出ますよね。

t i m e t o b e l i e v e n o w 9 (前書き)

え？ 日直は居ないのかって？ クラス委員が号令を掛ける学校
もありますよ？

え？ クラス委員が男女とも休んだら、誰が号令を掛けるの
かって？ クラス委員は休まないから、クラス委員なんです。

え？ なんで主人公しか号令掛けないのかって？ 偶然です。…
…あの、もう本編を読んで下さいませんか？

time to believe now 9

一月二十九日 土曜日 放課後

――キーンコーンカーンコーン……

「起立！」

終業のチャイムの直後、教室に響く号令。今日も俺の声と共に授業を締め括る。

土曜日は四十五分の授業が四つ、いつもより二十分早い時間に四時限目が終わった。

今日は一度も教師に指されなかった為、誰とも言葉を交わしていない。教師が話しかけてくれなければ、現在の俺に、会話の機会は皆無。よって、本日俺が教室内で発した言葉は「起立」「礼」「着席」だけだった。

俺とクラスメイト達の間に来た溝は、ほんの僅かも埋まる気配の無いまま、週末を迎えた。……まあ、たった一週間でどうにかなるとは思っていない。大体、溝が出来たのは去年の五月だ。

月曜日から生じている、この学校の生徒達の俺に対する拒絶感は、改善も悪化もしていない。そう、悪化はしていないのだ。

今日の前日。

つまりは昨日。

俺が水沢の心を傷付け、水沢が俺の身体を傷付けた金曜日。

この日の事件の事は、どうやら、学校中に知れ渡る、などという事にはならなかったようだ。今日一日、俺は常に周りへと聞き耳を立てていたが、特に何か騒ぎになっている様子は無く、少なくとも

教室内は、昨日以前と変わらぬ雰囲気を保っていた。これなら、昨日の放課後の事は隠ぺいが成功したと見ていいだろう。

良かったと思う、俺はもちろん水沢にとっても。

その水沢だが、とりあえず今週は自宅謹慎という事になっている。と言っても今週は今日で終わりなので、実質、学校を欠席となるのは今日だけだ。一応被害者という立場にある俺が、彼女の処分を望まなかった事も考慮され、正式に処分はされなかったらしい。だから水沢は、月曜日から普通に登校出来る筈。

彼女がそれを出来る精神状態であるかは判らないが……。

「では皆さん、卒業式に関するプリントを配りますので、ちゃんと目を通しておいて下さい」

いつの間にか広瀬川先生が教室に来ていた。すでに帰りのSHRが行われている。しまった、何か連絡事項を聞き逃したかもしれない。普通なら、後で友達に確認すればいいのだろうが、俺にはその友達が居ない。帰り際、先生に確認しなければならいだろうか。

……今週はどうもよくない、気が散漫になっている。

「皆さんは初めてになりますが、徳英の卒業式は全校生徒が参加します。一年生である皆さんには、特にやるべき事は有りませんが、卒業生を送り出す際に校歌を斉唱して貰う運びとなっています。もちろん校歌は憶えていますよね？」

卒業式の話か。再来月で三年生は卒業するのだが、その三年生には知っている人が居ないので、どうしてもミケの卒業式の方に気が行ってしまう。

「前日にリハーサルがありますので、そんなに心配しなくても大丈夫ですよ」

小学校、中学校の時も思ったのだが、卒業式のリハーサルって本番の感動を薄めてしまう気がする。しかも前日って……。

「はい、では今週もお疲れ様でした。日曜はゆっくりと休養を取って下さいね」

「そう思うなら宿題を減らして」と、何度思っただろう。……進学校だから仕方ないと言えば仕方ないが。

ともあれ、この一週間はどうか乗り切った。明日はしっかりと休み、次の一週間に備えよう。

「因幡君、ちょっといいかしら？」

「あ、はい」

教室を出ようとした時に、広瀬川先生に声を掛けられた。

教卓へ向かおうとしたら「廊下で」と言われ、そのまま教室出る。直感的に昨日の話だと思ったので、なんとなく、人目を避けるように、廊下の隅へと足を向けた。

「水沢さんの事なんですが……」

先生はやや声をすばめつつ、そう切り出した。予想は当たったようだ。

「水沢さんのお父様が、因幡君とそのご家族に会って謝罪したいと仰っているそうなの」

「水沢のお父さん？」

「ええ。昨日、四組の谷垣先生が水沢さんを家に送った際に、お父様からそう言われたそうなんです」

昨日、あの後、俺は広瀬川先生の車で家に送って貰い、水沢は谷垣先生に送って貰っていた。

俺を送った際、広瀬川先生は父さんに会えなかった為、昨日の事は俺の口から父さんに話した。だが、水沢の方は家に父親が居たようだ。

谷垣先生が、水沢の父親に昨日の事をどういう風に伝えたかは分らない。しかし、なんだか随分と迅速に謝罪を申し出た気がする。誠実ではあると思うが、水沢が落ち着くのを待って、彼女の話聞いてから判断してもいいように思えるのだが……。

「あの、谷垣先生は水沢のお父さんに、詳しく説明したんですか？」

「え？ うーん、どうでしょうか……。時間も時間でしたし、何より水沢さんがかなり憔悴していましたから、長居はなさらなかったんじゃないかしら。だから説明もそれほど詳しくは出来なかったと思いますよ？ それに、因幡君と水沢さんのご家族には、学校側から改めてご説明する事になっていきますので」

「にも拘らず、昨日の時点で謝罪を申し出たんですね、水沢のお父さんは……」

「そうですけど……それが？」

「……いえ、なんと言いますか、そうそう受け入れられる事では無いと思ったんです、娘が人を……なんて事は。しかも相手は男子生徒ですし、寧ろ、俺側の落ち度を欲するんじゃないかなって。例え

ば……昨日、広瀬川先生が仰ったような事を疑うとか」

「うう、その事はもう……。でも、言われてみればそうですね。娘の男親としては随分とすんなり……」

俺の考えに信憑性が出て来たんじゃないか？

やはり水沢は昨日のような事が初めてでは無い。だから水沢の父親はすぐに事態を理解し、謝罪を申し出たのではないだろうか。

どうやら水沢の父親には会う事が出来そうだし、その時にでも話を……。

「いや、だからもう気にするなよ、俺……」

「はい？」

「あ、いえ……。えっと、謝罪の必要は無い……という訳にはいかないですね、やっぱり」

「……因幡君が会いたくないのであれば、強要は出来ません。貴方が被害者ですから」

「あ、そうか、そう取られますよね……。だったら、会って謝罪を受け入れた方がしこりを残しませんね」

「なんとというか、因幡君には頭が下がりますね。その歳で、よくそんな考え方が出来るものです」

「へ？」

「昨日も思ったのですが、因幡君。貴方は、もう少し自分を優先し

てもいいんじゃないでしょうか」

「……優先？」

「良い事でもあるので、今まで指摘しなかったのだけれど、因幡君は、ちよつと物分りが良すぎると思うんです。そういう子は得てして、自分を押し殺している事があります」

「……………」

——我慢しているのね、志朗君。

美作先生の声が聴こえた気がした。

そうなのだろうか。

俺は自分を押し殺しているのだろうか。

けれど、誰だって、何かしら我慢している事はある筈。

「因幡君くらいの年齢なら、もう少し我がままというか、自分の思うように行動してもいいと思います。もちろん限度はありますけど」

「思うように……………ですか」

「ええ。よく言われる事ですが、溜め込みすぎた心は、やがて暴走を起こすかもしれません。時には自分の本音を外に出す事も大切ですよ？」

「なるほど……………」

俺が水沢に投げ掛けたあの言葉。

水沢を傷付ける事となったあの言動。

俺はそれを、自分の意思に反してと捉えていたが、あれこそが俺の本音だったのかもしれない。

……暴走、か。

俺も母親という存在に関しては敏感だから、心の抑制が効かなかったのだろう。きっと俺は、水沢に母親の死を受け入れて欲しいと思っているんだな。

「ごめんなさい、話が逸れましたね。ええと、水沢さんのお父様には会うという事でいいのかしら？」

「あ、はい。あの、いつ頃になるんでしょう？」

「因幡君側の都合が優先という事を前提に、明日の日曜日を提案しているそうです」

「明日っ!？」

「さ、さすがに無理ですよね……?」

急すぎる。俺はともかく父さんの都合がつかない。こちらに合わせるという事だし、ここは断って別の日に……。

「……いや」

「因幡君？」

……自分の思うように、か。

俺は今、水沢の父親と話してみたいと思っている。
こういうのもありかな？

「先生、ケータイを使う許可を頂けますか？ 父に確認してみたいので」

「え？ あ、はい、どうぞ」

ケータイを取り出しすぐさま電源を入れる。父さんの番号を表示したところでしばし逡巡。緊急でもないのに、こんな時間に電話するのは、ひどく気が引ける。立て込んでいない事を祈りながら、俺は発信ボタンを押した。

……トウル……プツ

「志朗？」

「早っ」

「ああ、ちょうど携帯電話いじってたから」

「あつ、やっぱ忙しかった……よね？」

「いや、構わないよ。急用だったのかい？」

「その、じ、実はそれほど急用って訳でも無いんだけど、昨日の事に関する話なんだ」

「ふむ、聞こう」

「急な話なんだけど、水沢のお父さんが、俺達に会って謝罪したいそうなんだよ。しかも、明日」

「本当に急な話だね」

「それでさ、その、無理を承知でお願いなんだけど、出来れば明日、時間を作って貰えないかな？」

「ん、志朗のお願い？ 先方ではなく？」

「うん、俺が水沢のお父さんに会いたいんだ、早い段階で」

「理由は訊いても？」

「詳しくは今夜話すけど、端的に言えば……そうしなくちゃいけない気がするんだ。直感？」

「それが理由？」

「だ、駄目だよね、やっぱ……」

「……………。……午後一時から三時まで時間を作ろう」

「えっ、いいのっ!？」

「僕もそうした方がいいような気がするんだ。直感？」

「刑事の？」

「いや、父親の。それで？ 先方がウチに来るのかい？」

「あ、そういえば聞いてなかった。ごめん父さん、ちょっと待ってて。……先生、水沢さんって、ウチに謝罪に来るんですか？」

「え？ ああ……それでもいいのですが、やはり学校でお会いして頂きたいですね」

「そうですか……。父さん？ 学校でだって。いい？」

「了解。時間の方はそれでもいいって？」

「うん、こちらの都合に合わせるみたいだから。じゃあ、詳しくは夜になって事で、忙しいトコごめん、父さん」

「ううん、別に忙しくは無かったさ。じゃあ志朗、夜にまた」

ピッ ツー……ツー……

「先生、明日の午後一時からお願いします」

「あら、お父様は平気だったのですか？」

「ええ。それで大丈夫ですか？」

「はい。では、私から水沢さんに伝えておきましょう。明日の午後一時に学校で、ですね？」

「はい」

「明日、因幡君達は、学校に来たらまず職員室に来て下さい」

「分かりました」

「それでは、今日はこれで。気を付けて帰って下さいね」

「はい、さようなら。……ふう」

広瀬川先生に別れの挨拶をして、その場を後にする。

気が付けば俺は、一気に話を進め、明日にも水沢の父親に会う機会を作っていた。完全に感情優先の行動だ。ついさっきまでは、もう二度と水沢には関わらないつもりだったのに、今は、もう行くところまで行ってしまおうという心境になっている。……ちよつと状況に流され気味かな、俺。

でも実を言うと、最低あと一回は水沢に接触しなければならない理由があったりする。

俺はバッグのサイドポケットを開け、その中から“ある物”を取り出した。

“ある物”とは写真。

そう、水沢母娘の写真だ。

これが、何故か、俺のバッグに入っていた。

確かに水沢に返した記憶は無いが、バッグに入れた記憶はもつと無い。推察するに、あの場を収めた教頭先生か春日先生が入れたのだろう。あの時、俺は気絶していたし、水沢はパニック状態だったから、誰の物なのか確認出来ず、とりあえず俺のバッグに仕舞ったのだと思っている。

どうであれ、水沢の大切な写真が俺の手元にある。これを彼女に返さない訳にはいけないので、明日はそういう意味でも良い機会だった。

……ん？

明日って、水沢も来るのか？

父親だけ？

まあ、どっちに返しても同じか。

「……帰ろ」

そう呟きながら、写真を再びサイドポケットへと戻し、しっかりとファスナーを閉めた。

これは水沢にとって、母親との大切な思い出の一つ、絶対に落とす訳にはいかない。

そして俺は、土曜日の学校を後にすべく下駄箱へと向かった。

今日この後は、児の手柏医院てがしわへと行く事になっている。今週は色々あったので、いいタイミングで予約が入っていたものと思う。約束は夕方なので急ぐ必要は無いし、何をして時間をつぶそうかと、考えていた時だった。

「ちょっと、アンタ」

下駄箱から外履き用の革靴を取り出すのと同時に、女子から声を掛けられた。――え？ 水沢？ 一瞬そう思ったが、そこに居たのは見知らぬ女生徒。

いや、どこかで見た覚えがある。

どこでだったか……。

「ちょっと付き合いなよ」

「え？ 俺？」

「そうよ、早く来な」

俺の左腕を掴み、強引に連れて行こうとする女子生徒。

「ちょ、く、くつ、靴！」

「もう、何やってんのよ、早く履き替えてっ」

わたわたと靴を履き替え、上履きを投げ込むように下駄箱へと仕舞う。すると彼女は、またも俺の腕を掴み、問答無用と言わんばかりに外へと連れ出した。

それにしても思い出せない。

わりと綺麗な子だから、印象に残りそうなものなのだが。

特に俺の目を奪ったのは、彼女の髪。とても綺麗なロングのストレートヘアだった。軽めの脱色がいい感じにさわやかさを出している。体格もスレンダーで、なんていうか、モデルっぽい感じだ。

顔の方は……不機嫌感丸出しで、恐い印象しかないが。

「あの、君、誰だっけ……?」

「うっさい! いいから付いてこい!」

有無を言わさぬ勢いで、猛然と足を進める彼女。腕を振り払う事も可能だが、俺にどんな用が有るのかという興味が勝り、素直に付いて行くことにした。やっぱりこの子、どこかで見た事あるし。

「どこへ行くんだ?」

「うっさいって言ってるっしょっ!」

柳眉を逆立てて一喝。

取り付く島も無い、と。

まあ、行けば解かるか。

軽く諦めの心境で足を進めていくと、着いた先は体育館……の、裏?

「連れて来たわよー」

「おう、やっとか」

着いた瞬間に後悔。

そこには三人の男子生徒が居た。

その三人は、すぐさま俺へと近づき、取り囲むような位置取りをする。

体育館裏への呼び出しは、ある意味青春の1ページと言えなくもないが、俺はこんなページやりません。

「な、何？」

「因幡、訊きたい事がある」

正面の男子が凄みを効かせつつ口を開いた。

着崩した制服の上にコートをだらしなく羽織っている時点でいけ好かない。そして茶色い髪と耳にはピアス。染髪は黙認されているところがあるが、装飾品に関しては、ウチの学校はうるさい。教師に見つかれば没収される筈だから、終業後に装着したのだろう。…そう思うと、何か微笑ましいな。

それにしても、進学校であってもこういうガラの悪い連中って居るもんなんだな。まあ、トラに比べれば大人しい方か。アイツの場合、コスプレの域に達しているし。

「てめえ、聞いてんのか!？」

「あ、ゴメン。えっと、なんの話？」

「水沢の事に決まってるだろうっ！ てめえ、水沢に何をしゃがった

あ!？」

「えっ……?」

そこにきてはたと気付く。

そして、周りの男女四人の顔を確認して納得。

彼らは、月曜日の昼休み、水沢と話していた時に割り込んできた生徒達だ。

男子達の名前は不明だが、女子の方は確か、水沢に『ナツ』と呼ばれていた気がする。

「な、何って言われても……、何が?」

なんとなく『ナツ』さんに訊ねた。

「昨日の放課後の事よっ! アンタ! ひかるに何したっ!？」

「……………」

おゝい、先生方ゝ、隠ぺい失敗してますよゝ。

「今日、ひかるが休んだのって、アンタの所為でしょっ!？」

ナツさんが詰め寄ってくる。確かに彼女の言う通りなのだが、ここで肯定はしない。彼女らが、詳細まで聞き及んでいるか判らないからだ。当事者と学校側は隠ぺいの方針なのだから、ひとまずここはしらばっくれよう。

「……水沢さんに何かあったのか?」

「とぼけんな！ アンタとひかるが言い争っているところを見た奴が居んのよ！」

それは先生に報せた生徒か？

「ええと、人違いじゃないの？ 俺はそんな事してないし」

いけしゃあしゃあと恍^{とぼ}ける俺。我ながら感じが悪い。

「ナメてんのかてめえっ！」

「うわっ」

突然、正面の男子に胸ぐらを掴まれた。一触即発といった雰囲気だ。

「痛い目見ねえと解かんねーのか！？」

「水沢に何したか妥妥と話せ！」

左右の男子も交互に怒声を上げる。だが聞く限り、何かがあった事は知ってても、何があったかは知らないようだ。

「もうっ！ いいからやっちゃいなよっ！」

「ぼ、暴力反対……」

このナツって子が一番怖いんですけど……。とにかく、二日連続の暴力沙汰は避けたい、なんとか落ち着いて貰わねば。

「ここは少し冷静に話さないか？　言っとくけど、俺って平気でチクルタイプだぞ？」

情けなっ。

俺、情けなっ。

「ぐ……コイツ……」

しかし、効果はあったらしく、ひとまず俺を掴んでいた手は放された。

「ふう……。あの、君って水沢さんの彼氏？」

「なっ……。ち、ちげえよ」

「んじゃ、こっちのどっちかが？」

「お、俺らも違う……」

男子三人は否定するも、挙動からは、水沢に対してある程度の慕情を抱いている事が窺えた。まあ、水沢の容姿は学校トップクラスだから、おかしい事では無い。

「という事は、みんな友達として、水沢さんを心配しているって事か……」

「そうよ！　ひかるはアタシの親友！　あの子になんかあったら、アンタの事絶対に許さないっ！」

ナツさんはまだ冷静ではなかった。親友を想っての行動な訳だな。

「なあ、昨日、水沢さんに何があったんだ？ 今日、水沢さんは休んだのか？」

「……………。アンタ……本当にしらばっくれてる訳じゃないの？」

「ああ」

ゴメンナサイ、しらばっくれてます。

「…………聞いた話だと、昨日の放課後ひかるが――」

ナツさんの話を要約すると、昨日の放課後から水沢と連絡が取れなくなっており、心配になった彼女は水沢の事を友人知人に聞いて回った。その際に、昨日の放課後に屋上の昇降口で男子生徒と言いつ争っていた、という情報を得たそうだ。そこで、月曜日に水沢と一悶着あった俺と、その男子生徒を結びつけたらしい。

なんとも見切り発車な感否めない。

いや、大正解なんだけどさ。

「ホントにアンタじゃないの？」

「え？ あ、ああ、まあね」

ぐ……。親友を想う気持ちが伝わってきて、良心の呵責が。

「なんだよ、伊波の早とちりかあ？」

「…………そうみたい。ごめん、みんな…………」

ぐぐ……。痛い、胸が痛いっ。

「……ひかる、ヒス持ちだから……。キレると何するか分かんないトコあって、心配なのよ……」

ヒス持ち？

ヒステリーの事か？

「えっと、君って水沢さんと付き合い長いの？」

「中学の時から親友よ……。それが何？」

「彼女のお母さんの話って聞いた事あ……」

「なっ！？ ちょっとアンタ、こっち来いっ！」

「……るかって、え？ わっ」

「またもや、ナツさんは俺の腕を掴んで引っ張りだした。今回は何やら焦っている感じだ。」

「お、おい伊波、なんだ、どーした」

「ごめん！ アンタ達、もう帰って！」

「はあ？ んだよそれ……」

「後でちゃんと謝るから！ それじゃ！ ……ほらっ、アンタはこっち……！」

男子三人から引き離された俺は、体育館裏のさらに奥へと導かれる。

「……ここならいいわ。んで、アンタ！ この前の時といい、ひよつとしてひかるのママの事知ってんのっ!？」

「えっ、君は知ってるのか!? 確か水沢は誰にも話して無いって……」

「嘘っ!？ ひかる、アンタに母親の話をしたのっ!？」

互いが互いに驚く。早急に話の整理が必要なようだ。ここはひとつ……。

「さ〜いし〜はグー」

「は？ 何？」

「じゃ〜んけ〜ん……ポン！」

「あ、ポン……」

「ぐ……俺の負けか……」

すげえ、この子。チョキ出したよ。咄嗟には一番出難いんじゃないかなかったっけ？

「え？ 何？ なんでじゃんけん？」

「……仕方ない、負けたんだから俺から話すよ」

「へ？ ……んと、わかった」

因みに、勝っていても俺から話すつもりだった。ちょっと間を置きたかっただけだ。

ナツさんに話した内容は、水沢にも言った“俺が過去に水沢の母親に会っていた”説。欺瞞も甚だしいが、本当の事を言っても話がこじれるだけだろう。

「――ふうん、フラッシュバックねえ、そういう事あるんだあ」

「そっちは？ さっきも言ったけど、水沢は誰にも話して無いって言ってたぞ」

「アタシはあの子のパパから少しだけ。行方不明の母親を今でも探してるって感じで」

「水沢の父親か……。じゃ、水沢本人とは母親の話をした事無いんだ」

「あ、と……その……うん」

「あるんだ」

「んく……いいでしょ、別にどうでもっ」

「母親の話したら、水沢がキレた？」

「っ！？ ちょっとちよつと！ なんで知ってるわけっ！？」

「……君だったら話してもよさそうだな——」

俺はかいつまんで昨日の放課後にあった事をナツさんに話した。彼女は水沢があんな風になる事を知っていた人物。それでも尚、親友と言ってはばからない彼女になれば、教えても決して悪いようにはしない筈だと考えたのだ。

「——うそ……。あの子、そこまでやったの……？」

「ああ。それで、結果的に大事に至らなかったから、内々で収める事にした。だからさっきはしらばっくれたんだ。ごめん……」

「あ、ううん……そういう事なら仕方ないわ。アタシもあの子のそんな話、広まって欲しくないし」

予想通り、ナツさんは水沢を第一に考えてくれた。今の彼女になら、過去の水沢の事を訊ねても、話してくれるのではないだろうか。

「水沢は昔から、母親に関する事には敏感だったのか？」

「うーん、ひかるは基本的に母親の話は避けるから、最初はよく判んなかった。でも話題に上ると、なんとなく不安定になるのよ、あの子。だから途中から『母親』はタブー扱いにしたわ。ひかるのパパに多少事情も聞いてたしね。でも、去年……なんて言えればいいんだろ。悪化、かな？ うん、一気に悪化したのよ」

「去年、急に？」

「うん、去年の今頃さ、あの子すっごい落ち込んでたのよ。それで

あの子のパパに話を聞いたらさ、なんてったけな……何か、届け出？を出して、ひかるのママが法的に死んだ事になった……みたいなの？」

「失踪届け？」

「ああ、それぞれ、そんな感じ」

因みに、失踪宣告を申し出て受理されるまで、通例六カ月以上はかかる。となると、失踪宣告の申請をしたのは、一昨年の三伏と言ったところだろう。そして去年の今頃に受理され、役所に失踪届けを提出した、と。つまりは、規定の“失踪から七年”に合わせて、申請をしたという事になる。

「だからアタシ、ひかるを慰めるつもりで『ママの事、残念だったね』って……」

「それは……。その時にキレた？」

「そうなのよ。ひかる、その辺にある物を、片っ端からアタシに投げ付けてさ、『ママは死んでないっ！』って叫び続けたわ。……さすがにあれはビビったわね」

それか。

それがあつたから水沢の父親は、すぐに謝罪を申し出たんだな。

「でもでも、もっとビビったのが、その後ひかるは……」

「何も憶えていなかった、と」

「……よくご存知で」

そんな事があっても、この子は水沢の親友なのか……。俺ににとつてのトラとミケだな。

ナツさんが居るなら、水沢は大丈夫なのかも知れない。

「ねえ、アンタってさ、本当に精神病院に通ってんの？」

「へ？ あ、ああ、それは本当の事だ。……あと出来れば精神科病院って言って欲しいかも」

「ふうん、なんか思ってたのと違う気がする」

「それはどうも」

「そんなアンタから見てさ、ひかるって……う、ううん。なんでもない」

ナツさんが何を訊きたかったのかは、手に取るように判った。俺も水沢のそこが心配だったからだ。

「……精神に病がある事を指摘するのは、決して侮辱にはならない。そこに相手を想う気持ちがあるならね」

「――ッ」

「自分で病気に気付けないなんて事は、精神疾患に限らず、よくある事だろう？ 気付いた人は教えてあげるべきだよな」

「……………。かもね……」

口では素っ気ないが、真摯に受け止めてくれたという感触はあった。きつと、俺の言いたい事は伝わった筈だ。

俺は結局、水沢とは赤の他人で、彼女の領域に踏み込めるほどの信用は持ち合わせていない。だが、このナツさんであれば或いは…。

「アタシ、伊波千夏^{いなみ ちなつ}」

「は……？」

突然の自己紹介。

一瞬呆気にとられたが、俺もすぐに応じた。

「あ、お、俺は……」

「知ってる。アンタ有名だし」

「……あ、そう」

「今日は……その、なんつか、話せて良かったかも」

「えっ!？」

今、なんて言った？

俺と話せて良かったって言ったのか？

「んじゃ、あたし行くわ。バイ、因幡」

「あ、ああ……」

伊波千夏は去って行った。

しかし、これは、もしかして。

飽くまで希望的観測ではあるが。

それでも、やっぱり、ひよっとして。

俺は——彼女の信用を得たのでは？

こ、こ、これは！ 高校入学以来、初の快挙！？

い、いや、落ち着け。ぬか喜びだったら嫌だ、その判断は次のエ
ンカウントの時にすべきだ。

しかしながら期待は隠せない。

だって……俺にもついに、ついにこの学校で友人が！ 友達がつ

！ ——だから、落ち着け俺っ！

そんな感じに浮き足立ちながら、学校を後にする俺だった。

t i m e t o b e l i e v e n o w 9 (後書き)

『ナツさん』の次の登場予定は、(劇中での)明日です。

t i m e t o b e l i e v e n o w 1 0 (前書き)

えー、この先、学校関連のお話がほぼありません。というか、今までも場所が学校なだけで、学校に纏わる話はありませんね。

ですが、学園ものと言います。

ひかるちゃんのエピソードが終わるまで、どうかお待ちを……

time to believe now 10

一月二十九日 土曜日 昼下がり

俺は再び其処に居た。

“其処”とは何処か。

先週の土曜日、水沢ひかるの母親と思われるあの女性と出会った場所だ。

その時点では「出会った」とは捉えていなかった。それは「起こった」のだと思っていた。現実とは連関しない、ただの幻覚なのだと。

しかし、今はもう、俺はそれを現実だと信じてしまっている。

幻覚でも妄想でもない、信ずるべき現実なのだ、と。

「うーん……居ないかあ」

アーケード街を駅側から入り、最初にある横町の曲がり角に俺は居る。先週の土曜日の丁度今頃の時間に、あの女性が現れた場所だ。しかし今日は、あの女性らしき姿は見当たらない。まあ、すんなり会えてしまうのもどうかと思う。何しろ相手は、あまりにも特異な存在なのだから。

俺はひとまずウロウロするのを止め、アーケード内に設置されているベンチへと腰を預けた。

「ふー……」

座ると同時にケータイを取り出し、時間を確認する。児の手柏医

院へ行くべき時間まで、たっぷり二時間以上あった。

俺は、約束の時間まで、なんとなく水沢の母親を探してみようと思った。三十分ほど前、伊波千夏との会話を切り上げた直後に、なんとなく思い立ったのだ。特に何かをしようという訳ではなく、本当になんとかここへとやってきた。

なんとなく。

なんとなくの行動だ。

実を言うと、あの伊波千夏に出会った事により、水沢ひかるに関わろうとする意欲？ のようなものが消え始めていた。ナツさんに会うまでは、「もしかして、俺に何か出来る事が……」などと考えていたのだが、今はもう確信してしまっている。俺に出来る事など無い、と。ようするに、「水沢にはナツさんが付いていれば大丈夫だ」という事だ。

そして、父さんには申し訳ないのだが、水沢の父親に訊きたかった事は、あらかたナツさんから聞けてしまった。だから明日は、ただ謝罪を受け入れてお終いという事になるだろう。

そんな訳で、俺のすべき事はもはや、例の写真を水沢へと返すのみとなった。

それでなんとなく気が抜けた形となって、今はなんとなくベンチに座りながら、なんとなくあの女性を探しているのだ。結局何が言いたいのかというと……

「……俺、何でここに来たんだろう」

自分の行動が理解できない。

仮にあの女性に会う事が出来たとして、そこになんの意味があるというのか。

俺は一体何をしたいのだろうか。

「……ん？」

ビイイイイイイイイ……

「ッ!? こ、これって……!」

俺は反射的に立ち上がる。

この音。

この耳鳴りのような小さな音。

これが聴こえるという事は、何かが起こるのかもしれない。もしもこれが、俺の考えているような現象だとするならば、水沢の母親が現れる可能性がある。

……葉山ことりの方かもしれないが。

俺はキョロキョロと周りを見回した。もちろん、水沢の母親の姿を求めてだ。今日は土曜日だから、この時間の人の数は比較的多い。しかし、それは主に学生。そんな中にあの派手な女性が居れば、むしろ見つけやすい筈。そう思っていたのに……

「あれ? 音が聴こえない……」

……あの音はいつの間にか消えていた。

「なんなの、一体」

本当に困惑する。この耳鳴りのような音が、一体どういった現象なのか、未だに解からない。何かが見える、何かが聴こえる予兆なのかと思っていたのだが、よく考えてみると、あの音が鳴った時に知覚できたのは、葉山ことりだけ。ひょっとして、ことりさん関連限定の現象だったりするのか?

うーん……俺に一体何が起こっているのか、誰か詳しく教えてくれないものだろうか。

「……………」

そう考えて浮かんでくる人物が一人。

月曜日の朝に出会ったあの男。

狂気の笑みをその顔に浮かべる、右眼が義眼のあの男だ。

あの男は俺の事を理解しているかのような素振りだった。彼と話が出来れば、色々な事が解決してしまうような気がする。

だが、しかし、はっきり言おう。

俺はもう二度とあの男には会いたくない。

何やら父さんとの関係性を匂わせていたが、俺はあの男の事を父さんには話さなかった。あの時、別れ際に、もう俺に会う気は無いと言っていた為、俺はあの義眼の男との出会いを無かったものとしているのだ。

それは何故か。

その理由はただ一つ。

俺はとにかく、あの男が怖い。

「…………怖がらないで」

「ん？」

「…………あなたなら大丈夫」

「え？ え？」

声が聴こえる。どこかで聴いた声が。

「…………あなたなら出来るよ」

どこだ？　どこから聴こえる？

「……あなたならきつと出来る。だから……」

アーケード街の雑踏の中、必死に声の出所を探す。

「……だから、あなたが……」

そしてついに見つけた。

沢山の学生達が行き交う中、一人足を止めている女子学生。

「き、君は……！」

「……あなたが、救ってあげて」

「葉山ことりさん!？」

「……あなたなら、出来るから」

葉山ことりはそう言って、どこかを指差した。

俺がその方向に目を向けると、そこには……

「……ッ！　あの女性！」

俺は足を踏み出しかけたが、すぐにはっとなって、一旦ことりさんへと目を戻す。だが、彼女はすでに居なくなっていた。

「俺が……救う？」

確かにそう言っていた気がする。ことりさんの意図は解らないが、

あの女性を指差したという事は、彼女を救えという事だろうか。

「……とりあえず今は」

ことりさんの事も気になるが、今はひとまず置いておこう。

俺はあの女性・水沢の母親の元へと駆け寄った。

「……………」

彼女はぼんやりと立ち尽くすだけで、全く動く気配が無い。だからすんなりと近付く事が出来た。少なからず躊躇はあったが、思い切って声を掛けてみる。

「あのっ、み、水沢……さん？」

「……………」

彼女は視点の合っていないような目つきで、ゆっくりと俺に顔を向けた。そして目が合った瞬間……

「ねえねえ、お兄さん、ちょっとこっちに来てくれない？　ねえ、いいでしょ？」

「……………」

……うん、間違いなく先週の土曜日に出会ったあの女性だ。

「ね？　ね？　いいよね？　来て欲しーの。お願いっ。ね？　このとーり」

「分かりました、行きましょう」

「本当っ!? やったー! お姉さん、とっても嬉しいわ!」

俺がついて行く意思を見せると、彼女はガシッと俺の右腕に組み付いてきた。そしてそのまま、例の路地裏へ向かって引っ張りだす。

「あ、あの! そんなに引っ張らなくても、ちゃんとついて行きますから!」

「さあ、行つくよ」

「だから聞いて下さい!」

なんだか随分と注目を浴びている気がする。

やはり一人芝居に見えているのだろうか……。

いや、今は気にはいけない時だ。この人を、水沢さんを救う為……に?

「……………」

勢いに任せて声を掛けたが、何をどうすればいいんだ?

なにか俺、ことりさんに乗せられた?

だいたい、救うってなんだ?

この人は救われなかったからこんな風になってるのでは?

……俺は何をすればいいんだよ、ことりさん……。

「ええと……水沢さん?」

「ふんふふん、ふんふふん、ふん、ふん、ふん……」

鼻歌を歌ってらっしゃる……。

これ、無案無策でどうにかなるんだろうか。

「あの、水沢さん？ ひかるちゃんの話をしませんか？」

「あ、お兄さん、こっちよ、こっち」

「ひかるちゃんの話ですよ？ 娘さんでしょう？」

「もうっ、話はあとあとっ。ほくら、早く、速く」

だめだこりゃ、ここは黙ってついて行こう。というか、すれ違った人達の「ビクッ!？」って反応が悲しすぎる。どこかに着く前に通報されてしまいそうだ。

「ほい、こっちに行きましょうね」

それにしても、これはなんとも不思議だ。

ちゃんと腕を組んでいる感触がある。

引っ張られている感覚もだ。

体温は……二人とも厚着しているから判らない。ん？ 厚着って

……この毛皮のコートも感触があるぞ。

本当に俺にしか見えていないのか？

自信が無くなって――

「ほくら、そこ曲がるわよ」

「――ツツツ!？」

「おっと、すいません」

それは、角を曲がろうとした時の事だった。

向こうから曲がって来た人にぶつかりそうになったのだ。

ぶつかりそうになったのは互いの右肩。ぶつかりはしなかったが、かすったように思う。その人は、俺に一言謝って通り過ぎて行った。だがそんな事はどうでもいい。

ここで特筆すべき事は一つ。

『俺の右腕には、水沢の母親が組み付いている』という事。

俺は我が目を疑った。

当たり前だ。

何せ、さっきの人、水沢の母親の身体を通り抜けて行ったんだから。

「か、勘弁して欲しいかも……」

有り得ない現実を突き付けられ、にわかに恐怖感が生じた。

果たして俺は、どこへと連れて行かれるのだろうか。――そしてそのまま帰ってこなかった……。なんてありがちな展開は嫌だぞ。やばい、逃げたくなってきた。

「……………。……そう、だな……ありがちな展開と言えば……」

水沢の母親が、自分を見つけて貰いたがっているという展開。この手の話では、もはやお約束とも言える。救うっていうのはそういう事なのかもしれない。

だとすると、俺が連れて行かれる先には、水沢の母親のアレが……？

しかも八年経ってるから……

「はい！ 到着〜！」

「……ビクッ!?」

「さあ、入るわよ〜」

「え……?」

入る?

どこへ?

ええと……ん?

「……て、ちょっと待てー……っ!」

「ほら、急いで急いで〜」

「無理！ 無理ですってば！ 俺まだ十六ですからっ！」

ホテル、だった。

そこは、いわゆる、ラブホテル、だった。

「ちょっと何やってるの？ 早く入ろってば」

「え？ 嘘？ まじ？ 入るの？ ここに？ だってここって……
うそ〜ん」

抗えなくは無い。

抗えない訳では無いが、ここまで来てほっぽりだすのも悔いが残る。

よし、ここは覚悟の決め所だ。

決して興味があるから入る訳では無いぞ。

いや、本当に。

ウィイイン……

やけに稼働音のする自動ドアが開き、俺は、遂にそこへと足を踏み入れる事となった。

「こ、これがラブホ……」

エントランスは小ぢんまりとしていて、俺が利用した事のある観光ホテルのそれとは比べるべくもない。俺達以外に人は居らず、スタッフすら見当たらなかった。というかフロント無くない？　どこで受け付けるんだろうか。不思議に思いながらも、ざっと周りを見回す。すると、壁にあるパネルのような物に目が留まった。見ればそれは部屋の写真。何かボタンのような物もそこにはある。なるほど、自動販売機(?)か。

「こっちよ、こっち」

ゆっくりと観察する間もなく、水沢さんが俺を引っ張りだした。どうやらエレベーターホールへと向かっているらしい。

「い、いいんですか？　勝手に……その、お金……とかは？　――
て、あれっ!？」

気付くと、誰も俺を引っ張ってはいなかった。
消えた。

水沢の母親は、一瞬にしてその姿を消してしまった。

「え？ え？ な、なんで？ だって、遺体がまだ……」

「おい君っ！ 困るよっ！」

「へ？」

鋭い怒声に振り返ると、そこには蝶ネクタイを付けたワイシャツ姿のおじさんが居た。

「ここらは学生が多い地域だから、いろいろ厳しくしとかないと、目え付けられちゃうんだよねえ。君、高校生だろ？ ウチはNGなんだ。ていうか、この辺はどこもNG。ビジネスホテルでも探しな」

「え？ あ、はあ……」

急な展開に状況の把握が遅れたが、どうやらこのおじさんはこのスタッフで、高校生である俺がここを利用することを、拒絶しているようだ。

水沢の母親は消えてしまったし、もはや長居は無用と見た。結局何も得るものは無く、ただの叱られ損だったという訳か。……くそつ。

「す、すいません。利用しようとした訳じゃなくて、その……そうトイレ！ ……を、使わせて貰えないかと」

「はあ？ トイレ？ ……何もこんなトコを使わんでも……」

「限界なんです！ もう漏れます！」

「むっ、そ、そっちの角だ。終わったらすぐに帰ってくれよ？」

「ありがとうございます」

俺は示された場所へと、ダッシュで駆け込んだ。

別に漏れそうだった訳ではなかったが、入ってみたらなんとなく催したので、用は足していく事にした。

「フウウウ……。はあ、骨折り損のくっつてヤツかあ……」

色即是空、空即是色。こんな存在しないような存在を信じるような真似は、ある種の悟りが必要。俺には無理っす……。

俺はがっくりとしながらエントランスへと戻り、そそくさとそこを後にする。

ウイイイン……

やはり稼働音の大きい自動ドアをくぐり、ホテルから外へと出た直後の事だった。

突然、眩暈を感じたかと思ったら、一瞬で目の前が真っ白になったのだ――

――気付けばそこは、夜のホテル街。

かつて身を置いた事の無い環境。こんな時間のこんな場所に、高校生である俺が居るだなんて、間違いなく誉められた事では無い。本当ならば、すぐにでもこの場から離れるべきなのだが、そんな必要が無い事を俺は知っている。

俺はここに居て、ここに居ない。

ここでの俺はアウトサイダー。

許される行為は、見る事と聞く事だけ。俺の側からは何も干渉が
出来ない。

ならば見るしかない。ならば聞くしかない。

そう思い、周囲に意識を向けた。ここは、さっき俺が中に入った
ホテルの前にある通り。夜になってはいるが、場所自体は変わって
いない。ホテルの利用者への配慮か、青い照明が灯されており、辺
りは薄暗かった。人目を忍ぶ環境が整えられているようだ。俺ぐら
いの年齢だと、やや背徳感を覚えてしまう。

ウイイイン……

不意に、ホテルの出入り口の自動ドアの稼働音が聴こえた為、そ
ちらの方へと視線を移す。すると、そこから一組のカップルが出て
来た。ここにある光源でその姿を明視するには、ややカンデラが足
りないが、男女である事は間違いない。

「ねえ、ねえ、次はいつ逢えるの？」

これは……暗くて顔は判別できないが、その女性の声は、間違い
なく水沢の母親の声だった。

「まあ待ちなさい、こっちにも都合つてもんがある。いつもの通り、
こちらから連絡するから」

男性の方は、全く聞き覚えの無い声だ。

声の感じからすると、かなり年配の男性だと思われる。

詳しい状況は読み取れないが、少なくとも、この二人がホテルを
利用するような間柄である事は、明々白々。恋人同士か、夫婦か、
あるいはもっと不純関係か。

「もおっ、いつもそう言って連絡くれないんだから。私、さびし……」

「亜季っ！」

「ッ!？」

薄暗い路地に突如として響く男の声。

見ればそこには、怒気の孕んだ空気を纏う男が居た。

やはり、暗くてその顔は確認できないが、その声と、微光の中で微かに浮かぶその装いから、かなり若い男性だと思われる。

「お前……お前っ！ ふざけやがってえっ！」

その男は、怒張声と共に女へと詰め寄った。

「な、直人……さん」

「よくもこんな真似を……絶対に許さねえ！ 終わりだ！ もう終わりだあっ！」

「直人さん……な、なんで……ここが……?」

「調べたんだよ！ お前が怪しいから、人を雇って調べさせたんだっ！ お前がここに居るって報せがあったから、現場押さえに来たんだよっ！」

「そ、そんな……」

若い男は酷く激昂している。

察するに、これはいわゆる修羅場といった事態ではないだろうか。

「あ、あの……亜季ちゃん？ 彼は……？」

女と一緒にホテルから出て来た年配の男が、おずおずと口を挿む。彼は状況を理解していないらしい。

「ッ！ テメエ！ テメエの事も調べが付いてるんだからなっ！

若い男が、年配の男へと標的を変えた。

「な、何なんだね、一体……うわっ！？」

グイッと、若い男が年配の男の胸ぐらを掴みあげる。怒りの為か、必要以上に力が籠っているようだ。

「んぐ……は、離さない……！ く、苦し……い」

「直人さん！？ やめてっ！」

「……あんた、三浦……さんだよな？ 大学の教授センセなんだって？」

「なっ！？ き、君は……一体、誰……なんだね……？」

「……亜季の夫だ」

「えええっ！？」

女の夫？

という事は、水沢ひかるの父親？

「そんな……っ！　だって、亜季ちゃんは……独身……て」

「んなこと俺が知るか！　あんた、解ってんのか？　あんたは人の妻に手え出しやがったんだよ。それで教育者だとか、笑わせんじゃねえっ！」

修羅場という解釈は正しかったようだ。

今、この場は『夫』『妻』『妻の不倫相手』の三人が対峙している状況という事になる。

「あんたの家族がこれを知ったらどう思うかねえ？」

「!?　ま、まさか……」

「ああ、ぶちまけてやるっ。何もかも、あんたの妻と娘にぶちまけてやる！　ついでにあんたの職場にもなっ！」

「ま、待ってくれ！　それだけはやめてくれ！」

「ざけんなっ！　人の家庭ぶち壊しておいて何言いやがる！　こっちだってテメエの家庭ぶち壊してやらあ！」

「そんな……さ、誘ってきたのは亜季ちゃんの方なんだ……私は、悪く……」

「この野郎っ！　テメエが誘いに乗らなきゃよかっただけの話じゃねえか！　だいたい、どっちが悪いかなんて俺には関係ねえ！　どっちもくたばれっ！」

夫の感情が怒りで爆発している。それはそうだ、妻の不倫現場なんて、冷静でいられる筈がない。だが、妻に明らかな非があるとしても、今の冷静さを失っている夫は危険だ。いつ暴力を振るってもおかしくない。

「もうやめてえええっ！」

妻も危険を感じたのだろう、横合いから夫へとしがみ付いた。

「お願い直人さん！ 三浦さんを離して！ 全部私が悪い……きやつ！？」

しかし妻は、簡単に弾き飛ばされて、地面に尻餅をついた。

「俺に指図すんな！ 亜季、お前はもう妻でもなんでもねえっ！」

「け、警察……警察呼ぶよ！ 直人さん！」

自分では止められないと悟ったのだろう。この状況では、それが正しい判断だと思われる。しかし夫は……

「おお、呼べやつ！ 俺は全然構わねえ！」

……歯牙にも掛けない。警察を呼ばれて困るのは自分では無いと確信しているのだろう。

「待ってくれ亜季ちゃん！ それは困る、家族に知られてしまう！」

そう、困るのは妻の不倫相手。警察に介入されると、内々で済ま

す事が出来なくなるかもしれない。

「な、なあ君？ 話し合おう。わ、私は……ある程度ならば、自由の利くお金が……あるんだ」

どうやら金銭での解決を試みるようだ。だがその瞬間、夫の雰囲気張りが詰めたように思える。

「……………。テメエ……………」

「そ、そうだな……。二百、いや三百万ならすぐにでも用意できる」

「…………んじゃねえ」

「…………え？」

「ナメてんじゃねえええええっ！」

「ひっ!？」

ついに夫の右腕が振り上げられた。

もちろん拳は握られている。

これはかなり危険な状態だ。

今の夫の精神状態では、歯止めが効かないかもしれない。

「ダメエエエエエー……ッ！」

間一髪、妻が再び夫へとしがみ付く。

今度は腰にしっかりと。

突進だった事もあった所為か、夫の手は、妻の不倫相手から離れ

ていた。

「亜季いっ！ 放せえええっ！」

「三浦さん、行つてっ！ 早くっ、早くうっ！」

「あ、亜季ちゃん……。で、でも、このままじゃ家族に……」

「私が説得するからっ！ 今は行つてっ！ このままじゃ三浦さんが危ないっ！」

「う……くっ、あ、亜季ちゃん！ 彼が落ち着いたら連絡してくれ！ ちゃんと話し合おう！」

そう言い残すと、彼は脇目も振らずに駆け出した。

「待てやコラアアアッ！ くそっ、亜季！ 放しやがれっ！ ぶっ殺されてえのかあああああっ！」

！！――

「――おいおい君、まだこんな所にいたのか？ とつとと帰ってくれよ」

「……へ？」

「へ、じゃないよ。言っただろ？ 高校生にウロウロされちゃ困るんだよ」

「……………」

目の前には見覚えのあるおじさん。確か、ホテルのスタッフだ。そして、周りは明るい。照明では無く太陽のお蔭で。今、ホテルの前に通りに、さっきまで居た三人はもちろん居ない。居るのは俺とおじさんだけ。

こんな状況は前にもあった。

そう、これはあの時……月曜日の五時限目の時と一緒だ。

あの時は、葉山ことりの過去らしき光景を見た。

ならば、今見た光景は、水沢の母親の過去なのか？

つまり、今のが、俺をここへと連れてきた理由？

「おゝい、君ゝ、聴こえないのゝ？」

「――ハッ。あ、す、すいませんっ」

「ほら、帰った帰ったゝ」

「……………」

「ちょっと？」

「あの……貴方はここに勤めて長いんですか？」

「は？　なんだよ急に……」

「八年前もここで働いてました？」

「いたけど……それが何？」

「その頃、ここのホテルで何かトラブルとかってありませんでしたか？」

「はあ？……あのねえ、そんな前の事憶えちゃいないって。大体、こんな場所じゃトラブルなんて日常茶飯事だよ」

「……そうですか」

「いいから帰ってくれよー」

「あ、は、はい。失礼します」

俺は軽く会釈してから、その場から離れる。

ふと、周りをきよろきよろと見回してみたが、水沢の母親の姿は見つけられなかった。

（……………。さっきの……ことりさんの時と同じ現象……だよな？）

先ほどの白昼夢。この言い方は嫌だな……うーん、ビジョン、でいいか。あのビジョンが、ことりさんの時と同じく過去のビジョンだというのなら、これはかなり重苦しい展開になった。

暗い場所での出来事だったから、視覚情報はいまいち信憑性に欠けるが、話していた内容はしっかりと思い出せる。

少し考えをまとめてみよう。

暗かった為、顔ははっきりと確認出来なかったが、声から判断するに、ビジョンの中の女性は水沢の母親だ。何せ、直前まで聴いていた声なのだから、そうそう間違えたりしないだろう。そして、やりきれない話だが、どうやら水沢の母親は不倫をしていたらしい。

相手は確か……大学教授？　で、名前は「三浦」と言ったか……

彼も妻子持ちのようで、互いに不倫関係だったという事になる。

そんな二人の逢引の現場に現れた男性。その人は彼女の夫で、つまりは水沢ひかるの父親だった。「直人」と呼ばれていたな、その直人さんの憤りはかなりのもので、あの場で三浦さんが殺されてしまったのではないかと思った程だ。

結果的にそんな事にはならなかったが、俺はそこに安堵を覚える事が出来ずにいた。何故なら、三浦さんが去った後、あの場に水沢の母親が残されてしまっている。冷静さを失っているあの人の側に、彼女が残されてしまっているのだ。

そこでビジョンは途切れたが、その後の展開は想像に難くない。

「これが……真実？」

いや、解ってる。

こんな事、なんの証明にもなりはしない。

決定的な場面を見た訳では無いし、証拠になり得るものを見つかる事も出来ていない。

だが、疑うきっかけにはなる。

『水沢の母親を殺したのは、水沢の父親である』という可能性を疑うきっかけに。

「……でも、そうなると……」

果たして、この真実は暴くべきなのだろうか。一般良識の観点からならば、もちろんそうすべきなんだろう。でも、そうしたら水沢ひかるはどうなる。母親の死を認識しそうになると解離を起こすような子に、こんな真実が耐えられるのだろうか。俺だったら、父親が母親を殺したなんて事、きっと耐えられない。

水沢の母親は、一体何を思って俺をここへと連れてきたのだろうか。彼女の目的は何なんだ？

俺に何を期待しているんだ？

ことりさんが言うような救いか？

この真実を暴けば救いになるのか？

けどその場合の水沢ひかるの心情は？

「……………。はぁ…………」

下手の考え休むに似たり。

ただの高校生である俺には重すぎる問題だ。

大体、父親が犯人と決まった訳では無い。

見込み捜査の危険性は父さんからよく聞かされている。一人の冤罪を生むくらいなら百人の犯罪者を世に放つ、というあれだ。俺の判断は飽くまで状況証拠のみによるもの……いや、それすらにも達していないかもしれない。こんな、非常識という言葉すら生易しい方法で得た情報なんかで、水沢の父親を犯人と決め付けるのは、早計にも程がある。

（と、言うか、だ。そもそも、水沢の母親って殺されたのか？ 根本的にそれが判明してくない？ なんか、無意識に『死者の無念を晴らす』みたいな使命感に駆られていたが、水沢の母親に無念があるなんて、俺は何を以て判断してるんだ？ ……むむむ、これは…………ちよつと俺の手には…………）

「…………諦めないで。私の時みたいに、あの人も救ってあげて」

「え？」

……………ビイイイ……………

「……………」

耳鳴り？

いや、何か言葉をかけられた気がする。

「ことりさん……か？」

辺りを見回す。どうやら俺はアーケード街の雑踏の中に戻って来ていたようだ。思考に集中するあまり気付いていなかった。賑わう人通りの中を、ことりさんの姿を求めて目を走らせたが、結局見つける事は出来なかった。

「……私の時みたいにな、か」

考えてみれば、葉山ことりという少女も、一体何なんだろうか。

俺が彼女を救った？

いや、だから、救われなかったからあんなってるんだろ？

俺に感謝しているような事を言っていたが、確か俺、彼女には結構キツイ事をされた気が……。

これは、いわゆる、あれ、か？

俺、ひょっとして、ことりさんに、憑りつかれた？

……やばい、これ、納得いっちゃいそう。

だからちよこちよこ現れるのかも知れない。

そして何故か、俺が水沢の母親を救う事を望んでいる。いや、救えると信じている。

（ん？　ことりさんは俺の事を……信じてる？　……そうか、だったら……）

信用を得たのなら、それに応えるべきだ。そうすれば大切なものを手に入れることが出来ると、俺は知っている。

トラ。

ミケ。

美作先生。

そして父さん。

それはどれも俺にとって大切な存在。

ことりさんは特異な存在だが、俺を信用してくれるというのなら、友人と呼べるのかもしれない。

なら、彼女も大切な存在だ。

「ことりさん……俺、もう少しだけ首を突っ込んでみるよ……」

「……うん」

「え？」

——……ビィィィィ……

「……………」

別に姿を見せてくれてもいいと思うんだが……。

「さて、と。時間は……うん、いい頃合いだ。美作先生のトコに行こう」

その後、俺は兎の手柏医院へと向かった。

t i m e t o b e l i e v e n o w 1 0 (後書き)

『ことりさん』のエピソードは別に考えています。今はひかるちゃんのエピソードなんです。……ひかるちゃんの出番、少なげですが……。

t i m e t o b e l i e v e n o w 1 1 (前書き)

かったるい話が過去最長です。

果たして、今回の話は最後まで読んでもらえるのでしょうか。

今回は病院での話で、医者たちには演出の為に専門用語っぽい言葉を、頑張って使わせています。

いいですか？ 演出です。フィクションです。

はつきり言って、かなり適当なので、実際のものと混同しないように、お願い申し上げます。

追伸 ケータイで読んで下さっている方々。どうか頑張って下さい。

time to believe now 11

一月二十九日 土曜日 夕暮れ前

こ
てがしわ
児の手柏医院。

俺が十年来お世話になったきた精神科の病院。

休診日は木曜日と祝日。土日は午後からの診察となっている。が、この辺はかなりフアジーで、俺の感覚では、ほぼいつ来てもOKな気がする。先週のような急な診療希望も、断られたためしは無い。

医師の数は、確か、常勤二人に非常勤が三人だったと思う。常勤の一人はもちろん美作奈緒子先生。もう一人は主に病棟に居る為よく知らない。だがそう言えば、高井京助先生が先週から新しく常勤に入ったと言っていた。美作先生の甥っ子さんで、ちょっと変わった……いや、まだ判断できるほど接していないか。もとい、ちょっと変わっていきそうな先生だ。でも真面目そうで優しそうな感じではあった。

だがやはり、児の手柏医院の最大の魅力は美作先生の存在だろう。決して俺の鼻屑目ではなくて。

美作先生は、PTSDに有効とされる、EMDRという治療が行える医師だ。これを行うには医師免許とは別の資格が必要になるらしい。詳しい事は知らないが、EMDRを行える医師は決して多くないようで、この界限では美作先生だけなのだそうだ。俺も何度か受けた事があるが、目の前で先生がただ指を左右に動かしているだけにしか見えない為、「なんでこれに資格が要るのだろう」と疑問を持った事もあるが、その実、かなり厳密な手順があるとの事。でも確かに、あれをやって貰うと過去の記憶を鮮明に思い出すことが出来た。もちろん思い出せない事だってあるし、俺に関しては手詰

まりな状態になりつつもある。とは言え、美作先生が優秀な医師である事を疑った事は無い。

そんなお医者さんが居るのだから、今日も児の手柏医院は大繁盛……してないな。

待合室には俺しかない。

実は珍しい事では無く、基本的にここで他の患者さんと鉢合わせる事は、滅多に無い。会うとすれば、医師にアドバイスを請いに来た患者の家族が主だ。

この国の精神医療は、一昔前までは入院治療が基本だったのだが、現在は在宅療法にシフトしつつある。そこで美作先生は、いっそ訪問診療へと踏み切ったらしい。今はまだテストケースの段階ではあるものの、名目上この病院に所属を置く三人の医師が、患者宅を訪問して診療を行っているのだ。その為、患者達はここに通院する必要が無い。よって、ここで他の患者に会う事は滅多に無い、という訳だ。

では、どうして俺は通院しているのか。

それは、この病院の開業医である美作先生が、その立場上訪問診療を行っていないからだ。

精神疾患は、医師との相性が圧倒的にものを言う。だから俺は、美作先生が外来を行っているこの児の手柏医院に、足繁く通っている。要するに、俺は他の先生では嫌なのだ。

しかし、高井先生を常勤させたところを見ると、美作先生は訪問診療の方に回るつもりなのかもしれない。あるいは甥っ子さんにここを譲る気なのだろうか。

……それはあり得るな。

この病院は、一般の住宅を改装して造られているので、見た目は普通の民家とそう差は無い。まあ“普通”とは言っても大豪邸の部類に入るのだが、総合病院などに比べると小規模な医療施設だ。しかし、中はちゃんと病院然としており、二階なんかには六床ほどの病棟を完備している。

このように、規模は小さいながらも設備は充実しているので、美作先生が自分の引退後もここを機能させたいと考え、跡取りとして高井先生を呼び寄せた可能性は、充分にあると思われる。

いや、美作先生が引退なんて先の事か。

まだまだバリバリだし。

となると、やっぱり美作先生は訪問診療に回りたいのかもしれない。どちらにせよ、やがては高井先生がこのメインになるのだろうと思う。

「やあ、因幡君。お早いお着きですね」

噂をすれば影が差す。

噂してた訳じゃないけど。

俺が待合室で、つらつらと時間潰しの考え事に興じていると、奥から高井先生が現れた。初見の時も思ったが、相変わらず爽やかな空気を纏っている。髪型や体格は俺とそう変わりはないのに、何故こんなにも好青年に見えるのだろうか。

……やっぱ顔の差？ くっ。

「こんにちは、高井先生」

「はい、こんにちは。すいません、院長は今、電話対応に追われてまして。少々お待ち下さいね？」

「あ、問題ありません。俺が勝手に早く来ただけですから」

俺がそう言うと、高井先生は何故か俺の隣に腰を下ろした。何か話があるのだろうか。

「因幡君、これはもちろん断ってくれても構わないのだけど、今日

は僕も立ち会わせて貰えませんか？」

「はい？　立ち会って、診療にですか？」

「ええ。実は僕、君の病状に関する意見を、院長からよく求められていたんですよ、ここに来る前からね」

「そうなんですか？」

「因幡君の症状は多様性に富んでいるので、院長は多角的な見解が欲しかったんでしょう。僕に限らず、方々に意見を求めていたんですよ」

「……………」

美作先生にとって、俺はかなり悩ましい患者なのだろう。

いや、俺でなく、俺の病状か。

この十年お世話になってきたが、言い換えれば、未だにお世話になっているとも言える。通常、事故を原因とするPTSDは、五年も経てば寛解に向かうのだそうだが、俺は十年経った今でも水辺では不安定になる。それに加えて、ややこしい幻覚症状。PTSDよりもこちらの方に手を焼いている筈だ。何せ、現在に至るまで、その原因を確定出来ずにいるのだから。

そう、美作先生には幻覚の原因が判らない。

先生が医師である限り、その答えには辿り着けない。

「因幡君？　えーと、聴こえますか？」

「あっ、は、はい……大丈夫です」

「それで……僕はですね？　ずっと君の事が気になっていたんです。こうしてお話し出来る日を、ずっと待っていました」

「ぶふっ！？　ちょ、俺、男ですよ！？」

「はい？」

「えあ？」

「えーと、男なのは見れば判りますが……。ごめんなさい、なんの話かな？」

「えっと……」

直前の会話をよく思い出してみる。

……うん、人の話はちゃんと聞こう。

「す、すいません、ちょっと勘違いを……。話、続けて下さい」

「あ、はあ。……ほんと、どこまで話したかな……。あ、そうそう、僕が因幡君と話をしたかったってところでしたね。僕は、院長とはやや異なる分野を専攻して来ましたので、ひよっとしたら、何か気付ける事もあるのではないかと思ったんです。いわゆる、セカンド・オピニオンですね」

「なるほど」

俺は美作先生以外の診療を受けた事が無い。先生の指示の下、他科の病院で検査を受けた事はあるが、俺の治療に携わっているのは、実質、美作先生一人だけだ。十年近く掛かっている事を考えれば、

別の医師の意見を聞くのも有りだと思う。だけど、今となっては、それはあまり意味の無い事なのかもしれない。俺の問題は、医学の領域では無いのだろうか。

「あの、因みに美作先生と違う分野っていうのは？」

「ああ、院長は言語活動による治療手法に定評がありますが、僕は脳神経からのアプローチを得意としています」

「の、脳……？」

「ええ、ロボトミーとか」

「ロボトミー!？」

「やだなあ、冗談ですよ」

「……おい」

精神科医にあるまじき冗談だと思う。

「残念だけど、この国では出来ませんから」

「……………」

今、残念って言ったぞ。

実はこの人ヤバくない？

「電気や光で刺激を与える技法や、外科的な処置なんかも学んではきましたが、僕はお薬の勉強に最も力を入れてきました」

「えっと、トランクライザーとかの……？」

「そういったものを如何に適切に扱えるかが、僕の腕の見せ所ですね」

なんかそういう風に言われると、一気に警戒心が下がるな。

……俺、騙されてる？

「因幡君のカルテを見る限り、適宜な治療が為されていると思います。僕なんかに出来る事は無いのかもしれませんが。しかし、愚者一得という事も有り得ますし、どうでしょうか？」

「あ、立ち会って下さるのは全然構わないんです。ただ、きっとこれ以上の改善は……」

見込まれない。

俺の幻覚症状は、治るとかそういう問題では無いから。

「僕は、幻覚に関しては、一旦置いておいてもいいと思っているんです」

「え!？」

「もっと正確に言うならば、君の症状が幻覚では無いという可能性も考慮すべきかと」

「ッ!」

ボスンッ!

「因幡君？」

思わず立ち上がってしまった。しかも、膝の上に置いていたスポーツバッグを落としたがら。……他の患者さんが居なくて良かった。

「あ、あの、それって、どういう意味で言ってます？」

「……………。因幡君が、今まで症状として見てきた物、聴いてきた音が、本当に幻覚なのか疑問に思っている、という意味ですよ」

「た、高井先生……」

思わぬ展開だった。

まさか、高井先生が先に気付くとは。

俺は、自分に起きている事を、美作先生に伝えるべきかを決めかねていた。先生とのこの十年を否定してしまうような気がしたからだ。

俺に必要なのは精神医療の力では無いと思われるのが嫌だった。

それにより先生との繋がりが断たれてしまう事が嫌だった。

そして、最も嫌なのが、先生に俺の話を信じて貰えなかった場合だ。

もちろん先生が俺の話を信じてくれないとは思わない。だが、美作先生は精神科医なのだ。俺のこんな非常識な話をあっさり信じるようでは、医師として問題があると言わざるを得ない。俺の話に疑問を持ち、社会通念に準じた人間へと戻す事が、正しい医師の在り方。それがお医者さんの仕事。俺は信じて欲しいけど、美作先生は医師としてそれを信じてはいけないのだ。

だから悩む。

話すべきか、話さざるべきか。

「僕のような考えでは、やはり信用は持てませんか？」

「そ、それは……」

しかし、この高井先生は、柔軟にも俺の特異性に気付き、更には受け入れようとする姿勢すら見せている。

それは、本来ならば誤った対応。

でも、俺に限っては非常に有効な対応。

ただ、高井先生に話すという事は、美作先生に話すも同然。同じ病院の医師なのだから、申し送りやディスカッションは当然の如く行われるだろう。その結果、新しい症状の発露と判断されてしまう可能性も考えられる。それならいつそ、隠しておいた方がマシなのではないだろうか。

ビイイイイイイイイ……

「わっ!？」

「ど、どうしましたか、因幡君」

何故かこのタイミングでこの音。この音を聞いてまず最初に浮かんでくるのは「葉山ことり」。また彼女が現れるのかと思い、キョロキョロと周りを見回したが、どこにもその姿は無い。けれども、なんとなく、本当になんとなくのだが、誰かが、俺に何かを伝えたがっているような気がした。

「因幡君、大丈夫ですか？ 座った方が良いですよ。さあ……」

「……あ、は、はい、すみません……」

高井先生が、気遣わしげに俺の両肩に手を置いて、ゆっくりと座らせる。

「さ、これも……」

そして、床に落としたバッグを拾い上げて、俺に手渡してくれた。流石だ、俺の突然の奇行にも全く動じない。

「あ、何か落としましたね」

そう言って高井先生はもう一度床へと手を伸ばす。その手の向かった先にあったもの。それは――写真。

「えっ……?」

何故、だ?

なんでそれが落ちた?

それは絶対に落としてはならない物。

俺はそれをバッグのサイドポケットに仕舞って、しっかりとファスナーを閉めた。そしてその後、そこを開けてはいない。だから落ちる筈が無いんだ。

水沢母娘の写真、が。

「よいしょ……ん? ……ッ! こ、これはっ!?!」

俺が驚いていると、何故か、高井先生がそれ以上に驚いた様子を見せた。

「高井……先生?」

「因幡君……！ き、き、君はっ……！」

「は、はい……？」

「君は……ッ、妻子持ちだったのかいっ……？」

「なんでやねんっ！」

思わず異郷の言葉でツツコミを入れてしまった。

「……え？ ち、違うんですか……？ でも、これ……奥さんと娘さんの写真じゃ……？」

「だからなんでやねんっ……！」

この人、冗談じゃなくて本気っぽい！？

「俺は十六です！ 結婚なんて出来ません！ 大体その女の子の方！ どう見ても小学生でしょ！？ いったい俺がいくつの時の子ですか！？ 一ケタ代になりますよ！」

なんか今、既視感を覚えたぞ。

「……冷静に考えてみればそうですね。……ふう、驚いた……」

高井先生はそう言いながら写真を返してくれた。というか驚いたのはこっちだ、こんなの冷静に考えなくても分かるでしょ。

「はぁ……。……でも、ホントになんで落ちたんだろう……」

写真を再び仕舞うべくバッグのサイドポケットに手をやると、フアスナーが開いていた。俺は確かに閉めたし、その後は絶対に開けていない。

落ちた拍子に開いたのだろうか。

「裂けた」なら解かるが、「開く」というのは有り得ない気がする。

これは……何かのサイン？

だとして、何を示している？

もしかして「打ち明けろ」という事か？

「――因幡さーん、お部屋にどうぞー」

「あ、因幡君、呼ばれましたね」

俺が考え事を始めてすぐに、受付のお姉さんが呼びかけてきた。これから美作先生と話をする訳だが……うん、そうだな、そうしてみよう。

「あの、高井先生」

「はい？」

「美作先生と一緒に、俺の話を聞いて貰えませんか？」

「それはもちろん構いませんよ。それが仕事ですからね。けど、僕も一緒にいいんですか？ 最初にも言いましたが、僕の申し出なら気にせずに断ってくれていいんですよ？」

「高井先生、実は俺、自分の身に起こっている事は、幻覚症状じゃ

ないと思うようになってきたんです」

「……………。……お話、伺いましょう」

そうして俺は、高井先生と連れだって、美作先生の待つ診療室へと向かった。

高井先生は無言で、何かを考えている様子だ。多分、俺に講ずるべき対処法のプロセスを組み立てているのだろう。

一方の俺も同じように、何をどこまで話すべきかを頭の中でまとめていく。

何から何まで話す必要は無い。話す事によって得られる、気持ちの整理が目的なのだ。先生たちが俺の問題を解決してくれるのではなく、俺自身が問題を解決出来るように、先生たちが導いてくれる。それがカウンセリングなのだ。と美作先生は言っていた。

コンコン

「はあい、どうぞ」

部屋の扉をノックした直後に美作先生の応答。
それを確認してからドアを開く。

「美作先生、こんにちは」

「はい、こんにちは志朗君。あら、京助君？」

俺が高井先生を伴って入ってきた事に、美作先生は軽く驚いた様子を见せる。どうやら同席する事は、高井先生の独断だったようだ。

「院長、高井でお願いします。……実は、同席させて頂こうかと思

いまして。因幡君の了承は得ています、よろしいですか？」

「ふーん、やっぱり気になった？」

「まあ、あんな話を聞かされれば……」

なんの話だろう……？

「志朗君がOKなら構わないわ。志朗君の症状は複雑だけど、決して重篤ではないし、目線を変えてみるのも有りだね」

美作先生はそう言いながら、俺達に座るよう促した。

俺はいつものように、ソファへと腰を下ろす。

そして、やはりいつものように、目の前のテーブルにはティーセツトが置かれている。

ここは、診療室と言っても、パツと見は普通のリビングルームに見える。木目を基調とした家具が並び、各所に置物やら観葉植物やらがレイアウトされていた。更には、テレビを始め、冷蔵庫や電子レンジ、IHヒーターなどの家電も取り揃えられており、この部屋でなら普通に、寧ろ快適に生活が送れそうな勢いだ。

医療関連の物は、美作先生のデスク周辺に集中しており、そこが無ければ、この部屋は先生の私室ではないかと思えてしまう。

そして、この微妙な散らかり具合も生活感を出していて、その印象に拍車をかけていた。

「はいどうぞ」

「ありがとうございます」

俺がソファに座って間もなく、美作先生がティーカップを差し出

してくれた。中身は、これもまたいつものように、ミルクティーだ。俺はカップを受け取ると、更にまたいつものように、砂糖を怒涛の如く投入する。

「い、因幡君？ さすがにそれは入れ過ぎなんじゃ……」

「ふふ、志朗君は甘いものの好きなのよ。小さい頃からずっと」

「はい、大好きです。ケーキ、6号なら1ホールいけます」

「そ、それはかなり好きですね……。僕は甘いのが苦手なのでストリートでお願いします」

「志朗君ね、自分でスイーツも作っちゃうのよ。特にスイートポテトは絶品」

「へえ、そうなんですか」

「い、いえ、あれは、別に特別な作り方をしている訳じゃなくて、ワタヤさんトコの牛乳がおいしいから出る味なんです」

「ああ、ワタヤ牛乳。前に、テレビで取り上げられた事がありましたよね？」

「あ、高井先生ご存知でしたか。あの牛乳、コクが絶妙なんですよね。普通の牛乳と比べたら圧倒的に濃いんですけど、生クリームほどの重さが無いんで、あれでスイートポテトを作るとポテツとしないですよ。……ただ、ここら辺の店には卸してないんですよ。御和^{みわ}の方まで行かないと」

「ふうん、結構意外ですね。因幡君、お菓子作りが好きだなんて」

「お菓子だけじゃないわ、料理も得意よ。というか、家事全般が得意ね。ほら、志朗君のトコは父子家庭だから」

「ああ、なるほど」

「家計のやり繰りとかもやってるそうだから、もう実質、因幡さんの奥さんね」

「お、奥さんて……。父さんは忙しい人だから、なるだけ負担を軽くしてあげたいだけで……」

「志朗君はいい子ね。なでなで」

「あ、いや、美作先生？ 子ども扱いしないで欲しいんですけど……」

「ふふふ」

「ふふふじゃなくて……」

見る人によつては、というか誰が見てもお茶会しているようにしか見えないだろう。

いつも始めはこんな感じだ。
ただ雑談するだけ。

俺はとにかく好き勝手に話をする。どんなにくだらな話をして、突然に脈絡の無い話をして、美作先生は常に関心を持って聞き入ってくれるので、非常に気分が良い。

確か先生はアブレークションで言い方をしていたな。多分、これ

も治療技法の一つなのだろう。

それにしても、今日は高井先生も反応してくれるので、本当に気分が良かった。俺が元来おしゃべりな事と、学校におけるコミュニケーション不足も手伝って、なかなか口が止まらない。二人に話すべき事があるというのに、それを知っている高井先生も、本題に入るよう促すような素振りは見せず、俺との世間話に興じていた。流石はプロと言ったところか。きっと、俺が自分のタイミングで話し出すまで、決して話を振ったりはしないのだろう。

しかし、時間は有限、そろそろ切り出すか。

「あの、美作先生。先週の土曜日の幻覚の話、憶えています？」

「ええ、バッチリ憶えてるわ。綺麗なお姉さんに逆ナンされたのよね？」

「うん、バッチリ歪んでます。実は、あの話には続きがありました——」

俺は、水沢ひかるに関する話をした。もちろん、実名は伏せて、だ。

「——志朗君の幻覚の女性が、その『A子』ちゃんの母親だったって事？」

「はい……」

『A子』とは、水沢ひかるの事である。

「俺は最初、自分が憶えていないだけで、その子のお母さんに会った事があるんじゃないかって思ったんです。それをフラッシュバック

クしたんだろうって」

「そうね、STS……意識下に保持されている短期記憶がフラッシュバックする事はままあるわ。でもそれは間違いなく曖昧なものになる筈。志朗君みたいに明瞭な認識は無理よ。となると、長期記憶からの想起という事になるけど、それだと志朗君は、その女性と何か印象深い関わり合いを持った事になるの」

「俺は憶えていません」

「幻覚に表れたというなら、忘却はしていない。なら、その記憶を抑え込んでいる因子が、志朗君の中に有るという事ね」

うん、美作先生は医者としての見解を述べているな。ふう、俺はこれからそれを否定しなければいけないのか……気が重い。

「院長、想起に失敗しているのに、その女性の容姿を細かく説明出来るのは矛盾していませんか？」

「あら、そうね」

俺が、どう説明するかを考えていると、高井先生が言葉を挿んできた。

「因幡君、君はその女性を見ただけではなく、言葉も交わしているんですよね？ 女性のひとなりは印象に残っていますか？」

「あ、はい。明るくて、なんか見た目に比べて、幼い言動がある感じですよ」

「そこまで判って、少しも憶えていないなんて事、あるでしょうか」

「『あれ、何処かで……』くらいは思いそうなものよね」

なんだか高井先生は、俺が話を切り出し易いに、誘導してくれている気がする。

「じゃあ、縁も所縁も無い女性が志朗君の幻覚として表れた事になるわね。そう考えると今度は、現実との符合点に疑問が出てくるわ。A子ちゃんとそのお母さんしか知らない事を、志朗君が幻覚で知るなんて……。京助君、こんなの聞いた事ある？」

「高井でお願いします。……ありませんね。『事前に知っていたから幻覚に表れた』と考えるのが自然でしょう。ですがそうなると、因幡君が、縁も所縁も無い人達の情報を知っている事に疑問が出ますね」

縁も所縁も無い、か。

確かにその通りだ。

俺と彼女達は、先週まで何の関係性も持たない、全くの赤の他人だった。

そもそも、水沢の母親と出会うなんて事は、普通なら絶対に有り得なかった事だ。死んでいる人間に出会うなんて普通じゃない。つまり、俺は、普通じゃない。

「ねえ、志朗君」

「あ、はい」

「その、A子ちゃん母娘にしか解らない事って、どんな内容なのか

しら。差し障りなければ教えてくれない？」

「ええと……」

差し障りは……ないかな。

「み……んつ、A子は、俺が口にした『カルチョ』と『ミスミソウ』という言葉を聴いて、俺と自分の母親を関連付けたみたいなんです」

「カルチョ？ ミスミソウ？ ……うーん？」

それだけ聞いても解らないよな。

「三角草って確か……春に咲く多年草ですよ？ えっと、雪割草の事だったと思います」

「あら、京助君で草花にも詳しいのね、知らなかったわ」

「高井でお願いします。……でも、カルチョっていうのは誰の事でしょうか」

「ああ、み……A子は幼い頃、母親にそう呼ばれていたそうなんですよ。あだ名ですね。因みに三角草の方は、母娘二人だけの思い出の花」

「本当にプライベートな情報ね。なるほど、一つ一つなら偶然もあり得るけど、両方ともなると、二人のどちらかに聞きでもない限り、知り得ない情報かもね」

「そうですね。それを聴いたA子ちゃんが、因幡君と自分のお母さんを関連付けるのも、当然と言えるでしょう。……あの、因幡君の幻覚の女性がA子ちゃんのお母さんである事は、もう間違い無いんですか？」

来た。

このタイミングしかない。

少し気が引けたが、俺はあの写真をバッグから取り出した。

「あ、それ、さっきの写真ですね。まさか……」

高井先生が写真の意味に気付く。

「この写真の女性に、俺は出会ったんです」

そう言って、写真を美作先生に手渡した。

「これは……A子ちゃん母娘なの？」

「はい。その写真を見て、俺が出会ったのはA子の母親だと確信しました。ただ、見て下さい。その女の子がA子なんです、見ての通り小学生ぐらいの年齢です。多分、八年前の写真なんですよ」

「ふんふん、それで？」

「だけど、俺が目にしたのは、この写真に写っている女性の姿。つまり、八年前のこの人に、先週、出会ったんです」

「うーん？」

「実はですね、A子の母親は八年前に失踪しているんですよ。去年には失踪届けも出して、民法上の死亡が確定していると思われます。だから、その……ええと、何を言いたいのかと言いますと……」

いざ言うとなると言葉が詰まる。父さんと違って、美作先生は精神科医だ。こう言うては何だが、正気を疑うのが仕事。だから、こんな正気を疑われるような話をしたら、正気を疑われてしまうかもしれない。って、落ち着け、俺。

「……志朗君、もしかして自覚しちゃってるのかしら？」

「へ……？」

自覚？

なんの話だ？

「そうみたいですよ」

「あら、京助君、気付いてたの？」

「ええ、先ほど待合室で少し話をしたものですから。その時に因幡君が、『自分ののは幻覚では無い』といった主旨の発言を」

「もうっ、そういう事は最初に教えなさい、京助君」

「すみません、タイミングが掴めなかったもので。あと、高井でお願いします」

「え？ ……え？ ……えっ？」

「お、お、落ち着けと言われてもっ！ え！？ なんで！？ 何でなんですかつ！？」

「あらら……ごめんなさいね、志朗君。混乱させてしまうだなんて、医師失格だわね」

それから俺が落ち着くまでには、少し時間を要した。

美作先生と高井先生の二人に宥め^{すか}賺されて、ようやく話を聞く態勢が整う。

それを見て美作先生は、申し訳無さそうな顔をしながら、口を開いた。

「――まず、初めに言っておきたいのだけど、志朗君がPTSDを患っているという事は間違い無いの。そこは忘れないで欲しいわ。貴方があの水難事故で負った心の傷は、まだ癒えていない。幻覚症状を別にしても、その傷の治療は、これからも続けていかななくてはならないわ」

「は、はい……」

それは……なんとなく解っていた。

俺の水辺恐怖症は、幻覚が起らなくても、水辺に居る事で心が不安定になるし、過去のEMDRでは、事故の瞬間を回想出来なかった。

そして何より、一緒に事故に遭った筈の母さんの事が――何も思えない出せない。

「志朗君の幻覚症状には、頭を悩まされてきたわ。どうしても確定要素が見つけられなかったからねえ」

おっと、美作先生の話が始まっている。考え事は後だ。

「PTSDに伴う幻覚にしては、原因となった事故とあまりにも関係の無い内容が多い。志朗君には解体した言動が無いから、統合失調症を疑うには弱い。fMRIの画像にも異常は見られなかったから、器質性の線も薄い。まさかいけないお薬をやっているなんて事、志朗君にある訳無いし。これ、どういう事か分かる？」

「え、えっと……」

「私は医者として、志朗君は健康だと診断しなければならないのよ」

「た、確かに俺は健康です。学校、今のトコ皆勤だし。ほとんど毎日ジョギングしてるし」

「だから、京助君なんかは、ミュンヒハウゼンを疑ったわ」

「へ？ ミュンヒハウゼン？」

ホラ吹き男爵？

……ホラ……ですか。

「い、院長、それはもういいですから。というか高井でお願いします」

「さすがに私も行き詰ってねえ。根底から見直そうかと考え始めた時に、今まで全部を覆すような事が起こったのよ」

「全部を覆す？ ……それって一体？」

「去年の五月、ゴールデンウィーク明け、放課後の教室で志朗君が出会った女の子の話」

「え……？」

それは……葉山ことりの事だよな？

この間の月曜日の事は、まだ美作先生に話していない。だから先生は、俺が幻覚だと思っていた時のことりさんの話しか知らない筈なのに、何故ここで彼女の話が？

「去年、その話を聞いた時は愕然としたわ。志朗君に悟られないようにするのに、どれだけ苦労したか」

「そうだったんですか？ 全然気付かなかった……。でも、何にそんな驚いたんです？」

「志朗君は、その女の子の自殺を説得して止めたのよね？」

「は、はい」

「その際、女の子は志朗君に、自分の思いを吐露した」

「あの時は俺も必死だったので、詳しい所までは憶えていないんですけど……。去年、先生には思い出せる限りの事を話しましたよね？」

「そこなのよ。志朗君が教えてくれた、その女の子の自分を卑下する言葉の数々。私はね、志朗君。それらとほとんど同じ言葉を聞いた事があるのよ。葉山ことりちゃんっていう女の子から」

「えええっ!？」

今、なんて言った？

葉山ことりって言ったよな？

先生はことりさんに会った事があるのか？

「私、若い頃にね、徳英でスクールカウンセラーをやった事があるのよ」

「あっ」

そうか、それがあったか。

美作先生は今でも、市の要請を受けてC R T（自治体が学校等に派遣する専門家の緊急支援チーム）として学校に派遣される事が時々ある。だから過去に徳英でカウンセラーをしていたとしても、意外ではあるが、別に不思議な事では無い。

しかし、まさかことりさんと面識があるとは。

「ことりちゃんていうのは、その時に出会った生徒の一人なんだけどね？ 私、志朗君が会った女の子はその子だと思ってるのよ。でもね……その子はもう、十六年も前に……」

「教室で首を切って自殺……したんですよね？」

「……知っているのね」

「はい、実は――」

俺は月曜日の五時限目に起こった事を美作先生に伝えた。
葉山ことりに再び出会った事。

過去の出来事と思われるビジョンを見た事。

そして、その後、俺に起こった出来事。

話を聴いている間の先生は、ひどく沈痛な面持ちだった。これはとても珍しい事だ。いや、こんな先生を見た事は無い。先生とことりさんの間に、一体どんな事があったのだろうか。

「――それで、保健室に連れてかれたんです」

「もう、志朗君？ そんな大変な事があったなら、すぐ私に連絡しなさいな。パニックなんて、高校生になって初めてじゃないの」

「い、いえ、パニックって程じゃ……ただちょっと、すごくびっくりしただけで。それに、その二日前に診て貰ったばかりでしたし」

「志朗君、そういう事よくあるわよね。いつになったら遠慮しなくなるのかしら。いい？ こっちの都合なんて気にする必要は無いのよ？ 私は自覚を持ってこの仕事をしているんだから」

「は、はい」

美作先生はすでにいつもの調子を取り戻していた。

本当はことりさんの事を詳しく訊きたかったが、それは簡単に訊いてはいけない事のような気がする。先生がカウンセラーの立場でことりさんと関わっていたのなら、そのカウンセリングは最悪の結果に終わったという事になるからだ。

「ふふ、ホント志朗君は聡い子ね。そういう子大好きよ」

「へ？」

「ことりちゃんの事はいずれ話してあげる。志朗君だったら、彼女もきっと怒らないと思うしね。でも、それより今は、志朗君の事が方が重要だわ。貴方は今、私限定だけど、証明してしまってるんですもの」

「え？ 証明？」

「志朗君の話は事実と符合する。報道では知り得ない、人伝にも知り得ない、私とことりちゃん以外には知り得ない事を、志朗君は知っていた。……A子ちゃんと同じね。私が話していないという事は、ことりちゃんから聞いた事になるわ。けど、ことりちゃんは十六年前に亡くなってる。そして、その時志朗君は0歳。これらの事から『志朗君はことりちゃんの幽霊と出会った』と、私は信じるわ」

「先生……」

それは、患者に話を合わせている感じでは無かった。

それは、精神科医としてでは無く、美作奈緒子という個人が、俺を信じてくれているようだった。

これにより、俺の懸念が完全に消える。

美作先生は、今も尚、俺の理解者だった。

「いやあ、なんと言いますか、僕は医者として、ここはどうすべきなのでしょうね」

そう言えば、高井先生が居たんだった。

「幽霊……。過去、僕もそう言った事を訴える患者を、幾人か診てきています。ですがいずれも、幻覚、妄想、虚言のどれかと判断してきました。それが正しかったと、今でも信じています。しかし、

因幡君のケースを認めてしまうとなると、過去にあったそれらのケースが覆ってしまう可能性がある。院長のような当事者では無い僕には、正直受け入れ難い状況です」

高井先生の言い分は尤もだ。むしろ、信じてくれた美作先生が特異と言える。けど……

「……あの、高井先生は、俺の事が解っていた訳じゃないんですか？俺、てっきり解った上で話しているものと思っていました」

「ああ。いやね？ 実は以前、院長が仰っていたんですよ。因幡君はエスパーかも知れないと」

「ぶふっ、エ、エスパー……？」

なんか一気に胡散臭い。それ、俺の事？

「まあ、普通は額面通りに受け取ったりはしないのですが、院長が……美作奈緒子先生が、十年来診てきた上での意見ですからね。一笑に付すなんて事、出来る筈がありません。だから、ちょっと主客の一意性を確認してみたくなったんですよ」

「え、えっと、俺も自分を……その、エ、エスパーだと思っているのか、て事ですか……？」

「ははは。因幡君が自分の症状を幻覚では無いと考え、主治医もそれを疑っているのなら、現状の維持は無意味ですからね。院長は自ら指摘するような事はしないでしょし、ここは因幡君が言い出しやすい雰囲気を作ってみようかと、まあ、そう思った訳です。ふふふ、エスパーかどうかは、特に考えていませんでした」

「え？ あ、そうですよ。言われてみれば、なんで美作先生は教えてくれなかったんですか？ 俺のは幻覚じゃないって」

話からすると、去年の五月には気付いていたという事になる。

「志朗君の症状はね、悪く言えば停頓しているんだけど、裏を返せば安定しているとも言えたのよ。度重なる幻覚症状にも、貴方はセルフ・モニタリングを損なわなかった。それはつまり、幻覚と上手く付き合えているという事。そんな志朗君に『その症状は幻覚ではない』と伝えるのは、去年の五月の時点では、早計に思えたのよ。症状が窮している訳でもないのに、仮言的判断で治療方針を変える訳にはいかない。というか、幽霊を理由に治療法を変えるなんて、普通出来ないわ。医学も科学なんだから」

ごもつとも。

そもそも、仮に五月の時点で伝えられたとしても、俺の方が受け入れられなかったかもしれない。

「だから、志朗君が自覚して、何かを訴えてきてからでも遅くないと思ったのよ。ただ、志朗君の場合、自覚しても言い出さない可能性が、多分にあったのよね。志朗君てば、変な気遣いするから」

「へ、変て、何がですか？」

「例えば……『十年もお世話になってるのに、今更先生の診断を否定するような真似は出来ない』とか？」

「むぐ……」

近い事を考えた。

やはり精神科医って人の心が読める？

「日本人気質よねえ。美德ではあるんだけど、欠点にもなり易いわ。私、セカンド・オピニオンを推進している時点でどうかしてると思うのよ。だって、それって当たり前の事じゃない？」

何か違う話にシフトしてるけど、言いたい事は解かる。要するに、医者と患者は対等だという事だろう。日本人はどうしても「お医者様」だから、自分が意見するなんて畏れ多いと、思ってしまうところがある。

「それで、京助君って訳」

「は？」

高井先生？　が、何？

「私と違ってしがらみが無いからね、京助君は。他の精神科医じゃ、幽霊云々を真に受ける筈が無いし、私以外で志朗君の事を受け入れられそうな医者は、京助君しか思い付かなかったのよ。でもまさか、会って二回目で志朗君が切り出すとは思っていなかったわ。京助君、さすが」

「いい加減高井って呼んで下さい。……あの、もしかして叔母さんは、この為に僕に声を掛けたんですか？」

「貴方も叔母さんと呼んでるわ。この為に“も”よ、京助君」

「僕はまだ、受け入れたという訳ではないんですが」

「でも可能性の一つには数えたんじゃない？」

「……まあ、頭ごなしに否定するつもりはありません」

「ふふ。……とまあ、こういう訳なのよ、志朗君」

「は、はあ……」

気遣いが過ぎるのは、美作先生の方のような気がするぞ。

「私達には気兼ねせず話して欲しいわ。今までと同じように、自分が話したい事だけでいいの。志朗君のその……そうね、その『チカラ』は、幻覚症状ではないとしても、精神的負担には十分になり得るものなんだから。それと、もう理解していると思うから、敢えて言わせて貰うわね。そのチカラを抑える術を、私達は有していないわ。私達は医者だから、医者として出来る限りの事はするけれども、現状で出来得る事は、そのチカラがもたらす害悪から、志朗君の心を護る事だけ。害悪そのものを取り除く事は、私達には無理だわ」

「はい。でも、結局は今まで通りでいいんですよね？ 幻覚の呼び方が変わったただけな感じですし」

「そうね。だけど、志朗君のすぐ遠慮する癖は改善して欲しいかな。何度でも言うけど、私には気遣い無用よ？」

「そ、そこまで気を遣っているつもりは無いんですが……」

俺はそんなに遠慮しているのだろうか。自分としては随分と頼っ

ているつもりなのだか。今日だって相談したい事が……

「……あ」

そうだった。

水沢の事を相談するんだった。

完全に脱線していたからすっかり忘れていた。

「ん？ どうしたの、志朗君」

「あ、あの……話を最初に戻してもいいでしょうか？」

「んん？ 最初って言う……。あつ、これからは『エスパーシロ』を名乗るべきかどうかって話ね？」

「どんな奇跡が起ころうとも絶対に名乗りませんっ！」

「院長、エスパーはどうもしつくりきません。『ミューディアムシロ』の方がより正確かと」

「正確性がどうかじゃなくて名乗りたく無いんですっ！」

戻った線路は、明後日へと続く線路だった。

「水……！ じゃなくてっ、A子の話ですよ！ 自分じゃ考えが行き詰まって、アドバイスが欲しいんです！」

「ああ！ A子ちゃんの話ね！ そんなに気に掛けるだなんて、志朗君、本気でホレたのね。ウチの娘とは遊びだったの？」

「なんでそーなるのつつ!? ホレてないし、先生の娘さんなんて知りませんっ!」

「あれ? でも確か……因幡君で妻子持ちでしたよね?」

「貴男その頭でよく医者になれましたねつつ!?」

患者を翻弄する精神科医達。これは出るところ出てもいいんじゃないだろうか。

「これくらいにしましょうか。志朗君の頭に危険な考えが浮かんだようよ」

「おっと、やり過ぎましたか」

そして患者の心を読む精神科医達。これは泣いてもいいところじゃないだろうか。

「ごめんなさいね? ちょっと一呼吸入れたかったのよ」

俺をからかうのが一呼吸?

「はあああ……。えー、話、いいっすか?」

「いっすよ、いっすよ」

仕切り直して話をする。

水沢の母親がどういった存在なのかは、少なくとも美作先生には、理解して貰う事が出来た。しかし、俺が本当に相談したかった事は、水沢ひかるの事だった。

まだ推測の域を出る事は出来ないが、水沢の母親は、自分が死に至った経緯を伝えようとしていると、俺は解釈している。つまり、俺は水沢の母親の死の真相を暴こうと考えているのだ。だがそうになると、水沢ひかるの事がネックになってくる。果たして、俺がやろうとしている事は、水沢ひかるにとって良い事なのだろうか。そこに自信を持つ事が出来ない。彼女に母親の死を受け入れさせるのは、至難であるという事を、俺は身を以って知っている。よって俺は、美作先生達に、水沢ひかるの事を相談しようと思ったのだ。

そして俺は、やはり名は明かさないうまま、聞いた話という形にして、昨日の放課後の水沢の様子や行動を説明し、暗に二人へと分析を促した。

「――人を殺しかけるほど逆上……ねえ」

「そしてその間の事は憶えていない……と」

美作先生と高井先生は、互いを窺う様に視線を合わす。俺の拙い説明でちゃんと理解して貰えたか不安だが、二人は手に入れた情報を元に分析を始めてくれた。

「A子ちゃんが異常な反応的攻撃性を持っているとして、それがお母さんの事限定となると、特殊な例ね」

「情動の発散かもしれませんが、それが他者への攻撃でしか出来ないのだとしたら、かなり危険ですね」

特殊。

危険。

さっそく嫌な言葉が聴こえてきた。

「健忘が解離症状なら、よっぽど強い抑圧ね。もしくは、トランスに陥って記録自体を失敗してるのかも。どちらにせよ過剰な反応よ。いくらお母さんの死を認めたくないからといって、同一性を失うほど取り乱すなんて、通常起こり得ない事だわ。うーん、これはあれかしら……」

「フラッシュバック、ですか？」

「あら、京助君も同じ見解？」

……フラッシュバック？

それが結論？

何か思ってたのと違うな。

いや、素人ですけど。

「まあ、志朗君の情報を元にシミュレーションしたにすぎないから、直接会って言葉を交わさないことには断定出来ないわ。けど、もしこの考えの通りだとするなら……ふう、A子ちゃん、とても可哀相な子だわね」

「ええ、まあ、僕もそう思います……」

水沢が可哀相？

母親を亡くしているのだからそれは当たり前なのだが、先生たちの表情は、より強い悲愴を表しているように見えた。

「あの……美作先生？ A子に母親の死を受け入れさせるのは、やっぱり難しいんですか？」

「……………」

「み、美作先生？」

美作先生は、何故か俺を見つめてきた。その悲しげな瞳は、水沢ひかるに向けられるべきものである筈。どうしてそれを俺へと向けているのだろう。

「ねえ、志朗君。貴方は、自分とA子ちゃんを重ねたのかしら？」

「あ、えっと……まあ、そういう側面も……」

「そう……。あのね、志朗君。A子ちゃんはね、貴方と同じ病態で、貴方と逆の症状だと考えられるわ」

「え？」

「飽くまで、志朗君の話を聞く限りでは、よ？ その前提を忘れないでね」

俺と同じ病態。PTSDって事か？ で、逆の症状。逆？

ええと……俺の症状は水辺における恐怖症と幻覚症状だな。

その逆って……？

……解からない。

「先生、俺の逆の症状ってなんですか？ ていうか逆なんてあります？」

「……………。志朗君はその瞬間を想起出来ない。A子ちゃんはその瞬間をフラッシュバックする。これで解るかな？」

その瞬間……て、どの瞬間？
なんだ？ 俺の想起出来ない事って……

「……ッ！ 母さんの死の瞬間っ!？」

「……………」

美作先生は静かに頷いた。

という事は、それはつまり、水沢ひかるは、俺と同じように、母親が死んだ時にそこに居た、と？

しかもその場面のフラッシュバックを起こしているという事は、彼女は誰よりも母親の死を認識している？

「え……？ それって……だったら……」

水沢は、母親が殺されたところを目撃している可能性が……！

「フラッシュバックで想起した内容を受け入れられなくて、解離を起こしていると考えられるわ。何にせよ、A子ちゃんにお母さんの死を受け入れさせるには、段階を踏む必要があるわね」

「……………」

……なあ、ことりさん。俺にどう救えと？

真相を暴いたところで、良い事なんて何も無いんじゃないか？

水沢の母親だって、娘を苦しめてまで救われないなんて思わない
だろ？

「美作先生、み……A子の母親の死の真相を暴く事は、A子の事を
想えば得策ではないんですね……？」

「死の真相？ 志朗君、何か知っているの？」

「その、詳しくは言えないんですが、それに繋がりそうな『ビジョン』を、今日見たんです」

「ん～……」

美作先生は少し表情を厳しくして、腕を組み考え込んだ。本当は詳しく説明して、よりの確なアドバイスを求めたかったが、さすがにこの情報は曖昧過ぎる。

「あのね？ 志朗君はよく知っていると思うけど、心的トラウマの克服は、その原因となった出来事と向かい合う事が大切なの。だから志朗君は、あの事故の瞬間を思い出す為に、この十年、私と一緒に頑張ってきたのよね？ それはやっぱりA子ちゃんも同じ事。A子ちゃんの心の傷を治したいのなら、まず本人が傷を負った原因を知らなければならぬわ。そしてそれは、一緒に頑張らなくてはいけないA子ちゃんのご家族も、知って然るべきなの。お母さんの死の真相にその原因があるのだとしたら、それは解明されるべきだと私は思うわ」

「あ、そっか……」

母親の死の真相は、水沢にとって最も辛い事ではあるが、最も必要な事でもあるのか。

「なら、俺はこのまま彼女の母親の事を……」

「いいえ、それは止めときなさい」

「へ？」

「真実は明かされるべきだと思うわよ？　でも、そこに志朗君が関わる事は、貴方の主治医として看過出来ないわ」

「ど、どういう事ですか？」

「深層心理学用語でね、逆転移という言葉があるの。私達精神科医は、患者さんに共感することによって、ある種の影響を受けてしまうわ。それによって神経を病んでしまう医者も、少なからずいるのよ。言いたい事、解かるかしら？」

「……………。……俺が、A子に関わると、俺自身にも何か影響が出る……………って事ですか？」

「志朗君、言ったわよね？　自分と重ねているって。私から見ても、貴方はかなり深く、A子ちゃんに共感を覚えてるように感じるわ。専門家ならば転移の操作も可能だけど、志朗君はきつと彼女に引きずられてしまう」

……………引きずられる、か。

そうかもしれない。今日だって自分の意志もあやふやなままに、水沢の母親を探した。もう関わるのは止めようと何度も考えたが、結局突っ込んだ首は未だに抜いていない。それはきつと、俺も水沢と同じで、母親という存在にある種の妄執を抱いているからだろう。母親の死という心の傷を、いびつな形に付けてしまった俺達。舐め合って、逆に傷を拡げてしまう可能性は否定出来ない。

「……………参ったな」

それでもやっぱり、「自分に出来る事が有るのなら」と考えてしまおう。どんなにジレンマを繰り返したとしても、最終的にはここへと行き着く気がする。ようするに、これが俺の本音なのだろう。

「先生、俺、自分の納得のいくようにやってみたいです」

「志朗君……」

「その……A子の為というよりは、彼女の母親が伝えたがっている事を、俺自身が知りたいんです。自分に起きているこの奇妙な現象を、理解して受け入れる為にも」

仮に、水沢の母親の事を人伝に知ったのだったら、ここまで関わろうとなんてしなかったと思う。俺はこの訳の解らない『チカラ』によって引き合わされたからこそ、ここまで気に掛かっているのだ。この『チカラ』により受け取る事となった、『死者からのメッセー』。

それはきつと俺にしか受け取れないもので、それはつまり、俺にしか出来ない事があるという事。そう思い至ってしまったては、もはや途中で投げ出すのは難しい。

そう、俺は水沢の母親を救ってみたいんだ。

葉山ことりの言う様に。

「はぁ……分かったわ、志朗君。但し、今から言う事を守ってね」

どうにか先生に解って貰おうと、思いの丈をぶつけてみたが、最後まで難色を薄める事は出来ず、先生がしぶしぶ折れる形で、一旦話はまとまった。どうやら条件付きで黙認してくれるようだ。

言いつけは三つ。

一つは、美作先生に対して変に遠慮をしないで、些細な事でも頼れとの事。

そして、事件性があるのなら、必ず父さんに相談しろと、俺が一人で何かをする事を固く禁じられた。

最後は――。

「――志朗君のそのチカラには、常に疑問を持ちなさい」

「え？」

疑問を持つ？

信じるなという事か？

だけど美作先生は俺のこのチカラを信じてくれたのでは？

「鵜呑みにしては駄目という事よ。いい？ そのチカラで得た情報は、飽くまで参考と捉えなさい。チカラを前提に生きるようになったのは、志朗君の社会性が損なわれてしまうわ。こう言うてはなんだけど、『幽霊が見える』なんて発言をする人に、社会的信用は得られない」

「うっ……」

「当事者の人にはきつい物言いだけどね、それが現実なのよ。どんなに私が志朗君の事を信じていても、そこは変えられない」

「……嘘か真かは関係なく、俺のチカラは社会的に受け入れられないって事ですか？」

「現代社会における幽霊の概念って、極端な話、宗教かエンターテインメントのどちらかでしょ？ 実質、現代の人間社会は幽霊の存

在を認めていないわ。だから、しっかりと線引きをして、志朗君に社会性を保って欲しいの。自分の事を理解してくれない社会からフエードアウト……なんて事にならない為にも、その非常識なチカラを、常識的な目で見える事を忘れないで。『疑問を持つ』というのはそういう意味よ」

「このチカラの所為で、社会から逸脱してしまわぬよう気を付けろ、と」

「そういう事」

それなら問題無い。俺は常日頃から、社会規範に則^{のっと}った人間であるべくを心掛けている。やはり、幻覚の呼び方が変わっただけに過ぎない。今までのように、“幻覚と現実を混同しないように気を付けてきた”のと同じ要領で、やっていける筈だ。

「……こんな所、かしらね。今日は志朗君自身の話があり出来なかったけれど、A子ちゃんの件が一段落するまで、志朗君は自分に目が行かなそうだし、一旦、日を改めましょうか」

「あ、すいません、俺の方の都合ばかり……」

「はい、さっそく遠慮してるわよ」

「あう……」

「ふふ。志朗君のチカラに関しては、始めからゆつくりと対処するつもりだったから、問題無いわ。これから少しずつ受け入れていきましょう。お互いにね」

「はい」

「うーん……そうね、今日は、最後に一つだけ確認させて頂戴」

「はい？」

「幻覚では無いと自覚してから、水辺での症状に変化はあったかしら？」

水辺での幻覚。

水の中から女の人が見れるという、長年、俺を怯えさせてきた精神的脅威。

「このところ、水辺には近付いていませんので、変化があったかはちょっと……。あつ、でもそっか」

「……………」

「チカラを考慮すると、あれも幻覚では無い可能性がある訳か……。あの女の人も、何か俺に伝えたい事があるのかなあ。となると俺、十年もあの人を無視し続けた事になりますね」

「……まだ無理、か」

「え？　無理って？」

「いいえ、なんでもないわ。志朗君、水辺に関しては、PTSDに伴う幻覚症状の可能性が高いと思うの。チカラとは別箇に考えましょう」

「そうなんですか？」

結局俺は幻覚持ちって事か。自分の事ながら、なんてややこしい奴なんだ。

「ええと……じゃあ、水辺の方には何か宿題を？」

俺は行動療法の事を宿題と呼んでいる。

「それは止めておきましょう。貴方が事故の瞬間を思い出さない限り、あまり効果が得られないようだから。やはり、心の傷の原因を正確に把握する事が先決だわ」

「はあ……」

俺のPTSDが、十年前の水難事故に起因するものである事は間違いない。だけど俺は、その事故の事がどうしても思い出せなかった。過去に行ったEMDRでは、事故当日までは回想出来たが、事故の瞬間はキレイに空白だった。

それに、一緒に居た筈の母さんの事も……。

「それじゃ、今日はお終いね。……京助君？　ずっと黙ってたけど、貴方から何かあるかしら」

「え？　あ、ああ、その……高井と呼んで下さい」

「私にじゃなくて、志朗君によ」

「ああ、そうか。そうですね……正直、因幡君の不思議な事にはお手上げだったので、実は僕、A子ちゃんの方の事を考えていまし

た」

「A子の方……？ た、高井先生、その……先生はどういったお考えを？」

俺はつい明け透けに、興味津々と訊ねてしまった。

「多分に想像が混じっていますので、口にするのはちょっと気が咎めますねえ」

「そ、そうですか……」

それはそうだ、曖昧な情報しか与えていないのだから。そもそも、勝手に水沢の精神分析をして貰ってる時点で、色々と問題ある気がする。

「でもまあ、A子ちゃんと付き合っていく上で気を付ける点を、幾つかアドバイスをしましょうか？」

「アドバイス……ですか？」

水沢との付き合い方……か、俺に必要だろうか……。

まあ、ナツさんに教えるという手もあるな。

それにしても、高井先生は「水沢と付き合いっていくには気を付けるべき点がある」と考えているのか。

「あの、お願いします、教えて下さい」

「では、帰りがてらにでもお話ししましょう」

「は？ 帰りがてら？」

「京助君？」

「あ、因幡君を車で送ろうかと思ひまして。もう外は暗いですからね」

「いえいえいえつ、女の子じゃ無いんですから、そんな事して頂く必要は……」

今は冬。暗くても時間的にはまだ夕方だ。

「今日はお客さん因幡君だけですし、僕、やる事が特に無いんですよ。新参ですから、専任している患者さんもまだ居ませんしね。いい機会なので、もう少しお話ししましょう？」 因幡君

「え、え〜と……」

美作先生へと伺いを立てるように視線を向ける。先生もそれに気づいて俺と視線を絡めると、何やら難しげな表情を浮かべた。

「み、美作先生？ な、なんですか、その意味ありげな顔……」

「……うん、まあ、志朗君がいいなら、いいんじゃない？」

美作先生とは思えない程の煮え切らない態度。何があるというのだ。

「は、はあ……。では、お願いします」

いろいろ気にはなるが、高井先生の話は聞きたかったので、送って貰う事にした。

「はい。じゃあ、僕は車をまわしてきますね。……あと、院長。この事、妻には……」

「ええ、内緒にしておくわ」

「今のやり取りちょっと待てえええっ！」

俺を送る事を、何故奥さんに隠さにやらんっ!? ……え? 何? 高井先生って何?

「やあねえ、冗談よ」

「因幡君は反応が素直なので楽しいですね」

「……おい」

この二人……ホントに俺をからかうのが好きだな(怒)。

「まあまあ、そう怒らないの。私はそんな志朗君が大好きよ」

「アリガトウゴザイマース」

「あらら、スネちゃった? 京助君、帰り、ご機嫌取りよろしくね」

「はは……まあ、やってみます」

その後、俺は、高井先生に宥められつつ、自宅へと送られた。

t i m e t o b e l i e v e n o w 1 1 (後書き)

おお、ここまで読んで下さいましたか。ご苦勞様でした。感謝いたします。

えー、次回ですが、最初にチラッと出てきた、あの子が登場します。

t i m e t o b e l i e v e n o w 1 2 (前書き)

伏線、乱発します。

が、ひかるちゃんエピソード中は回収されません。

time to believe now 12

一月二十九日 土曜日 宵の頃

――タッタッタッタッタッタ……

「ハッ……ハッ……ハッ……ハッ……ハッ……ハッ……」

日の落ちた住宅街を駆け巡る。

月の無い寒空を見上げれば、そこには冬の星座たちの瞬きが……
いまいちよく見えなかった。

ここはベッドタウン。

市街地である穂^ほノ上^{がみ}から、駅で数えて下りに四駅目の月成^{つきなり}駅を中心に広がる住宅街。

防犯の為に数多く設置されている街灯の所為で、ここら辺は残念ながら天体観測には向かない。しかし、俺は星が見たくて外を走っている訳では無いので、何ら問題は無い。

「ハッ……ハッ……ハッ……、フウ……」

とある街灯の下で足を止め、腕時計で時間を確認……七時を回っている、そろそろ折り返そう。

「スー……ハ……フッ！」

大きく深呼吸をし、己の口から吐き出された白い息をその場に残すと、踵^{かかと}を返して、来た道に戻った。

タッタッタッタッタッタ……

街灯の下を選ぶように走って自宅へと向かう。その間、目に入る家々には、煌々と電気が点いていた。

今は土曜の夜の、いわゆるゴールデンタイム。一週間で、最も家族の団らん率が高いと思われる時間帯だ。

そんな時間帯に、独り住宅街を駆け巡る俺。

……別に淋しいとは思っていない、俺が家に着く頃には、父さんが帰って来る筈だ。ウチもご多分に漏れず、家族の団らんが待っている。

「ハッ……ハッ……ハッ……ハッ……ハッ……」

説明すると、俺は父さんが帰ってくるまでの空いた時間を、ジョギングで潰しているという訳だ。

夕方、兄の手柏医院から帰ってきた後、夕飯の準備をしていると父さんからの帰宅予定時間を報せるメールを受信した。俺はその時間の調理終了を計算し、ひとまず食材の下ごしらえだけを行い、あとは火を通すのみといった状態で、一旦準備を停止した。本当は、父さんが帰って来るまでの間、宿題をしているつもりだったのだが、どうにも明日の事が気になって集中が出来ず、気分転換にジョギングに興じようと考えたのだ。

ジョギングは俺の唯一の趣味と言えるかもしれない。

そもそもは、美作先生の勧めによって始めた事だ。

曰く「有酸素運動は心肺機能を高め、心拍の安定をもたらす。心拍の安定は精神の安定につながり、延いては、不安感の解消や抑うつ状態の回避が見込める」との事。つまりは運動療法なのだろう。効果の程は定かではないが、どうやら俺の性に合っていたらしく、最近では走る事に楽しさを覚えてきていた。そういう訳で、時間を

見つけては走っているのだ。

因みに、ただ走っているだけなので、運動能力の向上にあまり効果は無い。

——シャ……アアアアアアアアアア！

「喰らえっ！」

ズシャンッ！

「おごほっ！？」

それは、あまりにも脈絡の無い展開だった。

突然背後から、自転車と思しき音^{おほ}が近付いて来たかと思った次の瞬間、その自転車と思しき物体が、俺の腰へと衝撃を加えて来たのだ。

「んぐぐぐ……」

前方に弾かれた俺は、腰に手を当てながら地面に片膝をつき、その体勢のまま、痛みが去るのを待つ他なかった。

「い、一体……何……が？」

「あ、シロ、平気？」

「え？ ミ、ミケ……か？」

痛みに耐えながら背後へと顔を向けると、街灯に照らされたミケの姿がそこに在った。

「前方不注意でした。ごめんなさいでした」

「ぜ、前方不注意……違うよね？ 『喰らえ』……言ったよね？」

「うゆ？ そだっけ？」

「お、お前なあ……」

何故こんな無体な仕打ちを受けているのだろう。

「ごめんね、シロ。イライラしてたからつい」

「通り魔かよっ！？ 俺じゃなかったら確実に手が後ろに回るぞ！」

「こんな事してあげるの、シロだけなんだからねっ」

「意味深に言われたってちっとも嬉しくないってばっ！ ……はあ、まったく、こんな暗いつてのに、間違ってたかどうかどうするつもりだったのやら……」

ようやく痛みが引いたので、立ち上がってミケへと歩み寄った。

「大丈夫。そんなダサイ夜光ベスト着てジョギングするの、シロぐらしいじゃないから」

「俺以外だっています、夜間ジョガーのマナーです。……そんなトコで判断してたなんて、本当に俺でよかったぞ」

「間違っちゃっても未成年で初犯だし、別にいいかなって。ほら、

触法少年？」

「いい事なんて一つとして無いっての！ あと、触法少年は十四歳未満だ、ミケは当てはまらない」

ミケに近付いたところでふと気付く。

薄暗くて明確には判らないが、彼女に何か足りない。

「うーん？」

「何さね」

俺に凝視されてミケが首を傾げたが、気にせずに間違い探しを始める。

パンツルックに謎柄のポンチョ、跨っているのは彼女の愛車のマウンテンバイク。

ジーパンは別におかしくない、ミケは制服以外は基本的にズボンだからな。

このポンチョは初めて見るが、その謎の柄はおそらくアニメキャラ、実に彼女らしい。

MTBはミケが長年乗っているものだから、見間違えようもない程に見慣れている。

うーん、なんだ、どこがおかしいんだ？

「おーい、シロ〜？」

呼び掛けられてミケの顔に目を向けた時、ようやく気付いた。

「あれっ？ おさげ無くなってる？ つーか髪の毛が短いっ!？」

「気付くの遅くね？」

朝の時点ではまだおさがあつたのだが、今のミケはなんともボーイッシュな……いや、マニッシュかな？　とにかく、かなりのシヨートになっていた。

「ど？　似合う？」

「可愛いっちゃ可愛いが……また思いきったなあ。なんだってこの時期にイメチェン？　あ、受験に向けて気合入れたのか？」

「んーん。言ったでしょ？　イライラしてたって」

「は？」

「だから髪、切ったの」

「……イライラする度に切ってたなら、髪の毛いくらあっても足んないだろ」

「へーき。わたし、伸びるの早いから」

早いと言っても、人間の髪の毛は、一ミリ伸びるのに大体三日は要する筈だ。今朝までのミケの髪は、肩口から五十センチはあった。だから、もし彼女が元の髪型に戻したくなかったとしたら、計算上ええと……うん、ミケはこれから四年以上はイライラ出来ない。

「違う！　わたしはエロくない！」

「誰に何を反論したっ!？」

「およ、違った？」

「……もしかして、『エロい人の髪の毛は伸びるのが早い』っていうあれか？」

「男はハゲて、女は伸びるんでしょう？」

「迷信だろ？ そんな統計が取れる筈無いし」

その場合、「エロい人」の定義が必要になってくる。そんなもの定義づけられる訳が無い。

「苦勞すると髪が伸びて、樂すると爪が伸びるんでしょう？」

「え？ あ、ああ、そんなの知ってるんだ。けど苦樂は関係無しに、髪も爪も伸びるもんだろ？」

大体、「苦爪樂髪」っていう逆の言い方もあるし。

「揉むと膨らんで、揺ると萎しぼむんでしょ？」

「へ？ 何それ、なんの話？」

「おっぱい」

「……………」

「……………」

街灯の下、二人は見つめ合う……。
言っておくが、ちっともロマンティックでは無い。

「叩くと硬さが増して、冷やすと持続性が増すんでしょ？」

「さあて、早く帰って晩御飯にするか」

「シロ、無視はや。ちゃんとなんの話か訊いて」

「ミケ、置いてくぞ」

「……………。……答えはおち……」

「だまれ思春期っ！」

結論、エロいミケの髪は伸びるのが早い。

「つまんない」

ミケは不服そうに呟きながらキコキコとペダルをこぎ出し、俺の隣を並走する形を取った。

タッタッタッタッタッタ……

キコキコキコキコキコキコ……

「ハッ……ハッ……ハッ……それで？　なんでミケはイライラしてた？」

走りながらミケとの会話を続ける。俺のジョギングはトレーニング

グではないから、会話の出来るペースで走るのが一番良いのだ。

「……ぴき」

「ぴき？」

「あ、今のは擬音。額に血管浮き出た系の」

「……だったら擬音というよりは擬態語だな。血管が浮き出る時に音なんてしないから」

「シロ、細かい。怒りを表現したかっただけ」

「あ、そう、ごめん」

にしても「怒り」か……。

あまり感情を表に出さないミケが、ここまで怒りを曝すのも珍しい。一体どれほどの事があったのだろう。

「デルグラ、報特で潰しやがった。帝テレ、許すまじ」

「あ、納得」

どうやら、夕方のアニメが報道特番で潰れたらしい。ミケの一押しだったもんな、『デルタ・グラデーション』。

「報特って、なんか事件あったの？」

「幽世の掃除をしたんだってさ。わたしにはどうでもいい事さね」

「カクリヨノソウジ？」

「そ」

「……………」

「……………」

タッタッタッタッタッタ……

キコキコキコキコキコキコ……

「あ、内閣総辞職？」

「おお、通じた。シロ、やるねえ」

「いや、昨日党首選やってたから……。てか、普通に教えろよ」

「ダジャレたつもりだったんだけど、なかなか言い得て妙くない？
常世（内閣）のゴミ（閣僚）を一掃」

「この国に夜明けは来ないってか？ まあ、巧いかも。でも大臣を
ゴミ扱いはひど過ぎない？」

「奴らはあれよ、……ちよーりよーばっこ？」

「漢字、書けなさそうだな。俺も怪しいけど……。それにしても、
金本総理って短かったなあ」

「去年、内臓改革したばっかなのにね」

「ん、そっちはまいち」

「なにが？」

「へ？」

もしてかして本気で間違ってる？ 内閣改造。……入試不安だぞ、ミケ。

「選挙権の無いわたしら子供には、ホント関係ない事だし、んなことでデルグラ潰すなって感じ」

「解散じゃないから、有権者もあんまり関係無いと思ってるかもな。どんな組閣したって、結局代わり映えなんてしないだろうし」

「でも、シロには意外と関係あるんじゃない？」

「何故」

「入閣者予想に、ナナシの親が入ってた」

「え、伯父さんが？」

「七篠ななしの稲治とうじってそうっしょ？」

「ああ、そうだ。ふーん、伯父さんがねえ……。でもそれって、飽くまでマスコミの予想だろ？」

「まね。でも、本当にそうになったら、シロってば大臣の甥っ子じゃ

ん。すごくね？」

「……仮にそうだったとしても、やっぱり俺には関係無いよ。ミケも知ってるだろ？ 母方の親戚とは、ほぼ絶縁状態だって事。瑞穂さん以外とは、全くと言っていいほど交流が無い」

「……………。……ナナシとも絶縁しとけ」

「またそういう事を……。俺には、ミケがなんでそこまで瑞穂さんを嫌うのか、理解出来ない。本当に何があったんだよ」

「別に……。ナナシが成中卒業してから一回も会ってないし」

「きつと、何か誤解してるんだよ。会って話せばそれも解けるさ」

「シロ、可哀相。あんまり素直なのも玉に瑕ね」

「どういう意味だ？」

「ナナシのペルソナにダメされんって事」

「いや、だから、それがミケの誤解なんだって」

「……まあいいさね。どうであれ、わたしが徳英に入ったら、倒す予定だから」

「た、倒すの……？」

「殺す、でも可」

「不可っ！ 絶対不可だっ！」

「……つまんない」

「ここでつまんないは怖いっつのー！」

ミケの過激なジョーク(?)に振り回されながらのジョギング。通常の三倍は消耗するが、俺は彼女とのこんなやり取りが大好きだった。こういった気の置けないコミュニケーションが取れるのは、実質ミケとトラだけ。トラは神出鬼没でいつ会えるか判らない為、俺の親和欲求の大部分を満たしてくれているのはミケだ。俺が今まで腐らずにやってこれたのは、彼女のお蔭だと言っても過言では無い。

「話は変わるんだけど、わたしお腹へちった」

「超変えたな。何、夕飯まだだったんだ」

「美容院、飛び込みだったから時間掛かったの。シロんちの今夜の献立は？」

「ん？ ……ええと、主菜が麻婆豆腐で、副菜は春雨の塩サラダかな」

「ほほう、中華ですか。辛さは抑え目でヨロピコ」

「……え？ ……あ、ああ、分かった」

ミケは何かと唐突だ。
話も唐突なら来訪も唐突。

こんな事はよくある。

「そうと決まればペースアップよ。者共、我に続けっ！」

「わっ、ちよつとミケ!？」

シャアアアアアー……

そして行動も唐突。

ミケは一気にMTBを加速させ、あっという間に俺の視界から消えてしまう。夜道をそんなにぶっ飛ばすなんて、危ないったらありやしない。

「はぁ……、仕方ない。……フツ！」

俺もペースを上げてミケを追う。

と言っても追い付ける気はしない。

そもそも追い付く必要は無い。

目指す場所は同じなのだから、ミケなんて気にせずに自分のペースで帰っても、やがては合流出来る。しかし俺はペースを上げて走っていた。どうやら俺は、偶然ミケに会えた事が思いのほか嬉しかったようで、置いて行かれた事に妙な淋しさを感じてしまっているみたいだ。その所為か、俺は軽い焦燥感を覚え、自分の力量も弁えずにどんと走るペース上げていつている。

「ハア……ハア……ミ、ミケ……待って、くれ……ハア……ハア……」

息も絶え絶えにミケを呼ぶ。だが彼女は遙か先で、こんな小さな声では届きやしない。解ってはいるのだが、不安に駆られて呼ばず

にはいらなかった。

そう、俺は今、不安を覚えている。

このままミケに見捨てられてしまうのではないか、という不安を。たかだか先に行かれたくらいでこんな不安を抱くのは、明らかに杞人之憂。普段であれば、こんな事を思いはしないだろう。しかし、俺の頭には“ある事”が思い起こされ、つい、ミケに見捨てられるという事態を想像してしまったのだ。

“ある事”というのは、今日の夕方、児の手柏医院よりの帰途、俺を送ってくれた高井先生とのやり取り。

その時に聞かされたあの話――

「――見捨てられる不安感、ですか……」

「ええ、境界型と呼ばれるパーソナリティ障害の根幹にあるのがそれです」

「でも、それは誰でも持っている不安なのでは？　俺も、大切な人に見捨てられるのは怖いですし」

「因幡君の言うとおりですね。もちろん僕にもそう言った感情があります。ただ、境界例の人達は、そういった感情が非常に強い。常に見捨てられる不安に囚われているんです。……赤ん坊を思い出してみて下さい。赤ん坊が母親から引き離されると、激しく泣き叫ぶ事がよくありますよね？　それは、母親に見捨てられる事が己の死に直結する事を、本能的に察しているからなんです。だから、泣き叫んで母親を求める。この、赤ん坊が本能的に抱くような不安感に、境界例の人達はいつも苛まれているんです」

「母親に見捨てられる不安……」

「そうです。そんな不安の所為で、精神や感情が安定せず、自暴自棄になったり、他者に危害を加えるようになったりと、社会性・社交性を著しく損なってしまう人格障害。これが境界性パーソナリティ障害です。その原因として、母親との関係性というのはとても重視されています」

「その……A子がそれを患っているのは、間違い無いんですか？」

「『患う』という表現は適当では無いかもしれませんが。人格障害は病気ではありませんから」

「病気じゃないって……え？ あれ？」

「精神医療の領域ではありますがね、精神病とは一線を画しているんですよ。精神病態に達していない精神的症候を人格障害、もしくはパーソナリティ障害と言うんです」

「病気じゃないって事は治らないんですか？」

「いいえ、詐病でない限り改善は可能です、時間は掛かりますがね。ただ、憂慮すべきなのが、境界例は他のパーソナリティ障害に比べて、自殺が多いという事」

「自殺……」

「だから僕は、その疑いがあるというだけでも、A子ちゃんは専門家に診せるべきと考えます。手遅れになる前にね」

「……て、手遅れ」

「因みに、因幡君は自殺を考えた事がありますか？」

「あ、ある訳無いですよ！」

「それはよかった。君とA子ちゃんは、共通点が多々ありますからね、院長にはそんな懸念もあつたんじゃないかな」

「俺も境界例って……？」

「はっきり言って、因幡君はそうなる因子を有していると思ってるんですよ、僕は」

「……………」

「気を悪くしないで下さいね、飽くまで可能性があるというだけですから。今のところその傾向は見られませんし、定められた判定基準も満たしてはいません。けど、無視出来ない因子がある事も確かなんです。君の境遇や、お父さんに対する感情とかね。だから僕は、君がA子ちゃんに関わる事が心配なんですよ」

「高井先生……」

「境界例の人達に、強い共感を持って接する事は、良い結果をもたらしません。一定の距離感を固守して接する事が肝要です。これが境界例の難しい所なのですが、その不安定な心と、極端な思考に引きずられない為に、どんな時も、一貫した平静を保って対応しなければなりません。無暗な同情や受容は禁物。自分以外に自分を救える者は居ないという事を理解させなければ、治療すら始められないんです。すでに強い共感を抱いている因幡君に、そういった対応は難しいんじゃないでしょうか」

「……そう、ですね」

「因幡君の『なんとかしてあげたい』という気持ち、それ自体は決して悪い事ではありません。ですが、こと境界例に限っては、そんな気持ちが問題を大きくしてしまう事が、よくあるんです」

「あ、あの……ようするに、もう、A子には関わるなって事ですか？」

「……………。……僕が主治医ならば、絶対に関わらせたりしません」

「あ……」

「院長が折れた時は、本当に驚きました。あの人の判断に、ここまですべて批判的な感想を持ったのは初めてですよ。正と出るか邪と出るか、正直判断付きませんね。でも、悪い結果の可能性があるのなら、回避すべきだと思うんです。A子ちゃんの事が、因幡君にとってそこまで必要な事とは思えませんし」

「それは……ごもっともです。俺は完璧部外者ですし、A子からしたら、余計な首を突っ込んでいるようにしか見えないでしょうね……」

「それが解っていても、関わるのを止めようとは思いませんか？」

「す、すみません……」

「いえ、僕に謝られても……。でもそうですか、力尽くで止める訳にもいきませんし、主治医では無い僕は、院長の意向に従う他あり

ませんね。……なら、そうですね。A子ちゃんの事、分かる範囲で出来るだけ詳しく話してくれませんか？」

「え？」

「因幡君の負担を減らす為にも、A子ちゃんへの対処法を教えてくださいと思うんです。A子ちゃんの情動が不安定なのは間違い無いようですからね、そういう子と接する際に注意すべき点を知っていただいた方がいいでしょう？　ただ、正確にお教えするには、もう少し情報が必要ですよ」

「ああ、なるほど。でも俺、A子とは親しい訳じゃないので、これ以上詳しい話は……」

「因幡君の主観で構わないので、A子ちゃんに抱いた印象などを教えて下さい」

「それでいいんですか？　先入観と入っちゃいますよ？」

「主観的な話の中に隠れた客観的な部分だけを抽出する手法があるんです。だから、気にせず思いつくままに話して下さい」

「なんかちょっと恐れですね……。んじゃまあ、えっと――」

――そうして俺は、自宅へと到着するまでの間、高井先生にA子……水沢ひかるの事を話した。

その際、一昨日の放課後の話が出た所で、水沢が殺しかけたのは実は俺であるという事を、うっかり高井先生に話してしまい、美作先生が居た時には隠した、詳しい状況を話す羽目になったのだ。

その時に高井先生がある点に気付いた。それは水沢が正気を失っ

たタイミング。

保健の小池瞳先生の話では、水沢は俺に平手を喰らわせたのは憶えているとの事。彼女から平手をもらったのは、俺が母親の死を指摘した時だ。思い返してみれば、彼女はあの時、母親の死の証拠を俺に提示するよう求めてきた。それは、正気を失っているにしては冷静な思考に思える。つまり、母親の死を指摘した時点での水沢は、自己の同一性が保たれたまま激昂していたのだ。

真に水沢から正気を奪ったのは、その後に俺が彼女に掛けた言葉。「今、自分の傍にお母さんが居ない」「自分の事を大好きなお母さんが、今の今まで音沙汰がない」「もし、お母さんが無事なら、何に代えても、まず自分に会いに来る」これらの発言は、母親が亡くなったという事よりも、むしろ母親に捨てられたという事を彷彿とする文脈で、境界例の人の感情を爆発させるには十分は言葉だと、高井先生に指摘された。

実際、俺のこの発言の後に、水沢は我を失うほど激昂したのだから、先生の指摘は正しいのだろう。

母親に見捨てられるという不安感。それを増長させる、傍に母親が居ないという現状。これが水沢ひかるの心を不安定にしている元凶。高井先生は境界例の疑いを益々深めたようだ。

今にして思えば、水沢は出会った時から掴み所の無い子だった。初見では、無慈悲にも俺をチカン扱いして、雑踏の中で喚き散らした。しかし、その後すぐに一転して俺をフォローする側に回り、やけにフレンドリーに接してきた。だが母親の話に入ると更にもう一転、ひどく取り乱しながら俺へと詰め寄った。

二度目の遭遇の時も、始めは素っ気なく無関心な態度だったが、俺の失言に一気に憤激。ところが、去り際には何故かしゅんとしていた。

一昨日だってそうだ。昼に屋上で出会った時は言葉少なげで、弱い態度だったが、あっさりとふてぶてしい態度に変わった。その後の放課後も、興奮したり落ち込んだりと目まぐるしく、それで

も母親の思い出話をしていた時は、とても穏やかで優しげな表情を浮かべていた。

このように、俺の前での水沢は、態度が一貫していた事が無い。感情の起伏が激しく、それこそ端から端へといった感じだった。高井先生によると、それは境界例の典型で、やはり見捨てられ不安に起因する情動障害なのだそうだ。

だが、やや疑問がある。

水沢の母親は、別に娘を捨てた訳では無い筈。それでもここまで見捨てられ不安を抱くものなのだろうか。

その疑問に再び高井先生は、水沢自身の捉え方の問題だと説いた。彼女は母親の死を認めていない為、自分の傍から母親が居なくなつた理由を「ママが自分を捨てた」と解釈してもおかしくはないとの事らしい。それをきっかけに水沢は境界例の道を歩み出したのかもしれない、というのが高井先生の見解だ。

では、美作先生が言っていた、水沢が「母親の死に際をフラッシュバックしている」という話はどうなるのか。高井先生はその説を否定した。もし、彼女が正気を失つた理由が、母親の死を想起した際に起こった防衛機制とするならば、俺が母親の死を想起させた時点で起こっていなければおかしいとの事だ。

……この時は結局、水沢に関して最終的な結論には至らなかった。それも当然だろう、俺は決して水沢と親しい訳ではないし、高井先生に至っては会った事すらないのだから。しかし、正確にはないといえ、水沢が大変な問題を抱えているであろう事は、俺自身、前よりも認識が深まったように思える。同じ轍を踏むような不用意な真似は避けられるだろう。

明日を迎える前に高井先生と話せて、良かったのかも知れない。

「――ゼハー……ゼハー……ミ、ミケ……どこ……だ……？　フウ……フウ……」

いつの間にか俺は月成駅前に居た。我ながら一心不乱に走ったものだ。いや、この表現は適当じゃないか、ごちゃごちゃ考えながら走っていたからな。

「シロー、こっちー」

声のした方に顔を向けると、駅本舎前に備え付けられた自販機の横で、缶ジュースを叩く^{あお}ミケを発見した。俺は最後の力を振り絞って、そこへと駆け寄る。

「シローおっそい。そんなんじゃ箱根なんて夢のまた夢」

「ゼエ……ゼエ………目指して……ハア……ハア………ません、から………」

もう一度言おう、俺はトレーニングの為に走ってる訳じゃない。

「ングングング……プハア。やっぱレモネードはホットに限る。夏でもあったために欲しいよね」

「フウ……フウ………賛同、しかねる……ハア………」

ホットレモネードをがぶ飲み出来るミケは凄いと思う。

「おりゃ」

ミケが掛け声と共に、飲み終わった空き缶を、くずかごと投げた。

ガコンッ カラカラカラ……

しかし、缶はくずかごの縁に弾かれる。

「あや……シロ、お願い」

「んあ？ ……ああ」

俺は地面に転がった缶を拾い上げると、くずかごへと投げ入れた……りはせずに、ミケの元へと戻した。

「さんくす。……むむむむむ、せりゃっ」

俺から受け取った空き缶を、再び投じるミケ。

カシャンッ

「YES！」

事前に狙いを定めたのが良かったのか、空き缶は吸い込まれるように、くずかごの中へと消えた。

「ぶい」

そして、何故か夜空に向かってVサイン。ミケは時々不思議ちゃんだ。

「さて、俺の息も整ったし、ミケも己に打ち克ったし、とつと帰ろう」

「ほーい」

俺達は連れだって月成駅を抜けて行く。

バスと一般車両でひしめく駅前ロータリーを横目に横断歩道を渡ると、目の前に立ちはだかる十二階建てのマンション。

「到着つと。わたし、自転車置いて来るから」

「あいよ」

ミケは駐輪場へと回って行った。

そう、この、駅から徒歩一分未満という超好立地のマンションこそが、俺宅だ。

その名もオークハイツ月成。

ここの101号室で、俺と父さんは暮らしている。

因みに、ここの505号室にミケが住んだりもする。

「ん？」

俺がエントランスに着いた時、駐車場の方から、眼鏡をかけたサラリーマン風の青年がやって来た。

「あ、父さん、お帰りなさい」

「ん？ ああ、志朗、ただいま」

それは、父さんだった。

俺としては、父さんが帰って来る前に戻るつもりだったのだが、ミケと遭遇した事で、少々計算が狂ったようだ。どうやら後半の追い上げは実を結ばなかったらしい。

「走ってたのかい？」

「まあね、ちょっと時間が空いたもんで」

「ふむ、明日の事が気に掛かって、ジツとしていらなかったのかな？」

「ング」

刑事といい、精神科医といい、人の心を読むのは止めて貰えないだろうか……。

「……それって、プロファイリングだったり？」

「まさか。父親の勘だよ」

はっきり言って、父さんの勘は非常に鋭い。本人は父親の勘だと主張するが、絶対に仕事で培ったものだろう。

「おまた〜。……およ？ シロパパじゃん、おかえんなさい」

「やあ、ミケちゃん、ただいま。なんだ、ミケちゃんと走ってたのか」

「んーん、シロとは偶然会ったの。よって必然的にゴチになります」

「は？」

「いやミケ、脈絡が途切れてる」

「そ？」

「……うん、まあ言いたい事は解ったよ。夕飯はミケちゃんも一緒なんだね？」

「うす、改めてゴチになります」

「ご馳走するのは志朗だけだね」

「父さんが家長なんだから間違っちゃいないさ。さ、ここは寒いから早く中に入ろう」

俺はポケットからキーを取り出し、エントランスのドア横のセンサーにかざす。キーに埋め込まれたICチップにセンサーが反応して、ガチャッと、ロックが解除された。

俺、父さん、ミケの順でマンションへと足を踏み入れる。

エントランスはマンションの南側の端にあり、入ってすぐに105号室がある。つまり、北側の一番奥に、俺達の住む101号室があるといった構造だ。普通、入り口から1、2、3……と並ぶものじゃないかと、未だに疑問に思っている。

「ここでシロパパに残念なお知らせがあります」

部屋に向かって廊下を歩いていると、ミケがやはり唐突に口を開いた。俺と父さんは足を止めて振り返る。

「ん、なんだい、ミケちゃん」

「シロパパ、シロに身長、追い抜かれてるよ」

何かと思えば、わりとどうでもいい指摘だった。

「そ、そんな……馬鹿……な」

しかし、父さんは殊ことの外シほかョックを受けたようだった。

「と、父さん？」

いつも毅然としている父さんの動揺に、俺の方まで動揺してしまう。

「く……、息子の成長を喜ぶべきなのに、男のプライドがそれを邪魔する……。僕はなんて小さい人間なんだ」

「実際シロパって小さいよね」

「ぐはっ」

「お、おい、ミケ……？」

何故か追い打ちをかけるミケ。だが、別に父さんは、極端に背が低い訳では無い。細身で童顔なところが、なんとなく相手に小柄な印象を与えてしまうのだ。

そこに誰かが騙される。

見た目で判断してはいけないという典型例だ。

父さんは三十代半ばで警部に昇格した。ノンキャリアの叩き上げとしては、最速コースでの昇進で、今年度からは県警本部に勤めているのだが、それまでは某所轄で、なんと「マル暴」に所属していた。つまり、昨年度まで、組織犯罪対策係で暴力団を相手にしていたという訳だ。いわゆるキャリア組とは違って、苛烈な現場をがっ

つりと経験している為、見た目が華奢でも、そこいらのチンピラとは比べものにならない程の修羅場をくぐってきているのだ。

……だから父さんが体格の事を気にしていただなんて、思いもよらなかった。

「……違うよ、父さん。父さんは小さくなんてない。小さい人間なんかじゃないよ」

「志朗……」

「だって、俺をここまで育ててくれたじゃないか。こんな問題だらけの俺を。父さんは、とても器の大きい人間さ、俺はそれをよく知ってる」

「……志朗、僕は君に、親の背中を見せてあげられているだろうか。こんな小さな背中でも、ちゃんと父親の背中をしているだろうか」

「小さくなんてない。俺はちゃんと、父親の大きな背中を見て育ってるよ」

「そう、か……」

「父さん」

「ん？」

「いつもありがとう」

「……志朗」

そして父と子は握手を交わす。深まる親子の絆に胸が熱くなった。

「なにこの親子、ガチでウザい」

「ぶち壊さないでくれますっ!？」

水入らずなところに水を差すミケ。感動が霧散してしまった。

「人の居ないトコでやってくれる? 見ててカユい」

「……前はグッジョブとか言ってたか……?」

「それは単に設定萌え、リアルはキモい」

「う、く……」

そもそも発端はミケなのに、容赦無く辛辣に切り捨てやがった。

「志朗、確かにミケちゃんの言うとおりだ」

「……え、父さん?」

「こういう話は、二人っきりの時にしよう」

「そう、だね」

「ごめんなさいでした。だからもうヤメテ、ホントにキシヨい」

そんなこんなで、帰宅するのにやたら手間取ってしまった。時刻は二十時近い、急いで夕飯を用意しなければならぬだろう。俺と

父さんは慣れているが、ミケにはやや遅めの夕食になってしまっている。それに、同じマンションに住んでいるとはいえ、中学生をあまり遅い時間に帰す訳にもいかない。

「おじゃまします」

俺が自宅のドアのカギを開けると、ミケが我先にと中へ入って行った。勝手知ったる他人の我が家、俺も父さんも今更気にしたりはしないので、それに続いて中へ入っていく。

ミケは早々にリビングに向かい、父さんは自室へと向かった。残った俺は、キッチンでご飯の炊きあがりを確認してから、夜光ベストを脱ぎつつ自室へと入る。そこでなんとなく自分が汗臭いような気がした。今日はミケのお蔭でハードワークになってしまったからだろう。少し考えて、クローゼットから着替えを取り出し、部屋を出た。

ダイニングに来ると、スーツを脱いだワイシャツ姿の父さんが、テーブルで新聞を広げていた。リビングを見ると、ポンチョを脱いだ白いセーター姿のミケが、ソファに座ってテレビを見ていた。そんな二人に聴こえるように、俺は声を掛ける。

「ごめん二人とも、軽く汗だけ流させて。五分で済みますから」

「ああ、分かった」

「気にせずごゆっくり」

二人の快諾を得て、俺はバスルームへと入ってゆく。

「……………」

「……………」

「……………。……さっきの……」

「ん？　なんだい、ミケちゃん」

「さっきの茶番は笑えた」

「がくつ、茶番はひどいなあ。だいたい君、笑ってなかったろ？」

「心で嘲笑」

「おいおい、志朗はああいうの本気な子なんだから、それはやめてあげなさいな」

「100パー、あんたに向けたもんよ。……あんな感じでシロは洗脳されてるのね」

「洗脳って……。おかしなアニメの見過ぎじゃないのかい？」

「アニメ関係無い。シロを自分に依存させて何のつもりかって話」

「またそれかい？　ミケちゃんの思い込みにも困ったもんだ。あんまり物事を穿った目ばかり見ていたら、心が捻くれてしまうよ？　それとも、もう手遅れかな？」

「言われなくても捻くれてるのは知ってる。でも、それとこれとは話が違う。わたしがあんたに懐疑的なのは、ちゃんと根拠があるもの」

「はあ、あの事か……。厄介な子に知られてしまったものだよ。そう考えてしまう気持ちは解かるが、僕は本当に志朗に愛情を注いでいる。志朗だって、それに応えてくれているよ」

「それが洗脳」

「……………。ミケちゃん、君も知っての通り、うちの家庭はやや普通とは違う。だから親子の絆の育み方も普通とは違うのかもしれない。そこが、見る人によってはおかしく映るんだろう。だけど、僕と志朗の絆は確かなものだよ。僕は父親として、志朗を誰よりも大切に思っている。どうか信じて欲しい」

「1ミリも信じらんない」

「君ねえ」

「『憎んでない』だったら信じたかも。でも『誰よりも大切』は有り得ない」

「はあ……。本当にそうなんだから仕方ないだろう。なんで信じないかな」

「信じて欲しいんなら全部吐け。シロをどうする気？ 何が目的？」

「警官に尋問かい？ やれやれ。……。僕の目的は志朗を幸せにする事。これでいいかな？」

「…………大概にしとけよ、このガキデカ」

「ピクッ。…………ふ、ふん、いやあ、ミケちゃんはあれか。つまり

は、志朗を独占したい訳だ。だから『ミケちゃんよりも大切にされている僕』が、気に喰わないんだね」

「はあ？ 別に独占とか考えてないし。あと、わたしよりあんたが大切にされてるって基準判んないし」

「聞いてるよ？ 君は、志朗が親しくしている人達に、軒並み辛辣なんだそうだね」

「だ、誰の事さねっ」

「例えば、虎太郎」

「あのDQNは、シロに厄介事を持ち込むトラブルメーカーだからよっ」

「どきゅんの意味が解らないのだが……。まあ、確かに、彼にはいろいろ問題があるけど、志朗が一番心を許している相手だと思うよ？」

「そんなん認めない」

「やれやれ……。なら、瑞穂君の事は？」

「あのふたくち女は、シロと親しい訳でもなんでもないっ」

「二枚舌って言いたかったのかな……。誰しも裏表は持っているものさ。それが表向きだったとしても、彼女が志朗に親切である事に変わりはないよ」

「そんなん認めないっ」

「おやおや……。じゃあ、美作先……」

「あのオバハンはわたしが個人的に嫌いなだけ！ シロは関係ない！」

「おっと早いな……。しかし、それはどうにかした方がいいんじゃないかい？ 先生は志朗の最大の理解者なのだから」

「認めてなるものかつ！」

「ミケちゃん、思っていた以上に排他的だね。君みたいな子が、往々にしてストーカーになるんだ。うん、予備軍だね。これは志朗の父親として、そして警官として、君の事をマークしといた方が良さそうだ」

「にやんだと~~~~……」

「……オタク、だしね」

——プツンッ

「この偏見陰険メガネザル科のシヨタ刑事がああああ——っ！」

「な、なんて口汚い子なんだ」

「あんたなんか昔捕まえた犯人にお礼参りで『アッー！』されるがいい——っ！」

「もはや何を言ってるのか解らないなあ……」

「あんたは倒すっ！ 絶対倒すっ！ 殺すでも可っっっ！」

「殺人未遂着手の時点で捕まえてあげるのが、せめてもの慈悲かな」

「ヨユウブッコイテンジャネエエエエー！」

「そろそろ落ち着いた方がいい。ほら、志朗がバスルームから出て来たみたいだ」

「ッ!？」

ガチャ……

「……………」

「……………」

トットットット……

「ふう、さっぱりした。二人ともごめん、夕飯すぐ用意するから」

「ああ、分かった」

「気にせずごゆっくり」

「あはは、二人とも、シャワー行く前と同じ科白じゃん」

「おや？」

「そだっけ？」

俺はクスクスと笑いながら調理に取り掛かる。

下準備は完璧、ものの数分で出来上がるだろう。

まずは中華鍋を焼く。煙が出てきたらたっぷり目のサラダ油を入れる。そこにすかさずニンニクとショウガのみじん切り、そして豆板醤を投入し、焦げないように気を付けながら油に香りと辛みを付ける。香り立ったらひき肉を入れて、バラバラになるよう鍋を振りながら炒める。肉に火が通りきる前に、長ネギのみじん切りを入れる。ネギが油に馴染むと同時に合わせ調味料（醤油、酒、オイスターソース、赤味噌、甜麺醤）を入れて、さらに香り立ったらガラスープでのぼす。ウチは山椒は入れない、父さんが苦手だからだ。その代わり黒胡椒を入れる。やがて鍋が煮立ったら、水抜きした豆腐を入れ、崩さないように混ぜつつもうひと煮立ち。ここで味見を：うん、塩を足す必要ないな。すぐに水溶き片栗粉でとろみ付け。とろみが付いたら火を消して、最後にごま油を少々。これで麻婆豆腐の出来上がり。ミケに合わせて辛さを抑えているし、山椒や八角といった癖のある薬味も入れていないから、やや子供向けかな。

「はい、終了。ミケ、冷蔵庫からサラダ出してくれる？」

「オケー」

副菜をミケに任せ、俺は三人分のご飯とみそ汁をよそう。それを、お盆でテーブルへと運んだ。

「父さん、今日お酒は平気？ えんがわがあるんだ、カレイのだけど」

「ああ、ビールを貰えるかい？」

「わかった」

「はいシロ、ビール」

見るとミケが、サラダと一緒に、ビールとグラスも持って来てくれている。

「お、ミケ、読んでたのか」

「うんにゃ。外しても、わたしが飲めばいいかなって」

「うん、それ罪に問われる。主に父さんが」

ミケから目が離せないな。

そんな事を思いながらキッチンへと戻り、お盆に麻婆豆腐とえんがわを載せて再度テーブルへ。

「はい、おまたせ。んじゃ、食べようか」

こうして、食卓に三人が着いた。

うーん、家族団らんな感じが心地いい。

「いただきます」

「うん、いただく」

「いただき……ゴクン。うん、おいし」

「ミケ？ いま、咀嚼した？」

「うゆ？」

いやまさかね。

確かにミケは、ホットレモネードをがぶ飲みできる女の子だけど、さすがに出来たての麻婆豆腐を……

「ハグハグハグハグハグ……」

「……かき込んでるっ!？」

「ング？ はっひはははひ？」

「あ、お気になさらず」

ミケとはわりと長い付き合いだが、まだまだ新しい発見がある。
実に楽しい奴だ。

「ふふ、ミケちゃん、女の子なんだから、もう少し落ち着いて食べた方がいいんじゃないのかい？」

「ほっほいふえ」

父さんの^{たしな}窘めにミケは……なんて返したか判らないけど、そんな二人のやり取りは、傍目に親子のように見えた。

少しばかり妬けてしまう。

両者に対して。

「そう言えばさっき、二人でなんか楽しそうだったね」

「ぶふっ」

「わ、ミケ、大丈夫か？ そんなかき込むから……」

「ケホ、ケホ、いいから、平気だから。それよりシロ、聴こえてたの？ さっき」

「え？ ああ。内容は判んなかったけど、ミケが声を張るなんて珍しいからさ、何を話してたのかなーと思って」

「……セーフ」

「三毛猫かぶり、なんてね」

「シロパパつまんない」

「？」

俺には意味が解らなかったが、二人の間では通じているようだ。ちよっと淋しかったりして。

「二人ってさ、結構仲がいいよね」

パシンッ！

「あだっ!？」

何故かミケに頭を叩かれた。

「あ、ゴメン、ツツコミ強すぎた？」

「俺いつボケた!？」

「あや？ 今のボケと違うん？」

「今のってどれ!？」

どう考えても、俺はボケた発言なんてしていない。話が噛み合っていないかった。

「ミケちゃん、志朗はきつと、僕らが仲良さげにしていたから、淋しくなっちゃったんだよ」

そして、的確に俺の感情を読み取る父さん。噛み合い過ぎるのも嫌だな。

「何、やきもち？ シロってばカワイイじゃん」

「くっ……」

確かに二人の言うとおりなのだが、素直に受け入れられない。俺は妙な敗北感に包まれながら、ご飯をかき込むのだった。

「ムグムグムグムグ……」

「シロ？ あれ、拗ねた？」

「志朗ぐらいの年齢の男の子は、子ども扱いされるのをとても嫌がるからね。カワイイなんて言っちゃ駄目だよ、ミケちゃん」

「そなの？ 失敗失敗」

「ガツガツガツガツ……」

その後は、二人に宥められながらの食事になった。俺の機嫌が直った頃には三人とも食事を平らげており、お茶を飲みつつの雑談に移行した。

しかし時間も時間も、ミケはそろそろ帰すべきだろう。

「さて、と。わたし、そろそろ帰るね」

促す前に自分から席を立つミケ。そこで俺は、ふと思い出した事があった。

「あ、ミケ、帰る前に渡したい物が」

「ん、何？」

「ミケが嫌がりそうな問題を集めて編集したんだ」

「……は？」

俺はミケを引っ張って自室へと向かう。

「明日は俺、用事があるからさ、ミケはそれをやってくれ」

「……ゲローン」

妙な声を出すミケを、部屋へと引き込む。

それから俺は、PCを立ち上げた。

「ちょっと待ってて、今、プリントアウトするから」

「お構いなく……」

妙なレスポンスを返すミケは、力無くベッドの上に座り込んだ……

「ん？ ……くんくん」

……かと思ったが、すぐに立ち上がり、部屋の中をウロウロし始めた。

「くんくん……これか」

「どうした？」

「シロのコートから嗅ぎ慣れないニオイがする。何コレ、移り香？」

「え、何か変な匂いする？ ……くんくん」

嗅覚に意識を集中してみるが、特に何も匂いはしなかった。

「シロのコートに香水のニオイ。これ如何に？」

「いやいやいや……おかしな事言うなよ。ほら、今日病院に行ったから、多分、美作先生の香水だろ？」

「これ、あのオバハンのニオイと違う」

「判別できるのか!？」

「もち。このニオイは……んーと、あれ?　もしかして男物?　…
…シロ、まさか……」

「まさか何っ!?　……て、男物?　ああ、そっか」

ミケの邪推に少し焦ってしまったが、そういう事なら思い当たる事がある。俺は安心(?)　しつつPCに向き直った。

「それ、きっと高井先生のコロンだと思う。……あ、プリンターの電源」

「……高井?」

「ポチツとな。……ああ、児の手柏医院に新しく来た先生だよ。高井京助先生。今日の帰り、車で送って貰ったんだ。その時に付いた匂いだと思う」

「……………」

「三十くらいの若い先生でさ、ちょっと変わってるけど、優しい先生なんだ。それにね、なんと、あの美作先生の甥っ子さんなんだよ。先生んとこって医者の家系なのかも」

「……ふーん」

PCをいじりながら高井先生の事を話すが、ミケは興味無さげだ。まあ当たり前か、ミケにはなんの関係も無い人達の話題だしな。俺はディスプレイに目を向けているので表情は判らないが、レスポンス

スがほぼ無い事から察するに「つまんない」といったところだろう。

「それとき、最近知った事なんだけど、美作先生には娘さんが居るんだって」

「……………。…………え？」

他に話題が浮かんでこなかった為、そのまま話を続けていると、意外にもミケが反応を示した。

「考えてみると、俺、美作先生のプライベートを何も知らないんだよな。そりゃ、医者が患者にプライベートを教える必要なんてないけど、十年近くも付き合いがあれば少しぐらいはねえ」

「……………」

「詳しくは分かんないんだけど、その娘さん、なんでも『行き遅れ街道まっしぐら』なんだとか。こういう人かちよつと気にな……」

ズバンッ！

「るぐひゅっ!？」

前触れも無く、突然でん部を蹴り上げられた。

俺は激しくダメージを受ける。

尻ではなく舌に。

「ひ、ひら……ひらはんら……」

「あ、ごめん。つい……」

「お、おはえらあ……いひあい、あいひああう」

「ちょっと何言ってるか判んない」

「おはえろへいはー!」

「はい？ わたしのセーターが何？」

「~~~~~」

ちよつと間を置いて、舌から痛みが引くのを待つ必要があるようだった。

「……ふう、ラクになってきた……。ミケ、弁解せよ」

「……まあ、妙な女に興味持っちゃって話」

「え？ あ、いや、気になるってのは別にそういう事じゃなくて……」

「それよりシロ。……プリンターの出口閉まってる」

「ん？ ……って、わっ」

見ると、排紙トレイを開き忘れたまま、プリントアウトを始めてしまっていた。慌てて開けるが時すでに遅し、用紙はヨレヨレになっ
てしまっている。

「ありゃ……。まあ、詰まんなかったから良しとしよう。印刷も出

来てるし」

「そのPCもプリンターも大分古いよね。未だに2000とかってむしろ凄いいんだけど」

「父さんのお下がりだからなあ。ま、動くんだからいいじゃん。俺、PCってあまり使う方じゃないしな」

「ケータイもかなり古いよね。ていうか、キッズケータイとかって有り得くない？」

「これは中学の入学祝だから、出来るだけ使い続けたい。機能も、通話とメールが出来れば充分だし」

「そのCDラジカセとか、よく動くよね」

「それは小学生の時に買って貰ったやつだしな。ほら、俺ってあんま音楽とか聴かないだろ？ だから、そう壊れはしないんだ」

「……シロパパに遠慮しておねだりしてないんでしょ」

「違う違う、ちゃんと使えるから必要ないだけ」

「……………」

ミケがどことなく無然とした態度を見せた。彼女は、俺と父さんの親子関係に思うところがあるようで、時々こうやって批判的な立場を示す。俺を心配しての事なので、これはこれで嬉しいのだが、全部ミケの思い過ごしだ。

……ところで、俺を蹴った件で流された？

「……まあ、とにかく、はいこれ、プリント」

プリンターから吐き出された紙をミケに渡す。枚数にして六枚。サイズはA4。

「何？ このグラフで埋め尽くされた紙。一体なんのデータ？」

「いや、関数のグラフだってばさ」

「こっちの暗号文は何？ わたしに解読しろと？」

「それ英語。解読じゃなくて和訳」

「……ゲロゲロ〜ン」

「さあ、頑張れ受験生。決戦の日は近い」

「今は頑張れとか言っちゃダメな風潮なのさ……」

何やら、ミケの周りに雨雲が生成されている気がするが、気にしない。これも彼女の為だ。

「帰るるる……」

「ああ、送ろうか？」

「いらね〜……。あ、シロ」

「ん？」

「その……さっきのさ、高井って先生」

「高井先生？」

「……シロを担当してるの？」

「へ？ いや、俺の主治医は飽くまで美作先生だけど？」

「……………。……そ」

「？ それが？」

「んーん。んじゃ帰る、見送り無用、じゃね」

「え、あ、ああ……」

ミケは足早に俺の部屋から出て行った。俺はプリンターの電源を落とし、PCをシャットダウンさせる。

……今のミケ、何かいつもを違った気がした。
どこかと訊かれても答えられないが。

「……洗い物するか」

少し気にはなったが、考えて答えが出るとも思えなかったので、俺はキッチンへ行く事にする。

部屋から出てダイニングを見ると、父さんの姿は無かった。――トイレかな？ と思いながら食器類を片付けていると、テーブルの端に紙片を発見。

そこには文字が書かれていた。

《すぐ戻る 父》

どうやら出掛けたようだ……

「ただいまー」

……と思ったらもう帰って来た。書置きの必要性が問われる程の早さだな。

「おかえり、どうしたの？」

「うん？ ああ、ミケちゃんが志朗に内緒の話があるって言うから、君に隠れて話を聞いて来たんだ」

「……………。……それ、ワザと？」

「何がだい？」

ミケが内緒にしたがっているのなら、問い質す訳にはいかない。けれども、そんな言い方されちゃあ気になってしょうがない。

「…………それって、どんな話？」

「すまないね、内緒なんだ」

「……………」

ストレス溜まるー。

「じゃあ俺もミケに内緒の話」

「おや」

そして対抗意識を燃やす子供な俺。

だけど、ミケに内緒で父さんに話したい事が本当にあった。

「……………」

「志朗、どうした？ なんの話なのかな？」

唐突に切り出してはみたものの、さすがに躊躇ってしまう。でも、話さない訳にはいかない。美作先生との約束もあるしな。

「その、例の水沢ひかるって子の話なんだけど」

「…………ふむ」

父さんは、自分の息子に危害を加えた人物の名を聞いて、にわか
に真剣味を表わす。俺もそれに合わせるように、真剣な声色で言葉
を紡いだ。

「その子の母親、殺されたのかもしれない」

「…………なんだって？」

t i m e t o b e l i e v e n o w 1 2 (後書き)

『ミケ』ちゃんはサブキャラではありません。でも、このエピソードではサブキャラです。この子の情報は小出しします。

次回、『ナツさん』が登場します。

t i m e t o b e l i e v e n o w 1 3 (前書き)

前半部はほぼ無意味なシーンですね。ナツさんが、伏線らしき発言をしますが、このエピソード中の回収はありません。

t i m e t o b e l i e v e n o w 1 3

一月三十日 日曜日 日中午前

「さ、寒すぎる……」

日曜日。

非常に寒い日曜日。

いや、異常に寒い日曜日。

見上げた空は雲一つ無く、風もピタリと凪いでいた。
故に起こった放射冷却。

今朝の最低気温はこの冬一番で、日中もそのまま気温は上がらず、
摂氏零度に届かないという。

この地域においては、実に五年ぶりの真冬日だ。――こんな日は
暖房の効いた部屋に閉じこもっていたい、日曜日なのだから出来な
い事ではない……というのに俺は外に居た。

寒い寒い日曜日の朝、かれこれ三時間、俺は外をうろうろしてい
るのだ。

(居ないな、水沢のお母さん……)

ここはすっかりお馴染みになってしまった、アーケード街のあの
横町付近。

目的は、言うまでも無く水沢の母親。

俺は昨日に引き続き、彼女を探していたのだった。

今日は、午後一時から、水沢の父親に会う予定となっている。そ
れまでに、もう一度水沢の母親に会えないかと思い、朝から搜索し

ていた。探す理由は……とにかく何か情報が欲しかったのだ。

昨晚、俺は父さんに全てを話した。病院の時とは違って、包み隠さず全部をだ。葉山ことりの件もあって、父さんは俺の話を真摯に聞いてくれた。そして、その話自体は信じてくれた。しかしながら、現時点で何も出来る事は無いという――

「――志朗の見たビジョン？　が、真実だとしても、その内容に『水沢さんのお母さんが殺された』という事を指し示すものは、何も無いよ。いや、そもそも殺されたと考える事自体、早計だね。人目に付かない場所で事故死し、そのまま発見されていない可能性もある。それにね、志朗。この話には根本的な問題があるんだ。何よりもまず、水沢さんのお母さんの死亡が証明出来ない。まあ、その……幽霊、に……なってる？　訳だから、亡くなっているのだろうけど、それは志朗にしか証拠となり得ない事なんだよ。法的な死というのは便宜上のもので、やはり遺体があって初めて死亡が確定する。志朗の話だけでは、水沢さんのお母さんの死を認める訳にはいかない。どんなに僕が君の事を信じていても、警官としての僕には、今の段階で出来る事は無いんだ――」

――つまり、事の真相を暴く前に、まず、水沢の母親の死亡を指し示す、客観的な証拠が必要だった。

俺一人だけが確信していてもしょうがない。

俺一人だけが真相に辿り着いても意味が無い。

それでは、ただの自己満足で自己完結だ。

水沢の母親は、きっと何らかの望みを俺に託した筈。そこには俺に出来る事が何かある筈。

しかし、今までの情報じゃ足りない。これでは真実に辿り着けない。

俺は一体何をすればいいのか、何かそれを明確にしてくれるものを示して欲しい……

「はあ、駄目だ、居ない……」

……そう願いながら、始めに出会った場所と昨日のホテルの間を、幾度か往復したが、未だ、水沢の母親の姿を確認する事は出来ていなかった。

今の時間は午前十一時。こんな寒空の下でも日曜日の商店街は賑わう。朝に比べて多くなった人波の中から、一人を探し出すのは難儀になりつつある。昨日のように、葉山ことりが何かを示してくれるのではと期待したりもしたが、今のところ彼女も現れない。

俺の身体もいい加減冷えすぎて、震えがきている。

（仕方ない、今日はもう諦めるか、この後用事もあるしな。……いや、少し休んでから、もう一度だけホテルの方まで行ってみよう。それで丁度、約束の時間に合いそうだ。そうと決まれば……）

何か温かいものを口にすべきと考え、辺りの店を物色する。

ちよつと早いが昼食を摂るのもいい。

そして俺は、目の前の立ち食いそば屋で即決した。安いしお手軽だ。見れば、ぼちぼち客も入っている。この寒さだと衝動的に食べたくなるのかもしれない。開店直後のその店はすでに賑わいを見せていた。

俺も誘われるように暖簾をくぐる。

「いらっしやいませっ」

実は初めて利用する店。自宅の近くに最前になっている店がある為、他のそば屋はほとんど利用していないのだ。

俺は軽く緊張しつつ店内を観察した。思ったよりも広い。別に立ち食いじゃなくてもいいのではないだろうか。やけに高いテーブル

で、無理やり立たされているかのように見えてしまう。そこが醍醐味なのかもしれないけど。

ひとまず、暖房の効いた店内で人心地は付けた。どうやら食券方式のようなので、販売機の前へと足を運ぶ。品揃えは多い、トッピングが違っただけで味にそう違いは無いのだろうが、これだけあると迷ってしまう。

「ん？」

メニューを端から順に眺めていると、ある表示に目が留まった。

《七草？そば》

このクエスチョンマークは一体……。

七草とは春の七草の事だろうか。人日の節句はもうとっくに過ぎているから、時事的にはズレたメニューだ。いや、お粥じゃなくて蕎麦だから関係無いのかも知れない。そもそも、クエスチョンマークが付いているのだから、春の七草では無い可能性が高い。

ひどく興味がそられた。美味しそうかどうかではなく、敢えてクエスチョンマークを付けている理由が知りたくなった。

「……………」

チャリンチャリン……ピッ

硬貨を食券販売機に投入して、ボタンを押した。
もう後戻りは出来ない。

俺はカウンターに居たお兄さんに食券を渡す。

「これ、お願いします」

「はい、かしこまりました……え？　な、七草そば一丁っ！」

今、「え？」って言わなかったか？

もしかしてやってしまっただろうか……。

だがもう遅い、覚悟を決めよう。

「お、お待たせしましたー、七草そばです」

流石は立ち食いそば屋だ。ほんの二、三分で出て来た。

はてさて、どんな蕎麦なのかな。

（ネギ、のってるな……）

早くも春の七草では無かった。いや、ネギはどんなトッピングでも付いてくるから、正味には数えないのかもしれない。見た感じは緑一色だし、まだ春の七草である可能性は残って……

（……って、この匂いパクチーじゃん）

春の七草はそれほど香りを主張しない。主に香り立つのはセリかな。後は、スズナとスズシロ（カブの葉とダイコンの葉）の軽い青臭さぐらいだろう。いずれにしろ、香草のように、好き嫌いが分れるような匂いは放たない。

（ん？　これってルッコラか？）

原形を残したままの葉っぱを発見した。パクチーがある以上、コイツに味の主張は無理だな。というか他全部無理だろ。この蕎麦はパクチー味だ。

「……………。……………いただきます」

いつまでも観察していたら、蕎麦がのびてしまう。幸い、パクチーは苦手という程ではないので、食べられなくはないだろう。

「ふー、ふー、ずるずるずるずる……」

ネバネバがあるな、モロヘイヤか？

確信は無いが、セロリとミツバも居る気がする。

あとは……

「……………んくっ」

ツーンと来た、もしやワサビの葉か？

しかも何か口の中がスースーする、ミントじゃないだろうな。

（これ、ある意味凄いかも……）

出汁の香りが全くしない。

醤油の香りが全くしない。

蕎麦の香りが全くしない。

俺は今、一体何を食べているのだろう。

「……………ずるずる……ずるずる………ンク。うつ、ケホッ。ふう………ズズズズ………ゴクン。ぷはあ………」

俺は黙々と食べた。

黙々ともぐもぐした。

目目連は目玉だけの妖怪だ。

ろくろくびもほくほくだな。

「……ハッ」

思考が解体している。イカン、気をしっかりと持って食さねば。

「ングングンググ……ゴックン。ふー……うぷ」

心を無にして一気に平らげる。そしてすぐさま、空になった器を返却口へと持って行った。

「ごちそうさまでした」

返却口の向こう側で、さっき俺の注文を受けたお兄さんが洗い物をしていたので、一声かける。

「あ、あざーしたあ……」

「あの……」

「は、はい、何か？」

「ミントだけはやめた方がいいと思います」

「で、ですよね……」

お兄さんの苦笑に、愛想笑いで応えてから店を出た。

そして、店先にあった自販機をロックオン。迷い無く財布から硬貨を取り出して、流れるような手つきで投入。間髪入れずに、好物であるミルクココアのボタンを押したら、フライング気味に取り出

し口へと手を伸ばす。手にした缶の熱さも気にせずにプルタブを上
げ、すかさず口を付けたのだった。

「ズズズ……。ふ〜」

え？

あの香草ちゃんぽん蕎麦の感想？

好奇心は猫をも殺す。

ガラガラガラ……

俺が店先でココアを飲んでいると、店内から高校生と思しき女お婆の
子が出て来た。女子高生もこういう店を利用するんだな。

「……好奇心は猫をも殺すってヤツね……」

「え？」

俺がついさっき頭に浮かべた文言を、その女の子が呟いた事に驚
き、思わず彼女の顔に目を向けた。相手もこちらに顔を向けた為、
互いに視線を絡める形となる。

「あ」

「あ」

見知った人だった。

初見は先週の月曜日で、認識したのはつい昨日。
キレイなロングヘアーが印象的な彼女。

「ナツさんか」

「因幡じゃん」

それは伊波千夏。

水沢ひかるの親友を称する女の子。

「居たんだな、気付かなかったよ」

「てことは、アンタも居たんだ。……あ、ねえ、それ一口くんない？」

「それって……これ？」

「うん」

出会うなり、いきなり俺の飲みかけを所望するナツさん。

実質、昨日知り合ったばかりの相手と回し飲み？

しかも異性同士で？

ドキドキなんてしてませんよ？

「……はい」

「サンキュ。ングング……」

彼女は躊躇う事無くココアを^{あお}呷る。俺が意識し過ぎなだけなのか？

「ふう……なんとか消えたわ」

「消えた？」

「うん、ちょっと変なモン食べちゃってさあ」

それって、もしかして……

「……『七草？そば』だったり？」

「え？　そうっ、そうなのよ！　なにになに？　もしかして因幡も食べた？」

「ああ。クエスチョンマークが気になってつい」

「だよねだよねっ！　アレは気になるよねっ！　もうアタシ、チャレンジャースピリットが刺激されちゃってさあ、これはいくしか……て感じ？　地雷でもネタになりそうだったし」

「で、正しく地雷だったと」

「キツかった〜。もうアレだね、おソバの味じゃないよね、有り得ない匂いだったし、なんかネバってたし、しかも鼻にツーンってくるし。なんの罰ゲームだったっの。あんなん売るなっっの」

「でも食べた？」

「そこもやっぱチャレンジャースピリットでしょ。アレって絶対店側からの挑戦じゃん？　食えるモンなら食ってみろってさ。アタシ、そーゆー事されると火が点くんだよねえ。汁一滴残さず完食してやったわっ。アンタは食べれた？」

「俺もキツかった〜。でも勿体無いから、なんとか平らげたよ」

「あんなのちつとも勿体無くなってるわよ。アタシら、もしかして残飯処理させられたんじゃないでしょーね。……うっわ、改めて考えてみると心配になってきた。だってアレ、食べ物のにオイとは思えなかったもん。ひょっとしてヤバくない？」

「その心配は無いと思うぞ。それぞれが独特の風味を持つ香草だから、互いにケンカしまくってたんだよ」

「え？ アンタ、アレに何入ってたか判んの？」

「多分、パクチー、ルッコラ、モロヘイヤ、セロリ、ミツバ、ワサビ、ミントだと思う。あとネギ」

「すごくない？ ワサビはあると思ってたけど、それ以外は判んないわよ。あ、スーサーしてたのはミントか。んじゃ、あのキツイニオイって、いろんなが混じった所為なわけ？」

「いや、あの匂いは、ほぼパクチーだな。そこは間違いない」

「ぱくち？」

「あれ、知らない？ ……えっと、コリアンダー？」

「あっ、コリアンダー知ってる！ ひかるがカメムシ臭いって言ってたやつだ……って、そうじゃん！ アレ、カメムシのニオイじゃん！ うげ、そう思ったら不快指数倍増」

「好き嫌いの分れる代表だよな。俺、パクチー自体はそうでもないんだけど、後から来るミントがな」

「アレが平気とか、どこの星のヒト？ アタシはトラウマになったかも……。う、思い出したらまた気持ち悪くなってきた。ングング……プハア……。あ、ごめえん因幡、大分飲んじやった」

「ああ、いいよ、全部あげる」

「え、でもアンタ、ちょびっとしか飲んでなかったじゃん」

「口直ししたかったただだから」

「あ、もしかして、アタシが口付けたから？ 因幡ってそういうの気にするヒト？」

「べ、別に気にしないけど。寧ろそっちが気にするんじゃない？ 女子なんだし」

「あー、さっきはそれどころじゃ無かったからねえ、とにかく口直ししたかったのよ。……そっかあ、アタシ、アンタと間接キ……」

「皆まで言うなっ！」

「あれあれ？ なになに？ やけに過剰な反応じゃーん。実はずっと意識してた？」

「あっ……。ち、違ってっ、だって知り合ったばっかで……。その、なんだ、異性だし？ じゃなくてっ」

「あーらら、焦っちゃってまあ。……因幡ってムツツリ？」

「なんでだよっ!？」

「だって、話してる間、ずっとチューの事考えてたんでしょ？」

「考えてないっ!」

「思い返してみると、アンタずっと唇を尖らしてた気が……」

「そんな訳あるかあああっ!」

「キャハハハ……」

やけに会話が弾む。トラやミケ以外の人間とこんな気楽に話せた事なんて、殆んど覚えが無い。なんとも新鮮な気分だった。これが「七草? そば」のお蔭だというのなら、あの苦行は無駄では無かった訳だ。

「ふうー、なんか因幡って、やたら話し易いわね。打てば響くって言うかさ。孤立してるような奴だから、てっきり暗い性格なのかと……て、あーっと、ごめん」

どうやらナツさんは、歯に衣着せないタイプのようだ。でも、陰でグチグチ言われるよりは、こちらの方が遥かに好感が持てる。

「いや、俺の方も、ナツさんってキツイ人のイメージだったから、こんなに気楽に話せるなんて意外だよ」

「……まあ、ひかるの事があって敵視してたからね。それに、噂からはアンタがこんな人柄だなんて、想像もつかなかったわよ。何しろ……、……ッ」

「ん？ 何しろ？」

「……なんでもない」

「……うん、まあ、だいたい分かるよ、自分が学校のみんなからどう思われているかは」

「もしかして、サイト、見ちゃった……？」

「サイ……ト？」

「え？ あっ、ヤバッ」

サイト……。

文脈からすると、俺に関するサイトが存在するって事か？
いや、ちょっと待て、それはさすがに……。

「あ、あの、それってどんな……」

「因幡っ！」

「わっ」

「口滑らせたアタシが言うのも何だけど、気にすんなっ！」

「……………」

本当に何だな。

でも確かに、そういうのは気にしないに限る。

気にしてもしようがない。

「分かった、気にしない」

「絶対よ？ 探したりとかしちゃう駄目だかね？ あんなのに踊らされるなんて、馬鹿みたいなんだから」

「探さないよ。良い事なんて一つとして無さそうだしさ」

「そう……。その、ゴメン」

「ん？」

「アタシも踊らされてるクチなのに、勝手な事言っちゃって……」

彼女は本当に申し訳無さそうな面持ちだ。

「……………。さっき、俺を敵視してたって言ってたけど」

「え？ あ、それもゴメン……」

「『してた』って事は、今はしてない？」

「……うん、アンタ、思ったのと全然違ったからさ……まだちょっとしか話してないけど、因幡っていい人っぽいし」

……これって、チャンスだったり？

「じ、じゃあさ、その、俺と、と、とも……」

「え？」

「あ、いや……」

本当は言いたかった。

「友達になって欲しい」と。

だけと言えなかった。

彼女であれば承諾してくれそうな気配ではあるが、そうなったらなかったで、彼女の学校生活に、何らかの支障を来たすかもしれない。

「その……」

察するに、その妙なサイトには、俺の事がかなり陰惨にかき込まれている模様。そんな俺と付き合いがあると、煽りを食う可能性がある。そこに思い至ってしまったのは、鼻白んでしまうのも仕方ないと思う。

「ええと……」

……言い訳かな？

単に俺がヘタレで気後れしてるだけ？

うーん、いつそこは強気に……

「……なんでもない」

「は？」

……行けませんでした。やっぱりヘタレでした。

「あ、はは……。で、でも驚きだよ、徳英に裏サイトが存在してる

なんてさ。未だに？　って感じだ」

「……あれって元々、試験のヤマとか、抜き打ちとかの情報を、交換する為のスペースだったの。誰が起ち上げたかは知らないけど、最初は特に問題の無い、ごく小さいコミュだったみたい。でも、いつの間にか利用者が増えて、だんだん荒れてきたんだ」

「そして学校裏サイト化した、と」

「……………。……………」

「え、違う？」

「そのサイトさ……。……ダメ、やっぱダメだ」

何を思い直したのか、ナツさんは一番気になるところで話を切ってしまう。

「あのさ、絶対に気になってると思うけど、この話、忘れて？　その代わりアタシ、なんとかしてみるから」

「なんとかって……。え？　何？　よく、解んないんだけど……」

「閉鎖さんのよ。……こんなこと言っても説得力無いだろうけど、アタシもずっとアレはどうかと思ってたのよね。直接自分に関係無かったから見て見ぬふりしてたんだけど、こうやって実際にアンタと話をしたら、なんだか罪悪感がさ……」

ど、どれほどの事が書き込まれているのだろうか。
激しく気になるし、激しく怖い。

「全部がアレの所為とは言えないけど、アタシのアンタに対する、その……偏見？　はアレが元だし」

「……………」

ちょっと待ってくれ。それじゃあ、現在の俺の学校内における境遇は、そうなる様に何らかの意思が働いているという事にならないか？

……それは信じ難い、いや、信じたくない。

「でもでもっ、心配しなくていいから。あんなの、ちょっとチクればソッコーで閉鎖よ。因幡は何も気にせず今まで通りで、ね？」

ナツさんから聞かされなければ「知らぬが華」状態だったんですが……。

唐突に衝撃的事実を告げられて、頭の中が飽和状態だ。それだけでなく、水沢の母親の件で頭を酷使しているというのに。

まあ、だとしても……

「ありがとう、そんなに気に掛けて貰えて嬉しいよ。どうかお願いします」

……知り合ったばかりで、しかも最初は陰悪ですらあったというのに、ナツさんは俺の為に骨を折ってくれるという。ここは素直に感謝を示すべきと考え、俺は軽く頭を下げた。

「え？　あ、ま、まかしといて……」

なんとも思わぬ展開になったものだ。

「七草？そば」とのギャップが凄い。

そして、伊波千夏の今の印象と第一印象のギャップも。

「……水沢の親友、か……」

「え、なんて？」

「あ、ううん」

最初にキツイ子と思えたのは、彼女が水沢の為に怒っていたからか。大切な親友を心配していたから、俺を害有りと見なしたんだな。今はもう解る、ナツさんはとても良い人だ。

「ちよつとちよつと、なに生^ぬ温い視線よこしてんのよ。アンタ、やっぱムツツリ？」

しまった、不躰に見つめてしまっていた。……しかも生^ぬ温かった？

「いやいやいや、あー、あの、そう、それ！ ナツさん部活？」

とにかく目に付いたナツさんのスポーツバッグを指差して、大きく話を変える。我ながらかなり不自然だった。

「これから？ 時間平気？」

「なんか誤魔化してない？」

「あ、もしかして部活と違う？ それとも、もう終わったとか？」

「……午後からよ、午前中はちよつと買い物してたの。もう少し時

間を潰したら行くわ」

ふう、どうにか話が変わったな。

……その代わり、不信を買ったかもしれないけど。

「そういう因幡は？ 制服って事は学校行くんでしょ？ そっちも部活なの？」

「いや、俺は……」

ナツさんなら構わないか。

「……水沢の父親に、一時から会う事になってるんだ」

「えっ、ひかるの？ なんで……あ、一昨日の事か」

「そう」

「でもアンタ、事を荒立てないって」

「うん。申し出たのは先方。会って謝罪がしたいんだそうだ。学校で会うのは学校側の希望」

「……………。ねえ、それってひかるも来るの？」

「ん？ んー、どうだろう。来ない可能性が高いんじゃないかな？ 俺に会いたくないだろうし」

「ひかる、ケータイの電源切ってるのよね……」

「え、まだ連絡取れてないのか？」

「だから、学校で会えるんなら会ってきたい。なんか心配だし」

「家には？」

「行った、昨夜と今朝、でも会ってくれなかったわ。ひかるって浮き沈みの激しい子だから、機嫌損ねて引きこもる事はわりとあるんだけど、こうも音沙汰無いのは初めてかも。何かあった時、いつもなら、すぐアタシに泣き付いて来るのにさ。……かなり不安だわ」

「不安……」

ナツさんは随分と水沢の事を気に掛けているようだ。それはもちろん友達思いだからだという事は分かっている。しかし、二日会えなかったぐらいでそこまで心配するのは、やや過保護ではないだろうか。例えば、俺が二、三日ミケに会えなかったとしても、淋しくはあるが、彼女の身を案じたりはしないと思う。幼い子供ならともかく、もう自分で大抵の事は出来る年齢なのだから。しかし、今のナツさんは、水沢に会えない事をとても不安がっている。まるで、子供が心配で目が離せない母親の様に。

「……あのさ、これ、答えなくてもいいんだけど、訊いていい？」

「何よ、その変な言い回し」

「水沢って、自殺を図った事ある？」

「ツツツ!？」

ナツさんの驚愕の表情。

その反応だけで伝わってきた。

「……なん、で？」

「すまない、軽々しく訊いていい事じゃ無かった」

「いいからっ！　なんでそう思ったか訊いてるのっ！」

「ナ、ナツさんの心配の仕方がちよつと過剰気味に思えたんだ。あと、その……俺が通ってる病院の先生に、嫌な話を聞いてしまつて。えっと、水沢みたいな子は、自殺してしまう可能性があるって……」

「ちよ、ちよつとアンタ……ひかるの事、医者に話してんの？」

「も、もちろん個人が特定出来るような話し方はしてないぞ？」

「だとしても、それって、ひかるの事を精神科医に分析させたって事でしょ？　本人を無視してさ。そんなんありなわけ？」

「それは……返す言葉も無いよ……。自分でも解かってはいるんだ、『俺にそこまで踏み込む権利なんて無い』って、『必要以上に関わるべきじゃない』って。けど、どうしても考えてしまふんだよ、『何か俺に出来る事があるんじゃないか』って。ま、まあ、水沢からすれば、余計なお世話以外の何物でもないんだろうけどさ……。それでも、なんて言うか……。俺と水沢って、結構重なる部分があつて……。だから俺達が出会った事には、何か意味があるように思えて……」

「……………」

「つまり、何が言いたいかというと、俺は決して軽々しい気持ちで……えと、ナツ……さん？」

俺が弁解を繰り広げていると、いつの間にかナツさんが、冷やかな視線をこちらに向けていた。やはり、先生たちに水沢の事を話したのは、軽率だったか。せっかく得たかも知れなかったナツさんの信用を、早くも失ってしまったかも知れない。

「結局はそういう事か……」

ナツさんは、呆れたような声でそう言った。表情にも落胆の色が見える。

「ようするに、アンタもひかるにホレたクチなのね」

「ホレッ!？」

予想に無い解釈をされていた。

「ま、ひかるはかなり可愛いからね、別におかしかないわ。結局アンタってムツツリだったわけね」

「なんでそーなんのっ!？」

「いい人ぶってたけど、所詮下心だったんだ」

「誤解だっ!」

「言っとくけど、ひかるってすげーモテんのよ? アンタなんて相

手にされないって」

「そ、そんなのは言われなくても……」

「それにね、昨日あたしと一緒に居た男子。確かにひかるのカレシって訳じゃないけど、なんの関係も無いって訳でもないのよ」

「……え？」

「だ、だからっ、ひかるにはそーゆー男友達が結構いるって事っ！」

「……………」

それっていわゆるセフレ？

つまり、水沢には無軌道な性行動があるって事か……。

「ナツさん、それって敢えて言う必要あったか……？」

少なからず驚いた。

ナツさんが、水沢のネガティブ・キャンペーンをするとは、思いもよらなかったからだ。

「あっ、う……。……そう、よね……。アタシ、なんで……」

今のナツさん、もしかしたら冷静じゃなかったのかも知れない。でもそれはひとまず置いて。

今の話が本当なら、やはり水沢は……。

「なあ、さっきの質問、やっぱり答えてくれないか？」

「さ、さつき？」

「水沢は自殺を図った事があるのかってやつ」

「ッ……そ、それは……」

「反応からして、あると解釈したんだけど」

「ち、違う違うっ！　じ、実際にした事は無いわっ」

「実際に？」

「……………ほのめかすのよ。アタシ、今まで何度も説得して止めてきた……」

「そうか……。なら、酒やタバコは？　変なクスリとかは？」

「ちよつとちよつと、一体何が聞きたいわけ？」

「水沢って、自己愛に欠けてはいないか？　自分を大切にしないというか、出来ないというか」

自己愛の欠如。

それは高井先生が危惧していた、境界例の特徴。

「よ、よく分ないんだけど……。でも……そうね、確かにひかるには時々、『自分なんかどうでもいい』みたいな言動があるわ」

「マジか……。じゃあ、友達との付き合い方とかは？　対人関係は良好か？」

「な、なんなのよ、もう……。男子には人気あるけど、女子からは敬遠されがちよ。ひかる、気分屋でヒス持ちだから。……アタシはひかるの事解ってるから気にしないけど、他の女子とは確執が出来る易いの」

「ヒス持ち……」

昨日もそんな事を言っていたな。多分、医学的な意味でのヒステリーでは無いだろう。この場合「激情的」だとか、「癪癪持ち」を指していると思われる。その所為で、対人関係が不安定になっているようだ。

聞けば聞くほど、高井先生から教わった境界例の特徴に当てはまる。もちろん、素人の俺が判別できる事では無いが、先生が言ったように、疑いがあるというだけでも専門家に診せるべきだ。何しろ、自殺してしまう可能性があるのだから。

これは、失礼を承知で水沢の父親に進言した方がいい。仮に思い過ぎしだったとしても、俺がただはた迷惑な奴になるだけ。見過ごして水沢に自殺される事だけは、絶対に避けなければならない。

(……って、水沢の父親に進言?)

それは……どういう事になる?

水沢がそうなった原因が母親の死にあるとして、そこに父親が関与していたとしたら?

只の憶測と切り捨てる事が、今の俺には難しい。中途半端に得てしまった情報の所為で、会った事も無い水沢の父親に信用が持てなかった。

——チカラには疑問を持ちなさい。

……美作先生の懸念通りの状態に陥りつつあるのかもしれない。

「……なぼっ、ちょっと困幡っ！　ちゃんと教えなっ、だからなんだっていうの!？」

「え？　あっ……」

「聞いてんの!？　一人で考え込まないでよ！　ひかるの事、アタシにも教えなさいっ!」

しまった、ナツさんをほったらかしにして思考に没頭していた。質問するだけしておいてそのままにされたんじゃ、彼女が納得いかないのも当然だ。しかし、どう説明すればいいのだろう。何も確定していないのに話だけ聞かせても、結局納得しないのではないだろうか。

「その、なんて言えればいいか……、……ん？」

「何よっ!？」

ビイイイイイイイイ……

「ッ!？　き、来たっ!」

「へ？　誰が？」

耳鳴りのような音。

そのかすかな音に気付いた瞬間、俺はすぐさまアーケード街の雑踏へと目を向ける。パッと見、目的の人物は見当たらない。俺は背

伸びしながら、あの横町への曲がり角付近を目で探した。すると……

「居たっ、水沢さんっ！」

「え？ ひかる？」

……チラッとだけ、あの女性らしき姿が、角を曲がって行く様子を目にした。

「ナツさん、急で悪いんだけど用事が出来た。ゴメン、俺行くから、じゃっ！」

「じゃって、ちょっと……！？」

俺は、唐突に話を打ち切って、駆け出すのだった。

t i m e t o b e l i e v e n o w 1 3 (後書き)

次回は、序盤にチラッと出てきた、アイツが登場します。……やっぱりチラッとですが。

t i m e t o b e l i e v e n o w 1 4 (前書き)

え？　ひかるちゃんのエピソードなのに、彼女の出番が少ない？
大丈夫です、今回にバツチリ……出てこないです、ゴメンナサイ。

一月三十日 日曜日 正午頃

「ああもうっ。どこ行っただんだ……」

俺は少し苛立ってしまった。

この冬一番の冷え込みだった寒い寒い早朝からずっと探し続けて、もうすぐ正午になろうかという時にようやく目にするも、それは一瞬目に映っただけに止まり、結局接触には至らなかったのだ。

さすがに落胆を隠せない。

「水沢さん……」

ぼそりと求めし人の名を呟く。

それは水沢ひかるの母親。

今日俺が探し続けている人物。

初見の時は、あれほど俺に拘ったというのに、こちらから求めてもあの人は応えてくれない。確かに、相手は理屈が通らなくても納得のいく存在だけでも、振り回される方の身にもなって欲しいものだ。

——疑問を持ちなさい。

「う……」

記憶の中の美作先生に窘められる。

考えてみれば、「水沢の母親が俺に何かを伝えたがっている」というのは、俺の勝手な解釈でしかないし、そもそも、水沢の母親と意思の疎通が図れたと言ひ難い。常に一方通行、俺の言葉が届いた事は、ほとんど無かったんじゃないだろうか。

……なんだか、水沢の母親の言動が、単なる反射的な反応でしかないように思えてきた。

つまり、意図も無ければ自我も無い、ただそこに居るだけの地縛霊の記憶を、追体験しているだけなのではないか、と。

そんな考えを皮切りに、俺の思考はどんどんネガティブになっていく。

だいたい、さっき見たのは本当に水沢の母親か？

チラッと見ただけで速断したが、だんだんと自信が無くなってきた。

いや、もっと根本的に、例の“チカラ”なるものが、俺の中から消えていないという保証は？

チカラの存在の有無なんて、どうやって確認すればいいんだ。

まずい、少し疲労を覚えてきた。

「ふう……。とりあえず、ホテルまでは……」

俺は、昼食を摂る前に決めていた予定を、遂行する事にした。

今いる場所は、アーケード街を駅側から入って、最初の横町を曲がったその先を、少し進んだ路地裏。このまま十五分ほど歩けば、昨日のホテルに着く。そこまで行っても水沢の母親に接触できなかったら、もう諦めて学校に……

「――ねえ、もしかしてひかるの家に行くの？」

「……いや、俺、水沢の家なんて知らな……って、え？」

「んじゃ、どこ行くのさ」

「……………」

「ん？」

「なんで居んのっ!？」

「わっ」

何故か伊波千夏がそこに居た。

「な、なんでって、アンタがひかるが居たような事を言うから、追ってきたんだけど？」

気付かなかった……。

俺としては、立ち食いそば屋の前で別れたつもりになっていたの
で、まさか付いて来ていたとは、少しも考えていなかった。
どうしよう。

正直、これから行く場所まで付いて来られるのは、いろんな意味
で困る。

「それで？　ひかるが居たの？　あの子を追ってきたわけ？」

「いや、俺が追ってきたのは水沢じゃなくて……」

「え？　でもさっき、『居た、水沢さん』って言ってたじゃん」

「そ、それは、水沢であって水沢では無いと言うか……」

「何言ってるの？ アンタ」

説明する時間が惜しい。説明したとしても、理解して貰えるとは思えない。こうなったら……

「……ナツさんっ！」

「な、何？」

「俺は今、幻覚症状を発症中なんだ」

「は？」

「君に迷惑を掛けたくない。だから、放っておいてくれ」

「……超冷静じゃん、とてもそうは見えないんだけど？」

「くっ……その、わ、僅かな理性で応対してるんだ」

「ていうか、そんな状態なんだったらさ、アタシ、傍に居た方がいいんじゃない？ なんかあった時に為に」

「優しいね、こんちくしょう」

「……確かに言動はおかしいっばいわね」

さすがに無理があったようだ。窮すると弱い俺。

「と、とにかく、俺の事は捨て置いてくれて構わないから」

「……………。なんかちょっと心配だから付いてくわ」

なんでこの人こんなに親切なの？

普段なら泣いて喜ぶけど、今は空気を読んで欲しいぞ。

「ああもうっ、どうなっても知らないからなっ」

少し自棄になりながらホテルへと向けて足を踏み出す。ナツさん
もちゃんと付いて来ているようだ。いや、来なくていいんだけど…
…。

まあ、目的地に着けば、彼女も去る事になる筈だ。俺への不信感
を胸に抱きつつな。…………くそう。

「それでそれで？ どこ行く気？」

「あ、あっち」

適当に指を差して濁す。ラブホテルとは口が裂けても言えないか
らだ。着けば判る事だけれども。

「あっちって…………いわゆるホテル街があるんじゃ…………？」

「うぐ」

知ってましたか。

「…………え？ 嘘、でしょ？ そこ行く気？」

「だ、だから付いて来なくていいってば」

「なんでそんなトコ行くわけっ!？」

「い、色々と事情があるんだよっ!」

「どんな事情よっ! 脈絡無さすぎでしょっ!？」

「だったらナツさんはここまでなっ! じゃっ!」

「つて、コラッ!？」

俺は耐えられなくなって、唐突に走り出す。

さすがにもう付いては来ないだろうが、なんだか最悪の別れ方だった気がする。彼女の中の俺像はどんな事になっているのやら、だ。考えてもしようがないので、再び水沢の母親を求めてあのホテルへと向かう。今度は道中彼女を探したりはせず、とにかくホテルを目指す事にした。

朝から複数回往復している道なので、当然迷うような事は無く、俺は難なくホテルへと辿り着いた。

「ふう、さて……」

着くと同時にホテル前の通りを見渡すが、水沢の母親の姿は見つかる事が出来なかった。となると選択肢は二つ。諦めて学校に向かうか、ホテルの中まで捜すか、だ。

（入ったところで昨日の様に追い返されるかもしれないし、やっぱり諦めるか）

そう思いながらも、未練がましくホテルの入り口を覗き込んだ。
すると……

ウィイイン

……あの、やけに稼働音のする自動ドアが開いた。中から誰かが出て来るのかと思い、そこから立ち去ろうとしたが、予想に反して誰も出て来なかった。しかも自動ドアはなかなか閉まらない。不思議に思い、近づいて中を覗こうとすると……

ウィイイン

……稼働音と共に自動ドアは閉まってしまう。

「……………」

誰も出入りしていないのに、勝手に開閉する自動ドア。

……怖いぞ……。

でも、これは、ひょっとして……

「——ねえ、もしかして入ろうとしてる？」

「……いや、そのつもりは無かったんだけど、入る必要が出てき……って、え？」

「一人で入って何する気？」

「……………」

「ん？」

「再びなんで居んのっ!？」

「わっ」

何故かまたもや伊波千夏がそこに居た。

「あんな逃げ方されたら、気になるに決まってんじゃん。だから、追って来たのよ」

「追わないでくれますっ!？」

「なによなによ、だったら何しようとしてるのか教えなさいよ」
頬を膨らませるナツさんは可愛かった。じゃなくてっ、まさかこんなに好奇心の強い子だったとは。

「こんなトコに入ったら補導されるわよ? アンタ、制服なんだし」

「わ、分かってるさ。けど……」

ビイイイイイイイイ……

実は先ほどから耳鳴りがしていた。これが聴こえている以上、ダメモトでも中に入りたい。入った後の事は一切何も考えてはいないが。

「と、とにかく、こんな場所に高校生が居るのは問題がある。ナツさんは帰った方がいい」

「アンタも高校生」

「だから、色々事情があるってさつきも……」

「――ギャハハハハ、マジかよそれ！　ちよ〜ウケんだけど〜！」

「ぶふっ!？」

死ぬほど聞き覚えのある声が聴こえてきた。

ナツさんのみならず、運命までもが俺の邪魔をする。

「くっ、ナツさん！　こっちにっ！」

「へ？　……て、わっ、ちょ、なに？　きゃっ！」

突如、通りに響き渡った下品な声に、俺は慌てて隠れる場所を探した。

そして見つけたのは、目隠しと思われる背の高い植木の向こう側に、ぽっかりと空いた空間。そこへとナツさんを引っ張り込み、強引に低い姿勢を取らせる。

「なにになにっ？　なんのつも……むぐ」

「シッ、……ちよつとでいいから黙ってて……!」

当り前の疑問を口にしようとするナツさんを無理やり封じ、俺自身も息を潜めた。そして通りへと意識を向け、アレが通り過ぎて行くのを待つ。

「ギャハハハ……!　……っと、今日はここにすつか。見た目シヨボいけど、中はイイ感じだかな」

（なんだとっ!?!）

危うく声に出しそうになる。どうやらアレはここに入ってくるつもりらしい。昼間っからはなんて不埒なっ。

「むぐー、むぐー」

「ナツさん……! もうちょっとだから頼む……!」

俺達は（ナツさんは無理矢理）更に息を殺して、アレをやり過ごす。

そして、すぐ側を通り過ぎていく複数の足音。

やがてあの自動ドアの稼働音が聴こえたので、俺は植木の枝葉の間から、アレの様子を確認。見えたのは男女三人の後ろ姿。つまり、アレは“両手に花”状態でホテルへと入って行った。

（さ、さ、さ、三人でだとおっ!?! 後ろから刺してやりたいっ!）

「むぐーっ!」

「あぁと、ご、ごめんナツさん」

「ぷはぁっ」

慌てて俺は手を離す。アレの、あまりにも不徳義な行いを目の当たりにし、思わずナツさんの口を押える手に、力が籠ってしまっていた。

「ハアハア……苦しかった……。何すんのよっ!?!」

「うっ、誠に申し訳ない……」

「こんな場所だから、ちょっと怖かったんだからねっ！」

「……本当にごめんなさい」

力尽くはさすがに拙かったな、反省せねば。だけど、こんな場所に居るところをアレに見られたく……

「……待てよ？」

いっそ、どさくさに紛れてみるのはどうだろう。アレになら迷惑かけても心痛まないし。

「もうっ、さっきからワケわかんない事ばっか。因幡、いい加減きっちり説明してもら……」

「ナツさんっ！」

「ひゃっ」

「今度こそナツさんは帰ってくれ、俺は行かなくちゃいけない」

「へ？　ちょ、ちょっと……引っ張らないでっ」

さっきとは逆にナツさんを引っ張りだして、ホテルの敷地から通りへと押しやる。

「じゃっ！」

「じゃっ、じゃないっつのーっ！ー！」

彼女を鮮やかに無視して踵を返し、そのままアレを追って自動ドアをくぐった。そこからは余計な行動は挿まず、ぐるりとエントランスを見回してアレの姿を探す。

――チンッ

不意に聴こえてきた音の方に目をやると、エレベーターホールでアレを発見。丁度エレベーターに乗り込んでいるところだった。

俺は躊躇する事無く足を進め、敢えて勢いを付けて、エレベーターへと乗り込んだ。

「うおっ!？」

「きゃあ!？」

いきなり現われた俺に驚いたのか、先に乗り込んだアレ達が声を上げる。だが、そんな事は気にせずに、俺はそのままアレへと詰め寄った。

「こんのエロトラっ！ 真っ昼間っからいいご身分だなあっ！」

「おわっ、シ、シロか？」

「人がややこしい事になってる時に、お前ってやつはくくく！」

「な、何言ってたオメエ、ちよっち落ち着け、話がさっぱわかんねえ」

おっと……少しばかり感情的になってしまったかも知れない。いくら相手がトラだとは言え、ちよびつとだけ理不尽だった可能性が無きにしも非ず。まあ、正直どうでもいい。今はそれより……

「――ねえ、もしかしてこの人、因幡の友達なの？」

「……いや、こんな不届きなヤツ友達でもなんでも……って、え？」

「だったらどんな関係？」

「……………」

「ん？」

「だからどーして居んのっ!？」

「わっ」

そしてやっぱり伊波千夏がそこに居た。

「そっちが悪いんでしょー、ちゃんと説明していかないから」

「説明出来ないんだよっ! それくらい察せないのかっ!？」

「ちょっと! 人をKYみたく言わないでくれる!？」

「このKYーーッ!」

「なっ……!？ こ、このムツツリーッ!」

「うがーーーーー！」

「――あー、なんだコイツら」

「なんや、虎太郎のツレと違うんか？」

「男の方はそうだ。女は知らね」

「痴話喧嘩始めてもうてるけど、エレベーター動かしてええのん？」

「さあな。……うーん、とりあえずコレ止めつか。今日はゆっこも居る事だし、ここは関西風に……んんっ、すううう……なんでやねんっ！」

ドゴォッ！

「ぐほおっ!？」

「へっ!？」

ナツさんと言い争っていると、突然、胸部に強烈な衝撃を浴びせられた。

「ゲホッゲホッ……! な、何を……ゴホッ」

「あ、ワリ、ツツコミ強すぎたな」

「ング……ゲホッ、俺、いつ……ボケた……? ……ていうか、今の、逆水平チョップ……」

「シロがラブホとか、カラダ張ったボケとしか思えねえだろ？」

「……俺がラブホテルに来たら……ウケ狙いに見えるのか……」

確かに俺は、こんな所には縁の無いガキだけど。

「にしてもたまげたねえ、まさかラブホでシロに会う日がくるとは。……しかも相手ミケじゃねーし」

トラは、無遠慮に、ナツさんへと目を向けた。明らかに値踏みしている。

「は？ ア、アタシ？ てかミケって？」

「うーん、上玉じゃねーか。やるねえ、シロ」

「ば、馬鹿っ、失礼な真似するなよ。別に俺達はそういう間柄じゃない。だからここを利用しに来た訳でもない」

「あん？ どういうこっちゃ」

「……ねえ因幡、結局誰なの？ このヘビメタな人」

今日のトラ。

髪はいつも通り逆立てている。カラコンはいつもと違って両目にブルー。上着は異様に裾の長いロングコート。材質はズボンと合わせて革のようだ。そしてあちこちに金属ジャラジャラ。

うん、確かにヘビメタルックだな。

「これはトラ。憶える必要は一切無い」

「ひどっ。シロ、ちゃんと紹介してくれよ」

「黙れ、この変態」

「誰が変態だコラ」

「変態だろうが。女性二人と……だなん……て？」

「ん？　うち？」

俺に視線を向けられた女性が首を傾げる。なかなかの美人で、胸部もふくよか……ではなくて。あれ？　おかしいぞ、入る時は確かに……

「……あの、女の人がもう一人、一緒にありませんでしたか？」

「もう一人？　今日はうちと虎太郎の二人だけやで？」

今日は？

今日“は”という事は過去に複数人で……ではなくて。二人？でも俺はトラ達が三人で入っていくところを見ている。そう思ってエレベーターの中に居る人数を数えてみるが、俺を含めて1、2、3、4人。つまり、間違っているのは俺。

「うーん……？」

「どしたあ、シロ、何を悩んでやがる。つか、ホントに何しに来たんだよ。その子とナニしに来たんじゃねえの？」

「トラ、マイナス一万点」

「なんの点数だそりゃ」

バカはほつところ。

しかし、どうしたものか。消えたもう一人(?)は気になるが、このままここに居ても何の意味もなさそうだ。

フウ……やっぱり考え無しの行動じゃあこうなるか。

「なあ、うちら上に行きたいんやけど、自分らどうするん?」

「あ」

トラの連れの女性が焦れてきたようだ。それも当然だな、こんな場所で足留めされてたら、誰だって落ち着かない。

「す、すいませんでした。じゃあ、俺達はここら辺で失れ……」

「よっしゃ! んじゃ、こーしよーぜっ」

退散しようとしたところで、トラが何やら提案してきた。

「よつと」

掛け声と共に、トラは最上階のボタンを押す。エレベータは、待ってましたとばかりに、淀みなく稼動を始めた。

「今日はいっちょ、この四人で楽しもうじゃ……」

「なんでやねんっ!」

ズバンッ！

「ゲハアッ！？」

どうやらトラがボケたようなので、さっきのお返しとばかりに、思いつきりツツコんでやった。

もちろん逆水平で。

「ぐ……っ。……なかなか、いいモン持ってんじゃねーか……。シロ……よ、オメエなら、ベルトも……夢じゃ……ねえ……ガクリ」

「はいはい、バカは早く死になさい」

本当はちよびつとだけそそられたが、理性でねじ伏せてやったさ。

「仲ええなあ、この二人」

「そうかしら……？」

「なあなあ、あんたはどないや？ 四人でってのも刺激的やあらへん？」

「はあっ！？ な、な、何言っちゃってんの！？ アタシは嫌よっ、そんな初た……い……ごによごによ」

「ん？ 最後なんて？」

「あう……えっと……」

チンッ

「あっ、ほら、着いたわよ！ アンタ達降りるんでしょ？ アタシと因幡はこのまま下行くからっ」

「へ？ ちょお待ちいやっ」

トラを沈めてスッキリしていると、何故だかナツさんとトラの連れの女性が揉めていた。

「ほらほらっ、さっさと降りなさいよ！」

「ちゃうねんっ、ここ9階やろ？ うちら行くんは14階や」

「え？」

確かにここは9階だ。トラは14階以外のボタンは押していないかったから、ここで誰かが乗り込んで来るという事になる。

「誰も居いひんな……閉めてええ？」

トラの連れの女性は、ホールに誰も居ない事を確認し、『閉』のボタンを押そうとする。

「ッ！ 俺っ、ここで降ります！」

「そ、そうなん？」

「え？ 因幡？」

ピンときた。

根拠は無いが、何故だか自信がある。

俺はここで降りるべきだ。

「それじゃ、どうもお邪魔様でした。トラの事、お願いします」

「ん？ ああ、うん、まかしとき」

昏倒している（フリだと思う）トラを女性に任せて、俺はエレベーターから飛び出た。

「待ってよ因幡！」

やはりというか、当然ナツさんも出て来る。

「ほなな。……虎太郎、いい加減起きいや」

「はいよ。……結局なんだったんだ、シロの奴。でもま、ミケにチクれば面白れえ事になりそ……」

「ちよつと待てええええーっ！」

背後から聞こえてきた不穏な発言に慌てて振り向いたが、エレベーターの扉はすでに閉ざされていた。

「どしたの？ アンタ」

「……いや、何もやましい事なんてしてないんだ。心配する必要は無い。……筈。……だよな？」

「何言ってるの？」

考えても怖いだけなので、今はやるべき事だけをやろう。

まずは、周りの確認。

こういう場所だから薄暗いのは仕方ない事だろう。このエレベーターホールから左右に廊下が続いているようだ。では、とりあえず右側から……

「……あつ」

「え？」

さっそく見つけた見覚えのあるシルエット。

俺はすぐさまそれを追う。

「ちょっと!？」

それは、その先のT字に別れた廊下を右へと曲がった。俺がT字路に辿り着き、その曲がって行った先に目をやると、遂にその姿を確認する事が出来た。

「水沢さん！」

「嘘っ、ひかるが居んの!？」

俺の呼び掛けには応える事無く、水沢の母親はとある一室へと――扉も開けずに――入って行った。

まるで吸い込まれるかの様に、扉の中へと消えていってしまったのだ。

「うわ……」

「ねえ、何！？ ひかるはどこの！？」

少し背筋にくるものがあつたが、俺はその扉の前まで足を進める。

「……ここにひかるが居るの？」

中に、入るべきか？

……そうだな、ここまで来て入らない訳にはいかない

「もしもーし、因幡ー？」

俺はドアノブに手を掛け、ゆっくりと回した。

「……………。あれ？ 動かない……」

しかし、ドアノブは全く動かない。

冷静に考えれば当然だった、俺はチェックイン(?)してここに居る訳ではないので、ここを開ける為のカギなどは持ち合わせていない。

というか、この扉、鍵穴はどこ？ オートロック？

「ちょっとちょっと、どうしたわけ？ 中にひかるが居んの？ なんか喋りなさいよ」

これはもしかしてゲームオーバーなのではないだろうか。

どう考えてもここを開ける手段なんて一つしかない。しかし、制服を着た高校生にそれは無理だという事は、昨日証明されている。かと言って、私服を着て出直したとしても、昨日のスタッフらしき

おじさんに見咎められたら、即アウトだろう。

「むむむむ……」

「ねえねえ、アタシ、怒ってもいいよね？　ここまでシカトされたら、怒っちゃってもいいよね？」

カチャ

「え？」

「怒ってもいいかつつてんのっ」

「そうじゃなくて。今、何か音が聴こえなかった？」

「聴こえたけど……それが何さ」

ドアから聴こえてきた気がする。もしかして、水沢の母親がカギを開けてくれたのではあるまいか。

「……もう一度開けてみよう」

俺が再びドアノブへと手を……

ガチャン　キィ

……掛ける前にドアが独りでに開き……

「——ん？」

……中から普通に人が出て来た……

「……って、ええええええ！？」

「え？ え？ な、なんだね君たちは……」

出て来たのは男性。

その向こうに女性も見える。

男性はひどく動揺しているようだ……って当たり前だろう！ 出て来るなり目の前に人が居たら、誰だって気まずいに決まってる！
な、何しろ、じ、事後、なのだろうから……。

「あ、えっと、その、お、俺達は……え」と

何か思い付け俺！

「だから、その……コンタクトを……そう！ コンタクトを落とす
てしまつて……！」

俺はポケットからケータイを取り出し、バックライトを点けて床にしゃがみ込んだ。

「いや、ここ暗いから、なかなか見つからなくて……ああ、すいません、こっち回って貰えます？」

苦しいか？

だが言い出した以上これで通さねば。

「……か、課長？ ど、どうしたんですか……？」

「あ、ああ、なんかコンタクトを落としたとかで……。と、とにかく僕は行こう。なんかその辺に落としたらしいから、そこは踏まないように……」

「は、はあ……」

やはり気まずかったらしく、彼らは深く考えずにそそくさと行ってくれた。でも、念の為に彼らの姿が見えなくなるまで、コンタクトを探すフリを続ける。

「……フウ、焦ったあ。因幡、もういいんじゃない？」

ナツさんに促され、ケータイをポケットに仕舞いながら立ち上がった。

「ひかるじゃなかったじゃん。アンタ、何がしたいわけ？」

「……………」

「因幡？」

キィ……

「って、何開けてんのよっ！」

実は、閉まる直前にボールペンを挟んで、扉が閉まり切らないようにした。オートロックなのだとしたら、開けられなくなるからだ。

「……………」

「……アンタ、入る気じゃないでしょうねえ」

そして、俺は中へと入った。

「うそでしょ!？」

部屋の中は廊下よりも暗い。点いている照明は壁のブラケットライトだけで、それめかなり弱く灯されている。部屋の様子はほとんど判らないが、それでいい。きっとここには、十八歳未満が見てはいけないものもある筈なのだから。

「暗いわね、電気どこ? あ、これか」

パチッ

「なんで点けるかなっ!？」

パチッ

いきなりメインの照明を点けたナツさん。俺は間髪入れずにそれを消した。……というか、結局君も入って来たんだ。

「ちよつとなんでよ」

「あのなあ……。ここは、さっきまで使われていたんだぞ? 絶対に見えない方がいいって」

「あっ……そ、そうよね」

そう、ここは先ほど出て来た二人が使っていた部屋。今の俺が言

っても全く説得力は無いが、これはプライバシーを侵害している可能性がある。もうさっきから良心の呵責が凄い。一瞬ベッドの辺りに様々な何かが見えた気がしたが、もちろん見なかった事にした。

（いつまでも滞在できる場所じゃないな。精神的にはもちろん、身体的にも色々辛い。何の事かは……言わぬが華だが）

「うう……このニオイ最悪」

「言うなよっ!？」

気持ちは解るが、口にしないで欲しかった。知らないニオイの筈なのに、なんとなく判ってしまうのが辛い。

「ねえ……もういい加減にしない？　こんな事してて何になるってのよ」

「何に……なるんだろうな……」

「もしもし?」

熟慮断行を以てここまで来た訳ではない。ただ、水沢の母親を追って来ただけで、何がどうなるかなんて俺にはさっぱりだ。したがって、何をどうすればいいのかもさっぱりだ。あの耳鳴りでもしてくれれば何か……

「……耳鳴り……」

「何か言った?」

今まで、不思議な事がある時には、あの耳鳴りのような音が聴こえてくるものと捉えていた。

しかし、ちょっと戻って考えてみると、俺が自ら不思議な事象を求めても、何も起きないパターンが多い。

例えばだ、俺は受信専用なのだとしたら？

つまり、あの耳鳴りは着信音で、水沢の母親なり葉山ことりなりが何かを発信した際に、鳴り出すのではないかという事だ。状況を鑑みれば、辛うじて仮説の域には達している気がする。

では、その仮説に則って現状を考えてみよう。

……耳鳴りは無い。

よって何も起こらない。

「……………」

「おい、暗くてよく判らないんだけど、アンタ生きてる？」

「……帰るか」

「はあ!？」

「因幡志朗。特技は骨折り損の草臥れ儲けです」

「……アンタ、はったおすわよ……」

ナツさんは勝手に付いて来たのだから文句言わないで欲しい。そう口しようとした時だった。

突然、壁のブラケットライトの小さな明かりが肥大し、俺の目の前を、一面オレンジ色に染めたのだ――

——気付けばそこは、ほの暗い部屋。

ベッドのヘッドボードに置かれたライトスタンドが唯一の光源。その光に薄く照らし出された部屋は、俺がつい先程まで居た部屋ではなかった。

いや違う。

壁紙や設備等は替わっているが、構造は先程まで居た部屋と同じに見える。だがこの一瞬でレイアウトが変わる筈がない。

これは異なる時間軸の同じ部屋、そういう事ではないだろうか。

「それじゃあ亜季ちゃん、くれぐれも頼むよ?」

「……ごめんなさい。本当に」

その部屋には二人の人間が居た。

一人は男性。

ベッドから少し離れたテーブルの側に立っている為、その顔を明確に判別する事は出来ない。

もう一人は女性。

こちらはベッドに腰掛けていたので、判別出来る。それは、間違はなく、水沢の母親だった。

「私は行くよ、元気でな、亜季ちゃん」

「ごめんなさい。ごめんなさい」

男性はどうやら部屋から出て行くようだ。

女性はベッドに座ったまま、俯きながら、何度も謝罪の言葉を口に出している。

やがて、男性は無言で部屋から出て行った。

「……………。はぁ……………」

女性は溜め息を吐きながら、ドサツとベッドの上で仰向けになる。スタンドライトに照らし出されたその表情には、正しく翳りが窺えた。彼女はそのまましばらく天井を見つめた後、おもむろに立ち上がった。先程まで男性が側に立っていたテーブルまで歩み寄る。すると女性は、テーブルの上にあった何かを掴み上げた。そちらにはスタンドライトの光が及ばず、それが何かは判らない。ただ、女性の手元からガサガサと紙擦れの音が聴こえてきた。おそらくそれは紙袋で、彼女は中身を確認しているものと思われる。

「はぁ……………」

再度、女性は溜め息を吐いた。やはりそこには光が及ばず、今度は表情を確認出来ない。彼女は手にしていたそれを、やや乱暴にテーブルへと戻し、ベッドの方へと戻って行く。

コンコン

不意に響くノックの音。それを聴いた女性は、どこか重い足取りでドアへと向かった。

ガチャ

ドアを開ける音。そして、すぐに女性は誰かと連れ立って、部屋の中へと戻って来る。

「首尾は？」

聴こえてきたのは男性の声。

先程まで居た男性とは明らかに違う、若い男性の声だった。

「そのテーブルの上」

女性はベッドへと戻り、腰を下ろす。

一方の男性は、テーブルの上に置かれていた、紙袋と思われるものを手にしている。例によって、その場所では、顔を判別する事が出来ない。

「本当に300万あるのか？」

「数えてないけど、あると思うよ」

300万……お金の事だろうか。

だとするなら、その金額には覚えがある。昨日、ホテルの前の通りで見たビジョンの中で、三浦という男性が口にした金額だ。

もしかこれは、水沢の父親が慰謝料を手にした時。では、水沢の母親の不倫騒動は落着いたのか？

「ふふん、過去最高額だな。流石は名門大学の学部長。まだまだイケるんじゃないか？」

「え!？」

男性の言動に不穏当なものが読み取れた。過去最高額というのはどういう意味だろう。

「い、いやよ! それだけあれば充分だよ! 三浦さんはもういいでしょ!？」

「何が充分だよ。お前は自分の置かれている状況が、まだ理解出来ていないんじゃないのか？」

「わ、わかってるよ！ でも、三浦さんにはそれ以外にも随分貰ってるし、これ以上はもう……」

「なんだ、あのジジイに本気にでもなったのか？」

「そうじゃない！ 私はただ……三浦さん、いい人だったから、心が痛くて……。ね、お願い、私、すぐに他を見つけるから、三浦さんは……」

「次のも上玉とは限らないだろう？ 100万単位なんて、なかなか無かつたろうが」

「だ、だけど……私はもういやだよ……」

この二人は一体なんの話をしているのだろうか。
不倫を清算したのだと思っていたが、会話を聞く限りでは、夫婦で共謀して搾取を行ったのだと思えない。

「はあ……。いいのか？ 娘と離ればなれになってしまっても」

「ッ！」

娘……水沢ひかるの事か？

「お前は娘と一緒に居たくて、こんな事をしているんだ。そうだな？」

「カ、カルチヨと……」

「お前と娘と一緒に居る為には、金が必要。そうだよな？」

「カルチヨと一緒に居る為に……」

「お前が娘と一緒に生きるには、こうするしかない。そうだよな？」

「カルチヨの為にはこうするしか……」

「お前が娘の為に出来る事はこれしかない。そうだよな？」

「カルチヨの為……」

それは、ひどく――

ひどく異様な光景だった。

男の声が、まるで呪詛の様に彼女を侵していく。

「さあ、急がないと三角草が咲いてしまうぞ？」

「あ……」

三角草。

その言葉で彼女から迷いの色が消えてしまう。

「……わかったよ」

「ん？」

「京助君の言うとおりにする」

「よくできました」

え………

——バシィッッ！

「おぶっ!？」

「因幡！　しっかり、しっかりするのよ！」

バシィッ！　バシィッ！

「ぶっ!？　いたいっ、ちょ……あばっ!!」

「因幡!？　気が付いた!？」

「な、なんなの……一体」

俺は何故か、ナツさんにより、平手の雨を浴びせられていた。
両の頬が非常に熱い。

どうしてこんな目に遭わされているのだろうか。

「ふう〜、焦ったあ。アタシ、人が気絶するトコ見たの初めてかも」

「いちち……、き、気絶？」

「そうよっ、しかも立ったままで！……人間で、立ったまま氣い失えんのね」

「いや、マンガじゃあるまいし」

「でもでも、アンタ実際、ウンともスンとも言わなかったわよ？
引っぱたいてもすぐには氣付かなかったし」

意識は確かに飛んでいたのだろう。ビジョンを見ている時の自分がどういった状態になっているのかは判らないが、立っていられたという事が、失神では無かった事を示している。これは素直に不思議だった。

「どのくらい無反応だった？」

「え？ そんなに長くは無かったわ。一分くらい？」

やはり、葉山ことりの時と同じで、体感と実際の時間には差異があった。これも素直に不思議だ。

「はあ……ちよつと疲れた……」

俺はそう呟きながらその場に座り込み、精算機とやらに背中を預けた。疲れたと言っても、肉体的な疲労ではなく、まるで、テストを終えた後の、緊張から解放された脱力感に似たものを感じる。ビジョンを見た事自体に消耗した訳ではない。その内容に、精神的な消耗を覚えた。

「因幡？ 大丈夫なわけ？」

「ああ、ありがとう。でも、もう一分だけ時間をくれ……」

俺は今見たものについて考える。

今回、新しく知った事。

水沢の母親は、いわゆる「美人局」を行っていたようだ。

ターゲットの人物と関係を結び、のちにその関係を家族にばらすと脅し、慰謝料と称して金銭を要求する。

当たり前だが、これは犯罪だ。しかも、後から来た若い男性との会話から察するに、常習犯。恐らく彼女達は、その後も三浦なる人物から搾取をしたものと思われる。となると、その三浦の事を調べる必要があるかもしれない。言ってみれば、彼には“動機”があるのだから。

そう、水沢の母親を手に掛ける“動機”が。

しかし、だ。

俺にはそこよりも気掛かりな点がある。

それはもう一人の男性。

俺はその男性を、水沢の母親の夫、即ち水沢ひかるの父親だと思っていたのだが、そうとは言い切れないのかも知れない。

昨日見たビジョンの中で水沢の母親は、その人物を「直人さん」と呼んでいたが、今見たビジョンでは「京助君」と呼んだ。

昨日と今日では違う人物だというのか？

どちらの時も顔を確認する事は出来なかったから、違う可能性ももちろんある。声の方も、昨日は怒声だったが、今日は落ち着いた口調だった為、同じ人物の声と断定しづらい。けれども、若い男だという事は共通しているし、状況も把握していたようだから、同一人物と考えるもいいのではないだろうか。

ならば、何故違う名で呼ばれていたのか。

犯罪を行っていたのだから、偽名を使った線が濃いだろう。となると、三浦の前で呼ばれた「直人」が偽名で、「京助」の方が本名

であると考えるのが自然だ。

「……………」

解っている、「京助」なんて決して珍しい名前では無い、たまたま同じ名前だっただけ、こういう偶然があっても何ら不思議な事じゃない。

そう、あの人である筈は無い、そんな筈……

「ねえ、マジで大丈夫？」

「…………え？　　ッ！　　うわっ!？」

声のした方に顔を向けると、すぐ鼻先にナツさんの顔があった。俺は反射的に仰け反ってしまう。

「な、な、なんでそんな近くに!？」

「だ、だって……暗くて顔色が判んなかったんだもん。なんかアンタ具合悪っぽそうだったし」

どうやら心配させてしまったようだ。

「……ごめん、具合が悪い訳じゃないんだ。ちょっと悩ましい事態になってさ」

「あのさ、別に何も起きて無くない？　アンタ一人で何やってんのよ。……これってさ、その、つまりアンタって今、病気……な感じ？」

言い難そうにしつつもズバリ訊いてくるナツさん。だが、そう思われても仕方がない。

「もう終わったから大丈夫。さ、帰ろうか」

「……終わったんだったらさ、説明しなさいよ。ひかるに関係ある事なんでしょ？ アタシ、そろそろ我慢の限界。教えてくんなかったら、無理矢理ここに連れ込まれたって言いふらす」

「濡れ衣じゃんっ!？」

「だったら、とつとと、説明」

もしかしてナツさん、実はかなり怒っているのか？
だったらここまで付き合う事無いだろうに。
これも水沢を想う故なのだろうか。

「は、話しても理解して貰えるかは……」

「それ、決めるの、アタシ」

「ご、ごもつとも……」

少し心が痛むが、ここは昨日話した内容の延長で誤魔化そう。

「……昨日の放課後の話、憶えてる？」

「え？ どの話？」

「俺が水沢と関わるようになったキツカケ」

「……えーと？　ひかるの前でフラッシュバック起こしたってやつ？」

「前でって言うか、俺が発作を起こしてた時に、水沢がたまたま傍に居たんだ」

「ああそっか。なんだっけ……昔会ったひかるのママの幻覚を見てたんだっけ？」

「それ。つまり、今日もそれ」

「……ひかるのママの幻をここまで追って来たって事？」

「そう」

「ワケわかんないかも。大体、幻って判っててなんで追うのよ」

「え？　ええと……な、何か、情報が得られるかな、って？」

「幻から？　なんの情報よ」

「う……。だ、だから……き、記憶だよ。うん、そう。何か水沢のお母さんの事を思い出せるかなって思ってたさ。ほら、居なくなった理由とか、思わぬ情報が俺の中に有るかもって」

「……ひかるの為に、何かひかるのママの事を思い出したかったって事？」

「まあ、そんな感じ」

ゴメンナサイ、俺、君に嘘ばかりです。

「ふっふん……」

相変わらずここは暗くて、ナツさんの表情を正確に読み取れないが、絶対に納得していないと思う。

「んで？ ひかるのママの幻さんは、何か情報くれたの？」

「えっと、まあ……」

「マジで？ それってアンタが何か思い出したって事よね、何を思い出したのよ」

あ、しまった。何も無いって言えばよかった。

「あ、き、今日じゃないよ？ 前の時、前の時。言ったら？ 俺が水沢のお母さんから聞いたと思われる言葉を口走った所為で、それを聴いた水沢が、俺とお母さんを関連付けたんだ、てさ」

「ひかるとひかるのママしか知らないってやつでしょ？ 何よ、それだけなわけ？ 今日ほただ幻覚見ただけ？ こんな場所にまで来て何も思い出せず終い？」

「ごめん……」

「はあ……」

暗い部屋に大きな溜め息の音。

ちょっと不条理を感じる。

何度も言うが、ナツさんは勝手に付いて来たんだぞ。

「ねえ」

「はい？」

「ひかるとひかるのママしか知らない事ってどんな事？ 親友のア
タシにも話してない事なの？」

「水沢は誰にも話してないって言ってたぞ」

「訊いちゃダメ？」

ナツさんになら問題ないかな？

「『カルチヨ』と『三角草』って、水沢から聞いた事あるか？」

「ミスミソウはひかるが好きだって言ってた花ね。カルチヨは……
あれ？ サッカー……だっけ？ フランス語？」

「いや、イタリア……語……」

あれ……？

「あ、そうそう、イタリア語でサッカーの事か。……って、それと
ひかるになんの関係が？」

「……サッカーの事じゃなくて、水沢の小さい頃のニックネーム……
…母親がそう呼んでたんだって……」

「そうなの？ 聞いた事無かったわ。……ひかるには悪いけど、変なあだ名ね」

「……『ひかるちゃん』が崩れて『カルチヨ』になったらしいけど……。あの、ナツさん？」

「なによ」

「今、カルチヨって聞いた時、なんだと思った？」

「いや、だからサッカーだってば」

「それ以外だったら？」

「は？ ひかるのあだ名なんでしょ？」

「最初に聞いた時、誰かの事だと思った？ えーと、誰か個人の事を指した言葉だって、少しでも過ったりしたか？」

「うーん？ 誰かの名前かと思ったかって事？ ……思わないですよ、ふつう。アタシ、真っ先にトトカルチヨって言葉が浮かんできたし」

「……………」

——でも、カルチヨっていうのは誰の事でしょうか

「で、それが何？」

なぜあの人は誰かの呼び名だと思ったんだ？

「おい？ 因幡？」

俺もナツさんと同じく、初めて「カルチョ」と聞いた時は、人のあだ名だとは全く思わなかった。

「ちょっとちょっと、もしかしてまたあ？」

つまり、あの人は知っていたという事か？

知らないフリをしようとして、うっかり口を滑らせた？

「仕方ない、もっかい引っぱたくか……」

あの、ビジョンで見た「京助」という人物は……

「せーのっ……」

……高井京助先生、なのか？

——ガチャ

「へ？ なんの音？」

「え？ アタシまだ何もしてないケド？」

音のした方向、ドアの方へと目を向けると、何かがここへと入って来た。……台車？

「って、やばっ！」

パチッ

入って来たものが何か理解した瞬間、部屋のメインライトが点けられた。

「……ん？ あ……す、す、すみませんっっっ！」

部屋に響き渡る、男性の謝罪。

電気が点いた事で状況が明瞭化する。最初に入って来たのは、シートやら枕やら掃除用具などが積まれた台車。そして、それそ押しながら入って来たおじさんが電気を点けたのだ。そのおじさんは、客がまだ居たと思い込んでいるようで、平謝りを始めている。

「もおおしわけありませんんっっ！ チェックアウトのシグナルが出てたので、てっきりもう居ないものと！ ほんとおおおにすいませええんっっ！」

詰まる所、まだ客の帰っていない部屋にスタッフがベッドメイクにきてしまっただけ合わせをした、といった状況なのだろう。こういうホテルで、急にスタッフが部屋に入って来てしまうのは致命的ミスだ。いや、どんなホテルでもか。

「い、因幡あ……」

ナツさんは、助けを求めるかのような視線を、こちらへと向けてきた。

気持ちは解かる。何せ、おじさんはまだ気付いていないが、俺達は制服を着ているのだ。俺に至っては、学校名が刺繍されているコートが羽織ってる。そもそもこのおじさん、昨日俺を注意した人じ

やないか。

……ナツさん、名前、呼ばないで欲しいぞ。

「あ……えと、も、問題無いですって。俺達、忘れ物を取りに来ただけですから。じ、じゃあ、俺達帰ります。お仕事頑張って……」

「ああ……はい。いや、ホントすんませ……ん？」

拙いっ、気付かれるっ。

「ホラ行くぞっ」

「きゃっ」

俺はナツさんの腕を掴み、その場から素早く離脱した。
どうか気付かれていませんように。

「因幡っ、どうすんのっ!？」

「どうするって……ここから出る。もう用は済んだんだから」

廊下を走りながら会話するカップル、迷惑な客もいたものだ。

俺達の事です。

客でもないし。

やがてエレベーターホールに着き、エレベーターを呼ぶべく、俺はボタンを連打した。

バシバシバシバシ……!

「こらこら、連打したって意味無いでしょ? やめなよ」

「いや、心が急かすもんだからつい。なんか、用が済んだら、ここに居る事が苦痛になってきてさ」

何故か今になって不安と緊張でドキドキしてきた。慣れない事はするもんじゃない。

「用が済んだ、ね……。アタシ、今なら一晩中アンタに質問できるわよ？　もう、ワケわんない事ばっか」

「夜はやメテ欲しいかな……」

「ものの例えよっ。それだけ訊きたい事があるって言いたいのだ」

「……解ってる」

チンッ

エレベーターが来たので、一旦話を止めて二人で乗り込んだ。『1』のボタンと『閉』のボタンを同時に押して、一階へと下りていく。

上がって来た時の騒がしさとは対照的に、二人は終始無言だった。そして、そのまま結局、ホテルを出るまでお互い口を開く事は無かった。

「んんー……よし。特に見咎められたりはしてないな。はあ……疲れた」

通りまで出てようやく緊張感が薄れてくれた。

「……じゃ、どっか店探そ？ 外じゃ寒すぎるわ」

「は？」

「話、じっくり聞かせて貰うからね」

「えっと……」

ナツさんは思いのほか食い下がってくる。俺が色々と誤魔化している事に、気付いているのかもしれない。しかし、俺が誤魔化さずに話したとしても、彼女が抱いているモヤモヤは解消されないだろう。

「ナツさんは、なんでそこまで水沢の事を気に掛けるんだ？」

「は？ 今更何言ってるの？ 親友だからに決まってるじゃん」

「なんていうか、親友というよりは、親みたいな心配の仕方に見えるんだ」

「意味解んないんだけど？」

「親ってさ、子供の心配に際限がないだろう？ だから子供の事ならどんな些細な事でも知れたがる。今のナツさんはそんな感じだ。知ってもしようがない事だってあるだろうに」

「……なんかムカつくわね。アタシは部外者だって言いたいわけ？ こっちからすればアンタの方がぽっと出なんだけど？」

「そうじゃなくて。例えば今回、出会って間もない男とラブホテル

に入るなんて、あまりにも軽率だ。いくら水沢の為だからって、あそこまでするのはおかしく感じる。今の水沢ってそんなに心配な状態なのか？ 連絡付かないって言ってもまだ二日、三日だろう？ ちよっと過剰というか、過保護じゃないかな」

「それは……そうかもだけど。……アンタには解んないのよ」

「水沢の危うさは俺にもなんとなく解るよ。ただ……」

「知った風な事言わないでっ！」

「……ッ」

「たかだか数回話した程度のアンタに何が解るってのよ！ ひかるが危うい？ アタシが過保護？ 簡単に言ってくれちゃって……！ いい？ アタシはね、中学でひかると出会った時から今まで、ずっとあの子を護ってきたの。だってあの子言うんだもん、自分にはアタシしか居ないって、アタシしか信じられる人は居ないって。分かる？ このアタシが今のひかるにとって一番近い人間なのよ！ 家族でもなく彼氏でもなく、このアタシが！ だから……だからアタシは、ずっとひかるの傍に居なきゃダメなの。誰よりあの子の事知ってなきゃダメなの。……だって、じゃないと、そうしないと……！ あの子……ホントに……死んじゃう……」

「！」

ナツさんは涙ぐんだ目を隠すように俯き、自分の身体を抱きしめる様な仕草をする。今の彼女はひどく弱弱しい印象で、今にも不安に押し潰されてしまいそうな、そんな雰囲気を感じていた。

一方の俺も、彼女の感情の吐露に、重苦しいものが胸を取り巻い

ている。

「ナツさん……」

「……………」

「水沢、本当は自殺を図った事があるんだな？」

「……………」

彼女は、コクンと、静かに頷いた。

「……アタシが、あの子の自殺を止めたのをきっかけに、友達になったの」

「そう、だったのか」

伊波千夏。

水沢ひかるの親友。

彼女は思った以上に重いものを背負い込んでいるのかもしれない。彼女の抱える不安や負担を解消するのは、とても難しい事だろう。それは——最初の段階で自ら胸に刻み込んでしまった重責。

水沢ひかるが居る限り、それは彼女について回る。

今、一番助けが必要なのはナツさんなのでは？

「ナツさん、俺、知ってる事全部話すよ」

「……………え？」

「ただ、ゴメン、少し時間をくれないか？ 話す前にまず、俺自身

が理解し切れてないんだよ」

「どういう事？」

「俺も状況がよく解ってないから、多分、今話しても疑問しか出て来ないと思う。だからちよっと待って欲しいんだ。けど、少しでも何か答えが出たら、必ず君に話すよ。包み隠さず全部」

「……………」

真剣な思いが伝わるように、ナツさんの目を真っ直ぐに見つめた。

「駄目、か？」

「……はあ。アンタが今話す気無いんだったら仕方ないじゃん。それでいいわ」

「ありがとう。……それとさ、その時は、どんな話だったとしても、とりあえず最後まで話は聞いて欲しいんだ」

「なんでそんな念を押すの？」

「俺は間違いなく真剣に話すつもりだけど、君はそう捉えない可能性が高いんだよ」

「ちゃんと真面目に聞くわよ」

「そうじゃなくて、ナツさんには……というか、普通の人には到底受け入れられないような話なんだ。それでも、どうか聞くだけは聞いて欲しい。その後、ナツさんが俺の事をどう思おうと、一切反論

はしないから」

「随分と気を持たせるのね、今すぐ聞きたくなるじゃない」

「そういうつもりじゃないんだけど、ゴメン」

「まあ、いいわ、聞きたがってるのはこっちなんだし。じゃあ、ケータイ番号交換しとこ？　話す気になったら電話頂戴」

「えっ？」

「なによなによー、嫌なわけー？」

「ああつと、そうじゃなくて……」

きっと他の人なら普通の事なのだろうが、俺にとっては、高校生になって初めての出来事だった。

何がってケータイ番号の交換。

「ケータイ出して。赤外線で送るから」

「は、はい」

という事はメルアドも教えてくれるのか……。き、緊張する、電話帳に友達を登録するのって何年振りだろ。

……えーと、ナツさんて俺の友達？

「因幡？」

「あ、ゴメン、今出す……」

ピリリリリリ…… ピリリリリリ……

「わっ」と

コートのポケットの中に手を入れた瞬間、そこに入っていたケータイが鳴り出した。驚きつつ慌てつつでそれを取り出して、誰からの着信か確認する。

「あれ、父さん？ ……って、あああああっ!？」

「きゃっ、な、何よ……」

約束の一時がすでに過ぎていた。

t i m e t o b e l i e v e n o w 1 4 (後書き)

『トラ』って何者かって？ 憶える必要は一切ありません。

あ、嘘です嘘です。

トラ君は、実はミケちゃん同様、主要キャラなんです。活躍はかなり先になりそうですが……。

あと、『ナツさん』、実はヒロイン格だったりします。

t i m e t o b e l i e v e n o w 1 5 (前書き)

ひかるちゃんのパパが登場です。

ひかるちゃんも、ちよびつと出てます。

time to believe now 15

一月三十日 日曜日 昼下がり

——ガラガラガラ……

「失礼しますっ。一年一組、因幡志朗ですっ」

職員室のドアを開けてそう言い放つ。

そこに居た人間全てに、目を向けられた気がした。と言っても今日は日曜日、教師の数は疎^{まばら}らだ。

「あ、因幡君、こちらです」

担任の広瀬川早苗先生の声。その声の出所を辿ると、来客用のソファの側で、手を挙げて立っている先生を見つけた。

見ればソファに父さんも座っている。

俺はやや急ぎ足でそこへと向かった。

「すみません！ 遅刻しました！」

着くなり、勢いよく頭を下げて広瀬川先生に謝罪をする。約束の時間から、優に四十分は過ぎてしまっているのだ。

「ええ、まあ、そうですね……。因幡君が遅刻なんて初めてかもしれませんね。でも、今日は無理を言って来てもらってる訳ですし、こうして来てくれただけでも良しといったところでしょいか」

「いえ、そんな、来ると約束して遅れたんですから、完全に俺の落ち度です」

「まあ、何にせよ、急いで応接室に行きましょう。因幡君のお父様はお忙しい方ですからね」

「父さん、ほんとにゴメン。折角時間を作ってくれたのに」

「ふむ、何かあったみたいだね。大丈夫かい？ 志朗」

「え……」

早っ。

父さん察するの早過ぎっ。

「表情が冴えない、少し消耗しているようだ。遅刻した理由が原因かな？」

俺はそんなに表に出易いのだろうか。

「……また“見た”んだ。それで少しこんがらがっちゃってる」

「何か新しい事が判ったのかい？」

「うん。やっぱりなんの証拠にもならなそうだけどね……」

「あの？ お二人とも、どうかしましたか？」

「おっと、失礼。では志朗、行こうか」

「あ、うん」

父さんに遅刻の理由を詳しく話したかったが、今はそんな余裕は無いようだ。俺の遅刻の所為で、先方を随分と待たせてしまっている。謝罪される側だとはいえ、これ以上礼を欠く訳にはいかない。

「あの、広瀬川先生、今日はこういった感じになるんですか？」

職員室を出た際に質問してみた。

考えてみると、これから何が行われるのか、いまいちよく判らなかったからだ。いや、もちろん水沢の父親に謝られるのだろうけど、学校側が仕切っているという事は、他にも何かあるかも知れない。

「お父様には少し話しましたが、水沢さんとお話し頂いた後に、学校側としての説明と謝罪を行いたいと思っています。他にも、再発防止の為の意見交換や、被害者側であるお二人のご要望などもお聞かせ願えればと……」

どうやら儀礼的に事が運ぶらしい。なんだか思っていたよりも大仰な対応だな、内々で済ます事になっているから、もっと簡素に終わるものと思っていた。ひょっとして、父さんの肩書が物を言っているのだろうか。

「こちらが応接室です。水沢さん達はずでにお待ちの筈です」

職員室の隣にある校長室の、更に隣が応接室になっている。ここは、この学校の生徒にとって、校長室以上に入る機会の無い部屋だ。もちろん俺も入るのは初めてなので、少し緊張を覚えてしまうのも仕方ない事だろう。水沢の父親に会う事への緊張も加わり、俺はや

や気後れしていた。

コンコン

「――どうぞ」

広瀬川先生のノックに、中から男性の声でレスポンスがあった。それを確認した後、先生はゆつくとドアを開く。ついに水沢の父親と対面の時だ。

「では、お二人とも、どうぞお入り下さい」

「失礼します」

「し、失礼します」

広瀬川先生に促され、父さん、俺の順で応接室に足を踏み入れる。

「本日は御足労頂き、誠に恐縮です」

初めに應對してきたのは校長先生だった。横には教頭先生も控えている。当然の如く俺の緊張感が増した。

「大変お待たせしてしまい、誠に申し訳ありません」

「あ、す、すいませんでした」

父さんに倣って俺も頭を下げる。

「いえ、さして問題は御座いません。どうぞ、あちらに……」

校長先生の指し示した方向に目をやると、そこには……

「……水沢」

意外にも、水沢ひかるが居た。

俺の視線に気付くと、隣に居る男性と示し合わせたように軽く会釈をしてきた。

「え……？」

「志朗、どうした？」

俺は思わず足を止めて固まってしまう。

水沢の隣に居る男性が目に入った所為だ。

まず間違い無く、この人が水沢の父親である筈。

しかし、その風貌は俺の想像していたものと、いや、あのビジョンから予想していたものとはかけ離れたものだった。

（違う。俺がビジョンの中で見た男性は、水沢の父親なんかじゃない）

「志朗、平気かい？ 何かあったのか？」

「……え、あ、ごめん父さん……行こう」

俺達は部屋の中央に配置されている応接セットのソファに着く。

「どうぞ、お掛け下さい」

そう促すのは四組の谷垣先生。

今、この部屋には生徒、保護者、教員が合わせて八人居た。

しかし、俺が主に目を向けているのは水沢の父親。近くで確認しても、ビジョンで見た男性とは絶対に違う。

そして、そのままなんとなく、彼から視線を外さずに腰を下ろした。俺に凝視されている事に気付いているのだろう、水沢の父親は少し居心地の悪そうな表情だ。

「では、水沢さん」

谷垣先生はそう声を掛けると、他の先生共々やや身を引いた。それと同時に、俺達の対面に居る水沢親子が立ち上がる。

「初めまして、水沢ひかるの父です。この度は、誠に申し訳ありませんでした。娘がご子息……？ に危害を加えてしまった事、深くお詫び申し上げます」

水沢の父親は、低くやや擦れた声でそう謝罪し、深々と頭を下げた。水沢ひかるもそれに合わせて同じように頭を下げる。

……何か今、「子息」のところで詰まっていたな。

もしかしたら父さんが高校生の親には見えな……

「んんっ！」

父さんが隣で咳払い。

釘を刺された気がするのは何故だろう。

「私が、因幡志朗の、父親、です」

なんでそんな区切るように？

「差支えなければ、名刺を交換して頂けませんか？」

「あ、ああ、はい、もちろん」

父さんの要望に応え、水沢の父親は名刺を取り出した。どうやら彼の名前を知る事が出来そうだ。

「私、こういうものです」

「恐縮です」

父さんが受け取った名刺を横合いから覗き込む。そこにはこう書かれていた。

《J I D 葛城興業（株） マーケティング部 部長 水沢隆三》

りゅうぞう
隆三。

直人でも京助でもない。

彼の名前は隆三だった。

「あ、あのっ、お年を伺いたいのですが……！」

「は？ 私、ですか？」

つい脈絡も無く訊ねてしまった。だが、こうなった以上は確認しておきたい。

「す、すみません。失礼は承知ですが、どうかお教え頂けませんか？」

「……五十六ですが」

訝しげな顔をしながらも教えてくれた。

五十六歳。

八年前なら四十八歳。

そう、俺が初めに驚いたのは、その春秋の高しゅんじゅうそうな見目形。

俺がビジョンの中で水沢の父親だと思っていた人物は、若い男だった。顔こそ確認出来なかったが、声や風貌からして、四十八歳なんて事は絶対はない。

もう確定してしまっていていいだろう、あのビジョンの男性は少なくとも水沢の父親ではない。

「志朗、少し気を散らせ過ぎだね。水沢さんが困ってらっしゃる」

「あ……、し、失礼致しました」

「あ、いえ。えー、それで今回の事です……。その、今後このような事は二度と起こさぬとお約束致します。娘も深く反省しておりますので、何卒ご容赦頂けないでしょうか」

水沢の父親・隆三氏は、特に俺へと宥ゆうじょ恕を求めてきた。俺の中では元々問題にはしていない事なので、当初の予定通りこの謝罪を受け入れて、一昨日の件は落着させる。

「幸い、僕に怪我はありませんでしたし、水……ひかるさんに一方的な非がある訳でもありません。僕自身は、喧嘩が少しエスカレートしてしまったというような認識なので、これ以上問題を大きくする事を望みません。ひかるさんがいいのなら、今回の事はお互い水に流せればと考えています」

「それで、よろしいので？」

今度は父さんに向けての確認のようだ。

「当人がこう言っている以上、私に否やはありません」

「寛大な御心遣い、痛み入ります。……ほら、ひかる」

父親に声を掛けられ、水沢は俺と視線を合わせる。

「……因幡君」

今日、初めて聴く水沢の声。

声色からは落ち着いている印象を受けた。特に緊張していたり、委縮している様には見えない。もっと言えば、悪怯れた様子も見受けられない。かと言って、反感や敵意も感じられない。

ようするに、彼女は普通だった。

「本当にごめんなさい。あの時の私、どうかしてたよ」

そう言って頭を下げる彼女に淀みは無かった。

「あの時」と彼女は言うが、状況はどこまで把握出来ているのだろうか。

「よく憶えていないっていうのは本当？」

「あの時の事？ ……うん、私、頭に血が上っちゃって。あとで先生から話を聞いた時は血の気が引いたよ」

「憶えていないのに、先生の話は信じられたのか？　自分はそんな事してないって思わなかった？」

「……最初はそう思ったけど、実際に因幡君は気絶していたし、私自身も先生たちに押さえ付けられてたから」

状況証拠から判断したという訳か。だからと言って、そうそう受け入れられるものなのだろうか。

人を殺しかけた、なんて事。

「正体を失う前まで俺と何を話していたかは憶えてる？」

「え？　えっと、それは……その……」

目に見えて落ち着きが無くなった。

どうやら憶えているらしい。

だが、今ここであげつらう必要は無いか、母親の話題は一旦置いておこう。

「じゃあさ、あんな風になった事って前にもあった？」

「……………」

水沢は少し考えるような仕草を見せる。

俺の視界の端では彼女の父親がピクリと反応していた。

「……ううん、あんな事は初めて。自分でもなんであんな事をしたのか……」

「そう、か」

自覚が無いのか、あるけど隠したのか。

「許して、くれるかな？」

「さっきも言った通りだ、お互い水に流そう」

「ありがとう、因幡君……」

そこで少しだけ笑みが見えた。

今日の彼女は穏やかで、口調も柔らかい。こんな女の子が男の首を絞めたなんて信じられるだろうか。当事者である俺と、現場に居た教頭先生以外は、みんな当惑しているかもしれない。

それが父親ならなおさら……

「父親として恥ずかしい限りです。娘にはきつく言い聞かせますので」

「……………、いえ……」

隆三氏にこの件に関する異論は無いようだった。

少しも疑問に思わないのだろうか。

娘が何故そんな事をしたのか、事の経緯なりを俺に問い質してもいいようなもののな。いくらなんでもあっさりし過ぎだろう。

「よろしいでしょうか？」

割って入って来たのは校長先生。俺達がここへ入って来た時の妙な表情が、幾分軽いものへと変わっていた。

「和解も為ったようなので、学校としてのこの件に関する説明を行ってもよろしいですか？」

そこからは学校主導で話が進められた。

不手際の陳謝から始まり、学校側の見解、今後の対応、再発防止における所信表明、等々。

それは、きわめてお役所的なものだった。事の早期鎮静が最優先。責任の所在などには一切言及せず、水沢があんな事をした理由にも、俺の学校での境遇にも、結局触れられず終いだ。

少なからず学校に対する不信任は募ったが、余計な話が出なかった事は、俺的に幸いと言える。

水沢サイドも長引く事は避けたいようで、特にアクションは起こさない。

ただ、父さんは、終始眼鏡を外したり掛け直したりを繰り返していた。父さんには、感情的になりそうになると、眼鏡をかけ直して冷静さを取り戻すというアルゴリズムがある。隣に座っていて気がじゃなかったが、広瀬川先生がひどく申し訳無さそうの顔でフォローを入れてくれたお蔭か、父さんは最後まで冷静さを保ってくれた。

「――えー、学校からは以上ですね。何か他にご不明な点はございますかな？」

校長先生のやや一方的な会見がようやく終わる。そこに神妙さはすでに無く、きつと責任を果たしたつもりになっているのだろう。元々、学校側の責任は薄いので問題は無いが。

「それでは、今日のところは……」

「失礼、校長先生、少しお待ちを。……水沢さん、もう少しお時間

宜しいですか？ 出来れば、我々保護者だけでお話したい事が」

本日の締めに入ったところで、父さんが隆三氏にそう言った。

「我々だけでですか？ まあ、そちらのお望みとあらば」

「感謝します。……そういう訳で校長先生。この場をもう少しお貸し頂けないでしょうか」

「はい？ ああ……ええ、それは構いませんが……。お二方だけでお話を？」

「ええ、子供達のプライバシーに関わる話も出そうなので、先生方にはご遠慮願いたいのです」

「ふむ……。分かりました、私共は退室いたします。終わったら職員室に顔を出して頂けますかな？」

「はい、ありがとうございます。……じゃあ志朗、そういう事になったから」

「……。分かったよ父さん」

「ひかる、どこかで時間を潰していなさい」

「いい、先帰ってるから」

「一人で大丈夫か？」

「何言ってるの？ いつも一人で通ってるじゃない」

そうして、二人を残し、俺達は応接室を出る事と相成った。

「因幡君に水沢さん」

出た直後に話しかけてきたのは校長先生。

「二人とも、和解したのだから、これからは仲良くするんだよ?」

なんとも応え難い事を言う。そんな簡単な問題じゃないのだが。

「ええ、まあ、そうですね……」

俺は適当に言葉を濁す。

「……………」

水沢に至っては無言だ。

校長先生は、もはや責任は果たしたとばかりに、軽い足取りで校長室へと入って行く。教頭先生もそれに追従した。

「じゃあ二人とも、気を付けて帰るんだぞ」

谷垣先生は、お決まりのセリフを吐きながら職員室へと戻る。

「あの、二人とも、なんて言うか、ごめんなさいね?」

最後に残った広瀬川先生は、何故だか俺達に謝罪の言葉を述べた。

「何がですか?」

「学校の対応に不快な思いをさせたんじゃないやありませんか？」

「ああ……」

思えば広瀬川先生は、一昨日から学校側の対応に異を唱えていた。しかし、この学校の職員である以上、学校の方針には従わなければならない。そんなジレンマに苛まれているのだろう。

「俺は別に気にしていません。今回はこれで良かったと思います」

「今回は、ですか……」

別に何かを含んだつもりは無かったのだが、先生は重く捉えてしまったようだ。

その後、二言三言交わしてから、広瀬川先生は職員室へと戻って行った。

「ふう……」

「……………」

廊下に残ったのは、俺と水沢ひかるの二人だけ。

「じゃ……」

「待った」

水沢が去ろうとするのを慌てて止める。一つだけ言っておきたい事があったのだ。

「ナツさんが心配してた。今日、部活で来てるから会って行ったら？」

「ナツ？」

水沢が怪訝な表情を見せる。

「ケータイ切ってるんだって？　なんか、随分と会いたがってたぞ」

「……………。……因幡君」

「ん？」

「アンタってナツと親しかったっけ？」

「いや、昨日知り合ったばかりだ」

「昨日？」

「君の事を心配するあまり、俺を体育館裏に呼び出したんだよ。『ひかるに何したの』ってね。その時に少し話をしたんだ」

「もしかして、ナツは今回の事を知ってるの？」

「一通り説明してある」

「そうなんだ……」

水沢の表情は冴えない。ひょっとして、ナツさんには知られたく

なかったのか？

「なんで電話出てやらないんだ？」

「……私の勝手でしょ」

「勝手って……」

「いいからほっといてっ」

一気に機嫌を悪くした水沢は、足早に俺の前から去っていく。

「おい！ 帰りに会ってった方がいいって！」

「ほっといてって言うてるでしょっ！」

俺の忠告をけんもほろろに突っぱね、水沢は廊下を曲がって行ってしまった。これで、この場に残されたのは俺一人となる。

「……………」

俺は、今さっき出て来た応接室のドアを見つめながら、しばし思案。

少しだけ逡巡したのち、思い切ってドアを開き中に入った。

「ん？」

最初に目に入っしたのは、隆三氏の少し驚いている表情。それに氣付いた父さんがこちらを振り返った。

「ああ志朗、思ったより遅かったね」

父さんに驚いている様子は無い。
やっぱりそういう事だったか。

「あの、因幡さん？」

「ああ、すみません。実は息子が、ひかるさん抜きで、水沢さんと話をしたいそうなんですよ」

「ひかる抜きで？」

決して事前に示し合わせたわけでは無かった。しかし父さんは俺の意を汲み、暗黙の裡に隆三氏とだけ話が出来る場をセッティングしてくれたのだ。

……俺が気付かなかったらどうしてたのだろう。

「すみません、水沢さん。水……ひかるさんや先生方の前では話し辛い事でして」

「ええと……私と、その……志朗君だけで話したいという事ですか？」

「あ、いえ、父も一緒に。主にひかるさんに聞かれない話なんです」

「はあ……」

隆三氏は俺の言葉に少し困惑しているようだ。先程は「水に流す」と言っておきながら「話がある」では無理も無いと思う。

「えっと、父さんの方はどんな話を？」

「大した話はしていないよ、場を繋ぐ為の世間話さ。志朗が話すといい」

父さんは立ち上がり席を俺に譲る。俺は少し緊張しながら隆三氏の正面に座った。そして、制服の内ポケットの中に入れていた物を取り出し、テーブルの上に置く。

「まず最初に、これをお返しします。ひかるさんに渡して下さい」

「ん……？」

隆三氏は、俺の差し出した物を手に取り確認した。

「これは、ひかるとさとみの……」

それは、水沢母娘の写真。

敢えて水沢ひかるには返さなかった。

「さとみさん……と、仰るんですね、奥さんの名前」

ビジョンの中で水沢の母親が呼ばれていた「亜季」という名前も偽名だったようだ。

「この写真はひかるから？」

「はい。……ご説明致しますと、僕とひかるさんが知り合ったきっかけは、彼女のある勘違いが始まりなんです」

「それは？」

「僕が、失踪したお母さんの行方を知っている、と」

「ッ！」

「もちろん僕は知りません。だけどひかるさんは納得してくれなくて、その写真で確認を求めてきたんです。それが一昨日の放課後の事。ご存知の通り、そこで悶着が起きてしまったので、返しそびれていました」

「やはり、母親の事が原因だったか……」

「やはり？」

「あっ」

隆三氏は、失言とばかりにバツの悪い顔をした。

「……水沢さん、実はですね、僕はある程度の事情を知っているんです」

「……なんですって？」

「お母さんの事はひかるさん本人から。そして、ひかるさんの事は伊波千夏さんから話を聞きました」

「そう、だったんですか……ふうー……」

隆三氏は、眉間に皺を寄せながら目を瞑り、大きく息を吐く。主観だが、観念したといった様相だ。

「志朗君、そして因幡さん」

俺と父さんの両方に声を掛けてから、彼はおもむろに立ち上がった。

「改めて謝罪します。申し訳ありません、娘の行動は予見出来得る事でした。父親である私の落ち度です」

そう言って再び深々と頭を下げた後、隆三氏はとつとつと事情を話し始める。その内容は概ね俺の思い描いていた通りだった。

水沢は、母親に関わる事となると心が不安定になり、時々異常な行動を起こすという事。

母親の死を匂わす他人の言動には特に反応し、自分を見失って暴れ出した事が何度かあるという事。

隆三氏が母親の法的な死を伝えた際にも我を忘れるほど激昂し、抑えようとした彼に軽傷を負わせたという事。

そんな中起こった今回の事件。

「――一昨日の夜、ひかるを送って下さった谷垣先生から話を伺った時は、頭が真っ白になりました。私の考えが甘かったんです。あの子が感情的になるのは身内にだけだと、勝手に決め付けておりました。千夏ちゃんに物を投げ付けたという事は知っていましたが、大事には捉えていませんでした。だから、まさか……人を殺しかける程の事をするとは……。でありながら、相手側……つまり志朗君が、寛容にも事を大きくしないと申し出てくれた事に甘え、問題を先送りにしようとしてしまった。面目次第もございません」

隆三氏は、自分が不誠実であった事を認め、真情を吐露した。彼は、娘が抱えている問題を、認識してはいたようだ。ただ、その認識が甘かった。

彼の失態は、今回の事件を止められなかった事ではなく、この時まで娘を放っておいた事、そう感じずにはいられない。

「水沢さん」

ずっと黙って話を聞くだけだった父さんが、このタイミングで口を挿む。見れば眼鏡を外していた。そして、それを掛け直しながら言葉を紡ぐ。

「貴方は先ほど、今後このような事は起こさないと仰いましたが、具体的にはどうなさるおつもりで？」

「そ、それは……」

隆三氏は言葉に詰まる。今さっき、問題を先送りにしたと自分で言っていたのだから、考えなどはないのだろう。

「水沢さん、私の息子は、貴方の娘さんと同じく、幼い頃にやや特殊な形で母親と死別しております」

「え……？」

「と、父さん？」

「その際に息子が負った心の傷はとても深いもので、今も尚、専門医師の力添えの元で生活を送っています」

「なんと……」

「私は学びました。心に傷を負った人間を、自分のものさしだけで推し量ってはいけないと。息子やひかるさんの様に、幼くして母親を失った子供は、どんなに平気そうに見えたとしても、見過ごしてはいけない傷を負っているものなんです。私は幸いにもその傷に気付く事が出来ました。水沢さん、貴方はいかがでしょう。娘さんの心の傷に、気付けませんでしたか？ そんな筈は無いですよね？」

父さんが俺の身の上話を始めた時は少し驚いたが、どうやら言葉に説得力を持たせる為の引き合いだったようだ。別に隠している訳ではないので話されても問題は無いが、敢えて聞かせたい話でもないので、やや複雑な心境だった。でも、これで彼が、娘との向き合い方を考え直してくれるかもしれない。

「……因幡さんの仰りたい事は解ります。実は一度、ケースワーカーに相談した事があるんです。その時にカウンセリングを受ける事を勧められました。しかし、私は未だ踏み切る事が出来ません」

「それは、世間体を気にして、という事ですか？」

俺も思い浮かべた疑問を、父さんが質問してくれた。

「ええ……お二人の前で言うのは気が引けますが、一度精神を疑われると信用の回復は至難」

それは……よく解る。

身を以て知っている。

だけど……

「……世間とはそういうものなのです。私は娘を差別に曝す事は出来ない」

……ッ！

「そんな悠長な事を言ってる場合じゃないでしょうっ！」

俺は思わず声を荒げてしまった。

彼の言い分は痛いほど理解できるが、そんな事に構っている場合ではない筈。

「な、なんですか急に……」

「躊躇っている間に水さ……ひかるさんが自殺してしまったては元も子もないと言ってるですっ！」

「じさっ……何を言ってるんだ君は!？」

「えっ……?」

隆三氏は心底驚いている様子だった。

もしかして知らないのか？

ナツさんは話していない？

「何故あれが自殺しなければならぬ! そんな事する筈無いだろう!？」
おかしなことを言わないでくれっ！」

「水沢さん、お怒りはご尤もですが落ち着いて下さい」

怒り心頭の隆三氏を父さんが宥める。

先に感情的になった俺はというと、すでに毒気が抜かれていた。

「これが落ち着いて……！」

「話を聞きましょう、切って捨てるには気になる話です。……志朗、何故ひかるさんが自殺すると思ったんだい？」

少しだけ話すべきかどうか悩んだ。ナツさんが話していないという事は、水沢が父親に隠している可能性があるからだ。

「……その、水沢さんは、伊波千夏さんはご存知なんですよね？」

しかし、やはり父親なら知るべきと考え、話す事にした。

「……娘の友人だが、それが？」

「二人が友達になったのは、伊波千夏さんがひかるさんの自殺を止めたのが始まりなんだそうです」

「なん……だって……？」

「そして、度々自殺をほめかすひかるさんを、千夏さんがいつも説得して止めてきたと言っていました」

「まさか、そんな……」

にわかには信じられないといった様子だ。誰かを傷付ける可能性は予見しても、自身を傷付ける可能性は全く考慮していなかったらしい。

「……千夏ちゃんは何故話してくれなかったんだ……」

誰に訊ねるでもなく、隆三氏はぼそりと呟く。話自体は信じたらしい。

「と言うよりは、ひかるさんがお父さんに知られたくなかったんだと思います。千夏さんはひかるさんの意向を汲む人ですから」

「……………」

レスポンスは無かった。

彼は口を押えながら考え込んでいる。

俺も父さんも黙って彼が口を開くのを待った。

「……お二人とも、先程は感情的になってしまいました。娘とはちゃんと向き合ってた。……志朗君、話を聞けて良かった。娘とはちゃんと向き合ってた話をします。そして、しかるべき措置を」

「……では、精神科に？」

「いえ、ケースワーカーに紹介された臨床心理士にまず頼ろうかと。精神科医には少し苦い思い出があって、いまいち信用が置けないんです」

精神科医に苦い思い出？

「あ、あの、それってどういう事ですか？ あ、いえ、干渉すべきじゃない事は解っているのですが、精神科に掛かっている身としては、凄く気になってしまってます」

「ああ、別に君の先生を非難するつもりは無いんです。ただ……私の妻は、精神科に掛かってからむしろ悪化して……結果はご存知の通りです」

彼の妻、つまり水沢の母親が精神科に？

その時の医者って、もしかしてあの人じゃ……。

「ど、どこの病院ですか!？」

「は、はい？」

「奥さんが掛かった病院です！ どこですか!？ 教えてください！」

「え、えっと……確か、大崎……クリニックだったかな……」

「お、大崎……?」

「……もしかして、君もそこに?」

「い、いえ……」

俺は取り乱してしまった。

短絡的に、水沢の母親が児の手柏医院に掛かっていたのではと考えたのだ。

そして、そこであの人に会った、と。

しかし、冷静になってみればあり得ない話だった。何せあの人が見の手柏医院にやって来たのはごく最近の事。

今の話で、一瞬二人に繋がりが見えたかと思ったが、どうやら俺の早とちり……待てよ? その大崎クリニックにあの人が居たのだとしたら?

「み、水沢さん、その時の医師の名前は判りますか？」

「医師の名前？ さすがにそれは……。でも、大崎クリニックというぐらいだから、大崎なのでは？」

「若い先生でした？」

「いえ、年配の方でしたよ」

「そう、ですか……」

違ったようだ。

そもそも、八年前では、まだあの人は医師ではなかったんじゃないだろうか。正確な年齢は知らないが、三十前後とするなら当時はまだ医学生、よくて研修医だ。

いや、もしかしたら見た目よりも歳がいつているのかも。

……駄目だな、どうしてもあの人と繋げようとしてしまう。チカラには疑問を持たなければいけないんだ。

俺のチカラは証拠にならない。

それを忘れてはいけない。

「水沢さん、奥さんのご病気と失踪に関連は認められるのですか？」

俺が考え込んでいると、父さんが代わって話を続け出した。

「え？ あの、そうだと思いますが。警察もそういう形で搜索していましたし」

「ふむ、特異行方不明者として受理されているのか……。という事

は、奥さんには自傷他害の恐れがあったので？」

「その、うつ病でしたから、自殺を図る可能性はあったかと……」

うつ病？

そんな風には見えなかったのだが。

「遺書は残しました？ 遺書でなくても、奥さんの希死念慮が客観的に読み取れる物証とかは？」

「父さん？ 何を聞きたいの？」

「捜索を行ったという事は、事件性や緊急性が認められたという事だ。ただ居なくなっただけでは、警察は動かない。だから、さとみさんが自殺する可能性を明確にする何かがあった筈なんだ」

水沢の母親の死因が自殺。

その発想は無かった。

「……妻は出掛けると言って家を出て、そのまま帰って来ませんでした。その際、財布や私物などを持ち出さなかった為、警察は緊急性があると考えたようです。……あの、因幡さん、何故このような話を？ 先程申したとおり、妻の死は法的に認められています。私の中では、もう終わった話なんですよ」

「これは失礼。ただ、貴方の中では終わっていても、娘さんの中では果たしてどうでしょう」

「ッ……それは……」

水沢にとっては、これっぽっちも終わった話ではない。それは火を見るより明らかだ。

「どうしろと言うのです……。もう一度妻を探せとでも？ 大体、因幡さんは妻を見つけられなかった警察の人間でしょう。こちらの心情も察して頂きたい」

「それに関しましては、返す言葉もございません。同じ警察の人間として、力至らなかった事、申し訳なく思います。ですが水沢さん、私はですね、今更何をとされるかもしれませんが、奥さんの失踪に事件性を感じております」

「は……？」

「ちょっと父さん！？」

「言ってしまうえば、殺人事件の可能性もあると思っています」

「……………」

隆三氏は絶句した。

かく言う俺も言葉を失う。

父さんは、俺の話を信じてくれてはいても、水沢の母親が殺されたという事には懐疑的だった筈。

一体、何を以て考えを変えたのだろう。

「と、いう訳で、志朗。君の出番だ」

「はあっ！？」

「む、息子さん？」

父さんは突然俺に話を振ってきた。俺は完全に聞く態勢だったの
で、頭が混乱する。

「え？ 何？ 俺？ え……どうしろと？ はい？」

「ほらほら、落ち着きなさい。志朗の考えの裏付けを取るチャンス
じゃないか。それに今日は、何か新しい展開があったのだろう？」

「って言われても！」

俺がなかなかパニックから抜け出せずにいると、父さんはおもむ
ろに俺の耳元へと口を近づけてきた。

「……志朗、今、水沢さんは非常に関心を引かれている筈。踏み込
んだ話も出来るかも知れないぞ」

「あの、どういう事ですか？ 妻が殺されたって？ 息子さんが何
を知っていると？」

「……ほらね？」

「……………」

老獪な刑事がそこに居た。確かに今の隆三氏なら、訊きようによ
っては、色々と話してくれるかも知れない。しかし、こんな形で丸
投げされても、一体どうすればよいのやら。

「志朗なら大丈夫。僕は君を信じているよ」

今は信用よりも、アドバイスが欲しい。

「えーと、ですね……、あの、水沢さん」

「ええ」

隆三氏は、やや前のめりに耳を傾けてきた。

うう、どう話したのか。

奥さんの幽霊が――などと口しようものなら、そこで話は即終了するだろうし……。

「ええ、あの、ひかるさんから聞いたのですが……。当時、ひかるさんがお母さんと一緒に居る為には、まとまったお金が必要だったそうですね？」

とりあえず、俺の見たビジョンが、現実が符合しているかを確認する事にした。

「ッ……ひかるが、そう言ったので？」

「え、ええ、まあ……」

嘘です、ゴメンナサイ。

「そ、その事は奥さんにとって、とても大きな問題だった筈。そこに失踪の原因があるのではないのでしょうか。……と、ひかるさんは考えていたようです」

「……………。ひかる……気付いていたのか」

「気付く、とは？」

「え？ 離婚の事では？」

離婚っ！？

「ッ……う、あ、ああ、みたいですわ……。えっと、だから奥さんは、うんと……ひかるさんと暮らす為のお金が必要だったと」

「それは……少し違います」

「へ？ と、と言いますと……？」

「離婚後の親権は、ほぼ間違いなく私の元へ来た事でしょう。妻の離婚後の経済面での問題よりも、彼女の病気の事の方が重視されたでしょうから」

「うつ病……」

「ええ。でなければ、私が親権を得られる可能性は低かったでしょうね。この国では、基本的に母親の親権が優先されますから」

「……しかし、奥さんは経済的な問題と捉えていた？」

「そう、だったかもしれません」

どうやら俺の見たビジョンは、現実と符合していたようだ。離婚は予想外だったが。

「お金が無ければ娘と引き離される。そのストレスが原因でうつ病に……」

「いえいえ、逆です。うつ病が原因で離婚に至ったんです」

「そうなんですか？」

「……妻が病気になった原因は、私の親族との折り合いが悪かったからなんです。だから、彼女が病気を治すには、私達から離れる必要があったんですよ……」

親族との折り合いが悪い、か。
なんとなく想像はつく。

水沢の話では、水商売をやっていた母親を、父親が見初めたとの事。しかも、その時の母親は実は未成年で、その上いわゆる出来ちゃった婚。さらに二人の年齢差は二十以上。
風当たりの強さは半端じゃなかった筈だ。

「それで、妻が殺された可能性に、この話がどう繋がるので？」

「え？」

「はい？」

……そう繋げなければいけないんだった。

「その、実はですね。奥さんはお金を得る為に、何と言いますか……まずい手段を取ってしまったようでした」

「まずい手段とは？」

「ある男と共謀して恐喝行為を……」

「志朗、ちょっと待った」

父さんが急に遮ってきた。しかし、隆三氏は俺の言った事が判ったようだ。

「い、因幡さん、今の話は……。恐喝？ 妻が？ 男って？」

「すみません水沢さん、ちょっと息子と話させて下さい。……志朗、今の話、証明出来るのかい？ 出来ないのなら不用意に話すべきじゃない」

「えっと、その男と被害者は特定できるかも知れない。ただ、さとみさんの失踪に関係しているかは、まだ自信が無い」

「……………。……志朗が昨夜言っていた、彼が……と言う可能性の方は？」

「あっ」

そうか。

そうだった。

俺は水沢の父親を疑っていると、昨日父さんに話していたんだっ
た。

それで父さんは隆三氏に疑いの目を向けてしまっていたんだな。
だからこんな展開に持ち込んだのか。

「ごめん父さん、言うのが遅れた。俺がビジョンで見たのはこの人

じゃなかったんだよ、今日会ってそれが判った」

「ふむ……」

「あの、一体なんの話？　息子さんの話を詳しく聞きたいのです
が……」

「いえ……」

父さんは問いかけに応じない。頭を整理しているようだ。

隆三氏は代弁を求めるかのような視線を俺へと送ってきたが、応じて良いものか判断がつかなかった。

「……水沢さん」

わずかな時間応接室を支配していた静寂を、父さんが破る。

「奥さんの件、真相をお知りになりたいですか？」

「し、真相とはどういう事です？」

「奥さんが居なくなってしまった本当の理由は、結局判明していませんよね？　貴方は終わった話と仰っていましたが、今でも知りたい気持ちは残っていますか？」

「それは……もちろんあります。しかし、もう八年も前の事。その、離婚の意思を固めた直後に起きた事なので、在らぬ疑いを掛けられるのではと不安になり、正直、これ以上は事無きをと願ったりもしました。仮に、因幡さん達の仰るような可能性があるのなら、今更蒸し返して欲しくないというのが本音です。……そんな真相、娘

になんて伝えればいいのか……」

「ですが、娘さんにとっては知るべき事ではないでしょうか。娘さんに向き合う為には、奥さんの件を避けて通る訳にはいかないと、私は愚考します」

「そ、それは……。……あの、そもそも息子さんはどこからそんな情報を？ 八年前、警察からそんな話は一言も出なかった。何故今になって、しかも無関係である息子さんから……」

一番されたくない質問だった。

しかし、至極当然の質問でもあった。

父さん、何かフォローを……

「志朗、ご説明を」

「……………」

……してくれないようだ。

期待を込めた視線も、やんわり弾き返されてしまった。

俺が行くしかないのか……。

「その、まだ確証が無いので詳しくは言えないのですが、奥さんと共謀していた男は、僕の知っている人かもしれないんです」

「き、君が知っている……？」

「志朗、それは本当なのかい？」

隆三氏のみならず、父さんまでもが驚きを示す。

「あ、いや、だから、確証は無くて……」

誤魔化そうとして、新たな疑問点を与えてしまったかも知れない。

「……うん、やはり調べてみるか。志朗の今後の為にも」

「え？ 父さん、今なんて？」

「フフ……これからもこういう事はあるのかもしれないからね。モデルケースにしよう」

「？」

父さんの言っている意味はよく解らなかった。

「あの……？」

隆三氏には更に解らない事だろう。

「水沢さん、奥さんの件、少し調べ直してみようと思います」

「は？ だ、だけど……」

「ああ、単に公私混同で職権乱用するだけなので、大事にはしません」

「と、父さん、なんでそんな言い方……？」

「但し、立件出来るような事柄が見つかった場合は、然るべき処置

に出ますがね。……ときに水沢さん。蒸し返されると貴方に何か不利になるような事が……有ったりしますか？」

「な、し、失礼なっ、私は潔白です！」

「安心しました。えー、では、捜索願いはどちらの警察署に？」

「ほ、穂ノ上東署、ですが……」

「では、この後ちょっと寄ってみます」

「そ、そう、ですか」

隆三氏は呆気にとられていた。

今の父さんは刑事モードらしいし、こうなったらもう止められない。何かしらの結論が出るまで、父さんは水沢の母親の事を調べるだろう。

「水沢さん、何か判った場合はすぐにお知らせする事をお約束します。貴方の方も何か思い出した事があったら、名刺の番号にお電話下さい」

「わ、分かりました……」

有無を言わさぬ勢いで押し切る父さん。見た目からは想像出来ぬであろうその迫力には、ギャップも相俟って誰もが気圧される。

「志朗、ギャップがなんだって？」

「いいいい言っていないよね?!」

眼鏡に光が反射して表情が判り難くなった父さんは、要注意だ。

「さ、志朗、君にも事情聴取がしたい。河岸を変えようか」

「じ、事情聴取……？」

「そうだよ。……では水沢さん、今日のところはこれで。ですが、近いうちにまたお会いする事になるでしょう」

「は、はあ……」

「あつ、ちょ、ちょっと待って！ 最後にもう一つだけ……！」

「はい？」

これを訊いていなかった。一番気になっていた筈なのに。

「奥さんが行方不明になった時、つまり、家から出て行った時、ひかるさんはどこに居ましたか？」

「どこって……遅い時間だったから寝ていた筈ですが」

「筈？ 確認なさっていないんですか？ 寝ていたところとか」

「確認は……していませんが」

「なら、お母さんに付いて行った可能性もあるんですね？」

「いやいや、朝は普通に起きてきましたし」

「つまり、朝に会うまでのひかるさんの行動は把握出来ていないと」

「行動って……だからあの子は寝ていたんだと……」

「確認、してないんですね？」

「それは、まあ……」

可能性は有り、か。

この憶測は外れていた方がいいんだが……。

「今のはどういった主旨の？」

「父に話しておきますので、あとでまとめて説明を受けて下さい」

「そう、ですか……」

少しシュンとさせてしまった。俺も父さんの事は言えないのかもしれない。

「ふう……やれやれ、なんとも妙な方向に話が行ってしまったものですな。……しかしまあ、妻の事は娘の為にも、どこか落としどころは無いか、とも思っていました。なんでもいいから、何か良い結果をもたらして頂きたいものです」

諦観の境地に至ったのか、内諾を与えたとも取れる発言だった。

しかし、彼の望む結果になる可能性は低いだろう。

そんな隆三氏に父さんが言葉を投げかける。

「お言葉ですが、どんな結果になろうとも、貴方のやるべき事は一つしかありません」

「と、仰いますと?」

「父親たる事、ですよ。大変ですよ、父子家庭って」

「……ふふ、ですね」

厄介な子供を抱えた父親同士、共感が為ったようだ。初めて隆三氏が笑顔を見せた。

「……ん? ……ッ! うわっ! ?」

「! 志朗! ?」

ビイイイイイイイイイ……!

俺は頭を抱えて崩れ落ちた。

耳鳴りの所為だ。

だが、これまでの耳鳴りとはわけが違う。

それは頭痛を伴う程強烈なもので、周りの音一切を遮る程だった。

「ぐっ……っ……!」

「……! ……!」

父さんが何かを言っているようだが、聞き取る事が出来なかった。

——……お願い……気付いて……

ノイズ混じりに誰かの声が聴こえる。父さんではない、これは…
…女の子の声？

「……見て……そして……聴いて……」

声がだんだんとはっきりしてきた。
この声……これはもしかして……

「こ、ことり、さん……か？」

それは、葉山ことりの声だった。

t i m e t o b e l i e v e n o w 1 5 (後書き)

因幡親子、後半強引でしたね。主人公は、父さんと一緒の時は強気になるのかもしれませんが。

……普段はヘタレ気味だけど。

いや、ヘタレだから、後ろ盾がある時は強気って感じでしょうかね。

そんなシロ君も、活躍の時間がじわじわと近付いてきております。次の次、くらいかな。

t i m e t o b e l i e v e n o w 1 6 (前書き)

ひかるちゃんのエピソードも佳境に差し掛かりました。今回は、ちゃんとひかるちゃんの出番あります。

t i m e t o b e l i e v e n o w 1 6

一月三十日 日曜日 日中午後

——ビイイイイイイイイイ……！

こここのところ頻繁に起こっている耳鳴り。
誰かが何かを伝えたがっている時に起こる現象、俺はそう認識している。

「ぐ……あ……」

しかし、こんな苦痛の伴う耳鳴りは初めてだった。耐える事に精いっぱい、他に気をまわす事が出来ない。

「——……ごめんね……つらいよね……」

耳鳴りの所為で周囲の音が遮断される中、唯一聞き取れるのが、この女の子の声。

「……がんばって受け入れて……そして……見て……」

「ことりさん……なん、だろ……？」

それは葉山ことりの声だと思われた。
去年の五月に初めて言葉を交わし、間を空けて九ヶ月振りに再会を果たした、すでに亡くなっている筈の少女の声。

「またも何かを伝えたがっているのは判るが、今回は何故こんなにも辛い形なのだろう。」

「……見て……私が見た事……聴いて……私が聞いた事……」

姿を見つける事は出来ない。だが、声はどんどん明確になってきている。

「分かつ……だから、これ……やめて……くれ」

耳鳴りの強さに加えて、激しい頭痛。ことりさんに応えてやりたいが、こんな状態では無理だ。

「……ごめんなさい……なんとか……受け入れて……」

ビイイイイイイイイ……！

そして、さらに強くなる耳鳴りと頭痛。俺がそれから逃れるには、意識を手放すほか無かった――

――気付けばそこは、見慣れた校門前。

どうやら俺は、またも傍観者の立場を得たらしい。

しかし校門前とは一体……？

俺は確か応接室にいた筈。

これまでは、俺自身が身を置いた場所で起こったと思われる出来事を目にしてきた。しかし今回、俺は応接室に身を置いていたというのに、何故か校門前の風景が目の前に。

周りの様子は……。

……何故だろう、視界が定点カメラの様に固定されている。自分の意志で周囲の状況を窺う事は出来ないようだ。

見えているものだけで判断するならば、今は学校を背にして校門前の通りを見渡している状態。陽光は左から。そちらが西なので時間は午後だろう。人通りは疎らで、生徒の姿は見当たらない。道行く人達は厚着で、ひどく寒そうにしている事から、今は冬だと思われる。

もしや、これは現在なのでは……？

「こんにちは」

不意に聴こえて来た男性の声。すぐにそちらへ目を向ける……事が出来ない。視界はゆっくり、ゆっくりと移り変わり、ようやく声の主と思われる人物を捉える。

「どうも、初めまして」

それは、紛れも無く、高井京助先生、だった。

「……どなた、ですか？」

高井先生が声を掛けたのは、もちろん俺ではない。それは、たった今校門から出て来たと思しき女生徒。

「ひかるちゃん、だよね？」

「そう……ですけど」

水沢ひかる、だった。

「ああ、ごめんごめん、そう警戒しないで……と言っても無理か。僕は佐藤直人、さとみさんの知り合いさ」

「えっ、今、なんて……？」

高井先生は本名を名乗らない。

そして、『さとみさん』と、水沢の母親の名を口にした。俺の心中は一気に吹き荒れる。

「僕は、君のお母さんの知り合いなんだ」

「マ、ママの……？」

「『カルチョ』ちゃんて、君の事だろ？ 昔、お母さんから君の幼い頃の写真を見せて貰った事があるんだが、また随分と綺麗になったもんだなあ。声を掛けるのに少し緊張してしまったよ」

「……………」

水沢は、驚きの為か、息を飲んだ。警戒を強めるのかとも思ったが、その表情はむしろ明るい。

「も、もしかして、今、ママがどこに居るか、貴方は知ってるのっ？」

疑問の余地は他にも多々あるだろうに、水沢は真っ先に母親の居場所を尋ねた。

「ん〜？ おかしな事を言うね。それは、君が一番よく知っているんじゃないのか？」

「は？」

水沢の表情が、期待から困惑に変わる。

「あれ？ 憶えていないのか？ うーん……少し話をした方がいいかな？」

「お、教えて、ママの事」

「そうだな……。でも、今日は冷えるからさ、車の中でもいいか？」

「わ、分かった」

今の自分が軽挙妄動である事に気付きもせず、水沢は言われるがままに高井先生の後を付いて行く。

「この辺、駐車場が無かったから、少し歩くぞ？」

「か、構わない。それよりどういう事？ 私がママの行方を知っているって」

「多分あれだな、お母さんが一人で行っちゃったのが悲しすぎて、忘れちゃったんだよ。まあ、よくある事だ」

「そ、そうなの？」

水沢と高井先生は言葉を交わしながら、どんどんと俺の前から離れていってしまう。

追う事は……出来ない。

どうも今回は制限が強い。以前までは自由に……とまでは言えないが、ある程度、自分の意志で現状情報を選別出来た。だが今回は、見えるもの聴こえるものが、予め決められているかのようだ。

……ひょっとしてこれは、俺が直接見聞きしている訳では無い？

「……は、……なの？」

「僕は……無いけど、……だった、……だよ」

二人の会話はもう聞き取れない。

なんとか追えないものかともがいてみたが、やはり無理なようだ。諦めかけたその時、ゆっくりと視界が前へと進みだした。俺としては急いで追って欲しかったが、その進みは極めて遅い。

そして、このまま見失うのではと不安を覚えた直後に、二人の姿が視界から消えていた。その上、それに続いて、突然、目の前のもので全てまでもが消えてしまった。

視界は黒一色。

今回はこれで終わりかとも思ったが、周りの喧騒はいまだ耳に入ってくる。

思うに、これは目を瞑っている状態なのではないのだろうか。しかし、俺が目を開いた気になっても、視界は黒く塗りつぶされたまままだ。

——バタンツ！

突然聴こえた強い音。

車のドアを閉めた音だと思われる。

その音が聴こえたのと同時に、目に光が入って来た。

そして、そこに見たのは見覚えのある車。それは間違いなく、つい先日俺が乗り込んだ高井先生の車だった。よく解からないが、い

つの間にか場所が移動していたらしい。そこがどこかは確認する事が出来ない。視点は目の前の車にのみ置かれているからだ。

車の中には人の影。

水沢と高井先生だ。

会話が聞けないものかと中へと意識を向けると、いきなりその車が鼻先にまで迫ってきた。絶対にぶつかるものと思ったが、驚いた事に、そのまま車のドアをすり抜け、次の瞬間には後部座席に居た前を見れば、運転席に高井先生。助手席には水沢。聞き慣れない異国の音楽が流れる車中で、二人が言葉を交わしている。

「それで？ 本当にするのかな？」

「……それで、ママの事が判るなら……」

何の話かは判らない。聞く限り、水沢が母親の為に何かをするようだ。

「そうか。なら用意して」

「う、うん」

水沢は頷くと、急に着ていたコートを脱ぎだした。さらに制服の上着までもだ。その後は、後ろからではよく見えないが、俯いて手元をこそごと動かしていた。

……まさか、ブラウスのボタンを外しているのか？
一体何をするつもりなんだ。

「躊躇わないんだな」

「……ママの為だもん」

高井先生の言うとおり、男の前だというのに、服を脱ぐ事への抵抗感が水沢には見受けられない。そして、とうとう彼女は服をはだけて、その肌を露わにする。

「肩をこっちに」

高井先生はそう言って、水沢の肩に何かを擦り付けた。その次に彼が取り出したものを見て、俺は驚愕する。

「筋肉注射だからちよつと痛いぞ？」

「わ、分かった」

高井先生の右手には注射器。
まさか、それを水沢に？

「痛っ……」

水沢はなんの抵抗もせずに、その右肩で注射器を受け入れてしまった。

「ごめんな、すぐ済むから……はい、終わった。これで押さえながらよく揉んで」

目の前に光景が信じられない。いくら母親の為だとはいえ、今さつき出会ったばかりの、得体の知れない男が持ち出した薬を、こうもあっさりその身に受けるとは。

水沢ひかるの危うさは、俺の想像を遥かに超えていた。

「それくらいでいいかな。効きは早いけど、身体への影響はほとんどないやつだから安心していい」

「……うん」

水沢ははだけたブラウスを元に戻す。今に至っても、一体何が行われているのか判らない。

「それじゃ、背もたれを少し倒して、リラックスして。呼吸は深く」

「はい……」

背もたれを倒した事により、水沢の顔が視界に入ってきた。気怠そうな感じだが、顔色自体は悪くない。

「うん、じゃあそのまま、百から下に向かって順に数えなさい。ゆっくりでいいから」

「分かった……。百……、九十九……、九十八……」

……これは、もしかして。

「……今の気分はどうだい？」

「……え？ うーんと、眠い感じ？」

「そうか、……続けて」

「はあ……。えっと……八十九？ 八十八……、八十七……、八十
六……」

「……………。……ひかるちゃんは、今、どこに住んでいるんだ？」

「六十八……え？ 私？ ……穂ノ上の立原だけど」

「八年前は？」

「……同じ所」

「お母さんも一緒に住んでた？」

「もちろん」

「いつまで一緒に？」

「そ、それは……ええと……」

これは……催眠療法的一种だ。

記憶障害が起きた時などに行われる手法。

高井先生は、水沢に母親が居なくなった時の事を、思い出させる気なのか？

「判らないのならいいよ。ほら、また続けて」

「え？ うーん……あつ、六十七……、六十六……、六十五……」

「……………」

「五十四……、五十三……、五十二……」

「……お母さん、居なくなったのかい？」

「四十九……あっ……うん。……居なくなった」

「いつから？」

「……八年前」

「なんで居なくなったんだろう？」

「そんなの……判んない」

「どこに行ったんだろうね」

「えっと……どこだったっけか……」

ん？

「何時頃に行っちゃったんだ？」

「……夜中、パパが帰ってきてすぐ」

これは……。

「君はその時何を？」

「……ママを、追っかけ……た」

ッ！？

「君はお母さんの居るところを知っているのだろうか？」

「わ、私……え？ 私が……？」

「お母さんに会いたいのなら、そこに行けばいいんじゃないか？」

「そこ……？ そこ……って？」

「追っかけたんだから、知っているだろう？」

「ママは……あそこに？ わた、私、……私、知ってる……」

「どこへ行けばお母さんに会える？ 何をすればお母さんに会える？」

「ハア……ハア……わ、私……」

「さあ、君は知っているぞ。どこへ行けばいいんだ？ 何をすればいいんだ？」

「いや、ハア……ハア……、そこに行っちゃ……ハア……ハア……ダメ……い、いや……」

「恐れなくていい。ひかるちゃん、君はどこへ行く？ そこで何を？」

「あ、あ、あ、会えるのっ！？ そ、それでママに会えるのっ！？」

「……こんなところかな。さあ、もういいだろう、僕が三つ数えれば、君の期待が現実になる。君は自分の望む事をすればいいだけ」

だ」

「ハアハア……ママ、ママーッ！」

「3」

「わたし！　わたしはっ！」

「2」

「ママにあいたいっっ！」

「1——」

「——志朗！　しっかりするんだ！」

「う……く、……と、父さん……？」

そこは応接室だった。

父さんが心配そうな顔で俺に呼びかけている。

「志朗、頭が痛むのか！？　僕の声は聴こえてる！？」

耳鳴りは治まっている。しかし、頭痛はまだ酷い。

「ハアハア……だ、大丈夫、聴こえてるよ……。う……頭はまだ、痛いけど……」

俺が返事を返すと、父さんの表情が幾分和らいだ。

「……本当に大丈夫なのかい？ 随分と辛そうに見えた。大事を取って病院に行った方がいい」

「ふう……、本当に平気。……あ、ほら、頭痛も治まって来たよ」

「無理していないだろうね」

「うん、もちろん。だから父さんも落ち着いて。……水沢さんが驚いちゃってるよ」

「あ、ああ……。すまない、取り乱してしまったようだね。あまり見ない症状だったから動揺してしまったよ」

「心配してくれてありがとう、父さん」

「いや」

お互い、どうにか落ち着く事が出来た。

隆三氏も心配そうな顔をしてきている、まずは一言掛けておこう。

「驚かせてしまってすいません。俺……んんっ、僕はもう大丈夫です」

「あ……うん、それは、良かった」

彼は表情を崩したが、こちらまだそういう訳にはいかない。

「水沢さん、今すぐひかるさんに電話して下さい」

「え？」

「志朗、急になんだい？」

「今、ビジョンを見たんだ」

「何？ それって、こんなにも辛そうな状態になってしまうものなのか？」

「あ、いや……今回は、特殊？ ……と、とにかく、いつもはこうじゃないから。……って、それは置いといて、えっと……とにかく水沢さん、今すぐにひかるさんと連絡を取って、彼女の居場所を確認して欲しいんです。後で説明しますから、急いでっ」

「わ、分り……ました」

隆三氏はケータイを取り出してくれた。

「志朗、まずい状況なのか？」

「まずいなんてもんじゃない、急がないと水沢が……」

「うーん、駄目ですね……。あの子、電源を切っているようだ」

「まだ切ってるのか!？」

思わず声を荒げてしまった。

落ちて着け俺、焦っても始まらない。とにかく、今できる事をやら

ねば。

「水沢さん！ ひかるさんを探して下さい！」

「ええと、さつきから一体……？」

「よく聞いて下さい。ひかるさんは、お母さんの死を認識したみた
いなんです。このままでは、後を追ってしまう可能性がある」

「なっ……！？」

俺の考え過ぎだと思いたい。しかし、先程目にした光景がそれを
許さない。

高井先生は水沢にこう問うていた。

どこに行けば母親に会えるのか。

何をすれば母親に会えるのか。

前者は、つまり水沢の母親が行方不明になった夜に出向いた場所。
であるならば、そこは彼女が死んだ場所である可能性が高い。ビジ
ョンの中で水沢は、母親の後を追いかけたと言っていたから、その
場所を知っているという事になる。きっと今、水沢は、母親が死ん
だ場所に向かっている筈だ。

そして、問題なのが後者。

何をすれば会える？

何をしたらって会える訳がない。

仮に俺であれば、例の横町なり、例のホテルなりへと赴くだろう
が、水沢は俺ではない。俺は例外中の例外なのだ。

普通の人が、死んだ人間に会う為に講じる手段なんて、誰でもき
つとまずはこの思い浮かべるだろう。

後追い自殺、と。

「……いい加減にして貰えないだろうか。君は、そんなにひかるに自殺をして欲しいのか？」

「ッ！」

俺の願いは、その丸つきり正反対。しかし、隆三氏には伝わってくれない。

「水沢さんっ！」

「うわっ」

俺はこれ以上ない程声を荒げながら立ち上がり、そのままの勢いで、隆三氏へと詰め寄った。

「俺が世迷言を言ってるようにしか聴こえないのは解ってます！でも、万が一俺の言う通りになってしまっっては取り返しがつかないでしょう！？俺は貴方に、貴方の娘を探して欲しいだけ！決して度を越えたお願いでは無い筈です！何事も無かった時は俺を蔑むなり罵倒するなりして下さって構わない！だから、今はどうかひかるさんを探して下さい！この通りですからっ！」

俺はうずくまって額を床へと擦り付けた。土下座の体勢だ。

「そ、そこまで……」

果たして伝わるだろうか。

彼は、俺が精神科に掛かっている事を知っている。

妄言と切り捨てられても不思議は無い。

「……志朗君、立って下さい。……君の言う通りにしますから」
伝わった！

「君の言う通り私は娘を探すだけ、何も不利益は無い。今は君を信じてひかるを探した方が良さそうだ」

「水沢さん……」

「では、私はすぐ行く事にします。因幡さん、またいずれ」

「ええ、ご連絡しますよ」

「失礼」

隆三氏は急ぎ足で応接室を後にしてくれた。なら、俺は俺で水沢の事を探してみようか。

「じゃあ志朗、説明して貰おうかな」

あ、そうだ、父さんにも協力を仰がないと。

「急ぎだから手短に話すよ——」

俺は父さんに、今日ここに来る前に見た事と、たった今見た事を話し、自分の考えも余すことなく伝えた。

「——高井、京助……」

「うん、残念ながら、高井先生がこの件の元凶だと思う」

「……こういう事か、ミケちゃん……」

「へ？　今、ミケって言った？」

「いや、言ってないよ。それで、その高井京助が、現時点で最も事の真相を知っている可能性が高い訳だね？」

「うん。さとみさんの死に関わっているかは、やっぱり判らないけど……」

「さとみさんの死に関わっているのは、三浦なる人物かも知れないな」

「脅迫されて已む無く？」

「そうだね。だけど志朗、一番の問題は水沢さとみさんの遺体が未だ見つかっていない事だ。何かそっちの情報は無いのかい？」

「それは多分、水沢ひかるが知っていると思うんだけど……」

「しかし、ひかるさんとは連絡が取れない、か。高井はひかるさんを自殺させたがってるって？」

「ビジョンの中では、そう誘導していたように見えたんだ。あの人、専門家だから、いやに説得力があった」

「真相を知っているひかるさんを亡き者にとって事かな。……そんな不確実な方法を取るだろうか。ひかるさんが自殺しなかったら、折角忘れてくれていた記憶を呼び覚ましただけになってしまう。それ

は、高井にとっては不利な事だろう？」

「……それもそうか」

「高井京助が何をしたいのか、志朗の話だけでは分からないな。話を聞くとしたら、その美人局方面から突くしかないか」

「あ、そうだよ。被害者の三浦が特定出来れば、恐喝か詐欺で立件できるんじゃない？ 後は、その……別件逮捕な感じで……はは、だ、駄目だよな……」

「というか、恐喝も詐欺も時効は七年」

「あっ……」

「でもまあ、三浦は特定しておいた方が良さそうだな。志朗、どこ
の大学だった？」

「……それは、判らない」

「いきなりつまずいたね……。県内にある大学は二十。大きな大学なら、教授が百人以上居る所もある。三浦は珍しい苗字ではないし、この八年で異動しているかもしれない。もう少し絞り込めないか？」

「！ そうだ、学部長！」

「八年前に学部長の役職に就いていた三浦教授か。なんとかなりそう
うだ。あとは、穂ノ上東署でさとみさんの資料を確認して、高井京
助の経歴……は、時間が掛かりそうだな」

「手分けしよう、父さん」

「手分け？」

「高井先生の事、美作先生に訊いて来る」

「それは止めた方がいい。高井がさとみさんの死に関係無かった場合、志朗と美作先生の関係が拗れるかも知れない」

「で、でも……」

「君はひかるさんを探しなさい。今はそれが急務だ。残念だけど、今の段階では警察は動いてくれない」

「俺は水沢と親しい訳じゃないから、どこを探せばいいのやら。……高井先生を問い質すとか……」

「それは絶対にやめなさい」

「……だよな」

「志朗、ひかるさんを見つける事が出来れば、それで全部解決してしまう可能性もある。しかし、何よりも自殺なんて結末だけは絶対に避けなきゃ駄目だ。いいかい？ 真相なんて暴けなくたっていいんだ、ひかるさんが絶対最優先。解るね？」

「は、はい」

「亡くなったさとみさんの事も大事だけど、ひかるさんは今、生きているんだから」

「そう、だね」

「よし、では行動しよう。志朗はひかるさん、僕は事件」

「それはいいけど……、父さん、仕事は平気？」

「ガク……出鼻を挫くね……。何かあればケータイが鳴るさ」

「そんなんでいいの？」

「志朗が心配する事じゃないよ。ほら、今は自分に出来る事を、だろ？」

「……ッ。ああ、分かった、父さん」

今やるべき事は明確だ。

それは、水沢ひかるを見つけ出す事。

俺がこの件に関わる事になったきっかけは、水沢ひかるの母親・さとみさん。

あの人に出会った事によって、俺の中の価値観は大きく変貌を遂げた。さとみさんは俺の創り出した幻想では無く、現実に存在する人間であり、尚且つもうすでに亡くなっている人物だった。まさか、自分が幽霊などという存在に関わる事になるうとは、想像だにしていなかった。しかし、さとみさん、そしてことりさんも、亡くなった人間であり、俺に対して何らかの救いを求めてきている。だから俺は、自分に出来る事なら、自分にしか出来ないのならば、ここ数日彼女達の為に駆け回っていた。

しかし、ふと思う。

俺は、死者の為に生者を蔑ろにしてはいなかっただろうか。

例えば、高井先生が水沢ひかるに接触するきっかけを作ったのは、恐らく俺だ。今にして思えば、俺が落とした水沢母娘の写真を見た時の高井先生は、本当に驚いていたのだろう。児の手柏医院でA子の話をした時、当事者である高井先生はすぐに気付いたに違いない。そしてその時、水沢ひかるが真相を知っている可能性に気付かせてしまった。しかも俺は、問われるままに、水沢ひかるの情報をあの人に伝えている。それらの事が、今日の高井先生の行動に繋がったのかも知れない。

結果論ではあるが、軽率さは否めない。

自分に起きている不思議な事に気が行き過ぎて、思慮が浅かったと言わざるを得ない。

水沢の母親には悪いが、父さんの言う通り、真相よりも水沢ひかるの方が大切だ。

なんとしても見つけなくてはいけない。

最悪の結果になる前に。

水沢の父親からの吉報を待つなんて悠長な事では駄目だ。

自分で見つけるつもりで探そう。

そう、俺が水沢を見つけるんだ。

水沢ひかるをこの俺が。

t i m e t o b e l i e v e n o w 1 6 (後書き)

ひかるちゃんの運命やいかに。

シロ君頑張れ。

てなわけで、次回、シロ君が頑張ります。

t i m e t o b e l i e v e n o w 1 7 (前書き)

今回、ちょこちょこ名前が出ていたアノ人が登場しますが、全く話には絡みません。ちょつと顔出しさせとこうかと……。

t i m e t o b e l i e v e n o w 17

一月三十日 日曜日 夕刻前

——ガラガラガラ……

「失礼しますっ！ 一年一組、因幡志朗ですっ！ 谷垣先生はいらっしゃいますかっ!？」

職員室に入るなり、俺は声を張り上げた。

「……お、おお、因幡。ん？ 俺か？ 広瀬川先生でなくて？」

谷垣先生はすぐ近くに居た。何故谷垣先生を指名したかと言うと……。

「谷垣先生！ 伊波千夏さんは何部ですか!？」

これを訊きたかったからだ。

「いや、そんな大きな声じゃなくても聴こえるって。んで？ 伊波の部活？ 確かバドミントンだけど、それが……?」

「ありがとうございます！ 失礼しますっ!」

「て、おおい、因幡!？」

目的の情報は得られたので、俺は速やかに職員室を後にする。今は何をするにも時間が惜しいのだ。

「おっと志朗……」

職員室から出た直後に父さんと鉢合わせた。

「ああ父さん、俺、お先するから、広瀬川先生によろしく言つてっ」

「こらこら志朗、焦ったってしょうがない。落ち着いて行動しなさい」

「解ってるっ、じゃ！」

落ち着いて行動。父さんの忠告だけはしっかりと聞いて、俺は廊下を疾走し……てはいけない。落ち着いた行動、落ち着いた行動。俺は猛然と“歩いて”体育館に向かった。

応接室での父さんとのやり取りの後、俺は水沢ひかるを探すべく部屋を飛び出た。まではいいが、やはりどこから探せばいいのか皆目見当がつかず、伊波千夏の協力を仰ぐべきという判断に至った。しかし、彼女がどこの部活動に所属しているかを聞いていなかった為、彼女の担任であるところの谷垣先生に訊ねたという訳だ。

部活中に邪魔するのは少し気が引けるが、ナツさんならば水沢の事を優先してくれる筈。いや、水沢に関しては、ナツさんを外して考える事は出来ない。水沢の父親と同じく、彼女は現状を知るべき人物の一人だ。

やがて、校舎東棟の、体育館へと続く渡り廊下へと辿り着いた。アルミニウム製の簀子が敷き詰められた床を踏みしめ、やや校舎から離れた場所に建てられた体育館を目指す。

そこで、ある問題が浮上した。

体育館には、部活に精を出している生徒が、沢山居る事だろう。そこから人目を避けてナツさん呼び出す事は至難。しかも、この俺が呼び出したともなれば、非常に注目を浴びてしまう可能性がある。そんな事を気にしている場合では無い事は解っているが、それはナツさんにとって、あまりにも迷惑になるのではないだろうか。

体育館の扉はしっかりと閉ざされている。

今日の冷え込みの所為で閉め切っているだけだと思われるので、鍵が掛かっている訳では無い筈。しかし、開けた時に、中の人達の目を引きそうで開けづらい。そして、人の目を引いてる中では、ナツさんに声を掛けづらい。

「ううー……。……。ナツさん、ホントごめん……。っ」

やはり事態はひっ迫していると考え、迷惑承知で声を掛ける事にした。

「――あら、志朗さんではないですか」

「へ？」

体育館への扉に手を伸ばしたところで、後ろから女性の声。

その声に振り返ると……

「あ、み、瑞穂さ……。じゃなくてっ、七篠先輩！　こ、こ、こんにちは……。！」

「ええ、こんにちは」

……。俺の従姉がそこに居た。

ふわふわと柔らかそうなその長い髪と同じ形容が利く、物腰、面持ち、雰囲気。それに加えて、高校生離れしたそのしなやかな肢体。まるで、典雅という言葉を具現化したような女性、七篠瑞穂さんだ。

今日が日曜日である事も相俟って、まさか遭遇するなどとは、露にも思っていなかった。

「どうなさったんですか？　こんな所で」

「え、えーと……た、体育館に用事がありまして……」

「まあ、うふふふ、それはそうですわよね、ここに居るんですもの、ふふふ」

思わず見とれそうになる笑顔だった。

本当に俺と同じ血が流れているのだろうか――と、よく疑問に思う。

「では、何故中に入らないのかしら？」

「そ、その、中の人を、どう呼び出そうかと……」

「ん？」

俺は瑞穂さんに事情を説明した。

「――でしたら、わたくしが呼んできて差し上げましょう」

「え！？　いいんですか！？」

「もちろんよく。志朗さんは色々大変な方ですからね、助けて差し上げませんと。それに、わたくしも体育館に用があって来たんですもの。つ・い・で、ですわ」

「あ、ありがとうございます」

「それで、どちらの方をお呼びすれば？」

「ああと、バドミントン部の伊波千夏さんです」

「あら？ 女の方ですね。……こう言っではなんですが、応じて下さるかしら？」

「ング……。こ、今回ならば大丈夫かと……」

「そう。では、お声、掛けてきますね」

「た、助かります」

瑞穂さんが体育館に入ろうとしたので、俺は慌てて扉を開いてから、道を開けた。

「まあっ、どうもありがとうございます」

「い、いえ」

そうして彼女は、たおやかに俺の前を過ぎ去り、中へと入って行った。

それを確認した後、扉を閉める

「……ぷはあ」

相変わらずあの人の前では、必要以上に緊張してしまう。
自分でも理由はよく解からない。

ともあれ、首尾よくナツさん呼び出せそうだ。

「うー、さむい……」

渡り廊下を吹き抜ける風は非常に冷たい。中に入りたい衝動に駆られるが、ナツさん呼び出したのが俺だとばれてしまう。仕方なく寒さに耐えつつ待っていると、目の前の扉がゆっくりと動き出した。

「……因幡？」

開いた扉からちょこんと顔を出した一人の女子。

「あ、ナツさん、出て来てくれたか」

それは正しく伊波千夏だった。瑞穂さんに感謝だな。

「驚いたー、いきなり七篠先輩が声掛けてくんだもーん。てか、生徒会長パシらせるとかって、アンタ何者？」

「パシッ!? ちちち違うっ! 俺がナツさんをどうやって呼び出すか悩んでたら、偶然現われた七篠先輩が手を貸してくれたんだ! 彼女の厚意であって、決してパシらせた訳じゃないっ!」

「ちょ、ちょっとちょっと、なんでそんな必死なわけ？」

「あつ、い、いや……、なんでもないです」

「それに、何を悩む必要があるのよ。普通に呼べばいいじゃない。会長なんか使うから、メツチャ緊張しちゃったわよ」

「つ、使うって……。俺はただ、人前で呼び出したらナツさんに迷惑かと思ってさ……」

「はあ？ 何言って……。あ、ああ、そういう事か。氣い遣ってくれたんだ？」

「ま、まあ……。って、そんな話してる場合じゃないっつっ！」

「きゃっ!？」

目的を思い出した俺は、真剣な表情でナツさんを見据える。今の彼女はスポーツウェア姿で、自慢の髪はポニーテールにしていた。……自慢かどうかは知らないが。って、観察も後っ！

「ナツさん、水沢の事で大事な話がある」

「へ？ い、いきなりね……。部活終わってからじゃダメ？」

「違うんだ、お昼に言った事じゃない。今すぐ水沢を見つけないと、大変な事になるかもしれないんだよ」

「ま、待って待って。え？ 何？ 大変な事って？」

「よく聞いてくれ。急いでいるから要点だけでなんとか理解して欲しい。いいか？ 水沢が、お母さんの死を認識したみたいなんだ」

「えっ……?」

「このままだと、母親恋しさに後を追ってしまう可能性がある」

「ッ!？」

「だけど水沢の居場所が判らないんだ。ナツさんの心当たりを教えてください」

「すとーっ! ちょとアンタ、話が速過ぎ! まじ? 今の話、本気なの? 何かの間違いっつか、思い過ごしじゃなくて?」

「それは否定できないけど、可能性がある以上は放っとく訳にはいかない。水沢のお父さんもすでに探し始めてるんだ」

「おじさんもっ!? うそ……嘘……。ひかるは? ひかるはどこに居んのっ!？」

ナツさんは、目に見えて狼狽えだした。

「因幡、教えな! ひかるはどこっ!？」

「落ち着いてくれっ! ……それが判らないからナツさんに訊きに來たんだよ。一番親しい君なら、何か思い付く事もあるんじゃないか?」

「ええっ!? え、えっと……ひかるの行きそうなトコ、ひかるの行きそうなトコは……、ううう、どこよどこよ……」

唐突な展開に、ナツさんの思考は定まらないようだった。無理も無い事だが、なんとか思い付いて欲しい。

「ナツさん、とにかく思い付いた場所を挙げてくれ」

「え？ えとえと……が、学校？ 高良公園？ テンパチ？ 御和とか？ だったらマルシヨーにリンドン？」

どうやら水沢の行動範囲を挙げているようだ。水沢は、八年前に母親が行った場所に居ると思われる。だから学校は無いだろう。高良公園は有りそうだ。御和市は、当時八歳だった水沢が、夜中に行けるとは思えない。あとの三つは店だから有り得ない。

「水沢の家って高良公園から近いのか？」

「わ、わりと……」

「じゃ、まずはそこへ……」

「あ、ああ、ちょ、ちょっと待って！ アタシも行く、アタシも行くから！」

「分かった。でも、上着を着て来た方がいい」

今のナツさんは半袖に短パン、右手にはラケット。急いでいるとはいえ、それで往来を歩くのは問題がある。何より、今日はひどく寒い。

「ああう……。ま、待っててね！？ 先行っちゃだかんね！？」

「昇降口に居るから」

「おっけ。……部長！ アタシ急用………！」

そう叫びながらナツさんは、体育館の中へと戻って行った。

その後、ジャージとコートを着こみ、自分の荷物を抱えたナツさんと合流し、走って高良公園に向かった。

高良公園は、穂ノ上市で最も大きな公園だ。特徴として、そのやたらと広い中央広場には数多くの移動販売車が集まり、俗に言うネオ屋台村が形成されている。お昼は、公園の周りのオフィス街のサラリーマンやOL達で賑わい、夕方は、学校帰りの学生達の寄り道スポットと化す。そんな広場の外周は、遊歩道となっており、絶好のジョギングコースとして市民に親しまれていた。俺もこの辺りに住んでいたなら、間違いなく利用した事だろう。

そんな市民の憩いの場に、俺達はやって来た。

「ナツさん、手分けた！ 俺はこっち回り！」

「ハアハア……わ、分かった」

高良公園に到着するなり、俺達は二手に分かれて公園内の搜索を開始した。

「水沢……っ！ 水沢ひかる……っ！ 返事しろ……っ！」

とりあえず、遊歩道を走りながら彼女の名を叫ぶ。ちらほら居るジョガー達に不審な目を向けられたが、気にしてなんてられない。

「水沢……っ！ どこだ……っ！」

正直、水沢の精神状態を想像すると、返事をしてくれるとは思えない。俺は単に不安から声を張り上げているに過ぎなかった。

「ハア……ハア……、こんな広いトコじゃ、フウ……埒があかない……」

この公園は、ウチの学校の敷地の四倍はある。無暗に探しても時間を食うばかりだ。

俺は立ち止まり、考えを巡らせる。もし、本当に水沢が希死念慮に駆られているのだとしたら、人目の付くような場所には居ないのではないだろうか。しかも、そこは八年前に水沢の母親が殺されたかもしれない場所。

それを鑑みた上で、この公園の事を考えてみる。

俺の今いる遊歩道には、ずらりと照明が立ち並んでいた。これのおかげで夜間でもここを走るジョガーは少なくない。この公園は、とてもじゃないが、人目に付かない場所とは言えない。

ここである可能性は低くなった。

「……くそつ、俺の浅慮の所為で時間を無駄にしたじゃないかっ」

そう独りごちながらケータイを取り出し、今日登録したばかりの番号を呼び出す。

トゥルルルル…… トゥルルルル…… プツッ

「……も、もしもし？」

「ナツさん、仕切り直したい。中央広場のコメントまで来てくれ」

「は？　なんでよ」

「多分ここじゃない、説明するから来てくれ」

「ああもうっ、分かったわよっ」

ケータイを切って、俺もすぐに中央広場へと向かった。

広場まで来ると、人の数が一気に膨れ上がる。どんなに寒くても今日は日曜日。平日と違って、時間帯は関係無しに賑わっていた。

「因幡ーっ！」

モニUMENTを目指すまでもなく、ナツさんが姿を現す。俺もすぐに彼女の元へと駆け寄った。

「ハアハア、今、ね……ハアハア……おじさんから、電話あったの……フウ」

「え？　水沢のお父さん？　もしかして見つかったのか？」

「ああ違う違う。ひかるの行きそうな場所を訊かれたわ」

「そう、か……」

「それで、こっちの状況を伝えたの、私達も探してるって。おじさんの方は、自宅周辺を探したけど見つけれなかったみたい。今は、もう少し広い範囲で探してると思う。で、私達は友達関係を当たってくれないかって」

隆三氏は早くも手詰まりなのか？

父親としてもっと思い当たる事は無いのだろうか。

「……友達って言われてもさ、こういう時に、アタシ以上に頼れる友達がひかるに居るとは思えない」

「そうなのか？」

「確か言ったと思うけど、あの子、男子には人気でも、女子にはちよつとね……。あ、男の所に転がり込んでるのかも」

「お、男……？」

「うーん、でもそれだと連絡先が判らないよ……。ええっと、うちの学校の三人を何とか調べて……あとは、中学ん時の元カレに連絡入れてみよっか……。ああ、この間紹介された人のメルアド捨てちゃったんだっけ……」

「……………」

水沢ってそんなに男が……。

シヨ、シヨックなんて受けてませんよ？

「ナ、ナツさん、その必要は無いと思う。誰かと一緒に居るなら、自殺する心配は無いし」

「あ……それもそうね」

「ナツさん、簡単に説明するからよく聞いてくれ」

俺は自分の知っている事を、幽霊云々の件は抜きにして、手短に

話した。水沢の母親が事件に巻き込まれた可能性。母親が居なくなつたとき、水沢がそれを追つた可能性。母親に何かがあった時、水沢がそれを目撃してしまつた可能性。その時の心のトラウマが、記憶を封印してしまつた可能性。……証拠を示せない以上、俺の推論という形で伝える他無かつた。

「――水沢は解つてたんだと思う。その時の事を思い出してしまつたら、悲しすぎて自分を保てないって。だから、お母さんの話が出ると、激しい拒絶反応を起こすんだ。その時の事を思い出さない為に……違うな、思い出しそうになると心が防衛機能を発動させる、かな。それがナツさんの言う、ヒス状態の水沢なんだ。……俺はそう考えてる」

「……………」

「だけど、水沢は思い出してしまつた。悲しすぎて自分を保てなくなる程の出来事を」

「…………ツ」

ナツさんが息を飲んだ。話は真剣に聞いてくれていたようだが、信じてくれるかは自信が無い。証拠を求められてしまつたら、この話はそこで終わってしまう。

「……………。ひかる……急いで探さなきゃ」

「信じてくれるのか？ 他でもない、俺の言う事だぞ？」

徳英での俺は異常者扱いだ。その俺がこんな話をして、通常なら妄言と切つて捨てられる事だろう。

「アンタの話が本当なら、ひかるの性格にも納得がいくわ。あの子の危うさは、きっと誰よりもアタシが理解してる。過去にそれくらいのことでも無きゃ、あんな風にはならないわよ。……やっぱひかるはアタシが護らなきゃ」

「……………」

正直、ナツさんの庇護欲の強さにも危うさを感じる。水沢の為に自らを蔑ろにしまいそうな勢いだ。何故ここまで献身的なのだろう。

「けど……なんで因幡が、ひかるの事をそんなに知っているのかは疑問ね。先週あったばかりなんでしょ？ アタシは二年以上の付き合いなのに、そんな事全然知らなかった」

まあ、当然の疑問だ。

「それは事が済んでからにしよう。心配しなくても、包み隠さず全部話すから。確かあのホテルの前でも言ったよね？」

「……そうね、今はひかるが先決だわ。で？　なんでここを探すの？　やめるの？」

「ん？　ああ、そうか。……さっきの話を踏まえると、水沢の行き先は、八年前にお母さんを追って辿り着いた場所だと思うんだよ」

「ふんふん、それで？」

「その場所で母親が亡くなっているのだとしたら、未だに見つかった

ていない以上、人目に付く場所とは思えない」

「あつ、そうね。んじゃ、この公園の線は薄いかな。いつも人居るし、夜中はカップルが茂みに……ッ、な、なんでもない」

「カップルが……何？」

「いいから続き！ このムツツリ」

「ムツツリ！？ ……ぐ、そ、それに加えて、当時八歳だった水沢がいけるような場所だから、自宅のわりと近くなんじゃないかな？」

「でも、おじさんは見つからなかったって……」

「ああ。だからさ、逆転の発想で、水沢の行きそうな場所じゃなくて、行かなそうな場所を探そうと思うんだ。ナツさん、その線で考えてみてくれないか？」

「え？ ひかるの行かなそうな場所？ んとんと……。……男湯とか男子トイレとか？」

「……いや、それ水沢というより、女性が行かない場所じゃん」

「ああ、そっか……。うーん……。ねえ？ 行かなそうな場所なんて、挙げてたらキリなくない？」

「何かないかな？ そこは水沢にとって辛い場所の筈だから、無意識にでも避けてるんじゃないかな」

「あっ！ 避けてる場所！ 千杜橋！」

せんとぼし

「千杜橋？」

千杜橋は、穂ノ上市街地と東の阿神山地区あがみやまを隔てる、深い溪谷に掛かる橋だ。

「その近くにひかるの家があるんだけど、あの子、高所恐怖症だとか言って近付かないのよ。今にして思えば、おかしい話だわ。だって学校の屋上で一緒にご飯食べた事あったし」

「……うん、有りそうだ。すぐに行こうっ！」

「ええ！」

俺達は再び走り出した。
ここから千杜橋までは一キロも無い。全力で走れば五分と掛からないだろう。

「ハア……ハア……因幡、ゴメン……少しペース……落として欲しいかも……」

そう言われて初めて、ナツさんが辛そうなのに気付く。

「ハッ……ハッ……荷物、貸して……俺が持つから……」

「ハア……ハア……た、助かる……」

俺は走りながら彼女のスポーツバッグを受け取った。

「って、重っ!？」

それは想像以上に重かった。こんなのを持って走ってたら、辛いのも当然だ。

「な、何入ってんの……？」

「ハッ……ハッ……乙女は、色々入り用なの……訊かないのがマナーよ……」

乙女の秘密らしい。寧ろ気になるのが、正しい男子の有り様ではないだろうか。

「ハッ……ハッ……ほら、ムツツリ……ペースあげるわよ」

「ハア……ハア……ムツツリは……カンベン……」

身軽になったナツさんがペースを上げる。乙女の秘密の重さに四苦八苦しながら、なんとか彼女に衝いて行く俺。ふと気付くと、背中側からオレンジ色の陽光が俺達を照らしていた。時間は間もなく四時。日が落ちる前になんとか水沢を見つけ出したい。

「ハッ……ハッ……み、見えた……千杜橋よ……」

ナツさんの声に、意識を前方に戻す。

千杜橋は比較的大きな橋だ。片側二車線通行で、長さも百メートル前後はある。だから一目見ただけでは、水沢が居るかどうかは判らないだろう。

「ひかる……！ 居る……！？」

橋に足が掛かった辺りで、ナツさんが水沢の名を叫ぶ。今、橋を歩いて渡っている人間は、俺達を除いてたった一人。予想に反して、一目で水沢が居ないと判ってしまった。

「居ないじゃないっ!」

ここは国道上の橋なので車通りは多いが、歩いて渡る人は実は少ない。歩道が無いからだ。この先の阿神山はいわゆる湯治場で、それ以外の目的で行く事はあまりないだろう。基本的に、阿神山を越えた先の御和市へ行く為に通るのが主だ。最近では新しい県道が開通し、山を越えずに御和市へと行けるようになった為、一頃に比べれば、車通りも大分減少している。夜になってしまえば、この辺りは閑散とする事だろう。つまりだ、ここは「人目に付かない」と言う条件に当てはまる。

「ナツさん、下だ、橋の下を探そう」

「えっ!?! ……ま、まさか、手遅れだった……わけ? ひ、ひかる、ここから……」

「ちよっ!?! 違う違うっ!」

“手遅れ”。今、最も聞きたくない言葉だった。

「ここは夏場に溪流釣りが出来るから、下りられるようになってるだろ? 今の時期なら、人目を避けるのに最適だ」

「……な、なんだあ、そういう事か。もう、脅かさないでよね」

「それはこっちの科白なんだが」

そして俺達は、阿神山区側まで橋を渡り切り、そこに在った下に降りる為の螺旋階段までやって来た。

「ねえ、立ち入り禁止になったるんだけど」

「まあ、十月から五月までは禁漁だからな」

階段の入り口には立ち入り禁止の札が立て掛けられていた。別に門扉がある訳では無いので、下りられない事は無いのだが、多少気が引けてしまう。

「別に釣りしに行く訳じゃないからいいよね？ そんな事よりひかるの方が大事」

「そう……だな」

俺、ナツさんの順で螺旋階段を下りて行く。谷底までは二十メートルも無いだろうが、螺旋の為か、普通の階段よりも時間が掛かってしまう。

「ちょっとちょっと、なんでそんな遅いわけ？」

「……え？ 別に遅くなんてないだろ？」

後ろからのナツさんのクレームに、俺は振り返って反論した。

「……ねえ、アンタ、顔が変じゃない？」

「悪かったなっ!？」

クレームに続いていきなりの罵詈。

「そうじゃなくて……なんでそんなしかめっ面してんのよ。もしかして、因幡って高いトコ駄目？」

「いや、そんな事はないけど……」

「けど？」

「た、立ち入り禁止の場所に入ってるんだから、緊張もするって！」

「そうなの？ 小心者なんだ。でも、ラブホの時はあんなに……あつ、ムツツリだから」

「ムツツリはもういいつつの！ ほら、行くぞ！」

俺は不機嫌さも隠そうとはせず、乱暴に足を踏み鳴らしながら、一気に螺旋階段を下りた……

「んだから、遅いっつーの！」

……つもりだった。

「んぐ……だったら先に行けばいいだろっ！？」

「……ちよつと……そんな怒んなくても……」

「あっ……」

ナツさんの怯んだ表情が目に入り、一瞬で熱が引く。

「う、ごめん。その、ナツさんが先に行ってくれる？」

「……………、いいけど……………」

俺はナツさんに前を譲った。

……………解ってる。

自分でも気付いている。

今の俺は冷静じゃなかった。そう自覚があっても、この場所ではどうにもならないのだ。

「……………ねえ、手、繋いだけよっか？」

俺の前に出たナツさんは、階段を下りもせずにそんな事を言い出した。

「え？」

「やっぱ高いところ怖いんでしょ？ 因幡の怯え方、なんかひかると重なる」

「怯え……………」

「ひかるも怯えると、今のアンタみたく感情的になったわ」

「……………」

ナツさんは俺の目を真っ直ぐ見つめている。

俺は少しだけ思い違いをしていたのかも知れない。

ナツさんの庇護欲は、水沢にのみ発揮されるものとばかり思っていたが、どうやらその限りではなかったらしい。その証拠に、俺を見つめる彼女の瞳には、まるで母親のような慈愛が込められているように思えた。

「……って、母親の慈愛なんて憶えちゃいないだろうが」

「はい？」

「いや、なんでもないよ。……ナツさん、俺さ、実は怖いんだ」

「やっぱりね」

「ただ、高い所がじゃない。そうじゃなくて、この下にあるもの」

「下？」

ナツさんが谷底へと目をやる。

「……ひよっとして川？」

「ああ。……俺、水辺恐怖症なんだ。海、川、プール、風呂、水溜り。そういう場所では不安定になってしまう」

「そ、それはまた……なんて言うか、難儀ね。前の三つは避けようもあるけど、後の二つは……って、お風呂！？ お風呂入れないの！？」

「あ、いや、シャワーは平気。バスタブにお湯を張れないだけだから」

「あ、水じゃなくて水辺って言ってたわね。へえええ、そんな事ってあるんだ……。水は平気だけど、水際は駄目。なんか想像つかない感覚だわ。ねえ、コップの水は？」

「え？ そりゃさすがに平気だけど……」

「バケツ」

「……まあ、平気かな」

「タライ」

「それは駄目かも……」

「ふーん、量の問題って訳ね……。バケツとタライの差って何よ」

「人が入れるか入れないか、かな」

「……なんとなく分かったかも。因幡、溺れた事あんでしょ」

「……そういう事」

「じゃあ、アンタはここまでにしとく？」

「いや、目に入らなければ平気だから行くよ。でも、自分のペースで行かせて欲しい。だからナツさんは、俺の事は気にせず先に行つて、水沢を探してくれ」

「まあ、それでいいか。じゃ、アタシは行くけど、アンタは無理す

る事ないからね？」

「ナツさんも、足元には気を付けて。ぼちぼち日が落ちてきた」

「了解」

カンッカンッカンッカンッ……

ナツさんは軽快に階段を下りて行った。俺は彼女の荷物を抱え直してから、ゆっくりと足を踏み出す。水面にさえ目を向けなければ、あの女の人を見る事は無い筈。

俺は視線を足元に固定し、下の景色が目に入らないようにして進む。

「……大丈夫、今は冬だから水嵩は減みずかさってる。雪解けにはまだ早いから、きっと今が一番少ない時期だ。それにもうすぐ日も落ちる、水面は見え難くなるさ。大丈夫、あの女の人とは出て来ない……」

自分に言い聞かせる為に、敢えて独りごちながら階段を下りる。そして、とうとう河原へと辿り着いてしまった。

さて、水沢を探す為には辺りを見渡さなければならぬのだが、俺の視線は真下。……役立たずにもほどがあるだろ。

「因幡——！ ひかる居た——！」

「何っ」

ナツさんの声に思わず顔を上げる。彼女がもたらしてくれた吉報は、川へと向けられていた俺の意識を、完全に逸らさせてくれた。

「こっちーーーーっ！」

再び聴こえたナツさんの声を辿り、遂にその姿を捉える。一番近くの橋脚の陰、そこに二人の姿があった。俺は脇目も振らずにそこへ駆け寄る。

「ナツさん！ 水沢！」

水沢は、いわゆる体育座りをして、橋脚を支える橋台に背中を預けていた。そんな彼女を気遣う様に、ナツさんが傍で片膝を付いている。

「……因幡君？ なんで……」

「アタシと一緒にアンタの事を探してたのよ。ここに居るかもって、因幡が推理したんだ」

「よく……分かったね……」

水沢が力無く俺に声を掛けてきた。なんだか眠そうな表情だ。

「水沢、身体は平気か？ 今日……その……学校で会った後、何かあったんだろ？」

彼女は高井先生に、おそらくは眠剤を投与されている。

「……………」

水沢は何も答えない。ただボーっと俺を見つめてくるだけ。

「……！ ナツさん、水沢の顔を触ってみてくれっ」

「は？ こう？」

ナツさんは水沢の頬を撫でた。

「冷たっ！？ ちょっとちょっと、ひかる！ アンタいつからここに居たわけっ！？」

「……いいから、ほっというて……」

「馬鹿っ！ このままじゃ死んじゃうわよっ！」

「……それでいい」

「ひかるっ！？」

「とにかく救急車を呼ぼう、話はそれからだ」

俺はすかさずケータイを取り出した。

「ダメ……！ ヤメテ……！ 余計な事しないで……！」

しかし水沢から制止の声。そして彼女は、地を這うように俺の元へと近寄り、そのまま俺の足へとしがみ付いて来た。

「……ママに会うの……！ 邪魔……しないで……！ こうすれば、ママに……ママに……」

——パアンッッ！

「ナ、ナツさん……」

ナツさんが横合いから、水沢の頬を張った。崩れ落ちた彼女を、ナツさんはさらに掴み上げる。

「しっかりしなっ！　こんな事したってママに会える訳ないじゃないっ！」

水沢に顔を寄せて強く言い聞かせるナツさん。しかし……。

「……ナツまで邪魔するの……？　アンタは、絶対、私の味方してくれると思ってたのに……」

「アタシはひかるの味方よ！　だからこんな事させる訳にはいかないの！　解ってよっ！」

「……解んない。……解んない解んない解んない！　だってママに会えるのよ！？　味方なら邪魔する筈ないじゃん！？」

「会えないの！　もうママには会えないの！　どうして解ってくれないの！？」

「会える……！　会えるもん……！　こうすれば会えるって言われたのっ！」

「!？」

「水沢……」

くそっ、高井先生、貴方は何故こんな事が出来るんだ。ただでさえ苦しんでいた水沢に、どうしてこんな事をするんだ。

「ナツさん、今はまず……」

「……誰？」

「ナツさん？」

ナツさんの声は、今までには無い色をしていた。深く深く暗い色だ。

「……誰に言われた？　ねえ、ひかる、それ、誰に言われたの？」

「………」

「言いなさいひかるっ！　誰がアンタにそんな事をっ！？」

ナツさんは、水沢の身体を激しく揺さ振りながら、問い詰め始めた。

「……あ……あう……」

「ひかるっ！　言いなさいよっ！」

「ナツさん！　落ち着いてくれ！」

「だけどっ！」

「水沢は消耗している、そんな風にしちゃ駄目だ。それに、いつま

でもこんな場所に居たら、水沢が本当に凍え死んでしまうぞ」

俺は、ナツさんが水沢にしたように、顔を寄せて言い聞かせた。

「……………」

ひとまず、声を荒げるのだけはやめてくれたようだ。表情も少し落ち着きを取り戻している。俺は安堵しながら言葉を続けた。

「まずは救急車、だろ？」

ナツさんの目の前にケータイをかざして、彼女の反応を待つ。

「……そう、ね」

「よし」

彼女が冷静さを取り戻したのを確認してから、俺はケータイを開いた。

「待って、因幡君。……分かった、分ったから。……私、うちに帰る……帰るから、救急車は……呼ばないで。大事に……しないで」

「え、でも……」

「お願い……大人しく帰るから……。身体は大丈夫、ちょっと……冷えたただけだから……」

「……………」

俺は確認を取るようにナツさんと視線を合わせる。彼女がコクンと頷いたので、俺はケータイを仕舞った。

「じゃあ、帰ろ？　ひかる、話はアンタが回復してからでいいわ」

「ナツ……ごめんね……」

「いいわよ。ほら、立てる？　肩貸す？」

「あ、俺が背負うよ」

「出たよ、このムツツリが……。ひかる、因幡に変なトコ触られないようにね」

「おい！　そんなつもりじゃないって！」

「……何？　因幡君てムツツリなの？」

「違うっ、断じて違う！」

「焦ってるのが証拠よ、ひかる」

「別に焦ってないっ！」

「そんだけ声荒げてたら説得力無いでしょ」

「ぐ……別に焦ってないよ？」

「遅いっつの」

有り難い事に、場の緊迫感が霧散し始めていた。どうやら今日のこの場は、なんとか乗り切れたようだった。しかし、問題が解決したわけでは無い。これからの水沢の事も、母親のさとみさんの事も、そして、あの高井先生の事も。

「クスクス……意外、ナツと因幡君が仲良かったなんて……思ってもみなかったよ」

不意に水沢がそんな事を言い出す。彼女の顔はとても穏やかに見え、俺とナツさんに、一層の安心感を与えてくれた。

「はぁ……よかった。ひかる、笑ってくれたね。一時はどうなる事かと……」

「ああ、よかったよ。じゃあ水沢、どうする？ やっぱ俺が背負うか？」

「……うん、そうね。お願いしちゃおっかな……」

水沢は承諾したので、俺は彼女に背を向けてしゃがんだ。ナツさんも、今度は余計な茶々を入れず、水沢が俺の背におぶさるのを手伝ってくれた。

背中の水沢の身体はやはり冷たい。実はかなり危機的だったのではないだろうか。いや、今は彼女の無事を喜ぼう。

背中の確かな重みに安堵を覚えながら、俺は螺旋階段を上って行く。

「……ていうか、ナツさん。荷物、持ってくれないの？」

今の俺は、右肩にナツさんの荷物を掛けつつ、水沢をおんぶして

いる状態だ。

「ああ、えっと、頑張れ男の子」

「ご声援ありがとう」

持ってくれないらしい。

「……ホントに意外ね。ナツ達って、昨日会ったばかりなんでしょ？ ……なんかそうは見えない」

俺の肩口で不思議そうな声を出す水沢。彼女に言に俺も同意だ。ナツさんはなんだか話し易い。

「なにになに？ ひかる、やきもち？ 心配しなくても、アタシとアンタは何があっても親友よ」

「親友、か……。今日もそうだけど、私が辛い時って……。いつもナツが居た気がする」

「当り前よ」

「……それだけナツには迷惑掛けてるって事よね」

「別に……そんなの解ってて親友やってんだから」

「……いつも、色々ごめんね？ ナツ……」

「ま、これからも任しときなさい。ずっとアンタの近くに居てあげるから」

俺の後ろで絆を確かめ合う二人。完全部外者の俺は、呼吸すら潜めて、邪魔をしないように努めた。人一人を背負って階段を上るのは非常に骨が折れるが、二人のやり取りを聴いていたら、そんな辛さも気にならなくなってしまう。そのお蔭か、自分で思っていたよりもずっと早く、橋げたの上へと辿り着けた。

「ナツさん、タクシー来たら止めてくれ。早いトコ水沢を暖かい所にやりたい」

「そうね、分かったわ」

すでに日は落ちて、辺りは暗い。俺の身体は火照っているが、ナツさんの寒そうな様子から、かなり冷え込んでいる事が判る。ずっと身体を動かしていない水沢の冷え具合がとても心配だった。

「タクシー来た！ ……ああん、客乗ってる」

こういう時に限って車通りが少ない気がする。タクシーを待つより、このまま水沢の自宅に直行した方がいいかもしれない。近いらしいし。

「ナツさん、タクシー、いつ来るか判らないし、とりあえず水沢の家に向かうか？」

「……それがいいかもね」

「……因幡君、降ろして、自分で歩くから……」

「え？ いや、大丈夫だって」

「ひかる、無理しなくていいんだよ？」

「ううん、ほら、歩いた方があったまるし……」

「歩けるのか？」

「……平気」

俺もナツさんもかなり心配だったが、本人がそう言っている以上、降ろす他無かった。

「ひかる、ホントに大丈夫？ ホントに歩ける？」

「……もう、ナツは心配し過ぎ。ほら、見てて……」

そう言うのと水沢は、一人で千杜橋を渡り始めた。その足取りは思いの外しつかりとしており、いっそ軽快とも言える程だ。

「……なんだ、大丈夫なんじゃん」

俺の隣でナツさんがホッと息を吐く。

しかし、俺達からどんどん距離を取っていく水沢に、何故か酷い胸騒ぎを覚えてしまう。

「ッ！ 水沢っ！ 止まれっ！」

「わっ、な、何よ因幡……」

俺が突如張り上げた声に、ナツさんが驚く。

水沢はというと、一瞬だけチラッとこちらを目を向けた。
そんな水沢の目。

その目を見た瞬間、俺の足は自然と地面を蹴る。

「水沢ーーーーっ！」

俺は全身全霊の力を脚へと込めて、水沢の元へと走った。彼女の居る場所はほんの数メートル先、それこそ一秒もあれば辿り着ける。しかし、その一秒は、とてつもなく長い時間だった。

わずか一秒。

されど一秒。

俺が水沢の意図に気付いてからの、たった一秒後。

その長い長い一秒間で、水沢ひかるは悠々と、橋の欄干の上に、登り詰めてしまっていたのだ。

「ひかるううううっっ!？」

俺の背後から、ナツさんの驚愕の叫び声。

その声に顔をこちらへと向けた水沢は、そのまま——意図的に——足を踏み外してしまう。

「いやあああああああ……!」

夜の帳の下りた橋の上に、伊波千夏の絶叫が響き渡ったのだった。

t i m e t o b e l i e v e n o w 1 7 (後書き)

ひかるちゃんの運命やいかに。

シロ君頑張れ。

……前回の後書きと同じこと言ってますね……。

t i m e t o b e l i e v e n o w 1 8 (前書き)

このエピソードも終盤に入りました。

一月三十日 日曜日 火点し頃

『間一髪』。

その言葉は、今、この瞬間の俺の為に誕生した言葉だと確信した。
——俺と伊波千夏が、安心感から気を抜いてしまった隙に、水沢ひかるが、橋の欄干から飛び降り自殺を図った。しかし俺は、まさに『間一髪』、彼女の右手首を掴み取る事に成功したのだ。現在、水沢は“橋の上から宙吊り状態”という、極めて危機的状況にあるが、辛うじて、落下という事態だけは阻むことが出来た。

女の子とはいえ、第二次性徴を終えた人間を、右手だけで重力から救った自分を、俺は心の中で称賛する。しかし、気を抜いてこの状況を招いた事を考えると、帳消しになった感が強い。

「ッ！ うわっ!？」

水沢を掴めた事で僅かに油断してしまい、彼女の右手首を掴んでいる俺の右手が、一瞬滑りかけた。俺は慌てて左手を伸ばし、水沢の着ているダッフルコートの袖口を掴んで、振じる様にして指に引っ掛ける。

「うおうっ!？」

欄干の手すりで身体を支えていた左手を離してしまった為、今度は俺の身体ごと持っていかれそうになった。咄嗟に左足を欄干の柵に絡み付け、どうにかこうにか持ち堪えようとする。

「くううう……」

手すり部分が俺の腹の辺りにある。完全に前屈姿勢だ。この体勢で水沢を引き上げるのは不可能に近い。

「……う……く……手を……は、放してよ……」

水沢がこちらを見上げてそう訴えてきた。千杜橋に備え付けられている電灯のお蔭で、かすかに彼女の表情が見て取れる。その顔には苦悶の表情。それは心情的なものなのか、それともどこかを痛めたのか。

「く……い、言うと思ったけど……無理に決まってるだろ。くそっ……、ナツさんっ！」

近くに居るであろう伊波千夏に呼びかける。だが何故かレスポンスが無い。

「ナツさん！ どうしたんだ！？ 居るんだろ！？ 手を貸してくれ！ ナツさん！」

この体勢で声を張り上げるのは非常に辛い。ナツさんは一体何をやっているんだ。

「ナツっ……うわあああ！？」

またもや身体を持っていかれそうになった。集中しなければ、水沢どころか俺まで落ちてしまう。

「……かる？ ひかる……ひかるー！？」

ようやくナツさんの声を確認する事が出来た。もしかしたら、水沢が落ちたと思ひ込んで、安心していたのかも知れない。

「ひかる、居るのね！？ まだ落ちてないのね！？ よかったああ！」

俺のすぐ傍に来て、そう喜ぶナツさん。

「よくない！ 今にも落ちそうなんだ！ 引き上げて……うおおっ！？」

「え？ きゃあああ！？ ちょっと、因幡！？ 放しちゃダメ！ 放しちゃダメよっ！」

俺の身体が三度持^{みた}っていかれそうになる。ナツさんが反射的に俺の腰へとしがみ付いてくれたお蔭で、辛くも凌ぐ事が出来た。

俺は改めて足を柵へと絡め直し、可能な限りしっかりと固定する。

「ナ、ナツさん、身体は……固定できたから、水沢を引き上げるの……手伝って……」

「え……あ、う、うん、うん！ ひかるっ、ひかるっ！」

ナツさんは欄干から身を乗り出して、水沢へと手を伸ばす。しかし、全く届きそうにはない。それもその筈、何しろ俺は、腰まで乗り出している上に腕も伸ばし切っているのだ。そもそも、俺の腕がナツさんの腕よりも長い時点で、届く筈も無かった。

「ダメエエ……届かないよお……ひかる……ひかるうう……」

「ナツさん……バッグの……シヨルダーベルトだ。それを……外して垂らせば……届かないか？」

「あっ、やってみる！」

俺が水沢を掴む前に投げ捨てたナツさんのスポーツバッグ。あれに使われていたシヨルダーベルトならば、それなりに強度があるだろう。

柵を通して、逆さまに、ナツさんがバッグからベルトを外している様子が見えた。焦っている所為か、少し手間取っているようだ。

「……ッ、外れた！」

「端っこを、しっかりと自分の手に……巻き付けて、垂らすんだ。……落とすなんてヘマ、しないでくれ……よ？」

「解ってるわよっ！ ……ひかる！ これ！」

ナツさんが俺の隣でベルトを垂らす。それは、水沢の顔の近くまで迫る事が出来ていた。

「よしっ、水沢、掴め……！」

「ひかる！ 掴んで！」

「……………」

しかし、俺達の意に反して、水沢は空いた左手を動かさない。

「ひかるっ!？ はやくっ! はやくうう!」

「……………」

「み、水沢……頼むから、掴んで……!」

「……私、落ちたいんだよ……」

「なっ、ひかるううっ!」

「手を放して……ねえ、放してよ……」

「ばか——っ! ひかるのばか——っ!」

これはいよいよもって不味い状況だ。いくら俺達が助けたくとも、本人にその意思が無ければ、今のこの現状を打開する事は困難。俺の握力だっていつまでも持ちはしない、この高さから落としてしまっってはまず助からないだろう。闇に包まれた谷底を見れば、そこは川原。そう、この位置は川の上ではないのだ。仮に川の上であったとしても、あの水位では陸と変わらない。水沢を救うには、引き上げるより他ないのだ。

「ッ!」

そして、悪い事は重なる。

俺が下の状態を確認する為に目をやった溪流。そこで、あるものが目に入ってしまったのだ。

「…………うそ、だろ? ……こ、こんな状況で……?」

川の側でこちらを見上げる女性らしき姿。
今ほど自分の病気を呪った事は無い。

「やめてくれ……今だけは、今だけは来ないでくれ……」

「因幡っ!? アンタどーしたの!? ちょっとしっかりして! じゃないとひかるがっ!」

「来るな……来るな……来るな……」

「因幡あ! お願いだからしっかりしてえええ! ひかるが落ちちやうよおおおっ!」

俺は強く目蓋を閉じて、ただ只管ひたすら両手に力を込める事しか出来なかった。どうすれば水沢を引き上げられるのか、そんな事を考える余裕は失われている。……もうどうしていいか判らない。このまま握力が尽きてしまうのを受け入れるしかないのだろうか。それはつまり、水沢の死を、受け入れるという事。
嫌だ、それは絶対に嫌だ!

「頼む! 消えてくれえ! 俺は水沢を助けたんだあっ!」

——カルチョを助けて

「——え?」

突然頭に響いた声に、俺は目蓋を開いた。目に入るのは宙吊り状態の水沢ひかる。そして……そして、その水沢の身体に重なるようにして見えた、別の女性らしき人の輪郭。それは、俺が幼い頃から

目にしてきた女の人ではなかった。

そう、それは……

「……さ、とみ……さん……か？」

「因幡 あああ！ 因幡 ってばあああっ！」

すぐ傍で叫び続けるナツさんの声。しかし、それを押しのけて、別の声が俺の頭に直接響いて来た。

——カルチヨと話して

（話？）

——私の言う事をカルチヨに話して

（……やってみる）

——……カルチヨ

「……カルチヨ」

「……え？」

虚ろだった水沢の瞳が、微かに揺れた。

——これがママの一番好きな花だよ。ね？ カワイイでしょ？

「これがママの一番好きな花だよ。ね？ カワイイでしょ？」

「……因幡君……何を言って……」

「因幡っ、ホントにどーしたのよっっ!」

水沢もナツさんも、明らかに困惑している。しかし俺は、水沢の母親であるさとみさんに、一縷の望みを託した。

——地味じゃないよ。ほら、見てみて。これね、花びらに見えるけど、実は花びらじゃないんだよ」

「地味じゃないよ。ほら、見てみて。これね、花びらに見えるけど、実は花びらじゃないんだよ」

「——ッ!? ……それ……それって……。え? ……な、なんで……?」

水沢の表情が、困惑から驚愕へと変わった。

——名前? これはね、三角草っていうんだよ

「名前? これはね、三角草っていうんだよ」

——ママが一番好きな花。カルチョにも好きになって欲しいなあ

「ママが一番好きな花。カルチョにも好きになって欲しいなあ」

「……………。……え、え、私……チューリップの方がいい。だつて……いっぱい、色があるんだもん」

「三角草だってね、ママの故郷では、赤かったり青かったりするん

だよ？　ここら辺には白いのしかないけどね」

「……ふ、ふくん……み、見てみたいかも……」

「よし、じゃあ、来年の春休みは、ママの故郷に連れてったげる。カルチョはまだ行った事無いもんね？」

「う、うう……うん。い、行き……たい。ママ……の、故郷」

「うんっ。ママの故郷の三角草を見れば、きっとカルチョも好きになってくれるよ。チューリップよりもね」

「うん……うん……ヒック。なったよ……グス……一番好きになった。居るんだね……？　ヒック……ママ、そこに居るんでしょ？」

「……………」

「ねえっ！　ママっ！」

さとみさんの声が聴こえなくなってしまった。ここからは俺に託すという事か？

「……………。……水沢」

「え……？　い、因幡……君？　……ママは？　あれ？　ママはっ！？」

「お母さんは、君に故郷の三角草を見てもらいたがってる」

「…………ッ。……三角草…………」

「君はどうなんだ？ お母さんの故郷の三角草、見なくてもいいのか？」

「……み、見たい。でも……ママが居なきゃ……」

「そうだな。二人で見なきゃ意味無いよな。だったら、お母さんを故郷に連れて行ってあげないと。お母さんはもう、一人では故郷に帰れないんだから」

「え？ ……ど、どういう事？」

「お母さんはもう、君の傍から離れられないんだ。だから、君が行ってくれないと、お母さんも行けない」

「え……？ え……？」

「さっきまでの俺の言葉。あれは、今、君の傍に居るお母さんの言葉を、そのまま繰り返したんだ」

「なっ……！？」

「水沢。お母さんの姿、見えなきゃ駄目か？ お母さんの声、聴こえなきゃ駄目か？ いつでも、どんな時でも、一緒に居てくれるだけじゃ駄目なのか？」

「ママ……が……私と……一緒に……」

「君が死んだ後、お母さんと一緒に居られる保証は無い！ だけど今！ 君は間違いなくお母さんと一緒に居るんだっ！」

「……ッ！」

もう、これが最後だ。

俺の握力はすでに限界に達してる。

これで駄目なら、俺はこの先、業を背負って生きていく事になるだろう。

「水沢、ベルトを、掴むんだ」

「……………」

俺達は視線を絡める。照明に照らし出された彼女の表情。虚ろだった彼女のその瞳は、精彩を取り戻しているように見えた。

「ッ！ ナツさん！ ベルトを引っ張れええええっ！」

「は？ え？」

「水沢がベルトを掴んだっ！ 早くっ、早くっっ！」

「あっ、あっ、んくっ……むに……むに……！」

ナツさんの力が加わった事で、俺に掛かる負担が僅かに小さくなった。俺は最後の力を振り絞って、右手を強く強く握る。そこで、コートの袖口を掴んでいた左手を放し、自分の身体を起こすべく、欄干の手すりを掴む。そうして、俺は強引に上半身を振り上げるように起こした。

「ぬああああー……！」

水沢が俺の右手首を掴んでくれた。彼女はもう、自らを助けるようとしてるんだ。後は、俺とナツさんに懸かっている。

「上がれえええええー！ー！ー！」

「ひかるううううー！ー！ー！」

そして、遂に訪れたその瞬間。

水沢の身体が、欄干の“こちら側”に……

——ドスン

「あいたっ」

……落ちた。

「……………」

「……………」

「いちいち……………」

俺のナツさんの目の前で、肩を押さえて痛がる、水沢ひかる。彼女は命の危機を——脱した。

「よっしゃああああー！ー！ー！」

「ひがりゅううううー！ー！ー！」

「わぶっ!?!」

俺は大声を上げながらガッツポーズ。ナツさんは泣きながら水沢に抱き着く。

「よがっだ……よがっだ……」

「ナツ、待って……。肩が痛い……ちょっと緩めて……」

「ううう……うううう……」

「う、うん。分かった、分かったから……ごめん、ごめんね? だから、いっぺん離れて? ……い、痛いの……」

ナツさんに抱き着かれた水沢が、何やらもがいていた。

「って、ナツさん、ストップストップ。水沢が痛がってる、どこか怪我してるのかも」

「えっ、怪我!? ひかる、どこ!? どこ怪我したのっ!?!」

「ナ、ナ、ナ、ナツ……。ちょ、ちょ、ちょ、ちょっと……」

抱き着くのは止めたが、今度は、橋の下でやったように、水沢の身体をガクガクと揺さ振り始めた。

「ああもう、落ち着け!」

「わっ」

俺はナツさんの両脇に手を入れて、力任せに水沢から引き離した。

「……それで、水沢。どこが痛むって？ 右肩？」

脱臼でもしたのだろうか。俺の手首を掴めたくらいだから、そこ
までではないと思うが。

「肩……ていうか、右腕……全体が痛いよ……」

「下手に動かさない方がいいな。……低体温の方も心配だし、やっ
ぱり救急車を呼ぼう」

「きゅ、救急車はちよつと……。大袈裟にはして欲しくない……」

「大袈裟じゃないと思うんだけど……」

「おじさんを呼びましょ」

ナツさんがそう言いながら、バッグからケータイを取り出してい
た。

「あ……ナツ、待って。パ、パパもちよつと……」

「……あ、もしもし？ 千夏です。ひかる見つかりました」

「……………」

水沢を無視するかのように、俺達から距離を取って電話するナツ
さん。

「……まあ、お父さんも君の事を探していたからな。伝えない訳にはいかないさ」

「……え？　パパ……も？」

「娘さんがヤバイ状態かも知れないって、俺が進言した」

「……………」

水沢の表情が強張る。今日は一昨日と違って、状況が理解出来て
いるようだ。

「そんな顔しないでくれ。親は誰よりも子供の事を知っているべき
人間だろ？」

「……子の心、親知らず……よ」

母親だけではなく、父親との間にも解決しなくてはならない問題
が在るようだった。そう言えば、再婚がどうか言っていたな。

「ふう……。水沢、少し動けるか？　ここでいつまでも座り込んで
たら車が危ない。それに、橋の上は冷えるし……えーと……せめて
あそこまで移動できないかな？」

「ん、分かったよ……」

水沢はゆっくりと立ち上がった。しかし、すぐにふらついてしま
う。

「おっと」

俺は咄嗟に支えた。

「あ、ごめん……」

「問題無い。俺の手に掴まって。ゆっくりでいいから」

俺は彼女の左手を取り、寄り添うように誘導する。

「ナツさん、あっちまで移動しよう」

電話中のナツさんは、俺の呼び掛けに、人差し指と親指でOKサインを作って応えた。

「いつつ……」

「歩くと響く？」

「だんだん……痛くなってきた、かも」

「と、止まるか？」

「……いい。それより、話が聞きたい……」

「なんの話？ ……って、訊くまでもないか」

「因幡君てさ……、その……霊能者ってやつ……なの？」

「よく、分からない……。けど、水沢のお母さんには会った」

「……ひょっとして……最初の時も……？」

「……ああ」

今回の事は、あの時が俺にとっての起点だった。あの時に水沢の母親と出会わなかったら、今の俺は、水沢とはなんの関係もない人間だっただろう。

「あの……、今もママは……ここに？」

「それは……」

水沢が不安そうな顔を向けてきた。「居る」とい答えてあげたいが、今はもうさとみさんの姿が見えない……

「ん？ あっ、居るみたいだ」

……事も無かった。

「ほ、ほんとに？」

水沢は、母親の姿を求めてキョロキョロと首を動かす。

「あー……その、水沢には見えないと思う。なんていうか……水沢のお母さん、何故か今は君と重なっているんだよ」

「へ？」

一瞬だが、水沢の顔がブレて、残像の様にさとみさんの顔が見えたのだ。それを伝えると、水沢は俺から手を放し、自分自身を抱き

しめる様な仕草をした。

少しの間そうした後、彼女は再び俺の手を取って歩き出す。

やがて、橋を越えたので、俺は、水沢が座れそうな場所を探す為に、辺りを見渡した。しかし、めばしい場所は見つけられず、仕方なくガードレールに腰を預けさせる事にした。その際、気を遣ってハンカチをガードレールに掛けようとしたが、「もう汚れているくらいい」との事だった。

因みに、ナツさんは未だ電話中。

水沢が腰を掛けたのを確認した後、俺はある疑問を彼女に投げかけてみた。

「なあ、水沢。今更なんだけど、俺の言う事、信じてるの？」

それがずっと気になっていた。

俺のイメージでは、遺族に「俺には貴方のご家族の霊が見えます」などと伝えた日には、それこそ最大級の非難を浴びせられるもの考えていた。それが水沢ともなれば、一体どんな反応をされるか、一昨日の事を考えると、正直怖いとすら思っていた。しかし、蓋を開けてみれば、彼女は拍子抜けなほど穏やかに話を聞いている。

「……あんなの、そうでもなきゃ……説明つかない」

「あんなの？」

「ママの言葉……。あれは絶対、ママじゃなきゃ分らないもの……」

「そうか……」

「……アンタが羨ましい……。私も……。ママの声、聴きたいよ……」

「……………」

俯く水沢を見て思った。落ち着いているから彼女は大丈夫、なんて楽観的にも程があった。もしかしたら、俺は彼女の追慕を煽っているだけなのかもしれない。

「その、理解者ぶるつもりはないんだけどさ、俺、水沢の気持ち…少し解るんだ」

「え……？」

「俺、六歳の時に、母さんを事故で亡くしてるから……」

「……………」

ずるいやり方だった。俺の感傷を押しつけて、水沢に我慢を強いるだなんて。

「俺の母さんは……どうやら俺の傍には居ないらしい」

「——！」

水沢が俺に顔を向けた気配がする。だが俺は、真っ直ぐに正面を見つめていた。

「……………。そっか……そう言うのが判っちゃうのも……辛いね」

俺の思惑通りになってしまったようだ。

ごめん、水沢。

「なによなによ、人が仕事してる時にいい雰囲気作ってんじゃないわよ」

電話を終えたらしきナツさんが、不機嫌そうに難癖を付けてきた。彼女にはこの重たい空気がいい雰囲気に見えるらしい。前も思ったが、ナツさんはいまいち空気が読めないようだ。

「って、仕事？　なんだそれ」

「ひかるのパパに、詳細を事細かく説明してた。アタシの知る限りぜーんぶっ」

「ちよっ！？　ナ、ナツ……？　どこまで……話……」

「ハイそこ黙る。アンタはいっぺん、ガッツリ説教された方がいいわ」

「ナ、ナツ……怒ってる……の？」

「アレで怒らないとか、アタシって何星人？」

「あう……ご、ごめんなさい」

「ふう……。……ひかる」

ナツさんは静かに水沢の名を呼び、そっと抱き寄せた。橋の上の時とは違って、今度はとても優しく。1

「無事じゃなかったら一生許さなかったけど、無事だったんだから

許してあげる」

「ナツ……。うん、ありがとう」

「よしっ。……じゃあ、少ししたらおじさんが来るは筈だから、もしたらアンタは病院行きなね？」

「……分かった、ナツの言うとおりにする」

「はぁ~~~~、一件落着ね。もう、一時はどうなる事かと思ったわよ。まさかりアル・クリフハンガーを拝むハメになるとはね〜」

「クリフ……。？ ナツ、それって？」

「知らない？ そういう映画があんのよ。その映画さ、始まってすぐに、さっきのひかるみたいな状態になった女の人が、谷底に落ちちゃうシーンがあるの。もうアタシ、そのシーンがずっと頭にチラついちゃって、恐くて仕方なかったわよ。因幡がおかしくなった時には『もうダメだー』って思った」

「お、おかしく……」

まあ、間違っちゃいないが、なんてストレートな。

「うーん、アタシ、よく解かんなかったんだけどさ。あの時の二人のやり取りってなんだったの？」

ナツさんの疑問は尤もだ。さて、どう説明したものか。

「あれはね、ママの幽霊が、因幡君を通して話しかけてくれたんだ

よ」

「ぶふっ!? み、水沢……?」

いきなりそんな事を言い出したら……

「はあ? ゆーれー?」

……こうなるだろ。

「うん。昔さ、ママと一緒にハイキングへ行った時に、あれと同じ会話をした事があるの。ママと私しか知らないやり取り。きつとママは、自分が傍に居るって事を、私に伝えたかったんだね。多分、因幡君に、ただ『ママが傍に居る』って言われても、私は信じなかった。だからママは、私とママにしか解らない事を、因幡君に言わせたんだよ」

「ちょ、ちょっとちょっと、ひかるストップ! 待って待って、なに? なに?」

再び、ナツさんの疑問は尤もだ。さて、どう説明したものか。

「ひかる、アンタ……。ママが亡くなった事……受け入れられたの?」

「……………」

俺が思っていたのとは違ったが、そのナツさんの疑問は尤もだった。

彼女は、水沢に母親の話をするとどうなるかを、身を以て知って

いる。水沢の口から「ママの幽霊」なんて言葉が出るとは思いもしなかっただろう。

「……八年前……ね？」

水沢が静かに口を開いた。

「その橋の下で……」

語られる内容は、彼女にとって最も辛い事実。

「ママが……」

やはり水沢は思い出していたのだ。

「……死んでいたの」

「ひかるっ!？」

ナツさんの驚きの声。俺はというと、想定内の事に納得する。水沢ひかるは真実を知っているようだ。

「殺されていたのか？」

「ちょっと因幡っ!？」

「それは……よく判んない。ママを追って橋の下に降りたら、そこで……死んで……た」

「ひかる! いいのっ、無理に話さなくていいのっ! 因幡っ、そ

んなのは今はいいでしょっ!？」

「……そうだな、あんな事があった後だし。……ごめん、水沢」

「ううん、平気。橋の下でずっと……その事を考えてたから……さ。……なんでママは死んだんだろうって」

「え……死んだ瞬間は見えないんだ？」

「こら! 因幡!」

「あ、ご、ごめん……」

「ナツ、大丈夫だから。……ねえ、因幡君。その……ママは何か言っていないの? 死んだ……原因とか」

「色々と何かを伝えようとはしてくれてるんだけど、いまいち要領が掴めなくてさ……。水沢、その時って他に誰かいなかったか？」

「……多分、居た」

「居たのかっ!？」

「……私がママを見つけた時……誰かがあの階段を……下りてきたの。……わ、私……怖くなって……か、隠れて……。それで、しばらく……隠れて……戻ってきたら、マ、ママが……居なくなってる……うう」

「因幡っ! もういいでしょ!？ ひかるこんな辛そうなのよ!？」

「あ、ああ……。水沢、無理させてすまなかった」

予想に反して、水沢は母親の死の真相を知らなかった。彼女の話から、死んだと思われる場所は判明したが、死因を示す情報は何もない。八年経った今、もはや川原を調べても何も出て来やしないだろう。

それにしても、水沢が目を離れた隙に居なくなったというのは、つまり、階段を下りてきたその誰かが、さとみさんの遺体を持ち去ったという事だろうか。

それはそのまま、さとみさんを殺した犯人だという事にならないか？

……だとしても、証明できるものは何もない。現状、俺が辿る真相への道は途絶えたようだ。

「ひかる、落ち着いた？」

「……ナツ、私さ……」

「ん？」

「どうしてかさ、さっき言った事……今日まで思い出せなかった」

「え？　そ、そんなの仕方ないわよ。そんな悲しい事、誰だって忘れたくなるわ」

「でもね？　私、思い出せて、ちょっとだけ……ホツとしちゃってるのよ」

「ど、どういう事？」

「私……ずっと考えてたの。なんでママは……私の事、置いてっちゃったのかなって。私の事、嫌いになったのかなって」

「そうじゃなかったじゃない。仕方……なかったのよ。だって、ア
ンタのママは……」

「うん、そう。でも、私はその事忘れちゃってたから……。だから私、ママは私を捨てて出て行ったのかもって思った。だけど私はすぐに……それを否定したわ。だってそれ、すごく怖い事なんだもん」

「うん……そうよね、親に捨てられるなんて怖いよね」

「違うの、ナツ」

「え？」

「……あんなに私の事が大好きだったママでさえ私を捨てた。だって他の人達は、もっと簡単に私を見捨てるんじゃないかって。そう思ったらもう……怖くて……。不安で……。私、必死に自分に言い聞かせたわ、ママが居なくなったのは、何か……。どうにもならない理由があったんだって。決して私を捨てた訳じゃないんだって。……だから私、その理由を訊きたくてずっと……。ずっと、ママを探し続けた」

「ひかる……」

「でも……私は、ママが居なくなった理由を知ってた。今日まで思い出せなかったけど、ママは私を見捨ててどこかへ行った訳じゃなかった。だから……私……ホッとしちゃったの」

「そう、だったんだ……」

「そしたら今度はさ、今までの自分が馬鹿みたいに思えて……。だって、そんな不安を抱くって事は、私がママの事を……。全然信じていなかったって事じゃない？ ……ううん、ママだけじゃない。私の周りにいる人達みんな……。この人達はいつか自分を見捨てるかも知れないって、ナツにすらそう思った事があるんだ。……。私、今まで、誰の事も……。信じていなかったんだよ」

「……………」

「自分が嫌になった。私は誰も信用していない。だったら周りの人達だって、私の事を信用してくれる筈が無い。私……。ずっとナツに迷惑掛けっぱなし……。パパにも……。因幡君にはひどい事しちゃったし……。こんな私、きっといつか見捨てられる。そうなる事が……。とっても怖かった」

「もしかしてひかる、だから、死のうと……。？」

「……。二人とも、ありがとね？ 私を見つけてくれて……。私を助けてくれて……。……。私を、見捨てないで……。くれ……。て、うう……。ホントに……。ヒック、……。ありが……。とう。……。う、ううう……。」

「……。バカ」

水沢とナツさんが抱き合う。街灯の薄明りの下で。

皮肉にも、高井先生の推察は的を射ていた。水沢をここまで追い込んだ高井先生が、最も水沢を理解していたのだ。俺は医者じゃないから、水沢が本当に、高井先生の言うようなパーソナリティー障害なのかは、もちろん判断できない。だけど、彼女の中に見捨てら

れ不安があるのは、どうやら事実。それを如何に払拭するかが、これからの水沢の課題……いや、違うな。きっと“俺達”の課題、だ。

「グス……。ご、ごめんね？ ナツ、メソメソしちゃって……。でも、思ってる事、全部言えたよ……」

「うん、ちゃんと聞いたよ、ひかる。安心して、アタシはアンタを見捨てたりなんかしない」

「ううん、もうそんな事思っていない。……そんな不安、消えちゃった」

へ？ 今、消えたって言った？

「そうなの？」

「うん、不思議なくらい……。因幡君に、ママが傍に居るって言われてから、なんだか本当にママを感じるの。そしたら不安なんてどこに行っちゃったみたい。……自分でもびっくりだよ」

水沢がそう言った瞬間、彼女の姿が再びブレて、別の女性の姿が浮かび上がった。

——カルチヨはきつと平気。

「えっ!？」

「ん？ どうしたの、因幡君」

「い、いや、なんでもない」

水沢の姿はもうブレていなかった。

今、聴こえてきた声は、おそらくさとみさんの声。——そうか、絶対に見捨てない人が水沢の中には居るんだ、だから不安が消えた。なら、さとみさんの言う通り、水沢ひかるは、もう本当に大丈夫なのかもしれないな。

「……そっか、俺は御役御免って事か」

「因幡？」

「あ、これもなんでもない」

「そうなの？ ……まあ、いいか。ところで因幡、包み隠さずプリーズ」

「は？」

突然ナツさんが、訳の解らない事を言い出した。

「アンタの不思議さが、今アタシの中で絶賛増量中なのよ。このままだとアンタの事、『不思議ちゃん』って呼ぶわよ？」

「ちゃん付けなんだ……」

まあ、ムツツリよりはマシだけど。

……マシか？

「ええと……」

——ブオオオオオオン…… キキイツ

俺が口を開こうとすると、ちょうど俺達の目の前に一台の車が止まった。そして、エンジンも止めずに運転手が降りてくる。

「ひかるっ！」

「あ……パパ」

それは水沢の父親・隆三さんだった。彼は娘の姿を目にした瞬間、大きく息を吐く。

「はあああ……。ひかる、無事でよかった。まったく、心配させないでくれ」

「……ごめん」

水沢はやや気まずそうだ。ナツさんがどこまで話しているか判らないからだろう。

「ひかる、千夏ちゃんから一通りの事は聞いている。話したい事は沢山あるが、今はとにかく病院へ行こう」

「うん……」

「千夏ちゃん、志朗君、本当にありがとう。このお礼は後で必ず。無礼は承知で今は行かせて貰えないかい？」

「あ、もちろんですよ。早くひかるさんを病院へ連れて行ってあげて下さい」

「そうだよおじさん、早く早く」

「感謝する。……さ、ひかる」

「分かった。……二人共、私も後でちゃんとお礼するからね？」

「そんなのいいから、ほら、行った行った」

「ひかる、後で電話頂戴ね？」

「うん、それじゃ」

ボタンッ ……ブロロロロ……！

最後はやや忙しく、水沢は俺達の前から去って行った。

まだ全てが解決した訳では無いが、今はこの達成感に浸ってもバチは当たらない筈だ。

「……ねえ、今、ふと思ったんだけどさ」

「なんだ？」

「あの時、アタシが、通りかかった車を止めて助けてを求めてれば、もっと簡単にひかるを助けられたんじゃない？」

「……………」

「……………」

「……このKY」

「なっ！？ 何よこのムツツリ！」

そう、まだ解決はしていない。

t i m e t o b e l i e v e n o w 1 8 (後書き)

描写はしていませんが、さとみさんが何かをしたから、ひかるちゃんの不安が消えたという訳ではありません。

ひかるちゃんは信じたんです。

シロ君の事……では無くて、「お母さんは自分が好きだ」という事を。

母親への信頼が揺らいでいた為、ひかるちゃんの心は不安定になっていましたが、今回の事がキツカケで、彼女の中で確信を取り戻せたのです。彼女にとって、シロ君が本当にさとみさんの幽霊が見えているかは、実はどうでも良く、とにかく「ママが自分を見捨てていない」という事を、ひかるちゃんが心から信じる事が出来た、という事が重要なんです。シロ君は、「さとみさんの幽霊が水沢の不安を消した」みたいな事を言ってきましたが、実際は、ひかるちゃん自身が、自分の中の不安と向き合い出したに過ぎません。ひかるちゃんの抱える問題は、これから徐々に、“自分の力で”解決していく事でしょう。

劇中で、さとみさんが「カルチョはきつと平気」と言っていたとおり、とりあえず、ひかるちゃんのサルベージは完了ですが、このエピソードはもうチョイ続きます。

t i m e t o b e l i e v e n o w 1 9 (前書き)

解決編……という訳ではありませんが、ここからは、さとみさんに
関する話が続きます。因みに、さとみさんはもう出ません。

time to believe now 19

二月五日 土曜日 黄昏時

「――で、水沢、今年度は休学する事にしたらしいんだ。しっかりケアして復学させるって、お父さんが言ってた。水沢本人もやる気を見せてたから、きっと二年から通えると思う」

「へえ。進級は大丈夫なのかい？」

「うん、今年はまだ残り一ヶ月ちょっとだから、学校側が色々配慮してくれるみたいなんだ。でも、水沢って成績優秀らしいから、それほど問題もないみたい。学年末テストも免除なんだって、羨ましいよ」

「テストは志朗の見せ場じゃないか、何を羨ましがら必要がある？」

「有るか無いかで言ったら、無い方がいいに決まってるよ、テストなんて」

「フフ、もっともだね。……うん、なんにせよ、ひかるさんが無事だった事、これに尽きる。志朗、よくやった」

「いや、俺なんて別に……。えっと、水沢の近況はこんなところかな。で、父さんの方の話を聞きたいんだけど、あれからどうなったの？」

「ふむ……」

「もしもし？ 父さん？」

「いや、どう話そうかと考えているところだ」

「電話じゃ話せない？」

「というよりは、守秘義務、かな」

「え……？ それってつまり……」

「うん、そうだな、志朗が居なければ、発覚さえしなかったかも知れない事件だ。内緒で少しだけ話してあげよう。他言は無用だよ？」

志朗

「も、もちろん」

「今、行っている、DNA鑑定の結果如何では、水沢さとみさんの死亡が証明されるかも知れない」

「ッ！？」

「可能性は薄いが、望みが無い訳ではない。だが、もしそうだったとしたら、かなりセンセーショナルな事件になりそうだよ……」

「え？ え？ 殺人事件じゃ……ないの？」

「僕の知る限りでは、過去に無かった事件だね。申し訳ないけど、志朗の手からは大分離れている。後はもう、全部父さんに任せなさ

い」

「……………」

「もしもし？ 志朗？」

「あ、ごめん、なんか理解が付いて行かなくて……。何がどうなつてそんな事になってるの？」

「説明してあげたいが……。ん、志朗、ちょっと待ってて。……。うん……。そうか。……。いや、僕が向かおう。……。ああ、そうしてくれ……。……。もしもし志朗、どうやら望みが繋がったようだよ。これからまた忙しくなる、詳しい話はまた後で……」

「え？ あ、と、父さん、高井先生は関わっているの！？ それだけでも……。！」

「……………」

「……教え……は、はは……駄目、だよな？」

「……三浦誠次。僕はこっちだと睨んでる」

「三浦っ！？」

「ここまでだ、君は家で吉報を待っているといい。……。今は家かい？」

「へ？ あ、う、うん、そうだよ……。？」

「……………。そうか、じゃ、電話切るよ？」

「あ、と、父さん、頑張っ……」

「ありがとう。じゃ」

プツ…… ツー ツー

「……………」

水沢ひかるの自殺騒動から六日後の土曜日。

この一週間、水沢は学校には来ず、今日の放課後……つまりは先程、休学届けを出す為に、父親と共に六日振りの学校へとやって来た。そして、届けを出した後、授業を終えた俺と伊波千夏を呼び出し、親子そろって感謝と謝罪の嵐を浴びせてきたのだ。その時の水沢は、とても明るい雰囲気で、休学を決してネガティブには捉えていないようだった。去り際なんかには、「復学したらよろしくね？」などと俺に声を掛け、復学の意欲を見せていた。もちろん、水沢の心の傷が癒えたなどとは思っていないが、間違いなく良い傾向だろう。しかも、よろしくされたという事は、彼女が俺を、友人として認識してくれている可能性がある。

そんな訳で、少しでも浮かれつつ、俺は水沢の事を父さんへと電話で報告していたのだ。

別に、仕事中の父さんに、今すぐ伝えなければならない事ではなかったのだが、本音を言うとはそれは方便。俺は、その後の進捗状況を知りたかったのだ。だが、話を聞いてみたところ、事態は何やら妙な具合になっていた。先ほどの電話で父さんが口にしていて、DNA鑑定という言葉。それに思うところは単純に「誰の？」。そして、センサーショナルな過去に無かった事件。これらが示すものは何か、残念ながら今の段階では判らない。だが、父さんは今回の事

件を、かなり重大な案件として認識しているようだ。いや、もちろん殺人事件は重大な事件だが、父さんの様子からすると、それだけではないように思える。まあ、少なくとも、俺の出る幕などは微塵もないのだろう。

(……無いよな、出る幕なんて)

それが解っていても、俺はここに来てしまっていた。

「……………」

無言で見つめている先は、兎の手柏医院。こてがしわそう、俺は高井京助先生に会いに来てしまったのだ。

ここに着いた時には、少し尻込みをされていて、なかなか入り口の扉に手を掛けられずにいた。それも父さんに電話したくなかった要因の一つ。

だが正味は、その後、高井先生に関して、何か新しい情報は無いかを訊くことが目的だった。しかし、その必要は無かったようだ。父さんはこう言っていた。

「三浦誠次」と。

つまり、父さんの考えている容疑者は、高井先生ではなかったのだ。それを聞いた事で、幾分か俺の緊張もほぐれている。

さて、日もぼちぼち暮れ始めている。そろそろ覚悟を決めてしまおう。

そして俺は、父さんの忠告を無視して、高井京助への接触を試みるのだった。

「こんにちは」

まずは受け付けのお姉さんに声を掛ける。

「はい、こんにちは。あら？ 因幡さん、本日はどうなさいましたか？」

「お話を聞いて頂きたくて……」

「はい。……生憎ですが、本日、美作は急用で外しております。お加減、よろしくないのです？」

「ええ、連絡もせずにすいません。……あの、高井先生は？」

「はい、高井は只今、診療中です。お受け出来ると思いますが、ただ、この後も診察がございまして、お時間が掛かるかと」

「構いません、どうかお願いします」

「はい、ではそのように。お掛けになってお待ち下さい」

美作先生は居ないらしい、珍しい事もあるもんだ。しかし、高井先生とはどうやら会えそうだ。こうなったら何時までだって待ってやる。俺はそう腹を決めて、待合室の長椅子に腰を掛けた。

「ふーんふふーん、らーらーるーーじゃん！」

待合室には、先程からずっと、やたらと大きな声で鼻歌(?)を歌っている男性が居た。

「ア、アナタ……お願いだから静かにして頂戴。周りに迷惑よ……」

その男性の奥さんだろうか、女性がその隣で居心地悪そうにしな

がら、男性を窘^{たしな}めている。

「周りだ〜？ 誰も……お？」

男性が突然立ち上がった。

……何か、こっちに近づいて来ていないか？

「ちょっと……アナタ……！」

「やあ、君」

「あ、はい」

声を掛けられてしまった。多分、何かの症状が出ている人だと思われる。

「私は流しのコンダクター。一曲いかがかね？」

「はい？」

流し？ コンダクター？ 一曲？ ……あつ、この人、指揮者って事か。って、流しの指揮者って有り得る？

「す、すみません、主人が……」

「あ、いえ、お気になさらず」

この病院で他の患者と鉢合^はわす事は少ないが、時にはこういう事もある。

「さあ、リクエストしなさい。一曲やってあげよう」

「アナタ、やめて……！」

「オマエは黙ってなさい！ ……さあ、リクエストを」

これは……合わせた方がいいかな？

「ええと、レパートリーなどは……？」

「ふふん、そうだな……。ハノンやドッツァー、デュポールもいいし、パガニーニだって……」

……どうしよう、全然わかんない。

「それにポップー、後はシュトラウス……」

「シュトラウスで」

ようやく知っている作曲家が出て来た。

「ほほう、君は舞曲が好きなのか。曲目は何にするかね？」

「ええと……」

知っている曲は限られている。一番有名なのはドナウだが、あれは長い、フルでやられたらキツイ。

「アンネンポルカを」

これなら比較的静かな曲だし、わりと短かった筈だ。……短いよね？

「んんっ……では」

そう言って男性はタクトを掲げる。もちろん手には何も持っていない。エアコンダクトだ。

「スウウウ……チャラチャ、チャラチャ、チャラチャ、チャッチャ
ー……」

意外……と言っでは失礼だが、ちゃんと音程が取れていた。これならば苦痛にはならない。

「……本当にごめんなさいね？」

奥さんらしき人が、俺の隣へやってきて、申し訳無さそうにそう言った。

「いえ、平気ですから」

「……ジャッ、ジャン、ジャッ、ジャン、チャッチャラチャラチャ
ン……」

「ご主人、お上手じゃないですか」

「……ええ、ピアノ講師ですので、音程は取れるんですよね……」

「なるほど、それで……」

「……真面目な人だったのに……まさか、心を病むなんて……。どうしてこんな事になってしまったのか……」

「……………」

「どうして」。患者の家族であれば、精神疾患に限らず、誰もが一度は考える事だろう。

病はいつも、突然に起こる。しかし、そこにはやはり原因があり、兆候もあった筈だ。それに気付く事が出来るのは、患者の近い人間、即ち「家族」に他ならない。例えば、水沢ひかるも、彼女の父親がもっと早くに向き合っていたならば、ああも深刻にはならなかっただろう。だが幸い、水沢は危機を脱する事が出来た。これから専門家の力添えの元、快方へと向かっていく事だろう。

「心の病気だなんて……一体どうすればいいのか……こんな病院に来ることになるなんて、思ってもいませんでした……」

こんな病院、か。まだまだ精神科の敷居は高いようだ。しかし、頼みの家族が精神科に否定的では、治るものも治らない。

「あの、心の病気とは言いますが、精神疾患は、ちゃんと身体の中で異常が起きているんです。それは、近年の研究でも証明されています。つまり、他の病気と何ら変わりはない。的確な治療を施せば、治す事が出来るんですよ」

「身体の中で……そうなんですか」

例によって美作先生の受け売りだ。けど、これはとても大事な事。精神疾患を、「気の持ちよう」だとか、「性格の問題」で片付けてしまう人は、残念ながら少なくない。美作先生は、心と身体を分

けて考える『心身二元論』の所為だと嘆いていた。

美作先生曰く、「心を内臓の一部と捉え、精神医療という肉体を治療する行為を行う」のが、精神科医なのだそうだ。

「……ありがとう、少し気が楽になりました」

「いえ」

「貴方もご家族が？」

「あ、僕はここに掛かっている患者です」

「えっ……」

奥さんの目の色が明らかに変わった。悲しい事だが、こういう展開には慣れている。

「あ、あら、ごめんなさい……。しっかりなさってるものだからてっきり……」

「お気になさらず」

とは言いつつも、少しだけ凹んだ。

「――竹内さーん、三番にどうぞー」

「あ、ほら、アナタ。呼ばれましたよ」

「ジャンジャ……こ、こら、途中で止めるやつがあるかつ。オー
ディエンスが居るんだぞっ」

「あ、こちらの事はお構いなく。早く行った方がいいですよ？」

「む、どこへだ？」

「え？ ええと……次の公演会？」

「お、そうか。では行かなくてはな」

「ほら、アナタ、こっちに……。では、失礼しますね？」

「あ、はい」

そして、夫婦は診療室へと向かって行った。

今気づいたが、あの人を診るのは高井先生なのだろうか。俺の中の高井先生は、もはや医者としての信用が失墜している。いや、その人間性もだ。しかしながら、今現在、彼に掛かってる患者は、多数いるようだ。水沢母娘にやった事を思うと、その患者さん達が大丈夫なのかどうか、気が気じゃない。

……そう、水沢母娘以外にも、彼が妙な事をしている可能性は否定できない。“ビジョン”で見た高井先生は、人の心を誘導する事に長けているように見えた。あれらは、完全に医者としてあるまじき行為。あの人を医者にしておくのは危険だ。

「戸塚さん、救急車の手配をお願いします」

「ッ！」

突然、高井先生の声が耳に入ってきた。見れば、いつの間にか、先生と受付のお姉さんが話をしている。

「救急車ですか？」

「ええ。竹内さんは、急性期の統合失調症です。入院が必要ですね」

「急性期ですか、うちでは受け入れられませんね。分かりました、手配します」

「お願いします。……あつ、間宮さん！ ロヒプノールとリスペリドンを持って来てくれませんかー！ 0. 2と8でー！」

「あ、はあい！」

随分とバタバタしている。さっきの男性の事だと思われるが、聞く限り、どこか別の病院に移送するようだ。素人目にはそこまで酷い症状には見えなかったのだが……。

それにしても、今、俺の目に映っている高井先生は、見紛う事無く医者だった。真剣な顔で対応するその姿は、格好良くすらある。解らない。

俺には高井京助という人間が解らない。

「ん？ 因幡君？」

「あつ……」

高井先生が俺に気付いた。

「すみません。今、立て込んでるんで、もう少し待っていて下さいね？」

「は、はい……」

先生の態度は、この前会った時と変わらない。優しげな声と顔を俺へと向けてくれた。

俺がビジョンで見た男性は、本当にこの人だったのか？

この人が水沢にあんな非道い事を？

そして、さとみさんを利用して詐欺行為を？

……自信が無くなってきた。

そして、それからしばらく経ち、日も完全に落ちた頃、遂に高井先生と話をする時がやって来た。

「――因幡さーん、三番にどうぞー」

受付のお姉さんに呼ばれ、かなり緊張しながら診療室へと向かった。診療室の扉の前で、一旦深呼吸をして、可能な限り心を落ち着かせた。そして、毅然とした態度を取る事を自分に言い聞かせながら、扉をノックする。

コンコン

「――どうぞ」

「失礼します」

中の間取りは、美作先生の部屋と大差はない。だが、こちらの方が、ずっと診療室然としていた。……美作先生が特殊なだけかも知れないが。

「因幡君、今日はどうしましたか？ 確か、春休みにEMDRをやる事になってましたよね？」

「いえ、今日は……今日も俺の話じゃないんです」

「という事は、A子ちゃんの事ですか？」

「……別に『ひかるちゃん』でいいんじゃないですか？ 佐藤直人さん」

「……………」

反応は……無い。

「今日は、貴方の話をしに来たんです」

「えーと、因幡君？ とりあえず座りましょうか。まずは落ち着きましょう」

「水沢ひかるは無事ですすよ？ 貴方の事を証言出来るかも知れません」

「因幡君、まずは座って……」

やはり表情に変化はない。この辺はお手の物か。患者の前でいちいち動揺なんかしていたら、医者は務まらない。

「さて、どんな話をしましょうか」

「八年前の話」

「八年前ですか……僕はまだ医学生でしたね」

「大崎クリニックで、臨地実習を受けてた頃ですか？」

「ッ……よ、よく知ってましたね。叔母さんからですか？」

父さんからの情報だ。臨地実習とは、医学生が実際の医療施設に赴き、実践的な現場を学習する授業らしい。それを、高井先生は、大崎クリニックで行ったのだ。

そして、その大崎クリニックは、水沢の母親・さとみさんが、双極性障害（躁うつ病）の治療の為にかかっていた病院。

「そこで水沢さとみさんと出会ったんですか？」

そう、二人は繋がりがあっても、決して不思議ではないのだ。

「い、因幡君、君は……」

「『亜季さん』、の方が分かり易いですか？」

「！」

反応が……あった。

「三浦誠次さんに、貴方の事を訊いてみましょうか？」

「……………」

高井先生は完全に黙り込んだ。目を瞑っているので、表情からはいまいち読み取れない。

「高井先生、俺の父さんが警官だって事は、ご存知で？」

「何？」

知らなかったようだ。

「県警の警部です。実は今、俺が、水沢さとみさんから得た情報の、裏を取って貰ってます」

実際、さとみさんから得た情報は、重要な部分が欠けている。しかし、敢えてそれを伝える必要は無いだろう。

「…………。そう、ですか…………フウ」

高井先生は、右手の親指で眉間を強く押している。しばらくその仕草が続けた後、丁寧だった口調を崩して話し出した。

「やれやれ、叔母さんもこんな気持ちだったのかなあ。誰にも知られていないと思っていた事を、なんの関係も無い筈の人間に指摘される。…………これはさすがに動揺が隠せないよ。さとみさんや三浦と繋がるような証拠は、何も残していないつもりだったんだがね…………」

「…………認めるんですね」

「言っとくけど、さとみさんの死に関しては、僕は関わってないよ」

「知ってます」

「知ってる、か…………。本当、君が怖いよ、僕は」

「俺は、貴方が怖いです。心に傷を負っている人にあんな事させるなんて、人格を疑います」

「返す言葉もないね……」

「……ご自分の行いを理解はしているんですね？ 八年前、水沢さとみさんにやらせた事を」

「ああ。けどね……」

「時効なのは知っています。俺はただ、水沢さとみさんに、一体何があったのかを知りたいだけ。そしてもう一つ、水沢ひかるに何故あんな事をしたのか、も」

「……………。ハア……分かった、話そう。もう隠す気は無い、なんでも訊くといい。大体、さとみさんの……幽霊？ から、大方の事は聞かされているんだろ？」

「と言うよりは、その場面を見せられたって感じです。……夫婦のふりをしていた貴方とさとみさんが、三浦という人物に対して、いわゆる美人局を行っていた。そんなビジョンを、あるホテルの前で見ました。その時の貴方達のやり取りを、再現して見せましょうか？」

「いいよ。君のチカラの事は、もうすでに信じてる。エスパー、ミードIAMに続き、サイコメトラーシローだね」

「は、恥ずかしい呼び方しないで下さい」

「恥ずかしいとは……世界中のサイコメトラーさん達に失礼ではな

いかな？」

「えっ……俺みたいな人って、わりと居るんですか？」

「さあ？ 僕は君しか知らない」

「……………。……もしかして、話、逸らそうしてます？」

「ごめんごめん。なんだか君って、からかうと楽しいんだよ。反応が素直でさ」

「ぐ……」

落ち着け、俺。心理合戦なんてやっても勝てる筈が無い。俺はただ、必要な事だけを質問すればいいんだ。ペースを持っていかなければ、余計なやり取りは極力避けよう。

「なあ、因幡君。僕は別に、言い逃れしようだなんて考えちゃいない。ちゃんと答えるから、そう警戒しないでくれよ」

「……………」

うん、バッチリ考えを読まれてる。

俺、実は精神科医って嫌いかも。

「……じゃあ、まずはさとみさんの話を」

「ああ。……彼女に関しては、僕に弁解の余地は無い。お金が欲しくて彼女を利用した」

「お金の為……」

「僕の家は医者の家系でね、裕福なんだよ。だから僕は、贅沢三昧で暮らしていた。医学生になって、親元を離れた後も、親の仕送りのお金で、やっぱり贅沢三昧。欲望はとどまる事を知らず、遂には学費にまで手を付けたんだ。そこでようやく、両親は僕の問題に気付いてね、それから必要最低限のお金しか与えなくなってしまった。でも、急に生活水準を落として暮らすのは非常に難しくてね、どうにかお金を手に出来ないかと悩んでいた時に、水沢さとみさんと出会ったんだ」

「高井先生、ちょっとすいません。話の続きを聞く前に、一つやっておきたい事がありました」

「ん？ やってみたい事？」

「ええ。このままだと、冷静に話を聞くのが困難で……。いいでしょうか？」

「？ ……どうぞ」

「すううう……、こんのダメ息子おおおっつ！」

「ッ!？」

俺は、憤懣やるかたない思いを一気に吐き出した。こうでもしないと、この人を引っぱたきそうになるからだ。

「ふう……失礼しました」

「……………」

「ん？ 続きをどうぞ」

「え？ あ、ああ……。んっんんっ、えーと……。ああ、さとみさんと出会った話か。……君の言う通り、大崎クリニックで実習を受けた時に、彼女と出会った。もちろん僕は学生だったから、治療には関わっていない。僕らが知り合ったきっかけは、待合室でぶつかって、そのまま世間話をしたのが始まりという、些細な事だった。彼女の症状の事を知ったのは、わりと後だよ」

「……因みに、どんな症状なんですか？」

「双極性障害。さとみさんはね、娘さんに関わる事でないと、行動意欲が湧かなかったんだ。例えば、娘さんの学校行事の時にはとても活発な人に見えたのに、町内会の行事では暗く落ち込んでいるように見える。つまり、娘さんの前では躁状態、それ以外ではうつ状態になってしまっただ」

先週、水沢の父親からうつ病と聞かされた時は、どうも納得いかなかったが、そういう事なら話は解る。俺が目にしてきたさとみさんは、常に娘の為に行動していた姿だった。だから俺は、躁状態の彼女しか知らない。

「僕は……そこに付け込んだわけだね。さとみさんは、その時、離婚の話が出ていたらしくて、夫と別れてしまったら、お金も身寄りもない自分は、娘と引き離されてしまうと思ひ込んでいた。別に経済的な不安があっても、母親が親権を得るのに問題は無いと僕は知っていたけど、それは敢えて教えずに、お金を得る方法を提案したんだ。それがつまり美人局。正直、相手にはされないと思ったけど、

彼女はこっちが驚く程、あっさりと話に乗って来た。よっぽど娘と引き離されるのが嫌だったんだな」

高井先生は飽くまで淡々と話す。良心の呵責は覚えないのだろうか。

「僕たちは完璧に身分を偽り、出来るだけ自分達と関わる可能性の低いターゲットを見つけ、相手が余裕で出せるレベルの金銭を要求し、一切の後腐れを残さないようにして、足が付くのを防いでいたんだ。殊^{こと}の外^{ほか}上手くいったよ。だから、上玉を見つけた時に、欲が出てしまった。常に金銭の要求は一度きりにしていたんだけど、その時だけ二度要求してしまったんだよ」

「三浦誠次……ですね？」

「そういう事だ。……彼に二度目の要求をした直後、さとみさんは消えてしまった」

「警察に届けようと思った事は？」

「一切無い。僕は、保身の為に、さとみさんと関わった痕跡を消す事しか頭になかった」

まるで他人事のようにそう言い切る高井先生。悪怯れた様子は全く見られない。

「……最低、ですね」

「……最低、だね」

「言い訳無しですか？」

「そんな余地があったかい？」

「……………」

もっかい叫ぼうかな……。

「はああ……。それで、その……高井先生は、三浦がさとみさんを殺したと思います？」

「当然思っているよ。状況証拠だけだけどね」

「だけど自分の身が優先な訳だ。……この人の最初の好印象は返上させてもらおう。いや、好印象でも無かったか。からかわれたし。」

「……さとみさんに関しては、ほぼ俺の予想通りでした。次は水沢ひかるの事を聞かせて下さい」

「ひかるちゃん……か」

「寧ろ俺にはこちらの方が重要だ。何しろ、この人の所為で水沢は命を落とした。返答如何では、グーで引っぱたく事も辞さない。」

「日曜日、貴方は水沢ひかるに催眠療法を行いましたね？」

「へえ、彼女、あれが催眠療法だって解ってたんだ」

「って、インフォームド・コンセントすらやらずに行ったんですか？」

「説明しようとは思ったんだがね、僕が『お母さんの事を思い出す方法があるんだけどやってみるか』と聞いたら、彼女は間髪入れずに『すぐお願い』って」

「……………」

……水沢、軽拳妄動にも程があるだろ……。

「…………それはいいです。でも、その後の事は捨て置けません」

「後？」

「高井先生、貴方、水沢が自殺を図るよう誘導しましたね？」

「……彼女が、そう言ったのかい？」

「実を言うと、水沢からは何も聞いていません」

「え？　では何故……」

「俺、その時、後部座席から見えました」

「はっ!？」

「信じられないなら、その時のやり取り、再現しますけど？」

「あ……い、いや、いい……。ま、まいったね……こりゃ……。新たに、アストラルシローも加えないと……。フフ……。あと一人出てくれば戦隊ものがやれるなあ……。超常戦隊シローレンジャー……」

とかね」

「……どんなに恥ずかしくしないで下さい」

高井先生が壊れ気味なのは見ていて気が晴れるが、今は戦隊の話なんかどうでもいい。

「先生、水沢ひかるを自殺させようとしたんですか？」

俺は可能な限り目に力を込め、そう問いかけた。

「……それは、誤解、だと言いたいね」

「何が誤解なんですか!？」

「……………。……君が、さとみさん母娘の写真を落とした時には、本当に驚いたよ。まさか今になって、再びさとみさんの姿を見る事になるとは、思ってもいなかった。そして何より、そこに写っていたひかるちゃんの姿。実は、あの時が初めてだったんだ、ひかるちゃんの顔を見るのは。そこまで来てようやく、遅まきながら良心の呵責を覚えた。この子が母親を失ったのには、僕に責任の一端がある……………」

「……………」

「……僕にも娘がいるんだ」

「!」

「今年三歳になる。それで思ったんだ、『もしも僕の娘が母親を失

ったら』って」

「娘さんが……」

「言い訳にもならないけど、八年前の僕は未成熟だった、精神的にね。あの時の僕は、将来、自分がこんな悔恨の念に囚われるなんて、思いもしなかったんだ」

悔恨。

高井先生は、ちゃんと過去を悔いているのか？

「だ、だったら尚更です！　なんで水沢の命を危機に曝したんですか！？」

「そんなつもりじゃなかった！」

「ッ」

「……君の話から、彼女が母親の死を目撃している可能性が浮上して、それが原因で、心に深刻な影を落としているかも知れないと思えた。叔母さんの言う通り、心の傷を癒すためには、その原因と向き合う事が重要。だから僕は、催眠療法で、ひかるちゃんの封じられた記憶を呼び覚ます事にしたんだよ。因幡君、僕はね、ひかるちゃんに、さとみさんの死んだ場所を、思い出して貰いたかっただけなんだ。それで事件が明るみに出れば、さとみさんも浮かばれると思ったんだよ。決して、ひかるちゃんにさとみさんの後を追わせようだなんて、考えていなかった。本当だ」

「水沢の自殺の可能性を指摘したのは先生じゃないですか。その貴方が、境界例かも知れない彼女に、そんな不用意な真似をするなん

て……」

「断定した訳じゃない。実際、彼女が境界例に達しているとは思えなかった。けれど僕は、万全を期して、彼女に付き添うつもりだったんだ。万が一にも自殺してしまわないようにね。けど……けど彼女が、僕が気を抜いた隙に、車から降りて行ってしまったんだ……！」

「……………」

「……解ってるよ、結局は僕の落ち度だね。彼女を見失うなんて失態は……」

「高井先生、それが本当なら、どうしてコソコソしたんですか？偽名まで使って……。そもそも、過去を清算したいというのなら、公に提訴して然るべきでしょう？」

「……………」

「何か言って下さいよ」

「……自分は身綺麗なまま、事を……収めたかった」

「貴方って人は……！」

「家庭があるところになってしまっただ！」

「……ッ」

「……因果……応報だね。三浦の気持が、よく解るよ……」

もう……いいか。この人を責めても、新しい情報が得られようには思えない。ビジョンの裏付けは取れたが、さとみさんが結局どうなってしまったのかは、この人も知らなかった。父さんの言う通り、この件はもう俺の手から離れているようだ。やはり、水沢ひかるを救った時点で、俺の役割は終わっていたらしい。これ以上余計な事はせずに、後は父さんに任せよう。

「帰ります」

「……僕の事はどうするんだ？」

「どうも出来ません。解ってるんでしょう？」

「……………」

「もし……水沢が死んでいたら、俺はどんな事をしてでも、貴方に罪を贖わせようとした筈。でも、彼女は無事だったから……貴方の事は忘れます」

「そう、か……」

「でも、一つだけ言わせて下さい」

「ん？」

「俺は貴方に医師であって欲しくない」

「……………」

「……さようなら、高井さん」

俺は高井さんを一瞥してから、部屋を出るべく、ドアへと向かう。そして、扉を開けた時だった。

「きゃっ」

受付のお姉さんがそこに立っていたのだ。どうやらノックをしようとしていたらしい。精神科は特に、診療中の乱入には厳しい筈。それを推して尚、ここに来たという事は、かなりの急用という事になる。

「あ、因幡さん、失礼いたしました。……終わられたのですか？」

「ええ、丁度。何かありました？」

「あ、はい、いえ、高井先生に急用がありまして」

「そうですか。なら俺は失礼しますね？」

「はい。どうぞお大事に」

俺はお姉さんに一礼して横を通り過ぎる。

ふと思ったのだが、今日の診療代ってどうなるんだろう。一応、患者として来た訳だから、払わねばなるまいか。……何か納得いかない。

「――あの、高井先生、警察の方がお見えなのですが……」

「!？」

後ろから聴こえてきたお姉さんの声に俺は驚く。
警察？

まさか父さん？

「……ッ」

俺は急いで受付へと向かった。待合室まで戻って来てみると、そこには背広姿の男性が数人。おそらくこの人達が警察なのだろう。父さんは……居ないようだ。それにしてもこの人数。ただ話を聞きに來たのであれば、通常、二人組の筈。これだけ数を揃えたという事は、身柄を確保しに來たのでは？

「志朗、やっぱり居た訳だ」

「ッ！？ と、父さん！？」

突然後ろから肩に手を置かれた。
驚いて振り返ると父上が居られた。
うう……あっさりバレた。

「僕はなんて言っただけなの？」

「……ご、ごめんなさい」

「ま、こうなるとは思っていたがね」

「……刑事の勘？」

「もちろん、父親の勘」

まあ、俺もバレるとは思っていた。ただ、予想よりかなり早かっただけだ。

「父さん、もしかして高井京助を……？」

「ん？ 僕は志朗を迎えに来ただけだよ。さ、帰ろうか」

「へ？ じゃ、じゃあこの人達は？」

「ふむ、二課の方々だね。何があったのやら」

「……父さん？」

「分かってる、ちゃんと説明はするよ。だけど、この場は去ろう。お仕事の邪魔になるからね」

「え、えと、診療代が……」

「んー、まあ、その辺の融通は利かせてくれるだろう。美作先生とは、昨日今日の付き合いじゃないからね」

「……いいのかな……」

父さんに促されて、俺は児の手柏医院を後にした。

「……志朗、驚くぞ」

「え？」

病院の前に停められていたパトカー群のとある一つの前で、父さんが満面の笑みで話しかけてきた。

もしかして、さとみさんの件が解決したのか？

「なんと！ 今日はこのパトカーで君を送ってあげよう！」

「……………」

「ん？ 志朗？」

「あ……そ、その、や、やったああっ！」

昔、小さい頃、パトカーに乗せて貰って大喜びした事がある。その時から父さんは、機会を見つけては俺をパトカーに乗せてくれるようになった。初めの頃は嬉しくて仕方なかったが、月一回ペースともなると、今や目新しさは皆無。もはや、タクシーよりも乗り慣れていた。しかし父さんは、今でも俺がパトカーに乗りたがっていると、信じて疑わない。

「い、いやゝ、俺、お巡りさんの息子でよかったゝ」

「うんうん、役得だね。お友達には秘密だよ？」

親にとって子供はいつまで経っても子供、そういう事なのだろう。俺は――頑張って――はしゃぎながらパトカーへと乗り込んだ。

そして、そこで俺は――事件の真相を知る事となる。

t i m e t o b e l i e v e n o w 1 9 (後書き)

変なところで切ってしまいます。真相は次回になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3726x/>

くしびと —OUT OF REACH—

2011年12月3日21時00分発行